京都府遺跡調査報告集

第193冊

１．犬飼遺跡第４・６・９次
２．令和４・５年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡
　　（１）柘榴川原遺跡
　　（２）石原遺跡次

２０２４

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1　犬飼遺跡



犬飼遺跡全景（西から）

巻頭図版２　犬飼遺跡



Ｆ拡張区溝状遺構ＳＤ200掘削状況（北から）

序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や地域の歴史教育などに活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。また、これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する亀岡市犬飼遺跡第４・６・９次調査は、一般国道423号整備事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施しました。また、精華町柘榴川原遺跡と石原遺跡は、国道163号精華拡幅事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施しました。今般、それぞれの事業において整理等作業が完了し、調査成果をまとめましたので、『京都府遺跡調査報告集第193冊』としてここに刊行する次第です。

犬飼遺跡は、曽我部町の南西に位置し、近くには大阪府能勢町から池田市に通じる摂丹街道が通っています。発掘調査では、古墳時代の溝や掘立柱建物、灌漑施設、地震跡などを検出するとともに、奈良時代の柵列や区画溝、柱穴などを検出しました。一方、柘榴川原遺跡では、山田川上流部左岸で縄文時代早期後半以降に天然ダム湖が２度形成されたことや地震動による堆積層の変形が確認されました。また、石原遺跡では、中世から近世の遺構を検出しました。

これらの調査成果は、今後、地域史や日本史研究を進めるうえで、重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました京都府建設交通部ならびに国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、心より御礼を申し上げます。

令和６年３月

公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理　事　長　　井　上　満　郎

例　　言

1．本書に収めた報告は下記のとおりである。

（1）犬飼遺跡第４・６・９次発掘調査報告

（2）令和４・５年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡発掘調査報告

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
犬飼遺跡 第４・６・９次	亀岡市曽我部町犬飼、曽我部町法貴	令和元年５月15日～ 令和元年８月９日 令和元年11月７日～ 令和２年３月12日 令和２年５月14日～ 令和３年１月６日 令和３年５月18日～ 令和３年12月21日	京都府南丹土木事務所	竹村亮仁 名村威彦 三好博喜
柘榴川原遺跡	相楽郡精華町柘榴川原・石原・松ヶ平	令和４年12月８日～ 令和５年２月28日	国土交通省 近畿地方整備局 京都国道事務所	福山博章
石原遺跡	相楽郡精華町柘榴松ヶ平・石原・芦谷	令和５年５月12日～ 令和５年８月３日		加藤雅士

3．本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4．土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5．本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。

6．現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

本 文 目 次

１．犬飼遺跡第４・６・９次発掘調査報告

１．はじめに---------- 1

２．位置と環境

１)地理的環境---------- 3

２)歴史的環境---------- 4

３．調査の経過と方法

１)調査の経緯---------- 6

２)調査の方法---------- 8

４．基本層序

１)第４次調査----------10

２)第６次調査----------10

３)第９次調査----------10

５．小規模調査(第４次調査－１)

１)調査の概要----------12

２)出土遺物----------18

３)小結 ----------20

６．Ｆ地区の調査(第４次調査－２)

１)調査の概要----------21

２)検出遺構----------21

３)出土遺物----------26

４)小結 ----------33

７．Ｆ拡張区の調査(第６次調査－１)

１)調査の概要----------33

２)検出遺構----------34

３)出土遺物----------41

４)小結 ----------51

８．小規模調査(第６次調査－２)

１)調査の概要----------51

２)出土遺物----------56

３)小結 ----------57

９．Ｋ地区の調査(第９次調査)

１)調査の概要----------57

２）検出遺構----57
３）出土遺物----62
４）小結----71
10. 総括
１）第４・６次調査溝状遺構ＳＤ16について----71
２）Ｋ地区出土土器の検討----73
３）各時代の犬飼遺跡の様相----77

２．令和４・５年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡発掘調査報告
１．はじめに----93
２．遺跡の環境
１）地理的環境----95
２）周辺遺跡----96
３）歴史的環境----97
（１）柘榴川原遺跡
１．はじめに----98
２．発掘調査の概要
１）基本層序----98
２）１トレンチ----102
３）２トレンチ----104
４）３トレンチ----104
５）４トレンチ----105
６）５トレンチ----107
７）６トレンチ----109
８）７トレンチ----109
９）８トレンチ----109
10）９トレンチ----109
３．出土遺物
１）土器----110
２）木製品----111
３）漆製品----111
４．まとめ----113
（２）石原遺跡
１．はじめに----115
２．発掘調査の概要

１）１区の調査----116
２）２区の調査----116
３）３区の調査----121
４）４区の調査----123
３．出土遺物----124
４．まとめ----125
付編１　放射性炭素年代測定----128
付編２　京都府南部精華町の柘榴川原遺跡の天然ダム湖堆積物----135

挿 図 目 次

１．犬飼遺跡第４・６・９次発掘調査報告

第１図　調査地の位置---- 1
第２図　亀岡盆地の地形---- 3
第３図　周辺遺跡分布図---- 5
第４図　犬飼遺跡既往調査地---- 7
第５図　地区割の方法---- 8
第６図　犬飼遺跡第４・６・９次調査地位置図---- 9
第７図　犬飼遺跡第４・６・９次調査基本層序模式図----11
第８図　第４次調査小規模調査区断面図----12
第９図　第４次調査小規模調査区平面図----13
第10図　第４次調査３トレンチ遺物出土状況----14
第11図　第４次調査小規模調査区平・断面図１----15
第12図　第４次調査小規模調査区平・断面図２----16
第13図　第４次調査小規模調査区平・断面図３----17
第14図　第４次調査小規模調査区出土遺物----18
第15図　第４次調査小規模調査区出土木製品１----19
第16図　第４次調査小規模調査区出土木製品２----20
第17図　Ｆ地区全体平面図----22
第18図　Ｆ地区調査区北側断面図----23
第19図　Ｆ地区調査区東側断面図----24
第20図　Ｆ地区掘立柱建物実測図----25
第21図　Ｆ地区竪穴建物ＳＨ150平・断面図----26
第22図　Ｆ地区溝状遺構ＳＤ16平・断面図----27
第23図　Ｆ地区溝状遺構ＳＤ16遺物出土状況図----28

第24図　Ｆ地区出土遺物１（土器１）----30
第25図　Ｆ地区出土遺物２（土器２）----31
第26図　Ｆ地区出土遺物３（木製品）----32
第27図　Ｆ地区出土遺物４----32
第28図　Ｆ拡張区遺構配置図（上層遺構検出面）----34
第29図　Ｆ拡張区壁断面図----35
第30図　Ｆ拡張区ＳＤ200Ｓ平・断面図----36
第31図　Ｆ拡張区畔断面図----37
第32図　Ｆ拡張区ＳＤ200遺物出土状況----38
第33図　Ｆ拡張区ＳＤ205遺物出土状況----39
第34図　Ｆ拡張区ＮＲ206平面図----40
第35図　Ｆ拡張区ＳＸ201・202平面図----41
第36図　Ｆ拡張区SD200出土遺物１（土師器ほか）----42
第37図　Ｆ拡張区遺物SD200出土遺物２（須恵器ほか）----44
第38図　Ｆ拡張区溝状遺構SD200出土遺物３（木製品）----45
第39図　Ｆ拡張区SD205ほか出土遺物４----46
第40図　Ｆ拡張区溝状遺構ＳＤ205出土木杭１----48
第41図　Ｆ拡張区溝状遺構ＳＤ205出土木杭２----49
第42図　Ｆ拡張区自然流路ＮＲ206出土遺物----50
第43図　第６次調査小規模調査区トレンチ配置図----51
第44図　第６次調査小規模調査区１～４トレンチ平面図----53
第45図　第６次調査小規模調査区１～４トレンチ断面図----54
第46図　第６次調査小規模調査区５・６トレンチ平・断面図----55
第47図　第６次調査小規模調査区出土遺物----56
第48図　Ｋ地区平面図----58
第49図　Ｋ地区土層横断図----59
第50図　Ｋ地区溝状遺構ＳＤ01、集石遺構ＳＸ125平・断面図----60
第51図　Ｋ地区柵列ＳＡ01～03平・断面図----61
第52図　Ｋ地区土坑ＳＫ94平・断面図----61
第53図　Ｋ地区ＳＤ01出土遺物１（須恵器）----63
第54図　Ｋ地区ＳＤ01出土遺物２（土師器）----64
第55図　Ｋ地区集石遺構ＳＸ125、土坑ＳＫ94出土遺物----64
第56図　Ｋ地区包含層出土遺物１（須恵器）----65
第57図　Ｋ地区包含層出土遺物２（須恵器）----66
第58図　Ｋ地区包含層出土遺物３（須恵器）----68

第59図　Ｋ地区包含層出土遺物４（土師器）----69
第60図　Ｋ地区包含層出土遺物５（土師器）----70
第61図　土師器と須恵器の器種組成および須恵器杯Ａ・Ｂの細分----75
第62図　犬飼遺跡の各時代の様相----78

２．令和４・５年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡発掘調査報告

第１図　精華町の位置----93
第２図　国道163号事業と遺跡調査----94
第３図　周辺地質分布図----95
第４図　周辺遺跡分布図----97
（１）柘榴川原遺跡
第５図　柘榴川原遺跡調査区配置図----98
第６図　１～５トレンチ柱状図----99
第７図　６～９トレンチ柱状図----102
第８図　１トレンチ平面図----103
第９図　２トレンチ平面図----104
第10図　３トレンチ平面図----105
第11図　３トレンチ 杭列SX301平・立面図----106
第12図　４トレンチ平面図----107
第13図　５トレンチ上層平面図----108
第14図　５トレンチ下層平面図----108
第15図　５トレンチＳＸ01平・断面図----108
第16図　６トレンチ平面図----109
第17図　７トレンチ平面図----109
第18図　８トレンチ平面図----109
第19図　９トレンチ平面図----110
第20図　出土遺物１（土器）----110
第21図　出土遺物２（木製品・漆製品）----112
（２）石原遺跡
第22図　調査区配置および周辺地形図----115
第23図　石原遺跡１区平・断面図----116
第24図　石原遺跡２区平面図----117
第25図　石原遺跡２区北壁土層断面図----118
第26図　石原遺跡２区第１面遺構平・断面図----119
第27図　石原遺跡２区ＳＤ40・110平面図----120

第28図　石原遺跡３区平・断面図----------122
第29図　石原遺跡４区平・断面図----------123
第30図　石原遺跡出土遺物----------125
付編
第31図　暦年較正結果----------133
第32図　柘榴川原遺跡周辺の地形----------135
第33図　１トレンチ(平面)----------136
第34図　１トレンチ(断面)----------136
第35図　砂質部の河川性堆積物----------137
第36図　泥質部の湖沼～氾濫原性堆積物----------137
第37図　泥質部の地層(第36図)にみられるウェーブリップル葉理----------137
第38図　砂質部と泥質部の境界部----------138
第39図　砂質部と泥質部が同時異相を示す境界部----------139
第40図　１トレンチの層序と堆積環境の変化----------139
第41図　変形した地層----------141
第42図　液状化に伴う水抜け構造----------141

付 表 目 次

１．犬飼遺跡第４・６・９次発掘調査報告
付表１　犬飼遺跡調査次数一覧----------６
付表２　南丹波地域で検出された溝状遺構一覧----------72
付表３　土師器の器種と個体数----------74
付表４　須恵器の器種と個体数----------74
付表５　土器観察表----------81
付表６　木製品観察表----------92
付表７　金属製品観察表----------92
付表８　玉類観察表----------92

２．令和４・５年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡
(１)柘榴川原遺跡
付表１　柘榴川原遺跡出土土器観察表----------113
付表２　柘榴川原遺跡出土木製品・漆製品観察表----------114
(２)石原遺跡
付表３　石原遺跡出土遺物観察表----------126

付表４　測定試料および処理----------129
付編
付表５　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果----------134

写 真 目 次

２．令和４・５年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡発掘調査報告

付編
写真１　試料の採集位置----------130
写真２　測定試料１----------131
写真３　測定試料２----------132

図 版 目 次

巻頭図版１　犬飼遺跡第４・６・９次
　　犬飼遺跡全景(西から)
巻頭図版２　犬飼遺跡第４・６・９次
　　Ｆ拡張区溝状遺構ＳＤ200掘削状況(北から)

１．犬飼遺跡第４・６・９次発掘調査報告

図版第１　(1)調査地遠景(南西から)
　　(2)１トレンチ全景(西から)
　　(3)１トレンチ断面(南から)
図版第２　(1)２トレンチ全景(北東から)
　　(2)２トレンチ断面(北西から)
　　(3)３トレンチ全景(東から)
図版第３　(1)３トレンチ木製品出土状況(北西から)
　　(2)３トレンチ木材出土状況(北東から)
　　(3)３トレンチ断面(東から)
図版第４　(1)４トレンチ断面(北東から)
　　(2)５トレンチ断面(南西から)
　　(3)７トレンチ全景(北西から)

図版第５　(1)７トレンチ断面(西から)
(2)８トレンチ全景(西から)
(3)８トレンチ断面(西から)
図版第６　(1)９トレンチ全景(北から)
(2)９トレンチ断面(北東から)
(3)10トレンチ全景(南西から)
図版第７　(1)調査地遠景(南東から)
(2)調査区東側断面(南西から)
(3)１トレンチ断面(南から)
図版第８　(1)溝状遺構ＳＤ16検出状況１(南東から)
(2)溝状遺構ＳＤ16検出状況２(南東から)
(3)溝状遺構ＳＤ16土器出土状況１(南東から)
図版第９　(1)溝状遺構ＳＤ16土器出土状況２(南東から)
(2)溝状遺構ＳＤ16土器出土状況３(南東から)
(3)溝状遺構ＳＤ16土器出土状況４(南から)
図版第10　(1)溝状遺構ＳＤ16杭出土状況１(東から)
(2)溝状遺構ＳＤ16杭出土状況２(南から)
(3)溝状遺構ＳＤ16断面ｅ－ｅ’(南東から)
図版第11　(1)溝状遺構ＳＤ16断面ｆ－ｆ’(北西から)
(2)溝状遺構ＳＤ16断面ｇ－ｇ’(南から)
(3)溝状遺構ＳＤ16断面ｈ－ｈ’(北から)
図版第12　(1)溝状遺構ＳＤ16断面ｈ－ｈ’(南東から)
(2)溝状遺構ＳＤ16完掘(南東から)
(3)掘立柱建物ＳＢ88検出状況(南西から)
図版第13　(1)掘立柱建物ＳＢ88完掘(南西から)
(2)柱穴ＳＰ199検出状況(南から)
(3)柱穴ＳＰ199断面(南西から)
図版第14　(1)掘立柱建物ＳＢ90検出状況(北東から)
(2)掘立柱建物ＳＢ90完掘状況(北東から)
(3)柱穴ＳＰ77断面(北東から)
図版第15　(1)柱穴ＳＰ78断面(北から)
(2)柱穴ＳＰ91断面(南西から)
(3)竪穴建物ＳＨ150断面(南東から)

図版第16　(1)竪穴建物ＳＨ150断面(南西から)
(2)竪穴建物ＳＨ150完掘(北東から)
(3)柱穴ＳＰ141土器出土状況(北から)
図版第17　(1)空中写真(東から)
(2)遺構検出状況(北から)
図版第18　(1)流路ＮＲ206完掘状況(北から)
(2)流路ＮＲ206南側(北西から)
図版第19　(1)暗渠検出状況(北から)
(2)不明遺構ＳＸ205木製品出土状況(南から)
(3)溝状遺構ＳＤ200遺物出土状況(北から)
図版第20　(1)溝状遺構ＳＤ200遺物出土状況(北から)
(2)流路ＮＲ206・溝状遺構ＳＤ200遺物出土状況(東から)
(3)遺物出土状況(北から)
図版第21　(1)断ち割り断面(南西から)
(2)溝状遺構ＳＤ200畔１断ち割り断面(南東から)
(3)溝状遺構ＳＤ16・ＳＤ200断ち割り断面(東から)
図版第22　(1)土坑ＳＸ201半裁断面(東から)
(2)柱穴ＳＰ202半裁断面(南から)
(3)土坑ＳＸ203半裁断面(南から)
図版第23　(1)１トレンチ全景(東から)
(2)１トレンチ全景(西から)
(3)１トレンチ断ち割り断面(東から)
図版第24　(1)２トレンチ全景(東から)
(2)２トレンチ断ち割り断面(西から)
(3)２トレンチ断ち割り断面(南から)
図版第25　(1)３トレンチ全景(東から)
(2)３トレンチ断ち割り断面(東から)
(3)３トレンチ断ち割り断面(南から)
図版第26　(1)４トレンチ全景(北から)
(2)４トレンチ全景(南から)
(3)４トレンチ断ち割り断面(北から)
図版第27　(1)５トレンチ全景(南から)
(2)５トレンチ断ち割り断面(南から)
(3)５トレンチ断ち割り断面(北から)

図版第28　(1)６トレンチ全景(東から)
(2)６トレンチ断ち割り断面(東から)
(3)６トレンチ断ち割り断面(西から)
図版第29　(1)調査区と平野部を望む(北西から)
(2)調査区全景(上が北)
図版第30　(1)区画溝ＳＤ01全景(南西から)
(2)区画溝ＳＤ01全景(南東から)
図版第31　(1)区画溝ＳＤ01検出状況１(南から)
(2)区画溝ＳＤ01検出状況２(東から)
(3)区画溝ＳＤ01検出状況３(東から)
図版第32　(1)区画溝ＳＤ01土層断面１(北から)
(2)区画溝ＳＤ01土層断面２(北から)
(3)区画溝ＳＤ01土層断面３(南から)
図版第33　(1)区画溝ＳＤ01内集石遺構ＳＸ125全景(南から)
(2)区画溝ＳＤ01内集石遺構ＳＸ125土層断面２(西から)
(3)区画溝ＳＤ01内集石遺構ＳＸ125土層断面３(東から)
図版第34　(1)柵列ＳＡ01全景(北から)
(2)柵列ＳＡ01柱穴ＳＰ11土層断面(西から)
(3)柵列ＳＡ01柱穴ＳＰ12土層断面(西から)
図版第35　(1)柵列ＳＡ02柱穴ＳＰ84土層断面(西から)
(2)柵列ＳＡ02柱穴ＳＰ83土層断面(西から)
(3)柵列ＳＡ02柱穴ＳＰ82土層断面(西から)
図版第36　(1)土坑ＳＫ94遺物出土状況(北から)
(2)土坑ＳＫ94遺物完掘状況(北から)
(3)遺物出土状況(西から)
図版第37　(1)下層確認断ち割り配置状況１(北西から)
(2)下層確認断ち割り配置状況２(北西から)
(3)下層確認断ち割り全景１(南西から)
図版第38　(1)下層確認断ち割り１土層断面(北西から)
(2)下層確認断ち割り２全景(南東から)
(3)下層確認断ち割り２土層断面(北東から)
図版第39　(1)下層確認断ち割り３全景(南東から)
(2)下層確認断ち割り３土層断面(北西から)
(3)下層確認断ち割り４全景(西から)

図版第40　(1)下層確認断ち割り４土層断面(南から)
(2)下層確認断ち割り５全景(北から)
(3)下層確認断ち割り５土層断面(東から)
図版第41　第４次調査出土遺物１
図版第42　第４次調査出土遺物２
図版第43　第４次調査出土遺物３
図版第44　第４次調査出土遺物４
図版第45　第４次調査出土遺物５
図版第46　(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器１(外面)
(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器１(内面)
図版第47　(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器２(外面)
(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器２(内面)
図版第48　(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器３(外面)
(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器３(内面)
図版第49　溝状遺構ＳＤ200出土土器４
図版第50　溝状遺構ＳＤ200出土土器５
図版第51　溝状遺構ＳＤ200出土土器６
図版第52　(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器７(外面)
(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器７(内面)
図版第53　(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器８(外面)
(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器８(内面)
図版第54　(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器９(外面)
(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器９(内面)
図版第55　溝状遺構ＳＤ205出土土器１
図版第56　溝状遺構ＳＤ205出土土器２
図版第57　溝状遺構ＳＤ205出土土器３・溝状遺構ＳＤ200出土玉類・
土色変化ＳＸ204出土土器・自然流路ＮＲ206出土土器１
図版第58　自然流路ＮＲ206出土土器２
図版第59　自然流路ＮＲ206出土土器３・小規模調査区出土土器１
図版第60　小規模調査区出土土器２
図版第61　区画溝ＳＤ01出土土器１
図版第62　区画溝ＳＤ01出土土器２・集石遺構ＳＸ125出土土器・土坑ＳＫ94出土土器
図版第63　包含層出土土器１
図版第64　包含層出土土器２
図版第65　包含層出土土器３

図版第66　包含層出土土器４
図版第67　包含層出土土器５
図版第68　包含層出土土器６
図版第69　包含層出土土器７
図版第70　包含層出土土器８
図版第71　包含層出土土器９
図版第72　包含層出土土器10
図版第73　包含層出土土器11
図版第74　包含層出土土器12
図版第75　包含層出土土器13
図版第76　包含層出土土器14
図版第77　第４次調査出土木製品１
図版第78　第４次調査出土木製品２
図版第79　第６次調査出土木製品１
図版第80　第６次調査出土木製品２

２．令和４・５年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡発掘調査報告

（１）柘榴川原遺跡
図版第１　調査区全景オルソ画像（上が東）
図版第２　(1)調査区遠景（北東から）
　　(2)調査区遠景（南東から）
図版第３　(1)１トレンチ全景（東から）
　　(2)１トレンチ全景（西から）
　　(3)１トレンチ北壁土層断面（南東から）
図版第４　(1)１トレンチ中央部土層断面（南から）
　　(2)２トレンチ全景（西から）
　　(3)２トレンチ東壁土層断面（西から）
図版第５　(1)３トレンチ全景（西から）
　　(2)３トレンチ西壁土層断面（東から）
　　(3)３トレンチ杭列ＳＸ301（北西から）
図版第６　(1)４トレンチ全景（西から）
　　(2)４トレンチ全景（東から）
　　(3)４トレンチ西壁土層断面（東から）

図版第７　(1)４トレンチ西側土層断面(西から)
(2)５トレンチ水田検出状況(東から)
(3)５トレンチ杭列ＳＸ501(北から)
図版第８　(1)５トレンチ全景(東から)
(2)５トレンチ西壁土層断面(東から)
(3)５トレンチ中央部土層断面(東から)
図版第９　(1)６トレンチ全景(東から)
(2)６トレンチ東壁土層断面(西から)
(3)７トレンチ全景(東から)
図版第10　(1)７トレンチ西壁土層断面(東から)
(2)８トレンチ全景(西から)
(3)８トレンチ西壁(東から)
図版第11　(1)９トレンチ全景(東から)
(2)９トレンチ北壁土層断面(南東から)
(3)９トレンチ西壁(東から)
図版第12　(1)土器　集合　表裏　個体
(2)木器　集合　個体
(２)石原遺跡
図版第13　調査区地遠景(東から)
図版第14　(1)１区全景(南東から)
(2)１区全景(北西から)
(3)１区調査区北壁土層断面(南から)
図版第15　(1)２区第１面全景(東から)
(2)２区第１面小溝群(北東から)
図版第16　(1)２区第１面全景(西から)
(2)２区小溝群検出状況(北西から)
(3)２区ＳＤ23・24(南東から)
図版第17　(1)２区地山面全景(東から)
(2)２区地山面全景(北西から)
図版第18　(1)２区調査区拡張ＳＤ110調査状況(北西から)
(2)２区ＳＰ107遺物出土状況(北から)
(3)２区ＳＸ109完掘状況(北東から)

図版第19　(1) ２区ＳＤ01土層断面(南から)
(2) ２区ＳＤ06土層断面(南から)
(3) ２区ＳＤ09土層断面(南から)
(4) ２区ＳＤ16土層断面(南から)
(5) ２区ＳＤ29土層断面(南から)
(6) ２区ＳＤ23土層断面(南から)
(7) ２区ＳＤ24土層断面(南から)
(8) ２区ＳＫ13土層断面(南から)
図版第20　(1) ３区完掘状況(西から)
(2) ３区完掘状況(北東から)
(3) ３区北壁土層断面(南西から)
図版第21　(1) ４区完掘状況(西から)
(2) ４区完掘状況(北東から)
(3) ４区南壁土層断面(北西から)
図版第22　(1)出土遺物１
(2)出土遺物２

１．犬飼遺跡第４・６・９次発掘調査報告

１．はじめに

亀岡市は、京都府中央部のやや南に位置し、その中央を流れる最大の河川である大堰川(桂川)には、左岸側からは三俣川・七谷川・愛宕谷川などが、右岸側からは千々川・犬飼川・曽我谷川・年谷川・西川・鵜ノ川などの小河川が流入している。

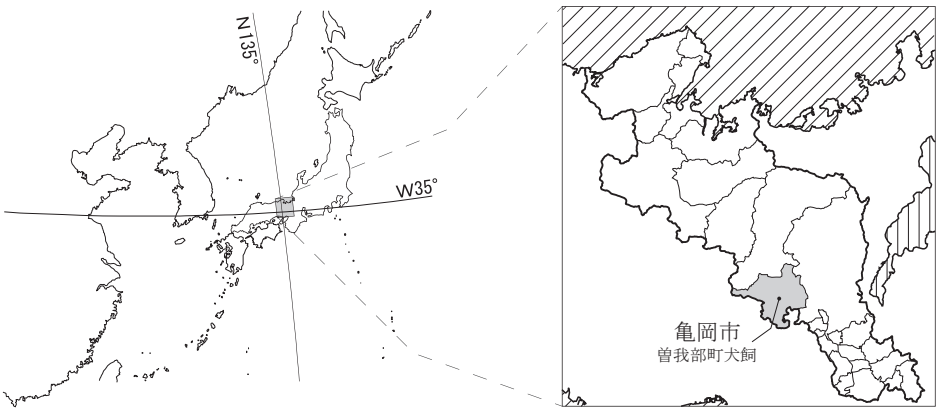
国道423号線は、大阪府大阪市北区の国道25号を起点とし、箕面市を経由し、亀岡市で国道９号に至る約53キロメートルの道路であり、第１次緊急輸送道路にも指定されている。京都縦貫自動車道亀岡インターチェンジや新名神高速道路箕面とどろみインターチェンジへも接続していることから京都府中部地域と阪神地域とを結ぶ重要な幹線道路としても位置づけられている。しかし亀岡市内の区間では、急カーブや急勾配が多く、異常気象時の事前通行規制区間であるため、車両の安全で円滑な通行に支障をきたしている。そのため、京都府により平成25年度に総延長3.6キロメートルになる「バイパス道路」として整備計画が事業化された(注1)。

今回の発掘調査は、国道423号(法貴バイパス)防災･安全交付金業務に伴って行ったものである。京都府南丹土木事務所と京都府教育委員会の協議が行われ、発掘調査について当調査研究センターが依頼を受けた。

現地調査に当たっては曽我部町、穐田野町、東別院町、西別院町、本梅町、東本梅町、宮前町、畑野町、吉川町、大井町、千代川町、亀岡地区西部の各自治会にご高配を賜るとともに、多くの地元の方々にご参加いただいた。また、京都府教育委員会および亀岡市教育委員会に指導・助言をいただいた。

なお、調査に係る経費は京都府南丹土木事務所が全額負担した。

本文は、現地を担当した調査課名村威彦、三好博喜、竹村亮仁が執筆した。　　(竹村亮仁)



第１図　調査地の位置

〔調査体制等〕

〈犬飼遺跡第４次〉

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課調査第１係長　村田和弘

同　調査員　浅田洋輔・尾崎裕妃

同　第３係調査員　名村威彦

調査場所　亀岡市曽我部町法貴中溝・綿打川

現地調査期間　令和元年５月15日～令和元年８月９日

令和元年11月７日～令和２年３月12日

調査面積　2,600㎡

〈犬飼遺跡第６次〉

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課調査第１係長　村田和弘

同　調査第２係調査員　三好博喜・尾崎裕妃

調査場所　亀岡市曽我部町法貴綿打川

現地調査期間　令和２年５月14日～令和３年１月６日

調査面積　2,000㎡

〈犬飼遺跡第９次〉

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課調査第３係長　村田和弘

同　主任　竹村亮仁

同　調査員　清水真好

調査場所　亀岡市曽我部町犬飼

現地調査期間　令和３年５月18日～令和３年12月21日

調査面積　1,200㎡

〈整理作業〉

整理作業責任者　調査課長　小池　寛

整理作業担当者　調査課調査第３係長　村田和弘

調査課調査第１係副主査　三好博喜

同　第３係主任　竹村亮仁

同　第２係調査員　名村威彦

整理作業期間　令和５年４月３日～令和６年３月29日

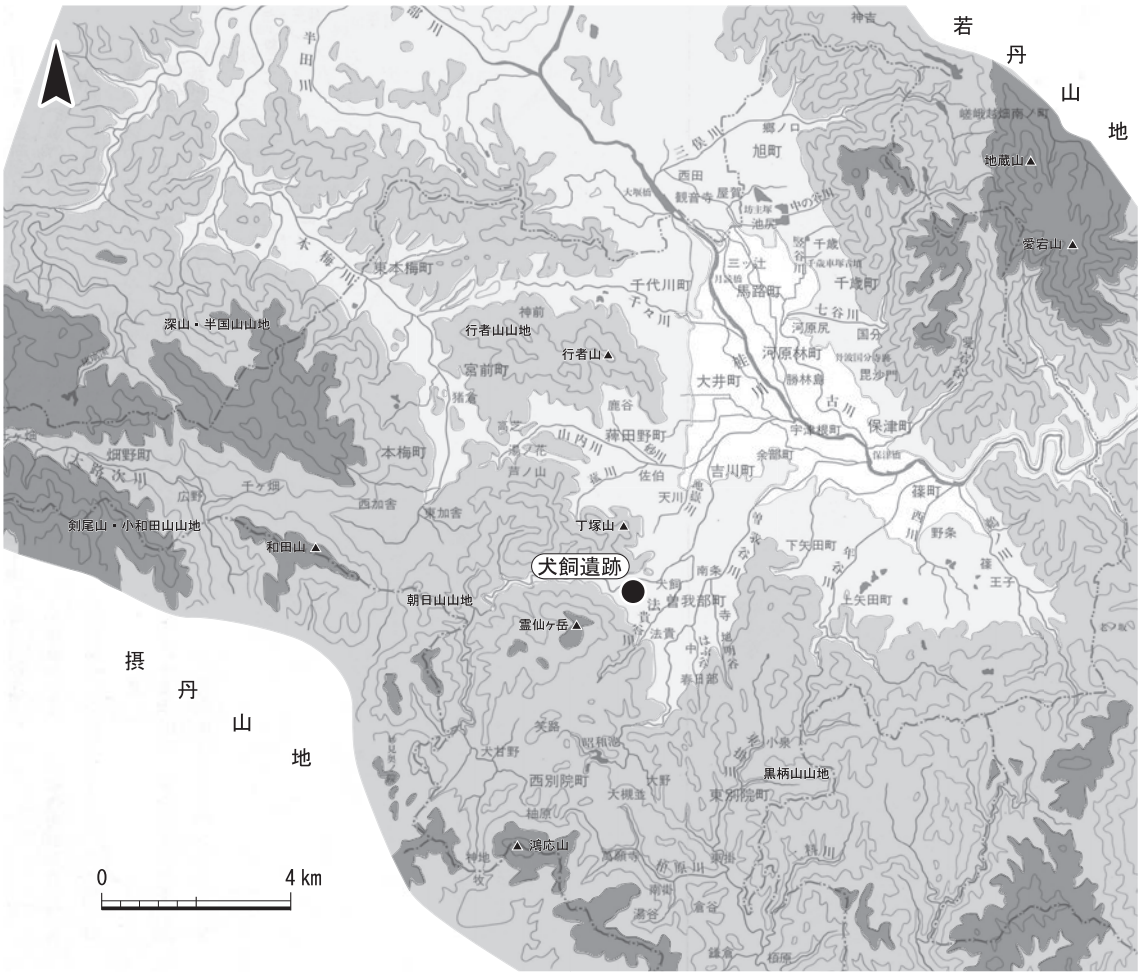
２．位 置 と 環 境

１）地理的環境(注２)

亀岡市は、京都府のほぼ中央に位置し、西側と南側が大きく突出した四角形状を呈している。面積約224.87k㎡で、東西約24.6km、南北約20.5kmの広さをもつ。北は南丹市、東は京都市、南及び西は大阪府高槻市・茨木市・豊能郡能勢町・同豊能町に接する。犬飼遺跡の所在する亀岡市曽我部町は亀岡盆地の南西端にあたる（第２図）。

亀岡盆地は、北東側を若丹山地、南西川を摂丹山地に囲まれる。これらの山地は丹波帯と呼ばれ、泥質岩、砂岩、チャートを主とした堆積岩からなり、一部に石灰岩が含まれる。盆地のほぼ中央を貫流する大堰川（桂川）は、淀川の支流のひとつであり、京都盆地を経て大阪湾へと注ぐ。亀岡断層の断層崖に沿うように、北西から南東方向へと流れており、両岸には河岸段丘が発達する。近世以降の集落も多くは段丘上に位置する。盆地内には大堰川に直交するように北東から南西方向に流れる大小の支流が複数存在している。このような地理的環境によって、山麓にみられる緩斜面から大堰川に向かって、断層崖と扇状地、平坦な河岸段丘というように階段状の地形を呈することが亀岡盆地の特徴である。

摂丹山地のうち、曽我部町の西側にある山々の頂部は標高400～500mの小起伏をなし、朝日山



第２図　亀岡盆地の地形

山地と呼ばれる。この山地内にある霊仙ヶ岳に水源をもつ犬飼川は、深いＶ字谷を形成して曽我部町内を東流し、大堰川に合流する。この霊仙ヶ岳の北東側山麓には、霊仙ヶ岳から供給された砂岩、粘板岩、花崗岩、石英閃緑岩、その風化物である真砂土からなる扇状地が発達しており、今回の調査地もこの扇状地上にある。また、南側から北側へ法貴谷川を取水口とする水路が、調査地に挟まれる形で流れており、この水路周辺は埋没谷痕跡であることが指摘されている。

２）歴史的環境(注３)

今回の犬飼遺跡の調査では主に古墳時代から古代までの遺構および遺物を確認した。ここでは当該時期を中心に亀岡盆地周辺の歴史的環境について概観する（第３図）。

古墳時代　亀岡盆地で、向山古墳など小規模な古墳が確認されるようになるのは前期後半ごろである。中期以降の古墳としては、豊富な副葬品をもつ坊主塚古墳（方墳、38m）が挙げられる。葺石、埴輪を備えており、特に墳丘南側に取り付く造出からは埴輪が集中して出土した。また、仿製三角縁神獣鏡や甲冑、鉄製武器類など、豊富な副葬品をもつ。後期になると全長82mの前方後円墳である千歳車塚古墳が築造される。これらの比較的有力な古墳は、いずれも大堰川東岸に築造される。他方、大堰川西岸では、200基以上からなる小金岐古墳群や、石棚付石室を有する拝田古墳群・鹿谷古墳群、後述する法貴・法貴峠古墳群など、群集墳が多く確認されている。集落遺跡も多く、大堰川西岸では、100棟を越す竪穴建物が検出された鹿谷遺跡をはじめ、千代川遺跡や余部遺跡、佐伯遺跡などで小・中規模の集落遺跡が調査されている。

近年の曽我部町内での継続的な発掘調査では、古墳時代前期から中期前半の遺構が広範囲で検出されていることから、弥生時代以前の遺跡の形成が低調な曽我部町内でも、古墳時代になると安定的な居住域が形成されるようになったと考えられる。犬飼遺跡第３次調査ではＡ地区で竪穴建物が検出されたほか、Ｃ地区で検出された自然流路から、古墳時代前期から古代にかけての土器が出土したほか、木製品が多量に出土した木材集積遺構が確認されており、周辺で木材加工が行われたことが推定される。また、須恵器とともに出土した、樹皮が残存した木材の年輪年代は６世紀の第３四半期を示したことが注目される。また、犬飼遺跡第７・10次調査では古墳時代前期後半の竪穴建物が確認さており、この時期犬飼遺跡で居住域が形成され始める。また、弥生時代後期に形成された自然流路については護岸層から古式土師器に伴って古墳時代中期初頭の須恵器が出土したほか、大規模な井堰も検出されており周辺での人間活動が推定される。曽我部町内では前期古墳は未確認であるが、穴太周辺で採取されたと伝わる筒形銅器が知られており、周辺に未知の前期古墳が存在する可能性は高い。犬飼遺跡の西側丘陵上には、中期後半の須恵器及び紡錘車形石製品、鉄刀が出土した犬飼古墳群や、墳丘内列石が調査された後期の法貴峠20号墳など、石室墳が密集しており、盆地内でも屈指の古墳集中地域である。

飛鳥時代　古墳時代と比較して盆地全体で集落の形成がやや低調であり、古墳時代後期末の首長居館である八木嶋遺跡も飛鳥時代には継続しない。集落遺跡としては、馬路遺跡や蔵垣内遺跡を挙げうる程度である。なお、これらの遺跡では竪穴建物が主体で、掘立柱建物の本格的な普及は８世紀半ば以降と考えられる。



第３図　周辺遺跡分布図

古代の亀岡盆地内では複数の古代寺院が知られており、曽我部町内でも白鳳寺院とされる與能廃寺がある。與能廃寺は正式な発掘調査は行われていないが、塔心礎が残されており、周辺では瓦が採取されている。

奈良時代　盆地全域で遺跡の数は急増する。大堰川東岸では７世紀末に池尻廃寺が、８世紀中葉には国分寺が築造され、周辺の遺跡でも建物の数が増加する。この時期、大堰川東岸では古山陰道が整備されており、これらは軌を一にした現象ととらえられる。推定山陰道に近接する時塚遺跡、車塚遺跡、池尻遺跡では８世紀になると掘立柱建物が急増する。池尻廃寺に隣接する池尻遺跡ではこの時期に正方位に沿う掘立柱建物や柵列が確認されており、官衙的な遺構の可能性も想定される。こうした集落遺跡の多くは８世紀で消滅し、９世紀には、丹波国府の推定地である千代川遺跡や、大型の掘立柱建物が検出されている太田遺跡など、大堰川西岸に中心が移動することとなる。　（名村威彦）

３．調査の経過と方法

１）調査の経緯

第４次調査　犬飼遺跡は、ほ場整備事業に先立って平成23年度に亀岡市教育委員会が試掘調査（第１次調査）を行っている[注4]。第４次調査の対象地周辺では試掘調査が行われていたが、顕著な遺構は検出されなかった。そこで、まず遺構面の有無および深さを確認する目的で対象地内に１～10トレンチを設定し、小規模調査を実施した。小規模調査では４～６トレンチを中心に遺構および遺物が確認されたため、調査範囲を拡大し、Ｆ地区として本調査を実施した。Ｆ地区では古墳時代前期から後期の遺構を検出した。

調査期間は小規模調査が令和元年５月15日から令和元年８月９日、本調査が令和元年11月７日から令和２年３月12日で、調査面積は2,600㎡である。（名村威彦）

第６次調査　第６次調査の調査区は、東西２か所に分かれる。東側では、第４次調査で検出した溝ＳＤ16の南東方向への延長部分を確認するためにＦ地区の東側への拡張を行い、地区名をＦ拡張区とした。また、西側の山麓緩斜面地では１～６トレンチを設定し、小規模調査を行った。小規模調査の結果を受けて調査範囲を拡大し、調査区東側の1,200㎡について本調査を実施し、調査地区名はＫ地区とした。ただし、本格的な調査は令和３年度に実施することとした。

調査期間は令和２年５月14日から令和３年１月６日で、調査面積は2,000㎡である。（三好博喜）

第９次調査　第６次調査の小規模調査で確認した遺構の把握や遺構の展開などを確認するため

付表１　犬飼遺跡調査次数一覧

次数	調査区	調査期間	調査面積	調査機関	調査要因	主な成果	報告書等
第１次	－	平成23年11月～12月	220㎡	亀岡市教育委員会	ほ場整備	範囲確認	亀岡市文化財報告書第82集
第２次	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ	平成30年11月12日～平成31年３月14日	4,155㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	古墳～奈良の集落、中世の方形居館	京都府遺跡調査報告集第185冊
第３次		令和元年５月２日～令和元年10月３日	5,569㎡		ほ場整備		京都府遺跡調査報告集第185冊
第４次	Ｆ	令和元年５月15日～令和元年８月９日 令和元年11月７日～令和２年３月12日	2,600㎡		バイパス建設	古墳時代～古代の集落	本報告
第５次	Ｇ	令和元年11月５日～令和２年２月12日	1,950㎡		ほ場整備	古墳時代前期の水路・地震痕跡	京都府センター情報第138号
第６次	Ｆ拡張Ｋ	令和２年５月14日～令和３年１月６日	2,000㎡		バイパス建設	古墳時代中期初頭の灌漑施設	本報告
第７次	Ｈ・Ｉ	令和２年６月８日～令和３年１月12日	2,000㎡		河川改修	古墳時代前期の灌漑施設・中世の屋敷跡	京都府遺跡調査報告集第190冊
第８次	Ｊ	令和２年９月15日～令和２年10月29日	410㎡		ほ場整備	古墳時代中期初頭の流路	京都府センター情報第139号
第９次	Ｋ（第６次継続調査）	令和３年５月18日～令和３年12月21日	1,200㎡		バイパス建設	古代の集落	京都府センター情報第143号
第10次	小規模・Ｌ・Ｍ	令和３年７月１日～令和４年１月17日	2,000㎡		河川改修	中世の水路	京都府遺跡調査報告集第190冊
第11次	小規模調査	令和４年１月５日～令和４年２月28日	540㎡		ほ場整備	中世の集落	京都府センター情報第143号
第12次	Ｎ（第11次継続調査）	令和４年５月23日～令和４年８月10日	670㎡		ほ場整備		京都府センター情報第144号



第４図　犬飼遺跡既往調査地

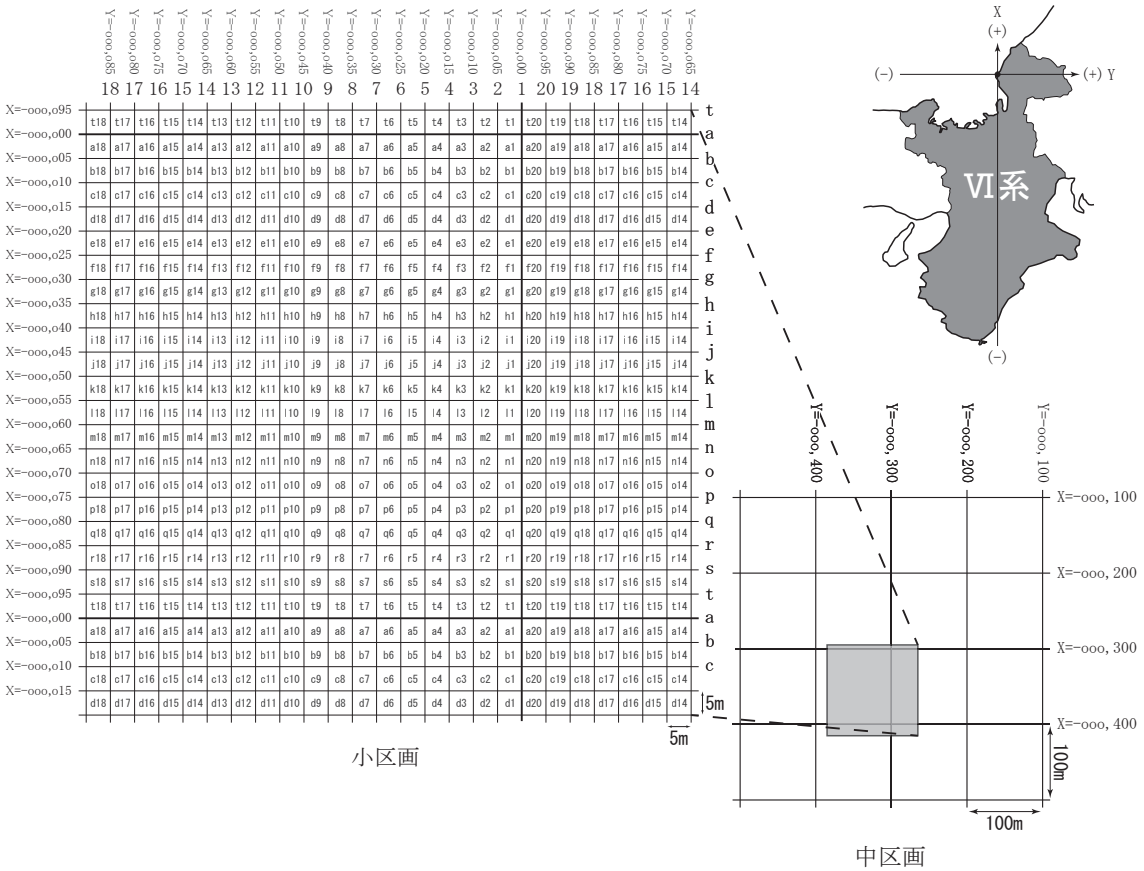
にＫ地区での発掘調査を実施した。調査区は南北約28m、東西約50m、面積1,200㎡である。調査の結果、建物は復元できないが、多数の柱穴と調査区を北西から南東に向かって斜交する溝を検出した。溝の東側の柱穴群周辺から、多く遺物が出土している。調査期間は令和３年５月18日から令和３年12月21日である。（竹村亮仁）

２）調査の方法

（１）地区割の方法について（第５図）

犬飼遺跡第４・６・９次調査では小規模調査区にアラビア数字のトレンチ名（例：１トレンチ）を付し、面的調査をした範囲にはアルファベット（大文字）の地区名（例：Ｆ地区）を付した。

調査では遺物の取り上げに対応するため、平面直角座標系（日本測地系：JGD2000 / Japan Plane Rectangular CS VI " EPSG : 2448 "）を利用した５ｍの区画を設定した。区画の基準線は南北、東西ともに平面直角座標系に一致させ、Ｘ、Ｙの座標値のうち、整数値の下二桁が00となる線を基準に100m四方の中区画を設定し、これを東西と南北でそれぞれ20等分し小区画とする。南北方向はＸ座標値の下二桁が00となる線をａとし、５ｍごとに北からａ～ｔまで、東西方向はＹ座標値の下二桁が00となる線を１とし、５ｍごとに東から１～20を設定し、両者の交点をａ１・ｂ１等と呼ぶ。日本測地系Ⅵ系平面直角座標系は北東角を起点としており、南と西へ向かってＸ、Ｙの絶対値が増加する。この点を考慮して、小区画の名称は北東隅の交点の名称で表す。



第５図　地区割の方法



第６図　犬飼遺跡第４・６・９次調査地位置図

（２）遺構略号について

調査で検出した遺構は、地区ごとに１から遺構番号を付した。それぞれの遺構番号の頭には遺構の性格を示す略号を付した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。本書で使用した略号は以下のとおりである。

ＮＲ：流路、ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑、ＳＰ：柱穴・ピット、

ＳＸ：その他の遺構

（３）出土遺物について

本報告では、古墳時代の須恵器の型式は『須恵器大成』（田辺昭三1981 角川書店）を、古代の土器の分類については『平城宮発掘調査報告』ＸⅢ（奈良文化財研究所1991）を参照している。

（名村威彦）

４．基本層序（第７図）

１）第４次調査

第４次調査では東西260mにおよぶ範囲に調査区を設定した。最も東側に位置する１トレンチの標高は137.1m、最も西側に位置する９トレンチの標高は139.8mであり、全体としては西側から東側にかけて低く傾斜しているが、１トレンチから３トレンチまでは東側から西側にかけて低く傾斜する。小規模調査区１～３トレンチでは無遺物層が厚く堆積しており、１～10cm程度の中礫を含む層が多く確認される。また、７・８層は植物遺体も含まれる。３トレンチでは流路堆積と考えられる層（11～14層）を確認しており、これらの層から土器や木製品が出土した。Ｆ地区では無遺物層（19～21層）を掘削したところ、その下層に遺物包含層（22・31層）を確認した。この遺物包含層を除去した直下で古墳時代前期・後期の遺構を検出した。小規模調査区８・10トレンチでは中礫を多量に含む層が厚く堆積しており、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。

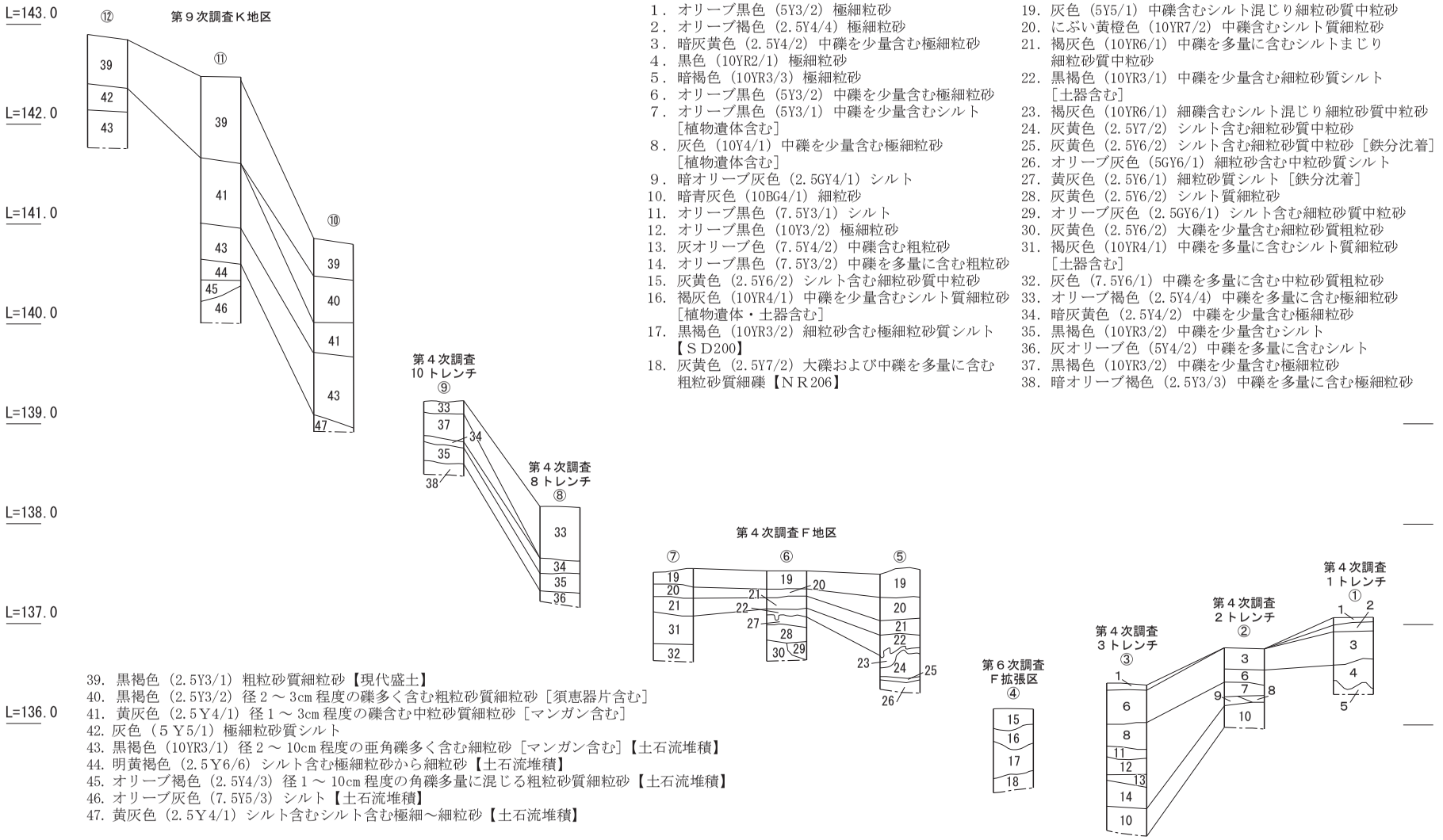
２）第６次調査

第６次調査Ｆ拡張区は東西20mの調査区である。調査区内は大部分が自然流路ＮＲ206および溝状遺構ＳＤ200にあたる。15層は近現代の耕作に伴う層である。その下層16層は２cm程度の礫を少量含む細粒砂層で、炭化物や木片、遺物を含む層である。17層は溝状遺構ＳＤ200の埋土が25cm程度堆積しており、その下層に18層として自然流路ＮＲ206の埋土が堆積する。

（名村威彦）

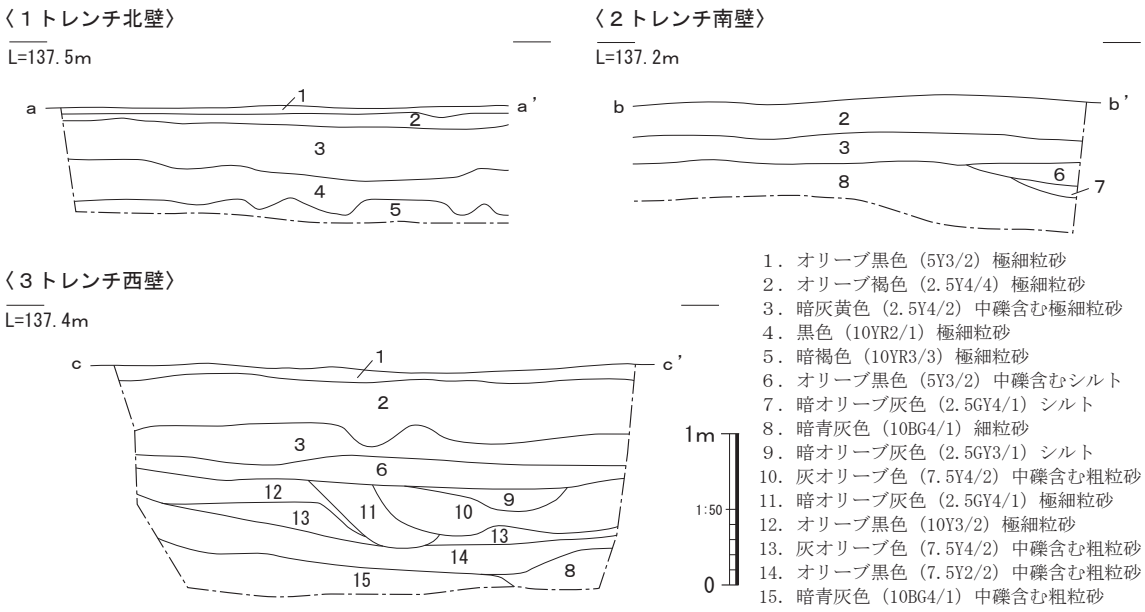
３）第９次調査

第６次調査の結果、現地表面から0.1～１m程度は、現在の盛土が堆積しており、２・３・６トレンチに薄く遺物包含層が残存していた。遺構検出面は２・３・８層上面で、10cm程度の礫混じりの堆積層上である。北側の８層は10cm大の礫主体の礫支持層で長軸が西から東にむく。８層下層の９層はしまりのない中礫まじりの砂層が堆積する。その下６層では偽礫の少ないシルト層が堆積している。９層は南から北側に下がる堆積構造で、ラミナが一部確認できる。６層中には礫を主体とする７・13層が認められる。13層には６層シルトの偽礫が含まれる。７層は山なりの



1．オリーブ黒色（5Y3/2）極細粒砂
2．オリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒砂
3．暗灰黄色（2.5Y4/2）中礫を少量含む極細粒砂
4．黒色（10YR2/1）極細粒砂
5．暗褐色（10YR3/3）極細粒砂
6．オリーブ黒色（5Y3/2）中礫を少量含む極細粒砂
7．オリーブ黒色（5Y3/1）中礫を少量含むシルト［植物遺体含む］
8．灰色（10Y4/1）中礫を少量含む極細粒砂［植物遺体含む］
9．暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト
10．暗青灰色（10BG4/1）細粒砂
11．オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト
12．オリーブ黒色（10Y3/2）極細粒砂
13．灰オリーブ色（7.5Y4/2）中礫含む粗粒砂
14．オリーブ黒色（7.5Y3/2）中礫を多量に含む粗粒砂
15．灰黄色（2.5Y6/2）シルト含む細粒砂質中粒砂
16．褐灰色（10YR4/1）中礫を少量含むシルト質細粒砂［植物遺体・土器含む］
17．黒褐色（10YR3/2）細粒砂含む極細粒砂質シルト【ＳＤ200】
18．灰黄色（2.5Y7/2）大礫および中礫を多量に含む粗粒砂質細礫【ＮＲ206】
19．灰色（5Y5/1）中礫含むシルト混じり細粒砂質中粒砂
20．にぶい黄橙色（10YR7/2）中礫含むシルト質細粒砂
21．褐灰色（10YR6/1）中礫を多量に含むシルトまじり細粒砂質中粒砂
22．黒褐色（10YR3/1）中礫を少量含む細粒砂質シルト［土器含む］
23．褐灰色（10YR6/1）細礫含むシルト混じり細粒砂質中粒砂
24．灰黄色（2.5Y7/2）シルト含む細粒砂質中粒砂
25．灰黄色（2.5Y6/2）シルト含む細粒砂質中粒砂［鉄分沈着］
26．オリーブ灰色（5GY6/1）細粒砂含む中粒砂質シルト
27．黄灰色（2.5Y6/1）細粒砂質シルト［鉄分沈着］
28．灰黄色（2.5Y6/2）シルト質細粒砂
29．オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト含む細粒砂質中粒砂
30．灰黄色（2.5Y6/2）大礫を少量含む細粒砂質粗粒砂
31．褐灰色（10YR4/1）中礫を多量に含むシルト質細粒砂［土器含む］
32．灰色（7.5Y6/1）中礫を多量に含む中粒砂質粗粒砂
33．オリーブ褐色（2.5Y4/4）中礫を多量に含む極細粒砂
34．暗灰黄色（2.5Y4/2）中礫を少量含む極細粒砂
35．黒褐色（10YR3/2）中礫を少量含むシルト
36．灰オリーブ色（5Y4/2）中礫を多量に含むシルト
37．黒褐色（10YR3/2）中礫を少量含む極細粒砂
38．暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）中礫を多量に含む極細粒砂
39．黒褐色（2.5Y3/1）粗粒砂質細粒砂【現代盛土】
40．黒褐色（2.5Y3/2）径２～３cm 程度の礫多く含む粗粒砂質細粒砂［須恵器片含む］
41．黄灰色（2.5Ｙ4/1）径１～３cm 程度の礫含む中粒砂質細粒砂［マンガン含む］
42．灰色（５Ｙ5/1）極細粒砂質シルト
43．黒褐色（10YR3/1）径２～10cm 程度の亜角礫多く含む細粒砂［マンガン含む］【土石流堆積】
44．明黄褐色（2.5Ｙ6/6）シルト含む極細粒砂から細粒砂【土石流堆積】
45．オリーブ褐色（2.5Y4/3）径１～10cm 程度の角礫多量に混じる粗粒砂質細粒砂【土石流堆積】
46．オリーブ灰色（7.5Y5/3）シルト【土石流堆積】
47．黄灰色（2.5Ｙ4/1）シルト含むシルト含む極細～細粒砂【土石流堆積】

第７図　犬飼遺跡第４・６・９次調査基本層序模式図(断面：1/50　東西方向は任意)



第８図　第４次調査小規模調査区断面図

断面形を呈している。包含する礫の堆積状況は８層にみられる礫層と類似する。南側では、やや小ぶりな礫を包含する砂層が堆積している。遺構の調査が完了したのちに行った断ち割りでは、調査区下層には、遺物を含まない谷状地形と考えられる堆積を２カ所確認した。谷状地形は、調査区の中央付近をピークに北側、南側に下る。７層が山なりの堆積をしていることは、埋没地形を投影していることに起因する。下層の状況を含めて考えると、人間活動が行われる以前の谷を埋めた土石流による堆積が、遺構検出面のベース層になっていると考えられる。断ち割りではしまりのない礫支持層や谷部に堆積したシルト層を確認することはできたが、遺構・遺物は確認できなかった。

５．小規模調査（第４次調査－１）

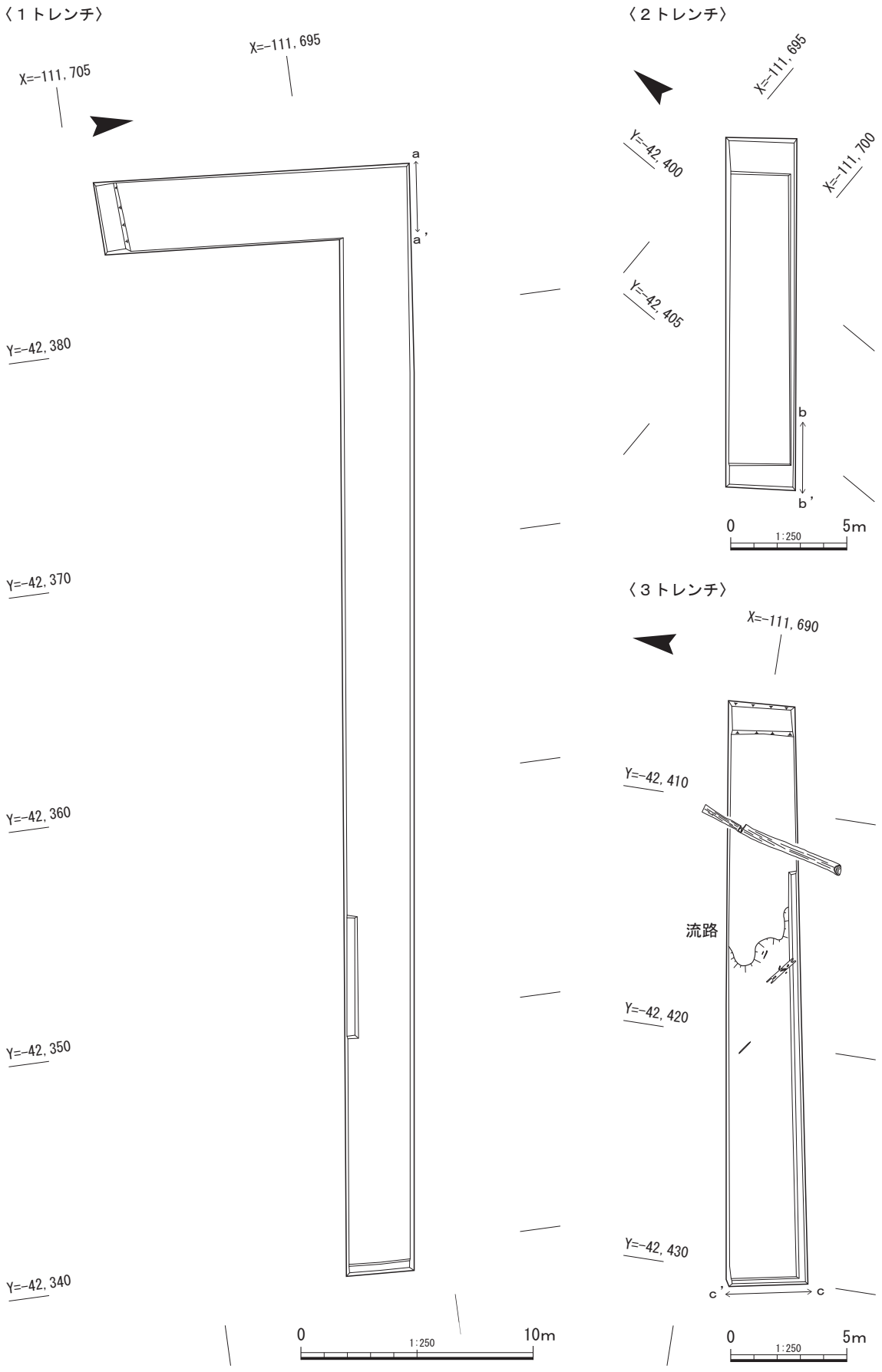
１）調査の概要

調査区は重機によってほ場の全面の耕作土の除去したのちに設定した（第６図）。

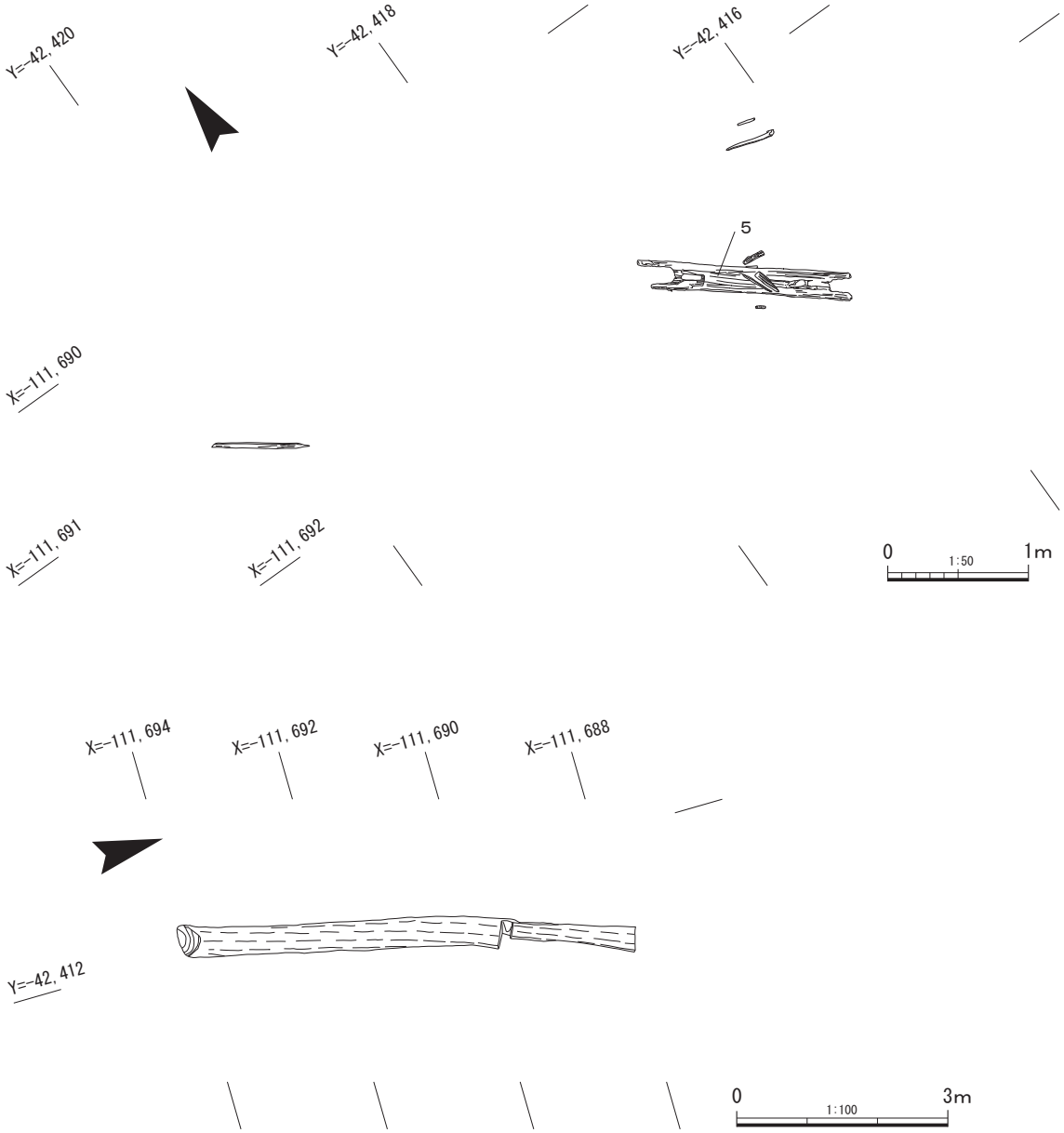
小規模調査区は、ほ場ごとに１～10トレンチの10か所で行った。その結果、４～６トレンチでは遺構を検出したため拡張し、Ｆ地区として面的な調査を実施することとなった。したがって、ここでは１～３トレンチおよび７～10トレンチを中心に報告する。

１トレンチ（第９図）　幅3.0m、長さ44.5mの調査区と幅3.0m、長さ13.6mの調査区をつなげた「Ｌ」字形の調査区である。表土下0.4mのところで黒色極細粒砂の安定的な層を確認したが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。その後、下層確認のために断ち割りを行ったが、遺構および遺物は確認できなかった。

２トレンチ（第９図）　幅3.0m、長さ15.0mの長方形の調査区である。表土下0.8mまで掘削したが、顕著な遺構および遺物は確認できなかった。下層には河川堆積物と考えられる砂礫層が厚く堆積していた。



第９図　第４次調査小規模調査区平面図

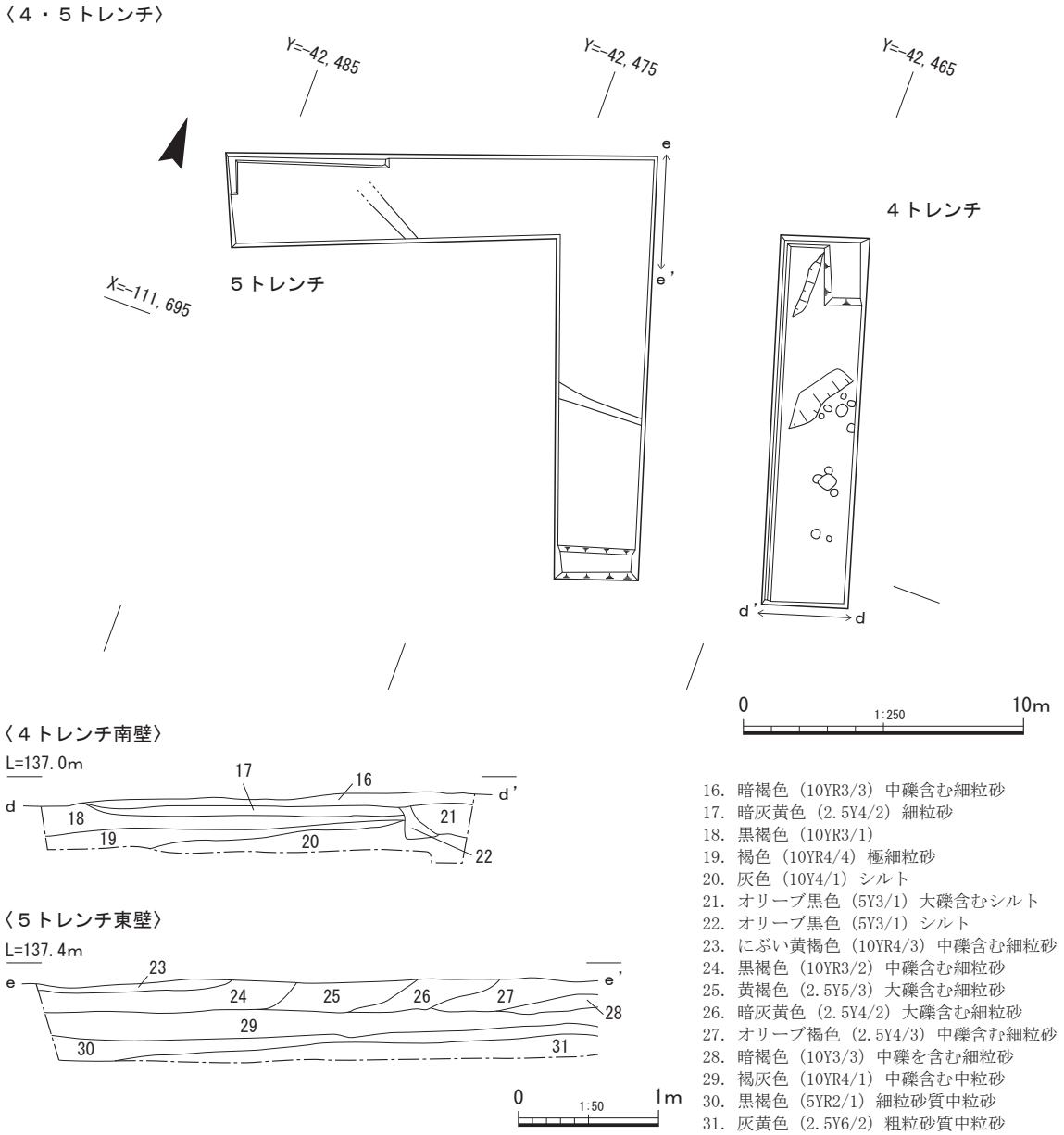


第10図　第４次調査３トレンチ遺物出土状況

３トレンチ（第９図）　幅3.5m、長さ25.2mの長方形の調査区である。表土下0.6mのところで中礫を含むシルト層を確認した。このシルト層からは瓦器の破片や木製品が出土した。この遺物包含層の下層には中礫を含む砂礫層が厚く堆積しており、河川堆積物と判断した。この河川堆積物には古墳時代中期から後期の須恵器と大型の木材が含まれていた（第10図）。調査区内に安定した地盤は認められず、遺構も検出されなかった。

４トレンチ（第11図）　幅3.0m、長さ13.2mの長方形の調査区である。表土下0.4mのところで安定した地盤を確認し、柱穴などの遺構を検出した。安定的な地盤は過去のほ場整備の際に削平されており、遺構形成面の標高は検出面より高かったと考えられる。

５トレンチ（第11図）　幅3.0m、長さ15.0mの調査区と、幅3.4mと長さ11.6mの調査区をつなげた「Ｌ」字形の調査区である。表土下0.4mのところで溝状遺構を検出した。検出面は、しまり



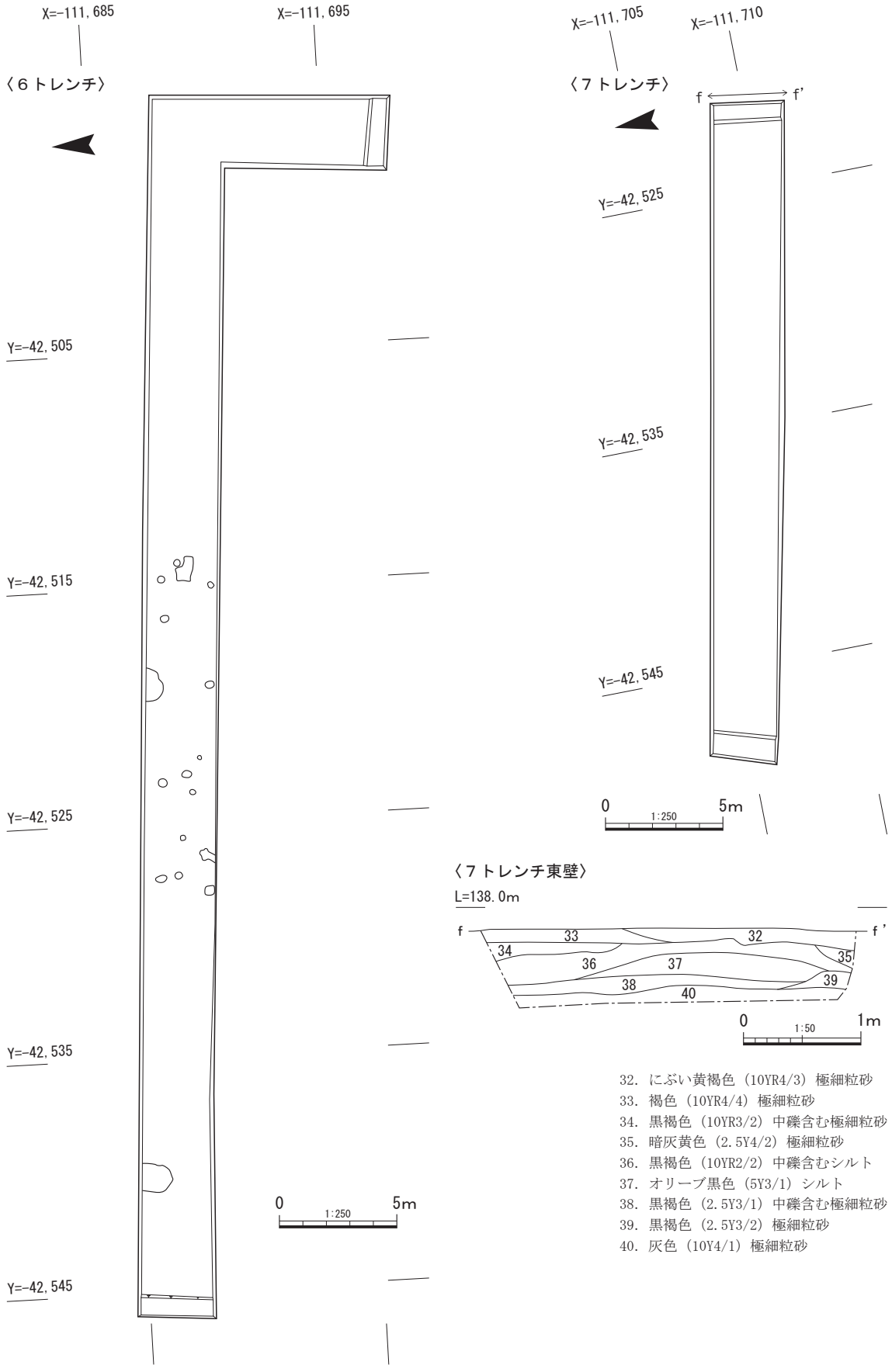
第11図　第４次調査小規模調査区平・断面図１

の強くない砂層で安定しておらず、本来の安定した遺構形成面は検出面より高く、削平されたものと考えられる。

６トレンチ（第12図）　幅3.3m、長さ52.0mの調査区と、幅3.2m、長さ6.9mの調査区をつなげた「Ｌ」字形の調査区である。表土下0.5mのところで柱穴などの遺構を検出した。

７トレンチ（第12図）　幅3.0m、長さ27.8mの長方形の調査区である。表土下0.4mまで掘削したが、安定した地盤は確認できず、顕著な遺構および遺物もみつからなかった。さらに下層を確認するために掘削したが、中礫を含む砂礫層が堆積しており安定した地盤は確認できなかった。

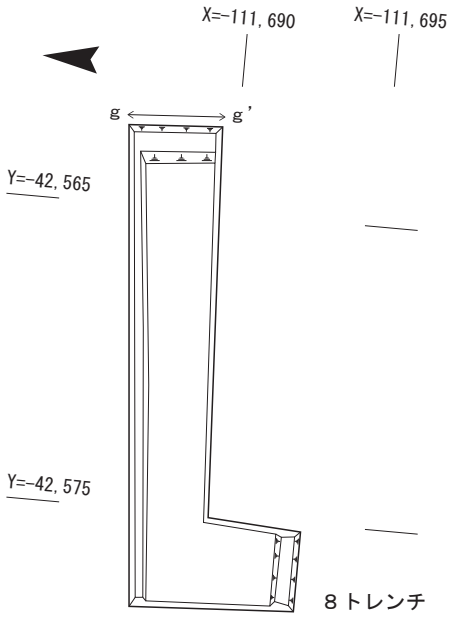
８トレンチ（第13図）　幅3.1m、長さ16.0mの調査区と幅2.6m、長さ3.0の調査区をつなげた「Ｌ」字形の調査区である。表土下1.0mまで中礫を含む砂礫層が厚く堆積しており、安定した地盤が確認できなかった。顕著な遺構および遺物は確認できなかった。



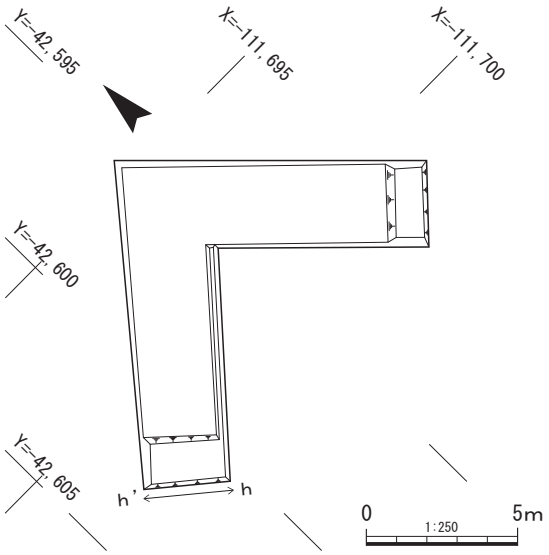
32. にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂
33. 褐色（10YR4/4）極細粒砂
34. 黒褐色（10YR3/2）中礫含む極細粒砂
35. 暗灰黄色（2.5Y4/2）極細粒砂
36. 黒褐色（10YR2/2）中礫含むシルト
37. オリーブ黒色（5Y3/1）シルト
38. 黒褐色（2.5Y3/1）中礫含む極細粒砂
39. 黒褐色（2.5Y3/2）極細粒砂
40. 灰色（10Y4/1）極細粒砂

第12図　第４次調査小規模調査区平・断面図２

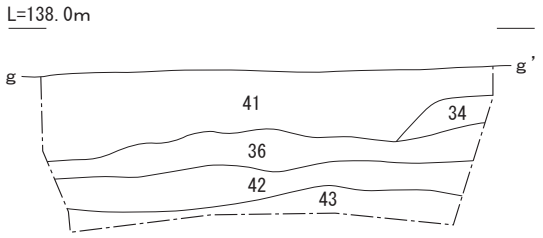
〈８・10 トレンチ〉



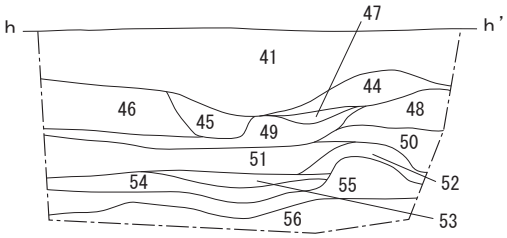
〈９トレンチ〉



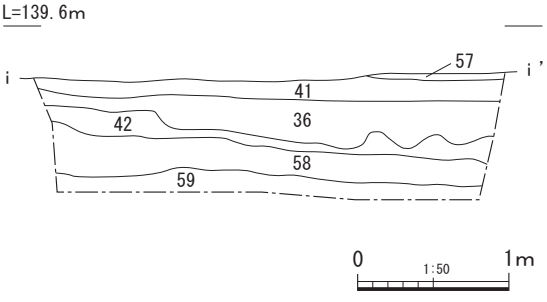
〈８トレンチ東壁〉



〈９トレンチ西壁〉

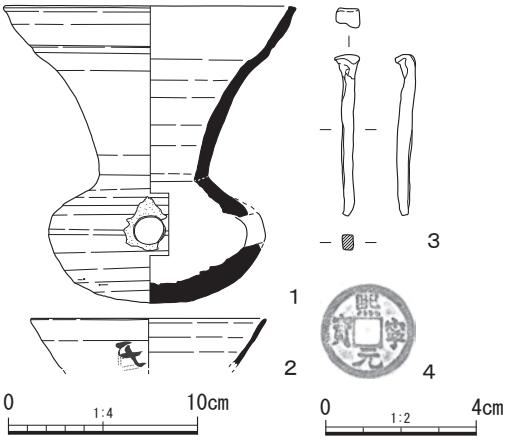


〈10 トレンチ北壁〉



34. 黒褐色（10YR3/2）中礫含む極細粒砂
36. 黒褐色（10YR2/2）中礫含むシルト
41. オリーブ褐色（2.5Y4/4）中礫を含む細粒砂質極細粒砂
42. 黒褐色（10YR3/2）中礫を少量含むシルト
43. 灰オリーブ色（5Y4/2）中礫を多量に含むシルト
44. 灰オリーブ色（5Y5/3）中礫を少量含むシルト
45. 褐色（10YR4/4 中礫を多量に含む細粒砂
46. 灰色（7.5Y4/1）中礫を多量に含む細粒砂
47. 褐色（10YR4/6）極細粒砂
48. 暗オリーブ色（5Y5/3）中礫を多量に含む極細粒砂
49. 暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒砂
50. 灰オリーブ色（5Y4/2）中礫を少量含む極細粒砂
51. 青灰色（5B6/1）中礫を多量に含むシルト質極粗粒砂
52. 黒褐色（5YR3/1）中礫を少量含むシルト質極粗粒砂
53. 灰白色（N7/1）粗粒砂
54. 明赤褐色（5YR5/6）シルト
55. 明青灰色（5BG7/1）中礫を少量含むシルト
56. 明緑灰色（10G7/1）シルト
57. オリーブ黒色（5Y3/2）極細粒砂〈現代耕作土〉
58. 褐色（10YR4/4）シルト
59. 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）中礫を多量に含む極細粒砂

第13図　第４次調査小規模調査区平・断面図３



第14図　第４次調査小規模調査区出土遺物

９トレンチ（第13図）　幅2.9m、長さ11.0mの調査区と幅2.8m、長さ7.0mの調査区をつなげたＬ字形の調査区である。表土下1.3mまで中礫を含む砂礫層が厚く堆積しており、堆積状況から地すべりによって運搬された土砂が堆積したものと判断した。安定した地盤および顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

10トレンチ（第13図）　幅3.0m、長さ5.8mの長方形の調査区である。地表下0.6mまで中礫を含む砂礫層が堆積しており、その直下でシルト層を確認した。顕著な遺構および遺物は確認できなかった。その下層は中礫を含む砂礫層が堆積しており、安定した地盤は確認できなかった。

以上の調査結果を受けて、遺構を確認した４～６トレンチについて拡張し、Ｆ地区として面的な調査を行うこととなった。

２）出土遺物

小規模調査では３～６トレンチの包含層を中心に、須恵器や木製品、青銅製品などがコンテナ５箱程度出土した。

（１）土器（第14図）

１は須恵器瓶である。頸部は斜め上方にゆるやかに広がり、口縁部は内湾気味に立ち上がる。頸部と口縁部の境界には太く浅い凹線が１条めぐり、口縁端部は面をもつ。調整は口縁部から頸部にかけて内外面ともに回転ナデである。胴部は中位に最大径をもつ横長の扁球体であるが、ややなで肩である。底部から最大径よりやや上位にかけて時計回りの回転ヘラ削りを施したのちに回転ナデで調整する。器形の比率としては頸部がやや短く、また頸部基部のしまりも弱いが、口縁部と頸部の境界の稜線が弱く、頸部や胴部に文様がないことからTK209型式以降であろう。

２は須恵器杯の口縁部破片である。調整は内外面ともに回転ナデである。外面に「厂」あるいは「匚」を含む文字の可能性がある墨書が残されている。

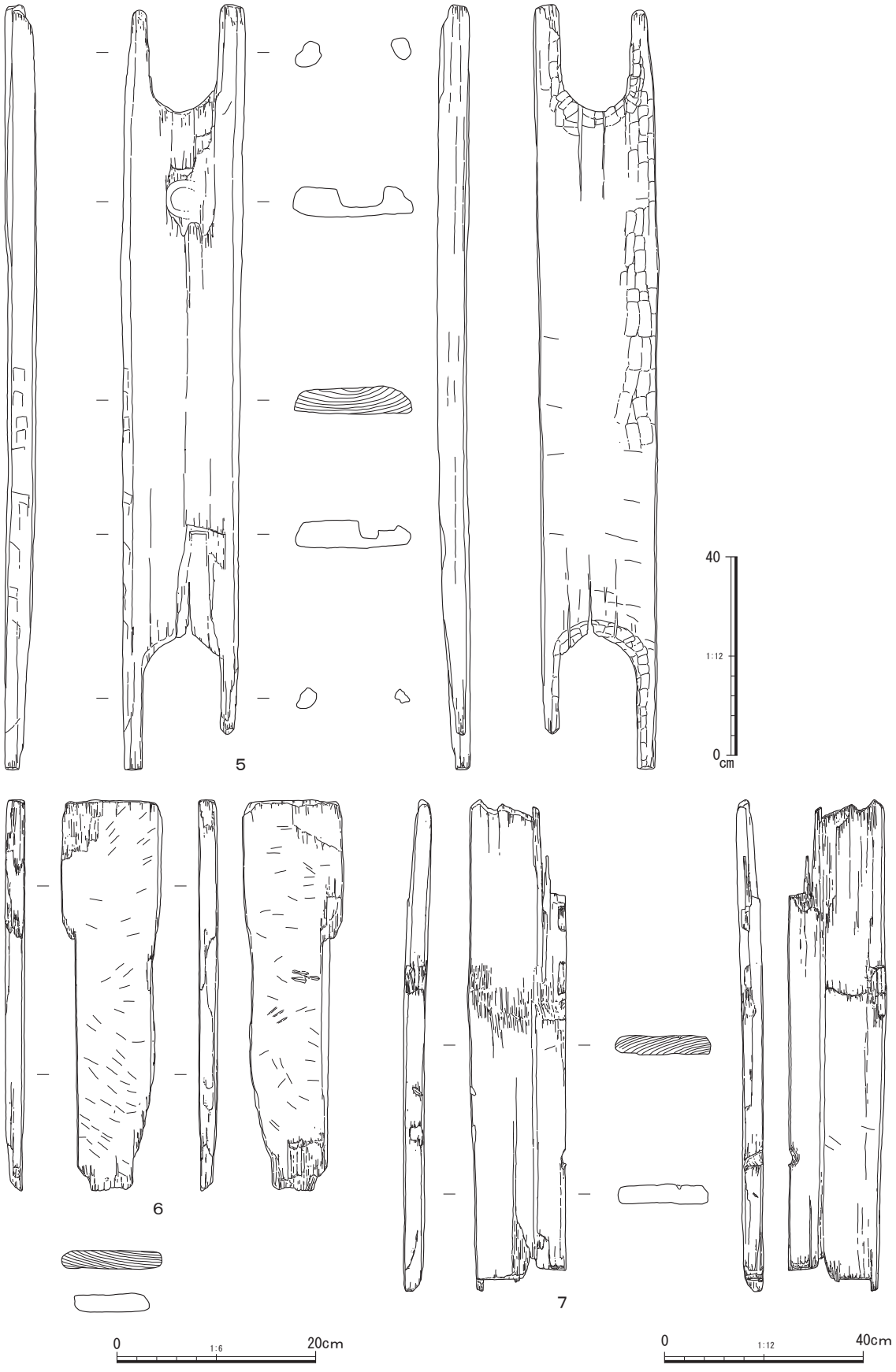
１・２は、３トレンチ包含層から出土した。

（２）金属製品（第14図）

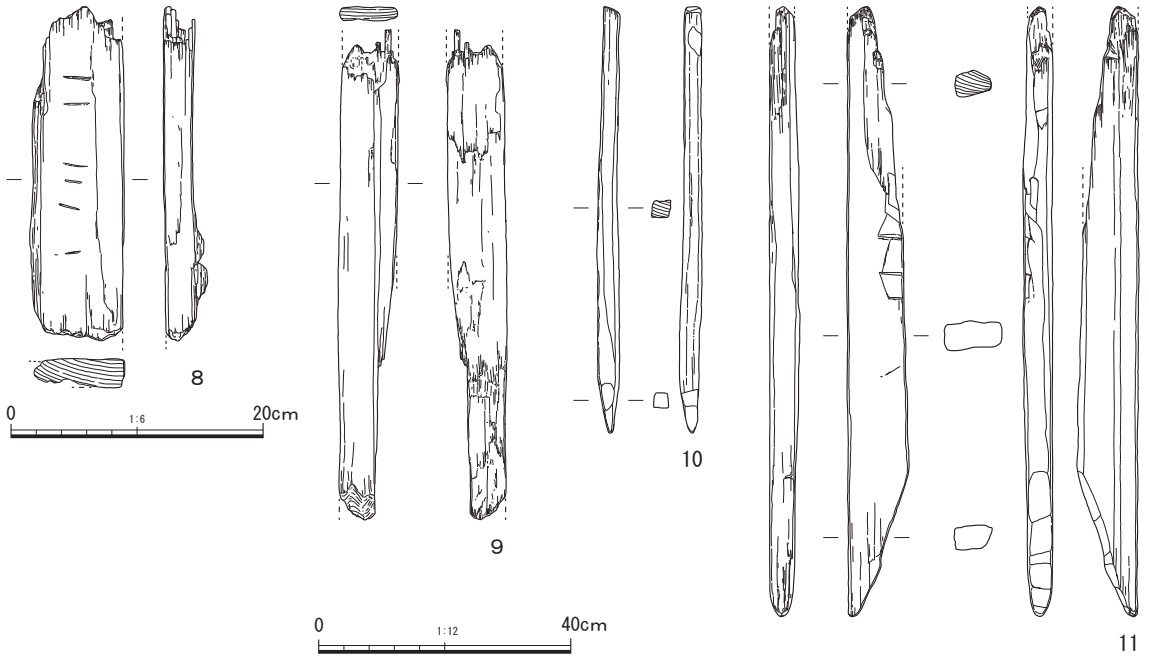
３は鉄製の和釘である。４は真書の熙寧元寶である。初鋳年代は1068年である。いずれも３トレンチ包含層から出土した。

（３）木製品（第15・16図）

５は柾目の建築部材である。楣か。全長154.0cm、幅24.0cm、厚さ5.4cmである。表面は腐植が激しく、加工痕の単位は不明瞭であるが、手斧ハツリの痕跡がわずかに確認できる。６～８は追柾目の板材である。６は現存長78.8cm、幅20.0cm、厚さ3.6cmである。材は途中で折損しているが、図上で上にした端面は大部分が本来の形状を残しており、厚さもほぼ均一で損傷は少ない。



第15図　第４次調査小規模調査区出土木製品１



第16図　第４次調査小規模調査区出土木製品２

７は現存長99.0cm、幅19.8cm、厚さ3.8cmである。表面は荒れが激しく、加工痕がほとんど確認できない。両端とも折損しているが、幅と厚さは本来の規模を残すと考えられる。８は現存長26.6cm、現存幅7.4cm、現存厚1.5～3.2cmである。全体に残りが悪く、本来の形状を残すのは表面のみである。本来は幅広で、厚い板材であったと考えられる。９は柾目の板材である。現存長78.0cm、幅9.0cm、厚さ2.2cmで、両端は折損している。表面は腐植が激しく、加工痕がほとんど確認できない。10は杭である。全長67.6cm、幅3.4cm、厚さ2.6cmで断面方形である。先端は四面とも加工されているが、一面のみ角度が小さいため側面から見ると斜辺の長い直角三角形状にみえる。11は杭の可能性がある板状木製品である。現存長48.4cm、幅4.8cm、厚さ2.1cmである。板状の木製品の先端を斜めに削っており、加工面は平坦である。筋交いのような部材として使用された可能性もある。上部が折損している。

３）小結

第４次調査の小規模調査区では４～６トレンチで柱穴､溝状遺構を検出した。小片ではあるが、土師器および須恵器が出土しており、周辺に古墳時代の遺構が広がる可能性が高いため調査範囲を拡張し、Ｆ地区として本調査を実施することとなった。

３トレンチでは自然流路に古墳時代後期から平安時代までの遺物が流れ込んでいることを確認した。出土した遺物の中には墨書土器が含まれる。後述する犬飼遺跡第６次調査では刻書土器も出土しており、犬飼遺跡周辺に識字層が居住していたことがうかがえる。令制国下における丹波国では600点を超える古代の墨書土器が出土しており(注5)、曽我部町内での出土例は犬飼遺跡第３次調査Ｃ地区(注6)、犬飼遺跡第10次調査Ｍ地区(注7)、金生寺遺跡第４・５次調査Ｆ地区(注8)、金生寺遺跡第７次調査(注9)で出土している。丹波国の場合、墨書土器は推定「古山陰道」に隣接する時塚遺跡や池尻遺跡、推定古代山陰道および駅家想定地周辺の遺跡、あるいは大きな河川沿いの遺跡からの出土が

多く、交通の要衝・駅制に携わる官人層との関連性が推定される。曽我部町内には古代の幹線道路や大きな河川はないが、近世以降、摂丹街道と呼ばれる交通路が整備される。この道路の存在が古代にまで遡るかは不明であるが、犬飼遺跡第10次調査M地区では「中道」と書かれた８世紀の須恵器杯Ｂ身が出土しており、摂津方面への交通の要衝に関わる集落として曽我部町内に識字層が居住していた可能性がある。

６．Ｆ地区の調査（第４次調査－２）

１）調査の概要

Ｆ地区は東西約100.0m、南北約23.5mにわたる五角形の調査区である（第17図）。小規模調査で遺構が検出された４～６トレンチを拡張した。調査に先立ち、耕作土を重機で移動した後に、遺構検出面まで重機で掘削した。その後、調査区の北側と東側の端に雨水等の排出と土層観察を兼ねた断ち割りを人力で行った。遺構検出は人力で行い、ベルトコンベアを用いて排土を移動した。古墳時代前期の溝状遺構や古墳時代後期の柱穴、掘立柱建物を検出したほか、時期不明の竪穴建物を検出した。調査地は、全体的に後世の削平により残存状況が悪く、本来の遺構形成面は削平されたものと考えられる。遺物は溝状遺構に伴う土師器と掘立柱建物に伴う須恵器が中心である。遺構完掘後、調査区の断ち割りを行ったところ、地山が検出され、下層遺構は認められなかった。また遺構完掘後、小型無人航空機（ＵＡＶ）を用いた空中写真撮影および地形測量を行った。

Ｆ地区では現地表面から下位約0.5mは耕作土などの無遺物層があり、その下層に遺物包含層が堆積する（第18図）。この包含層を除去したところで遺構を検出した。遺構検出面は凹凸が激しく、上位に堆積する層がこうした凹凸を埋めるように堆積しているような状況で、層序が大きく乱れるところも多数確認できた。また後述するとおり、一部の遺構埋土は大きく横ずれを起こすなど、遺構埋土についても層序が乱れるものがあった。こうした状況から、遺構が埋没した後に地震やそれに伴う土砂災害などの自然活動で地盤が動いたものと考えられる。一方、遺構埋土に横ずれなどの埋土の乱れが確認できないものもあることから、自然活動の後に形成された遺構も存在しており、少なくとも２時期の土地利用があったことがわかる。

２）検出遺構

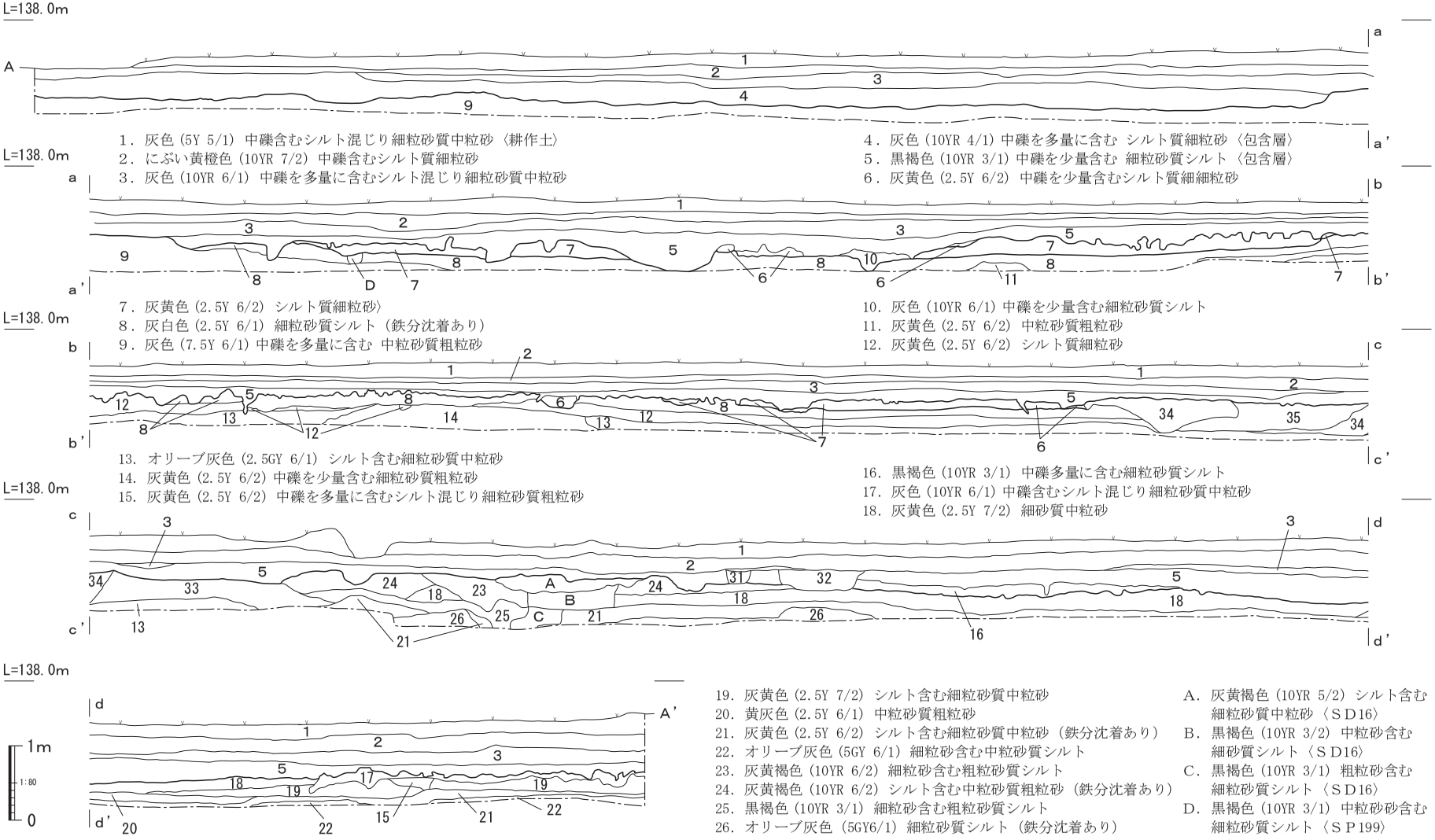
（１）掘立柱建物

掘立柱建物ＳＢ88（第20図上段）　Ｆ地区西側で検出した桁行２間以上、梁行２間の掘立柱建物である。桁行方向は調査地より北側に続く可能性がある。桁行の方位はＮ19°Ｅである。柱間はおおむね2.3mである。柱穴はいずれも円形で、径0.40m程度、深さ0.10m程度が残存していた。遺物は出土しておらず時期は不明である。比較的残存状況の良いＳＰ199は埋土の上半が横ずれをおこしている。桁行２間、梁行２間分の床面積は20.9㎡である。

掘立柱建物ＳＢ90（第20図下段）　Ｆ地区中央で検出した桁行３間、梁行２間の掘立柱建物である。桁行の方位はＮ71°Ｗである。柱間は桁行方向で1.5m、梁行方向で2.0mである。柱穴はいずれも円形で径0.42m程度、深さ0.10～0.36mが残存していた。ＳＰ77から須恵器杯蓋と高杯の脚

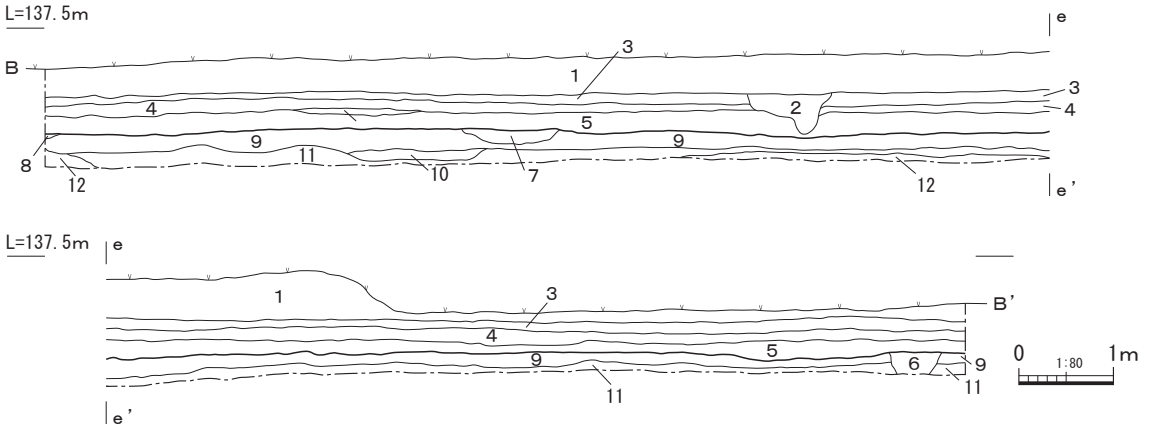


第17図　F地区全体平面図



1．灰色（5Y 5/1）中礫含むシルト混じり細粒砂質中粒砂〈耕作土〉
2．にぶい黄橙色（10YR 7/2）中礫含むシルト質細粒砂
3．灰色（10YR 6/1）中礫を多量に含むシルト混じり細粒砂質中粒砂
4．灰色（10YR 4/1）中礫を多量に含む シルト質細粒砂〈包含層〉
5．黒褐色（10YR 3/1）中礫を少量含む 細粒砂質シルト〈包含層〉
6．灰黄色（2.5Y 6/2）中礫を少量含むシルト質細細粒砂
7．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト質細粒砂〉
8．灰白色（2.5Y 6/1）細粒砂質シルト（鉄分沈着あり）
9．灰色（7.5Y 6/1）中礫を多量に含む 中粒砂質粗粒砂
10．灰色（10YR 6/1）中礫を少量含む細粒砂質シルト
11．灰黄色（2.5Y 6/2）中粒砂質粗粒砂
12．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト質細粒砂
13．オリーブ灰色（2.5GY 6/1）シルト含む細粒砂質中粒砂
14．灰黄色（2.5Y 6/2）中礫を少量含む細粒砂質粗粒砂
15．灰黄色（2.5Y 6/2）中礫を多量に含むシルト混じり細粒砂質粗粒砂
16．黒褐色（10YR 3/1）中礫多量に含む細粒砂質シルト
17．灰色（10YR 6/1）中礫含むシルト混じり細粒砂質中粒砂
18．灰黄色（2.5Y 7/2）細砂質中粒砂
19．灰黄色（2.5Y 7/2）シルト含む細粒砂質中粒砂
20．黄灰色（2.5Y 6/1）中粒砂質粗粒砂
21．灰黄色（2.5Y 6/2）シルト含む細粒砂質中粒砂（鉄分沈着あり）
22．オリーブ灰色（5GY 6/1）細粒砂含む中粒砂質シルト
23．灰黄褐色（10YR 6/2）細粒砂含む粗粒砂質シルト
24．灰黄褐色（10YR 6/2）シルト含む中粒砂質粗粒砂（鉄分沈着あり）
25．黒褐色（10YR 3/1）細粒砂含む粗粒砂質シルト
26．オリーブ灰色（5GY6/1）細粒砂質シルト（鉄分沈着あり）
A．灰黄褐色（10YR 5/2）シルト含む細粒砂質中粒砂〈ＳＤ16〉
B．黒褐色（10YR 3/2）中粒砂含む細砂質シルト〈ＳＤ16〉
C．黒褐色（10YR 3/1）粗粒砂含む細粒砂質シルト〈ＳＤ16〉
D．黒褐色（10YR 3/1）中粒砂砂含む細粒砂質シルト〈ＳＰ199〉

第18図　Ｆ地区調査区北側断面図



1．灰色（10Y 6/1）中礫を少量を含むシルト質細粒砂〈盛土〉
2．灰色（7.5Y 6/1）中礫をわずかに含むシルト質細粒砂〈攪乱か〉
3．にぶい黄橙色（10YR 6/3）中礫を少量含むシルト含む中粒砂質細粒砂
4．灰黄褐色（10YR 6/2）中礫を少量含む中粒砂混じり細粒砂質シルト
5．灰黄褐色（10YR 5/2）中礫を少量含む細粒砂質シルト
6．黒褐色（2.5Y 3/2）シルトを含む細粒砂質粗粒砂
7．灰白色（5Y 7/2）中礫を含むシルト混じり粗粒砂質中粒砂（鉄分沈着あり）
8．灰白色（7.5Y 7/2）シルトを含む粗粒砂質中粒砂（鉄分沈着あり）
9．灰白色（5Y 7/2）中礫を多量に含むシルト混じり中粒砂質細粒砂
10．褐灰色（10YR 5/1）中礫を多量に含む中粒砂質粗粒砂
11．明オリーブ灰色（2.5GY 7/1）中粒砂を含む細粒砂質シルト
12．明オリーブ灰色（2.5GY 7/1）シルト質粗粒砂

第19図　Ｆ地区調査区東側断面図

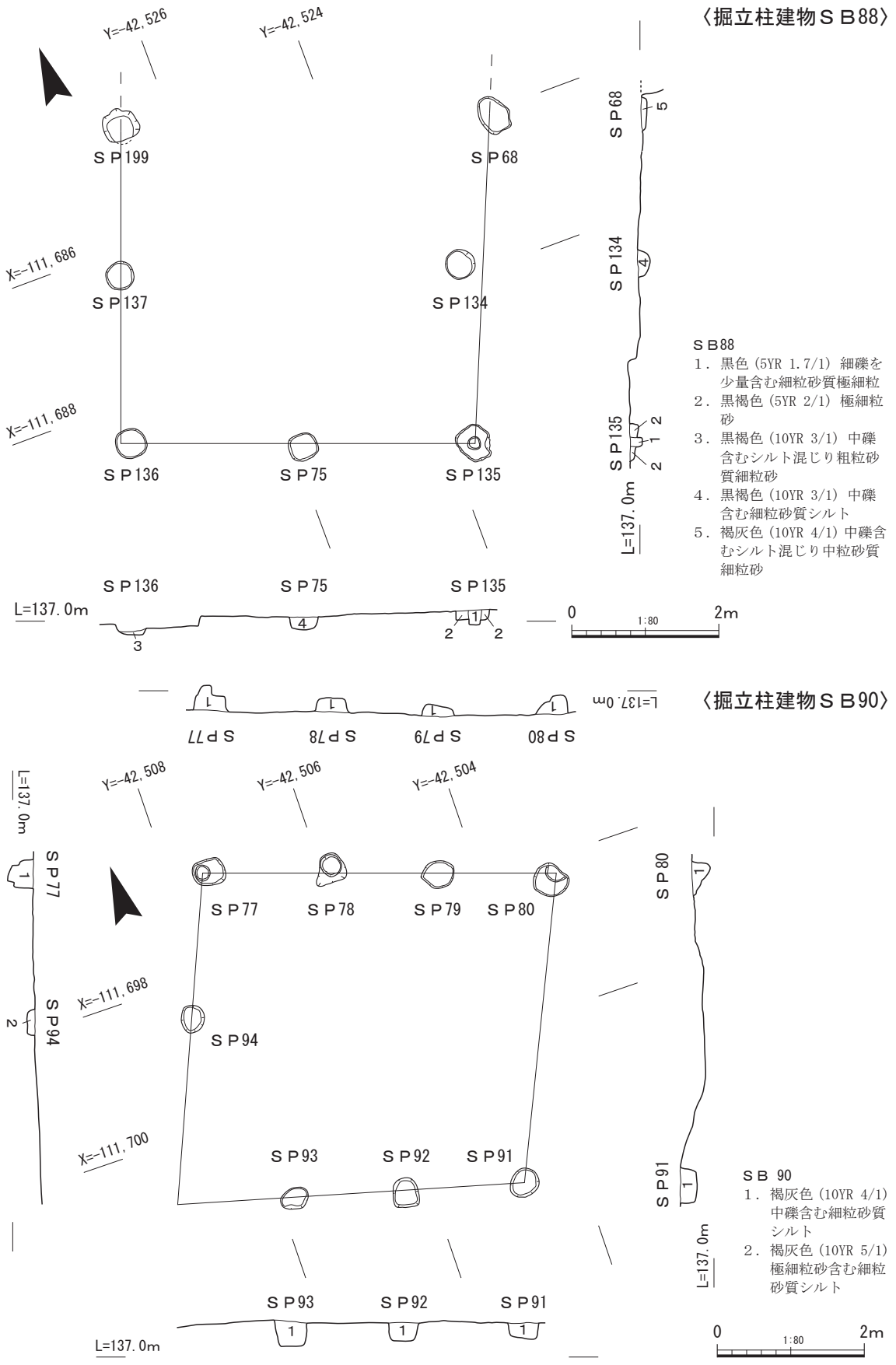
部（第24図12・13）が、ＳＰ78から口縁端部が肥厚する土師器甕（第24図14）、ＳＰ91から土師器甕あるいは壺（第24図15）が出土しており、古墳時代中期末以降の建物である。床面積は20.7㎡である。

（２）竪穴建物

竪穴建物ＳＨ150（第21図）　Ｆ地区中央で検出した平面方形の一辺3.1ｍの竪穴建物である。方位はＮ79°Ｗである。北側は大きく削平を受けており、東側については0.7ｍ程度が残る。深さは0.22ｍが残存する。遺物は出土しておらず時期は不明である。

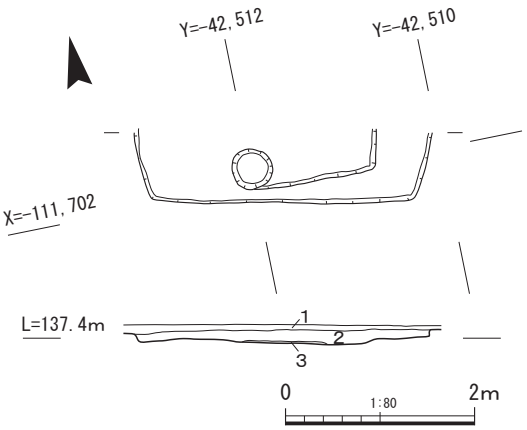
（３）溝状遺構

溝状遺構ＳＤ16（第22図）　Ｆ地区東側で検出した、幅0.9ｍ、長さ40.0ｍの直線的な溝である。方位はＮ61～69°Ｗで、調査区外に続いている。深さは残存状態が悪いところで0.34ｍ、良いところで1.00ｍ程度である。断面観察から流路埋土の上層が0.22ｍ程度、横ずれを起こしている状態が確認された。断面は逆台形である。底面の標高は、南東側で136.2ｍ程度、北西側で135.8ｍ程度であり、全体として北西側が低いため、南東から北西方向へ水が流れたと考えられる。遺物は検出面から深さ0.16ｍまでの埋土上層から出土しており、それより下層からは出土していない。遺物は主に３か所からまとまって出土している。最も北側の出土地点（第23図拡大図１）では、小型丸底壺（第24図18・19）、壺（21・22）、甕（33）、高杯（38・40）が出土しており、比較的完形に復元できる個体が多い。中央の出土地点（第23図拡大図２）では、小型丸底壺（16・20）、甕（28・32・34・35・36・37）、高杯（39・41）が出土した。完形に復元できるものもあるが、細片化した甕も多く、図化できない個体もあった。南側の出土地点（第23図拡大図３）では甕（29）および杭（46～48）が出土した。甕（29）は多数の破片が出土しているが、接合が困難で、上半部のみ図化できた。



第20図　Ｆ地区掘立柱建物実測図
（上段：掘立柱建物ＳＢ88，下段：掘立柱建物ＳＢ90）

南側の出土地点では、遺物がまとまって出土した範囲を囲むように杭を検出している。これらの他にも埋土掘削中に土師器の破片が多数出土している。なお、拡大図３の範囲より南側ではまとまって土器が出土することはなかったが、これはＳＤ16南東側が後世に削平を受けていることに起因する可能性がある。



１．褐灰色（10YR 4/1）細粒砂質シルト〈包含層〉
２．黒褐色（10YR 3/1）極細粒砂含む細粒砂質シルト〈遺構埋土〉
３．灰黄色（2.5Y 7/2）シルト含む細粒砂質中粒砂〈遺構埋土〉

第21図　Ｆ地区竪穴建物ＳＨ150平・断面図

（４）土坑・柱穴・その他

土坑ＳＰ141（第17図）　Ｆ地区南西側で検出した、径0.4ｍの円形土坑である。土師器鉢（第27図49）が出土しており古墳時代の土坑である。

不明遺構ＳＸ151（第17図）　Ｆ地区中央で検出した幅0.71ｍ、長さ1.23ｍの不定形土坑である。深さは0.08ｍが残る。埋土から北宋銭の咸平元寶（第27図50）が出土した。

このほかＦ地区では土坑を多数検出したが、遺物は出土せず、時期不明である。

３）出土遺物

Ｆ地区では、掘立柱建物の柱穴から出土した須恵器や溝状遺構ＳＤ16、柱穴から出土した土師器を中心に整理箱32箱程度の遺物が出土した。

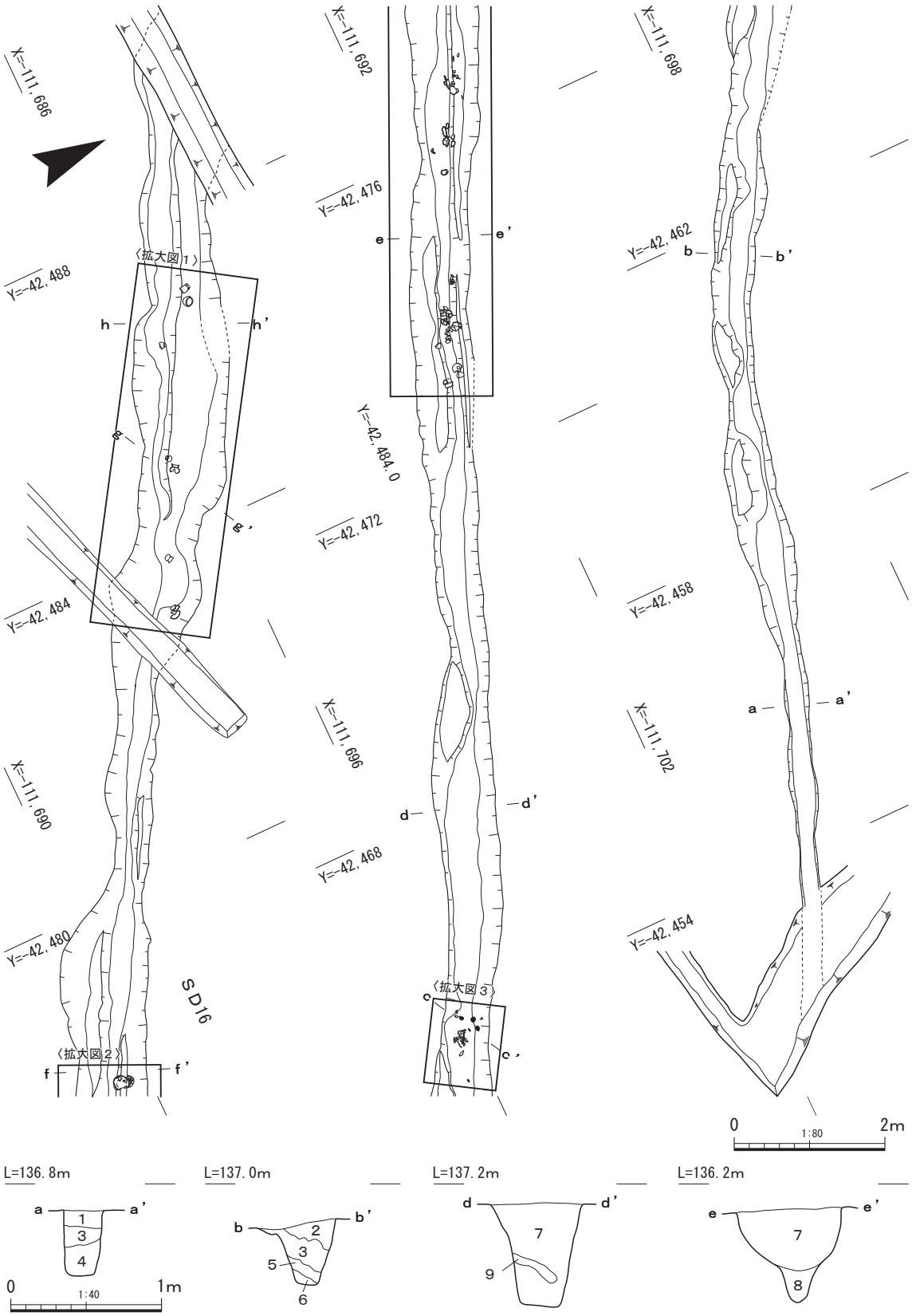
掘立柱建物ＳＢ90（第24図12～15）　12は須恵器杯Ｈ蓋である。天井部には回転ヘラケズリが施されており、天井部と側面部の境界は鋭く突出している。口縁端部は内傾する面をもつ。ＴＫ23型式の特徴をもつ。13は須恵器短脚高杯の脚部である。四方向の方形透かし孔とみられる。透かし孔に近接して強いユビオサエが１か所残る。ＴＫ47型式の特徴をもつ。

14は口縁端部が肥厚する甕の口縁部である。肥厚部は内傾する。内外面ともにナデである。

15は土師器甕あるいは壺の肩部である。外面ハケのちナデ、内面ケズリが確認できる。

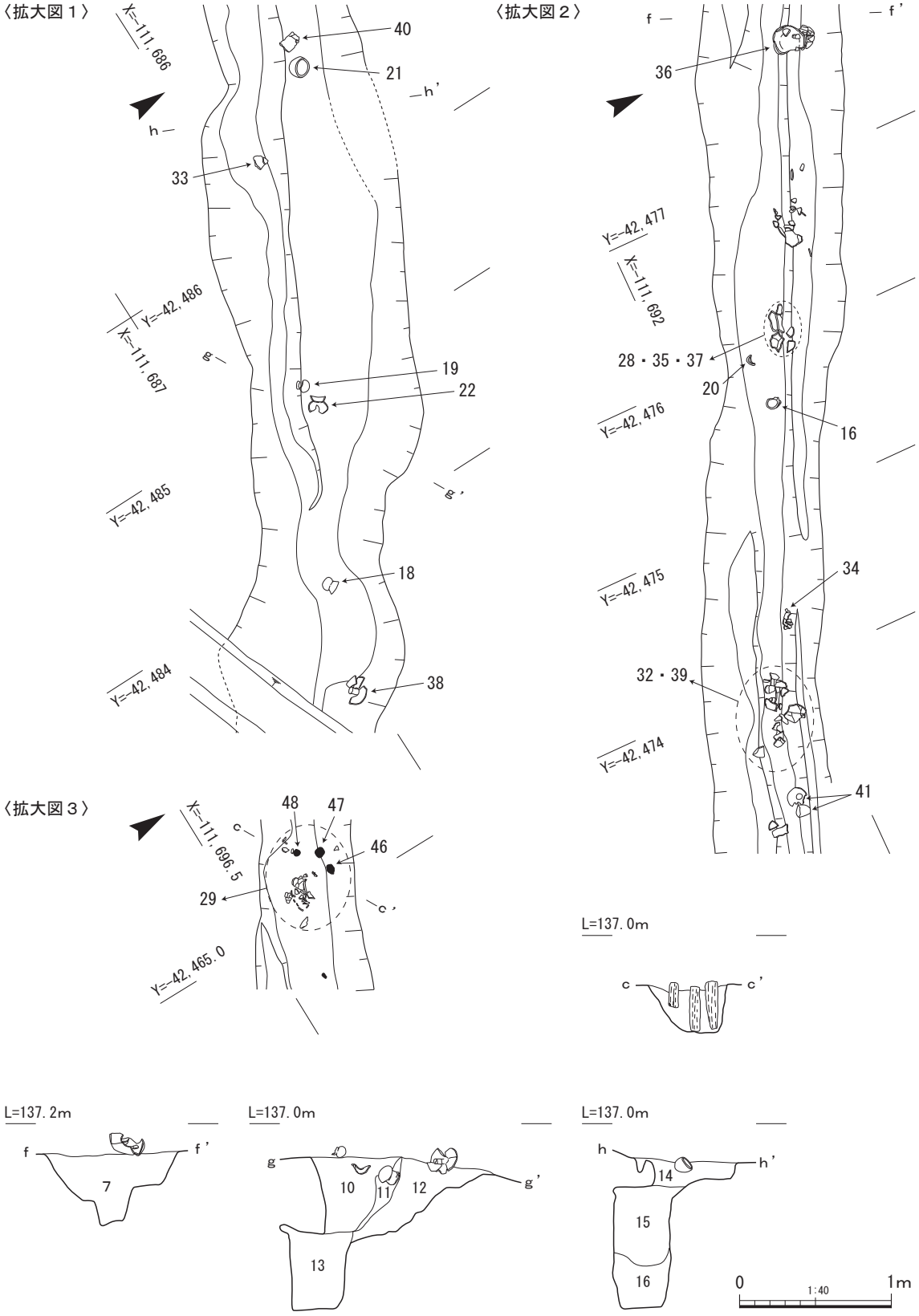
12・13はＳＰ77、14はＳＰ78、15はＳＰ91から出土した。

溝状遺構ＳＤ16（第24図16～37・第25・26図）　16～20は小型丸底壺である。16は、胴部に対して口縁部が長く、直線的に斜め上方にのびる。外面調整は口縁部から底部までナデであるが、底部にはわずかに不定方向のケズリが認められる。内面調整は全面ナデである。口縁部から胴部上半にかけて外面に煤が付着する。17は口縁部の途中から胴部にかけてである。胴部に対して口縁部が長く、直線的に斜め上方にのびる。内外面ともに口縁部から底部にまで全面的に細い横方向のミガキが施される。18は完形である。外面調整は、口縁部でナデ、肩部に縦方向のハケ、胴部から底部にかけて斜め方向のケズリである。内面調整は全面ナデで、底部付近は板状工具によるナデが認められる。19は完形に復元できる。口縁部は直線的で斜め上方に短くのびる。外面調整は口縁部ではナデ、肩部では斜め方向のハケ、胴部から底部にかけては横方向のハケと斜め方向のハケである。内面調整は口縁部から肩部ではナデ、胴部では横方向のケズリ、底部にユビオ



1．黒褐色（10YR 3/1）中粒砂質粗粒砂
　（灰白色（5Y 7/2）の同粒度のブロック含む）
2．黒褐色（10YR 3/1）シルト質細粒砂
3．灰白色（5Y 7/2）シルト含む中粒砂質粗粒砂
4．黒褐色（2.5Y 3/2）シルト含む細粒砂質粗粒砂
　（オリーブ灰色（2.5GY 6/1）粗粒砂含む細粒砂質シルトブロック含む）
5．灰白色（10YR 7/1）中粒砂質粗粒砂
6．灰白色（5Y 7/2）中粒砂質粗粒砂
7．黒褐色（10YR 3/1）中礫をわずかに含む細粒砂質シルト
8．褐灰色（10YR 6/1）シルト質細粒砂（鉄分沈着）
9．灰白色（5Y 7/2）中礫含む中粒砂質粗粒砂（鉄分沈着）

第22図　Ｆ地区溝状遺構ＳＤ16平・断面図



※土器は出土地点の標高を用いた図上の表現である。自然作用による埋土の横ずれや層序の乱れがあるため土器の包含層は異なる。
※平面図中の数字は第24～26図に同じ。

7．黒褐色（10YR 3/1）中礫をわずかに含む細粒砂質シルト
10．灰黄褐色（10YR 5/2）細礫をわずかに含む細粒砂質シルト
11．褐灰色（10YR 5/1）細粒砂質シルト
12．黒褐色（10YR 3/1）中礫を少量含む極細粒砂質シルト
13．灰黄褐色（10YR 5/2）中礫を多量に含む細粒砂質中粒砂
14．褐灰色（10YR 4/1）細礫を少量含む細粒砂質シルト
15．黒褐色（10YR 3/1）極細粒砂含む細粒砂質シルト
16．灰色（7.5Y 6/1）極細粒砂混じり細粒砂質シルト

第23図　Ｆ地区溝状遺構ＳＤ16遺物出土状況図

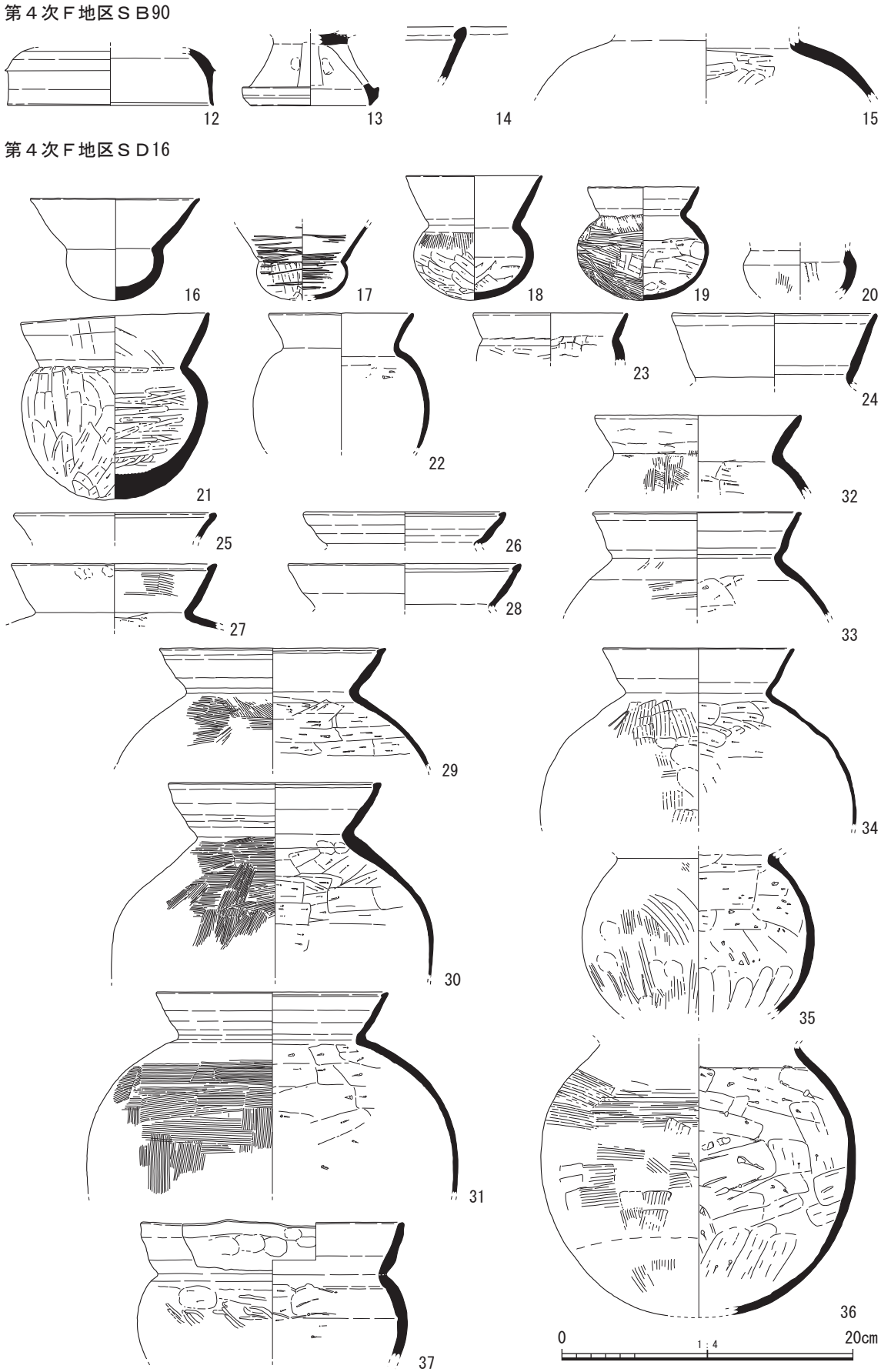
サエである。20は肩部から胴部にかけてである。内外面ともにナデである。以上の小型丸底壺について、胎土および色調は、胎土が細かく白みの強い浅黄橙色の16・18・20、胎土が細かく赤みの強い褐色の17、明るい褐色の19がある。

21～23は土師器壺である。21は完形である。口縁部は直線的に斜め上方にのびており、端部は丸い。外面調整は口縁部ではナデ、肩部から胴部にかけて不定方向のナデとわずかにケズリ、底部は不定方向のケズリである。内面調整は口縁部から胴部にかけてはナデ、底部は不定方向のナデである。口縁部から胴部にかけて、外面に煤が付着する。色調はいずれも白みの強い浅黄橙色である。22の口縁部はわずかに外反しており、端部は丸い。外面調整は口縁部ではナデ、胴部は不定方向のナデである。内面調整は口縁部ではナデ、頸部直下より下位は横方向のケズリのちナデである。外面に黒斑がみられる。色調は白みの強い浅黄橙色である。23は小型の甕である。口縁部は、直線的に斜め上方に短くのびており、端部は丸い。調整は内外面ともにナデである。

24は直口壺である。内外面ともに強い回転ナデが施される。色調は白みの強い浅黄橙色である。

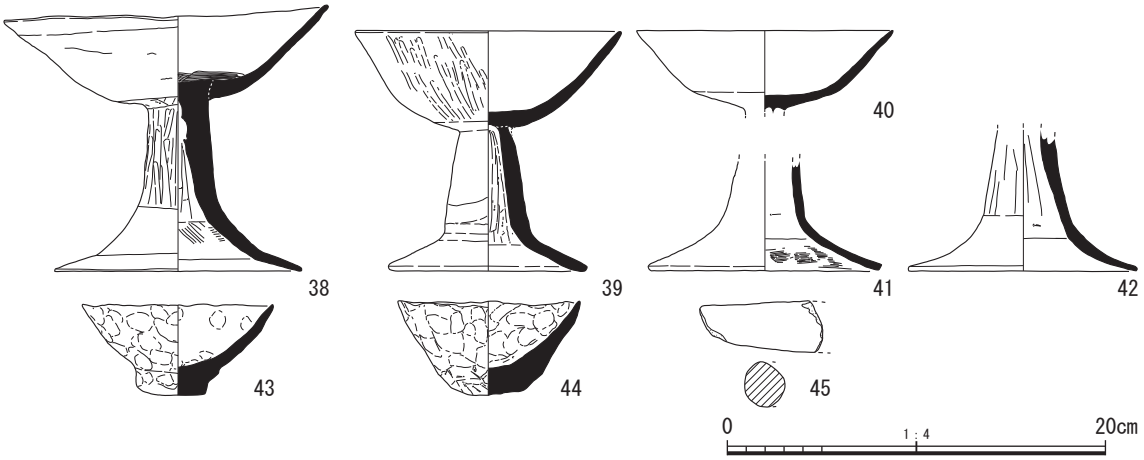
25～31は口縁端部が肥厚する甕である。25～29は口縁端部が内傾するもの、30・31は口縁端部が水平に近いものである。30は壺の可能性もある。外面調整は、口縁部はすべてナデである。肩部の外面調整は27がナデ、29・30は斜めハケおよび横ハケ、31は横ハケである。内面調整は口縁部では27にハケが施されており、28～31はナデである。肩部から胴部にかけての内面調整はすべて横方向のケズリである。31は胴部中位以下に煤が顕著に付着する。以上の口縁部が肥厚する甕について、色調は白みの強い浅黄橙色の25、明るい褐色の27・30・31、赤みのある褐色の28・29、焦げ茶色のような暗褐色の26がある。

32～37は土師器甕である。32は口縁部が直線的で口縁端部は丸い。外面調整は口縁部ではナデが施されるが、粘土紐の接合痕跡が残る。肩部の外面調整は不定方向のハケである。内面調整は口縁部でナデ、頸部直下から下位は横方向のケズリである。33は頸部が強いナデによって凹線状にくびれ、口縁部はわずかに外反しながら斜め上方にのびる。口縁端部は丸い。頸部内面にも強いナデによってくぼみが作られる。外面調整は口縁部ではナデ、肩部では横方向のハケがわずかに残る。内面調整は口縁部ではナデ、肩部は横方向のケズリである。34の口縁部はわずかに内湾しながら斜め上方にのびており、端部は丸い。肩部はほとんど張らずに胴部へと続く。外面調整は口縁部ではナデ、肩部から胴部にかけては板状工具による縦横両方向のナデが認められる。内面調整は口縁部でナデ、肩部より下位は横方向のケズリである。35は肩部から底部付近までが残る。外面調整は肩部がナデ、胴部は縦ハケである。内面調整は頸部直下から胴部中位まで横方向のケズリ､胴部下位から底部にかけては縦方向のナデである。外面は全体に顕著に煤が付着する。内面に粘土紐の接合痕が顕著に残る。36の外面調整は横ハケ、内面調整は横方向のケズリが中心であるが、底部付近内面は縦方向のケズリである。外面には煤が付着する。37は粗製の土師器甕である。作りが粗く口縁は水平ではなく、やや波状になる。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸い。外面調整は口縁部ではナデ､肩部は粗いミガキである。内面調整は口縁部ではナデ、肩部は粗い横方向のケズリである。内外面ともに煤状の炭化物が付着する。以上の土師器甕につ



第24図　Ｆ地区出土遺物１（土器１）

第４次Ｆ地区ＳＤ16



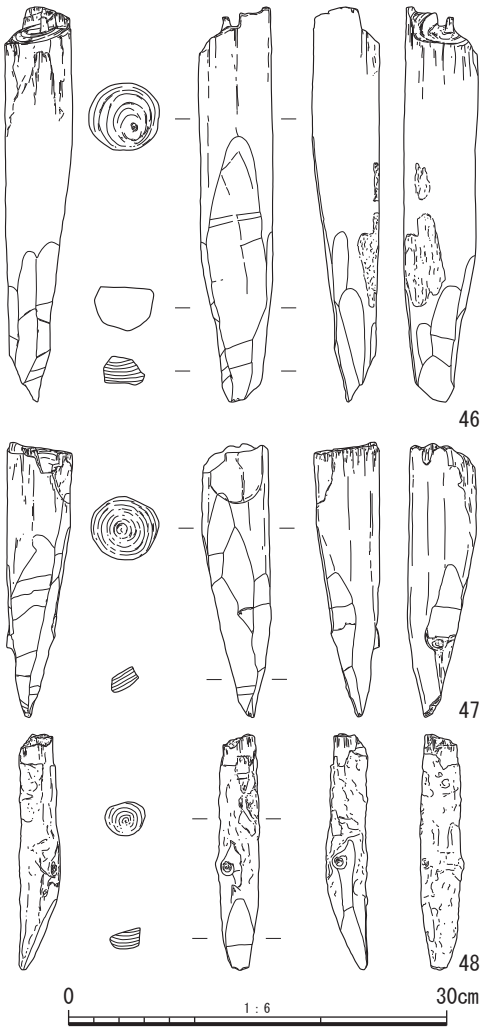
第25図　Ｆ地区出土遺物２（土器２）

いて、色調は、白みの強い浅黄橙色の32、明るい褐色の33・34・36、焦げ茶色のような暗茶褐色の37がある。

38～42は土師器高杯である。38・39はほぼ完形である。38の杯部口縁は直線的に斜め上方にのび、端部は丸い。屈曲部には弱い稜線が残る。中実の脚部の上端側面から粘土紐を積み上げて杯部を製作している。外面調整は杯部ではナデが施されるが、粘土紐の接合痕跡が残る。脚部外面は縦方向のミガキ、裾部付近はナデである。内面調整は杯部の口縁部付近ではナデ、底部では不定方向のハケである。脚部内面の調整は円筒部分が横方向のケズリ、円筒部分から裾部にかけては、ハケとナデである。39の口縁部は直線的に斜め上方にのび、端部は丸い。杯部の屈曲部が緩やかで稜がない。杯部と脚部の接合は、まず中空円筒形の脚部をつくり、ある程度乾燥した状態で脚部の頂部側面に粘土紐を付加させて巻き上げて杯部を成形し、底部に粘土を充填している。外面調整は杯部では粗い縦方向のミガキ、脚部は横方向のナデである。内面調整は杯部では摩滅のため不明瞭で、脚部は円筒部分で縦方向の棒状工具による粘土のかき出し痕跡が残っており、裾部では横方向のナデである。40は杯部である。杯部の屈曲部は弱く稜が残る。口縁端部はやや鋭くおさめられる。調整は内外面ともにナデである。杯部の底部外面に、脚部に挿入した際の突起が残っており、杯部と脚部を別作りにして接合している。41・42は脚部である。脚端部はナデによって面をもつ。41は外面の摩滅が激しく調整が判別できない。内面調整は円筒部分が横方向のケズリである。42の外面調整は縦方向のミガキで､裾付近はナデである。裾部内面は41がハケ、42はナデが施される。以上の土師器高杯について、胎土および色調は、胎土が細かく白味の強い浅黄橙色に赤い混和剤が混ざる39・40・42、胎土が粗く焦げ茶色のような暗褐色の38、赤みの強い橙色に赤い混和剤が混ざる41がある。

43・44は粗製の土師器小型鉢である。内面はユビオサエのちナデ、外面はユビオサエが顕著である。43は底部外面に不定方向のケズリがみられる。色調はいずれも明るい褐色である。

45は土師器把手である。色調は白色である。



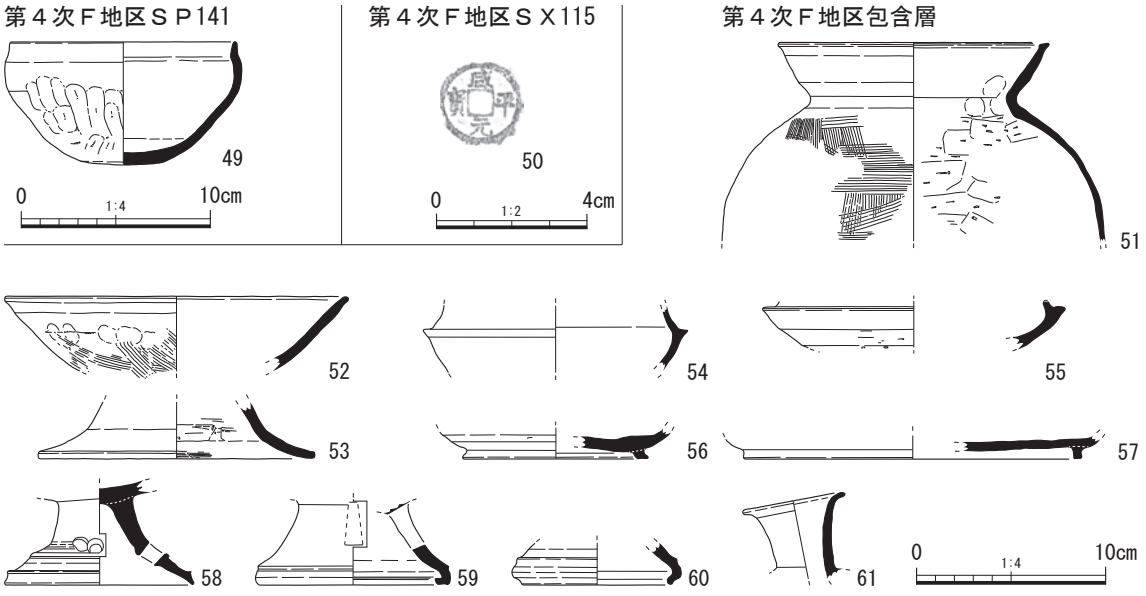
第26図　Ｆ地区出土遺物３（木製品）

46～48は木製の杭である。いずれも杭先端は残っているが、根元側は折損している。46は現存長31.4cm、径5.8cmの丸杭である。外面には一部樹皮が残る。杭先端は全面にわたって複数回削られており、一面のみ平坦に加工されているため断面は半円形状になる。47は現存長21.8cm、径5.4cmの丸杭である。外面には樹皮が残る。杭先端は一部未加工で樹皮を残す部分があるが径の４分の３は削り出しており面をもつ。杭先端の断面は略長方形である。48は現存長18.7cm、径3.5cmの丸杭である。外面には樹皮が残る。杭先端は大きく二面を削り出し、それ以外は未加工である。杭先端の断面は略三角形になる。

土坑ＳＰ141（第27図49）　49は土師器鉢である。口縁部は短く、まっすぐ上方にのびており、端部は丸い。肩部はわずかに外に張り、やや直線的に底部にむかう。外面調整は口縁部から肩部まではナデ、胴部から底部にかけては縦方向のケズリである。内面調整は、全面、回転ナデである。外面には煤が付着する。

不明遺構ＳＸ115（第27図50）　50は北宋銭の咸平元寶である。初鋳年代は998年である。

包含層（第27図51～61）　51は口縁端部が肥厚する甕である。口縁端部の肥厚部は水平に近い。口縁部は内



第27図　Ｆ地区出土遺物４

外面ともにナデ調整である。肩部から胴部にかけて外面は縦ハケのち横ハケで、内面は横方向のケズリである。52は土師器高杯の杯部である。口縁端部は丸い。外面調整は口縁部付近がナデおよびユビオサエ、底部付近は不定方向のハケである。内面は回転ナデである。53は土師器高杯の脚部である。外面調整はナデ、内面調整は、円筒部が横方向のケズリ、裾部がハケのちナデである。54～56は須恵器杯Ｈ身および杯Ｂ身である。56はやや外側に踏んばる短い高台が貼りつけられる。57は須恵器皿の底部である。ほぼ垂直の短い高台が貼りつけられる。58～60は須恵器短脚高杯の脚部である。58は円形透孔が４方向にあるが、１か所だけ割付を間違えた未貫通の透孔の痕跡がのこる。透孔から脚端部までの間に段状の凸線がめぐる。陶邑窯跡群では高蔵寺208号窯跡(注10)や高蔵寺85号窯跡(注11)に類例がある。59は方形透孔が４方向にある。内外面ともに回転ナデで調整する。脚端部は回転ナデで調整した後に直角に折り曲げて成形する。61は須恵器平瓶の口頸部である。わずかに自然釉がかかる。

４）小結

Ｆ地区では溝状遺構１条、掘立柱建物２棟、竪穴建物１棟、土坑100基以上を検出した。

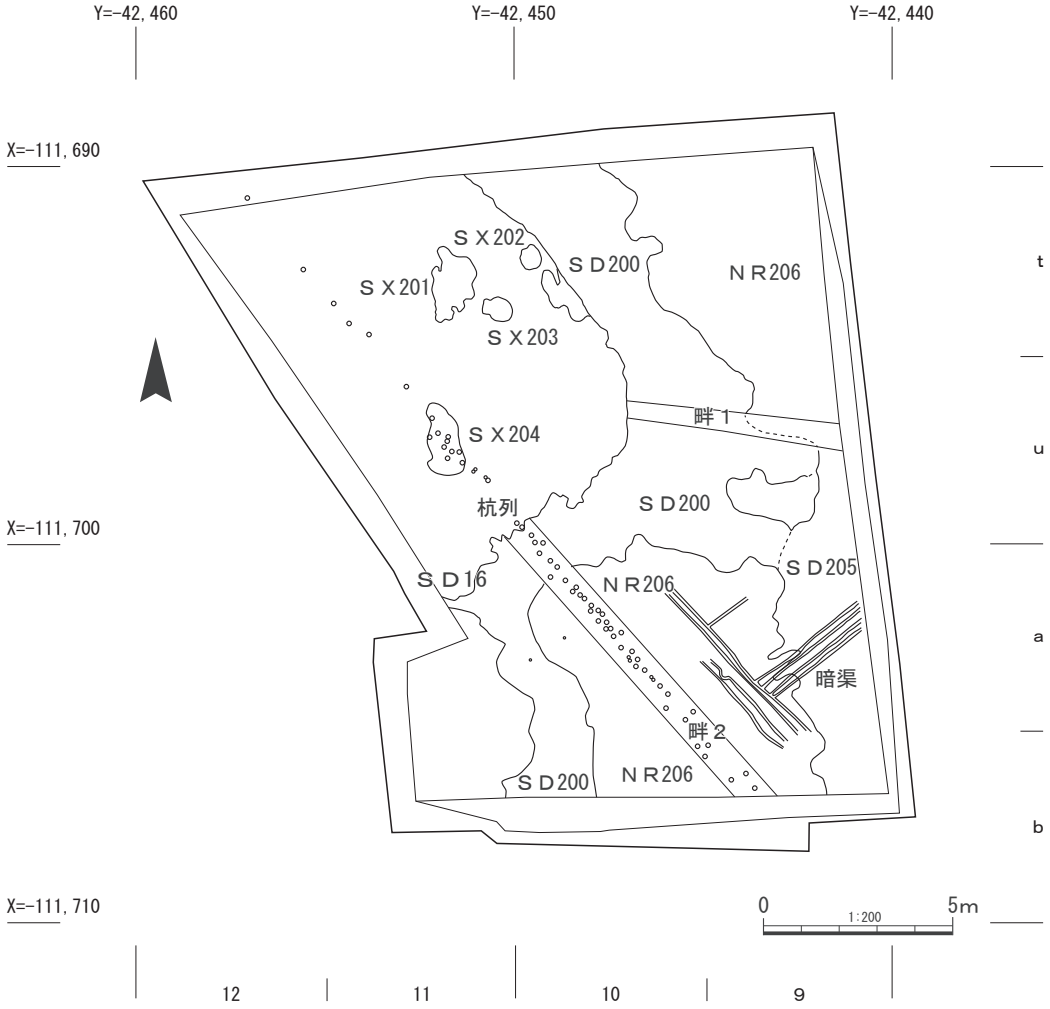
溝状遺構ＳＤ16は埋土上位から古墳時代前期後半から中期初頭にかけてと考えられる土師器が出土しており、この時期には埋没したものと考えられる。この溝状遺構ＳＤ16は北東－南西方向の強い作用を受けており、検出面から50cmまでの埋土が最大で30cm程度横ずれを起こしていた。これは地震等の自然災害に伴う作用が原因と考えられ、調査区内で検出した土坑も同様に埋土が横ずれを起こしているものが確認できたほか、調査区内の断ち割りや壁面では層位が大きく乱れる地点も確認できた。ＳＤ16の埋没後の作用であることから、古墳時代中期初頭以降に災害が発生したことが想定できる。掘立柱建物についてもＳＢ88では柱穴の一つであるＳＰ199で埋土の横ずれを確認しており（図版第13）、古墳時代中期初頭以前の掘立柱建物であることが分かる。一方、ＳＢ90では柱穴の横ずれは確認していない。柱穴からはＴＫ23型式、ＴＫ47型式の特徴を持つ須恵器が出土しており、古墳時代中期末以降の建物であることが分かる。以上のことから、災害は古墳時代中期初頭以降、古墳時代中期末以降の間に発生したと考えられる。なお、竪穴建物ＳＨ150については残存状態が悪く、遺物も出土していないため時期不明である。　（名村威彦）

７．Ｆ拡張区の調査（第６次調査－１）

１）調査の概要

Ｆ拡張区では、重機掘削の後、精査を行ったところ、溝状遺構ＳＤ16の延長及びこれに合流する黒褐色土の堆積を確認した。また、北東部に自然流路と思われる堆積が調査区内に広がる状況を確認した。黒褐色土を埋土とする遺構を溝状遺構ＳＤ200とし、自然流路をＮＲ206とした。ほかにも暗渠・杭列を伴う溝状遺構ＳＤ205を検出した。また、遺構面で確認した土色変化ＳＸ201～ＳＸ204があるが、遺構とは判断し難い。

調査は上位遺構から掘削を行い、必要に応じて土層観察用の畔を設定した（第28･29図）。また、下層の状況を確認するため、随時断ち割りを行った。自然流路ＮＲ206の川底まで掘削すること



第28図　Ｆ拡張区遺構配置図（上層遺構検出面）

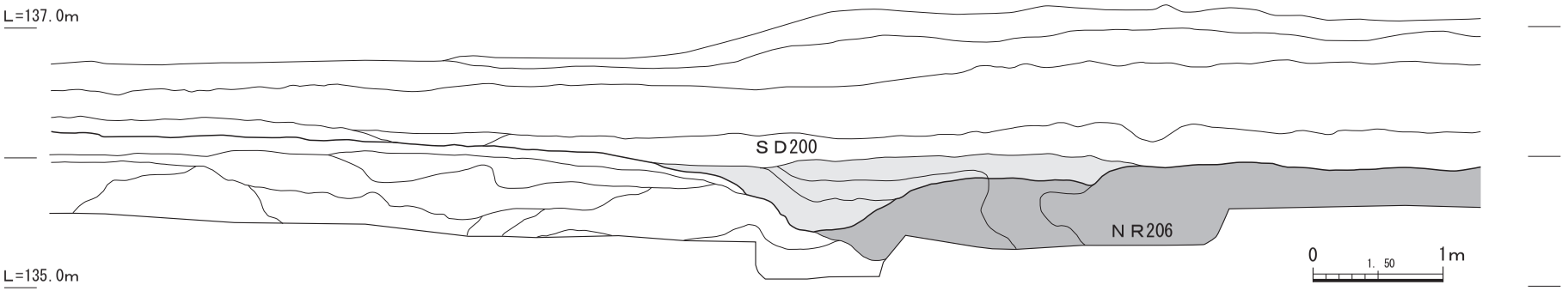
とした。ただし、川底にまで達しない箇所については掘削可能な深度で留めた。

２）検出遺構

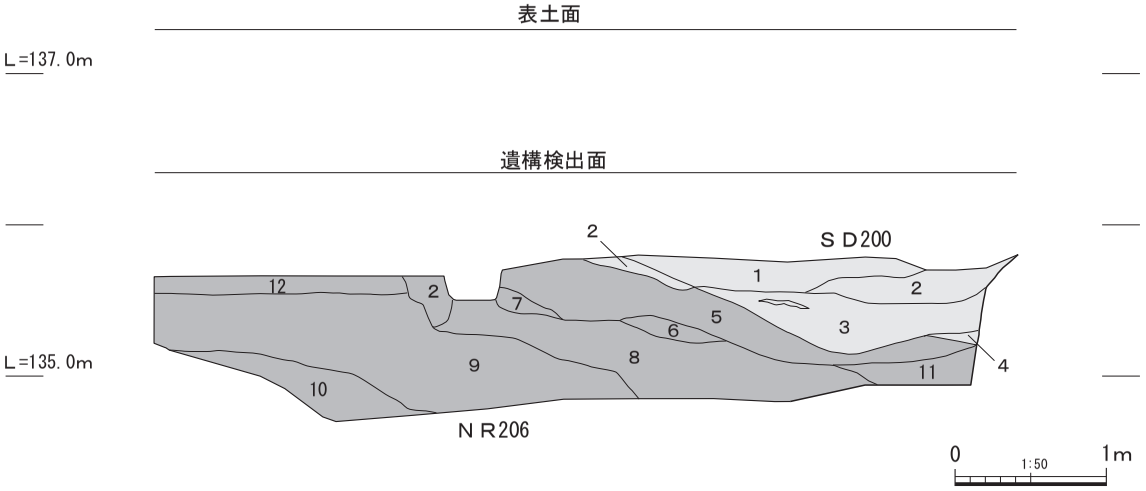
（１）溝状遺構

溝状遺構ＳＤ200（第30図）　南北方向の素掘り溝である。第４次調査の遺構面の続きを精査したところで検出した。南壁では溝底は標高135.15ｍで、遺構検出面からの深さは約1.1ｍである。東側の岸は緩やかに傾斜するが西側の岸は急傾斜となっている。埋土は複数層あり、黒褐色（10YR3/2）粘質土で埋没したのち、礫で埋まり、黒褐色（10YR3/2）砂利層が埋めていく。畔２では溝底は標高135.58ｍで、遺構検出面からの深さは約0.7ｍである。埋土は複数層あり、西岸から埋没する状況がわかる。明赤灰色（2.5Y7/2）系の土砂で埋まったのち、黒褐色（10YR3/2）系の土砂が流入している。畔１では溝底は標高135.42ｍである。主たる埋土は黒褐色（10YR3/2）の極細粒砂から細粒砂質のシルトで、やや粘性としまりがある。北壁での溝底は標高135.42ｍで、検出面からの深さは約0.6ｍである。埋土は複数層あり、西岸から埋没していることがわかる。溝状遺構ＳＤ200は、調査地南側に一旦深みを作り、北側へと流れ出ていたものと思われる。下層の自然流路ＮＲ206の流路底が調査区北半では比較的浅いのに対し、調査区南側では砂利の堆積が

第６次調査Ｆ拡張区北壁

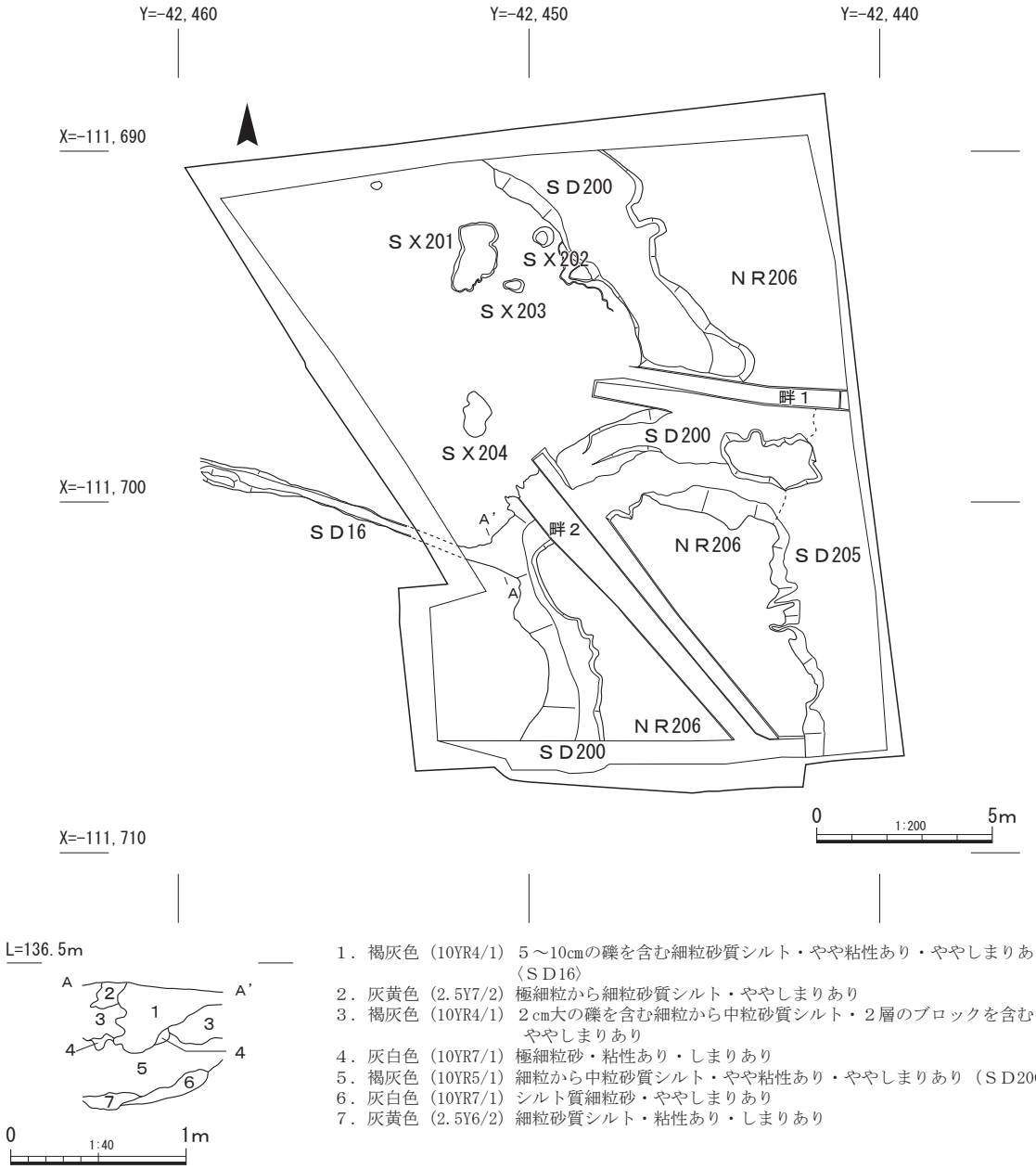


第６次調査Ｆ拡張区南壁



1．黒褐色（10YR3/2）砂利層に青灰色（５BG5/1）砂利含む〈ＳＤ200〉
2．礫層〈ＳＤ200〉
3．黒褐色（10YR3/2）粘質土〈ＳＤ200〉
4．黒褐色（10YR3/2）粘質土と粗い砂層の互層〈ＳＤ200〉
5．礫層と細かい砂層
6．褐灰色（10YR5/1 ）礫層
7．灰黄色（2.5Y7/2）礫層と粗い砂
8．灰白色（2.5Y7/1）礫多く砂混じり
9．灰黄色（2.5Y7/2）礫多く砂混じり
10．灰黄色（2.5Y7/2）粗い砂に礫少し混じる
11．灰黄色（2.5Y7/2）粗い砂
12．灰白色（2.5Y7/1）細粒から中粒砂質シルト・粘性あり・締まりあり

第29図　Ｆ拡張区壁断面図



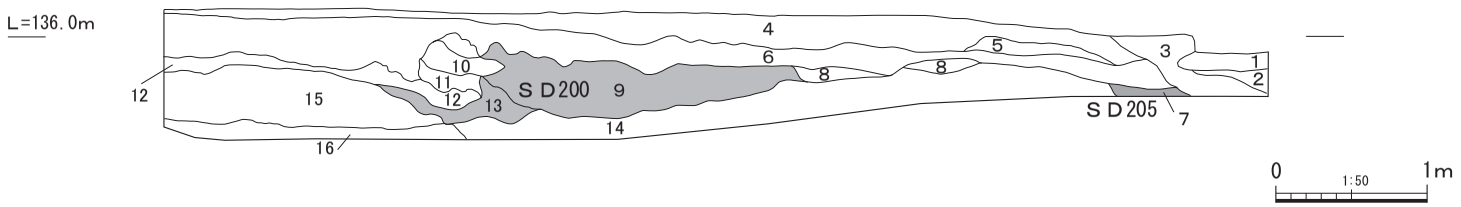
第30図　Ｆ拡張区ＳＤ200Ｓ平・断面図

厚く、流路底が一段と深くなっていることが影響している。

溝状遺構ＳＤ200と接続する箇所での溝状遺構ＳＤ16の溝底の標高は136.0mであり、溝状遺構ＳＤ200上部の流れを引き込んでいる。接続箇所の断面図（第30図左下）では溝状遺構ＳＤ200の埋土に溝状遺構ＳＤ16が掘り込まれていることから、溝状遺構ＳＤ200が埋もれていく中でも掘り直しながら溝状遺構ＳＤ16が機能していたことがうかがえる。取水口付近では水流を制御する施設などは確認できなかった。出土遺物をみると、Ｆ地区の報告ではＳＤ16からは須恵器が出土していないことから、自然流路ＮＲ206や溝状遺構ＳＤ200から取水していた溝状遺構ＳＤ16は、溝状遺構ＳＤ200の埋没以前には機能を失ったようである。

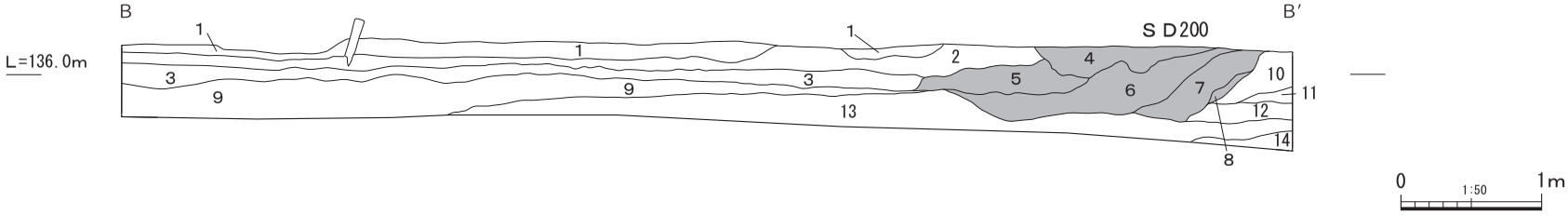
遺物は溝の埋土やa9区・a10区・a11区の溝の東岸に沿って張り付くように出土した（第32図）。

犬飼遺跡第６次調査Ｆ拡張区畔１



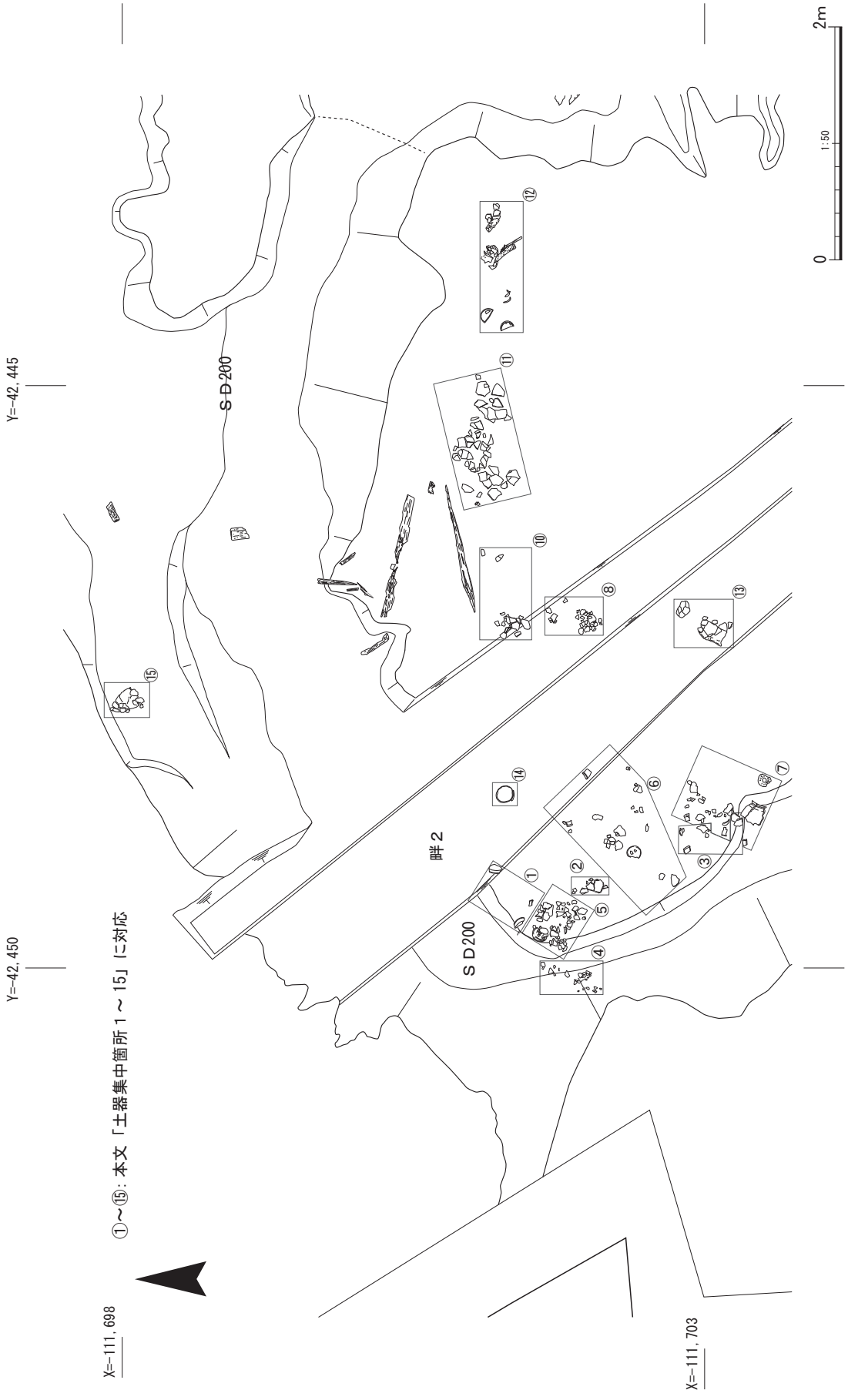
1．褐灰色（10YR6/1）2.0～10.0cmの礫を含むシルト質中粒から粗粒砂・しまりなし〈暗渠か〉
2．褐灰色（10YR6/1）シルト質中粒砂　やや粘性あり・ややしまりあり〈暗渠か〉
3．黄灰色（2.5Y6/1）2.0～10.0cmの礫を多量に含む粗粒砂・しまりなし〈暗渠か〉
4．灰黄色（2.5Y6/2）シルト質細粒から中粒砂・ややしまりあり〈旧耕作土か〉
5．灰白色（2.5Y7/1）2.0cmの礫を含む粗粒砂・しまりなし
6．褐灰色（10YR4/1）2.0cmの礫を少量含むシルト質細粒砂・ややしまりあり　炭化物・木片含む〈包含層〉
7．褐灰色（10YR5/1）細粒砂質シルト・粘性あり・しまりあり（木片含む）〈SX205〉
8．褐灰色（10YR5/1）シルト質細粒から中粒砂・ややしまりあり〈包含層〉
9．黒褐色（10YR3/2）極細粒から細粒砂質シルト・やや粘性あり　ややしまりあり〈ＳＤ200〉
10．灰黄褐色（10YR5/2）シルト質細粒から中粒砂・やや粘性あり　ややしまりあり
11．灰黄褐色（10YR5/2）シルト質細粒砂・やや粘性あり・ややしまりあり
12．褐灰色（10YR4/1）細粒砂質シルト・やや粘性あり・ややしまりあり（土壌化した層）
13．褐灰色（10YR4/1）シルト質細砂・やや粘性あり・ややしまりあり〈ＳＤ200〉
14．灰黄色（2.5Y7/2）2.0～10.0cmの礫を多量に含む粗粒質中礫・しまりあり〈土石流か〉
15．明オリーブ灰色（5GY7/1）細粒から中粒砂質シルト・やや粘性あり・ややしまりあり
16．明オリーブ灰色（5GY7/1）中粒から粗粒砂・しまりなし

犬飼遺跡第６次調査Ｆ拡張区畔２



1．褐灰色（10YR4/1）シルト質細粒から中粒砂・ややしまりあり〈包含層〉
2．褐灰色（10YR6/1）細粒砂質シルト・やや粘性あり・ややしまりあり
3．褐灰色（10YR5/1）シルト質細粒から粗粒砂・やや粘性あり・ややしまりあり（炭化物・木片含む）
4．黒褐色（10YR3/2）シルト質極細粒から細粒砂・ややしまりあり〈ＳＤ200〉
5．黒褐色（10YR3/2）10.0cmの礫を少量含む細粒砂質シルト・やや粘性あり・ややしまりあり〈ＳＤ200〉
6．黒褐色（10YR3/2）5.0～20.0cmの礫を多量に含む細粒砂質シルト・しまりあり〈ＳＤ200〉
7．明赤灰色（2.5Y7/2）2.0～５cmの礫を含む中粒から粗粒砂・ややしまりあり〈ＳＤ200〉
8．明赤灰色（2.5Y7/2）シルト混細粒から中粒砂・ややしまりあり〈ＳＤ200か〉
9．明オリーブ灰色（2.5GY7/1）中粒から粗粒砂・ややしまりあり〈ＮＲ206〉
10．明オリーブ灰色（5GY7/1）細砂質シルト・やや粘性あり・しまりあり
11．明オリーブ灰色（5GY7/1）中粒砂質シルト・やや粘性あり・ややしまりあり
12．明オリーブ灰色（2.5GY7/1）細粒から中粒砂質シルト・粘性あり・しまりあり
13．灰黄色（2.5Y7/2）2.0～20.0cmの礫を多量に含む粗粒質中礫・しまりあり
14．明オリーブ灰色（5GY7/1）中粒から粗粒砂・しまりなし

第31図　Ｆ拡張区畔断面図



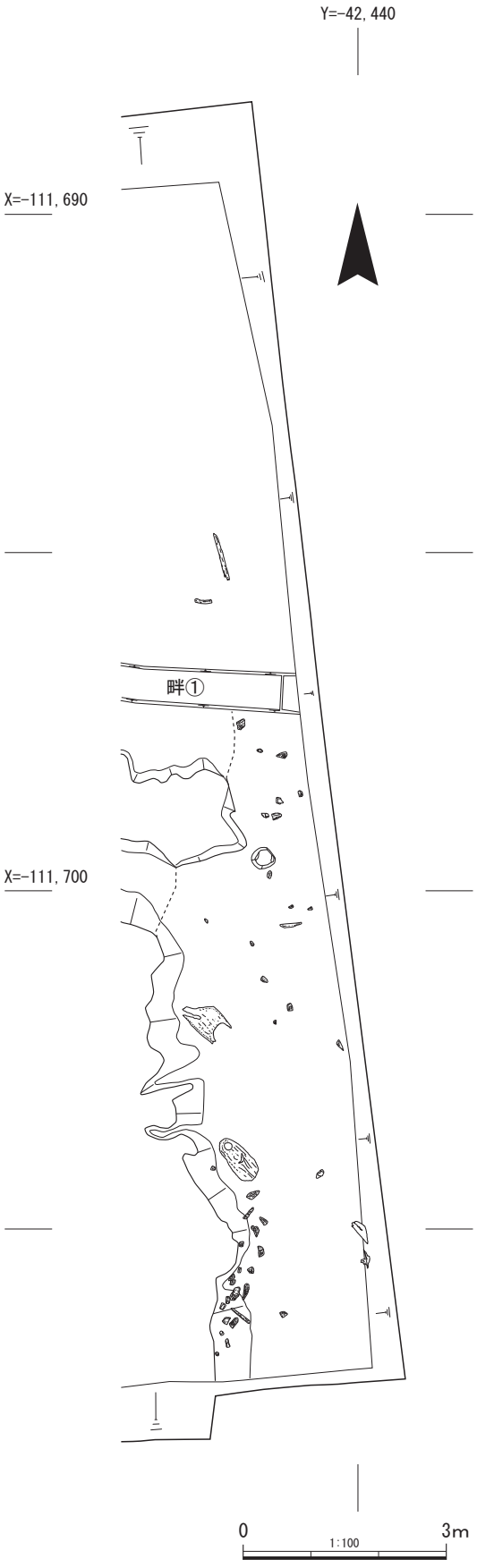
第32図　F拡張区SD200遺物出土状況

須恵器および土師器が大半を占める。ほかにも流路埋土からは臼玉や管玉、弥生土器、製塩土器、白磁などの破片が出土している。出土した遺物の時期幅も大きく、上流部からの流れ込みの可能性が高い。

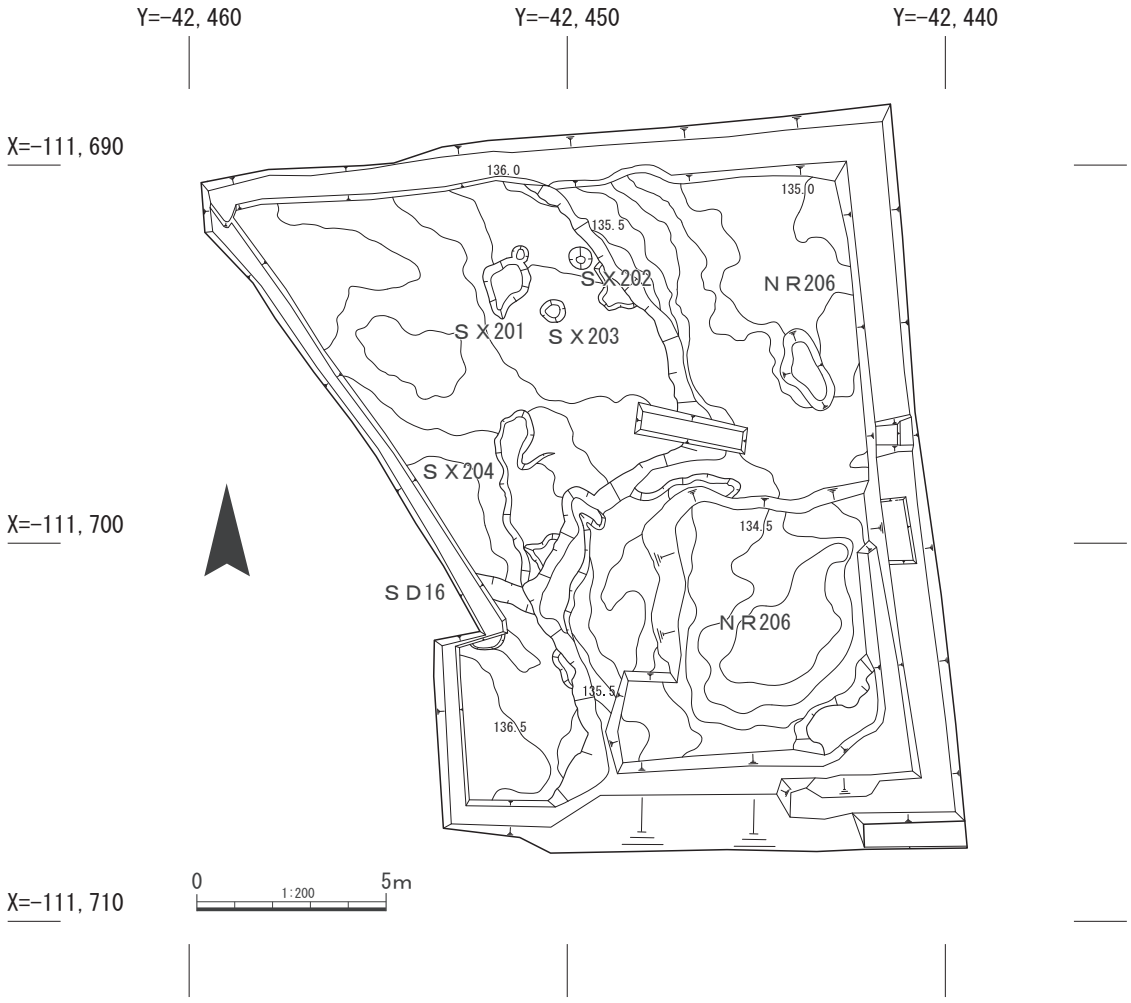
溝状遺構ＳＤ205（第33図）　b9区・a9区・t9区の東側で検出した。杭列を伴う南北方向の素掘り溝である。褐灰色（10YR5/1）シルトを埋土とする。粘性としまりがあり、木片含む。自然流路ＮＲ206の砂礫層を掘り込んで溝をつくっている。溝底の標高は、南側で135.8m前後、北側で135.5m前後である。南から北への流れをもつ。溝には杭列が伴っている。杭は、割り木を加工したものである。遺物は須恵器や土師器、瓦器の小片が出土した。ほかにも木材や樹皮などが混じってみられる。多くが摩滅しており、流れによって運ばれてきたものである。中世に機能していた溝である。

（２）自然流路

自然流路ＮＲ206（第34図）　溝状遺構ＳＤ200の東側で検出した。埋土が砂や砂利や礫が主体となるため、自然流路と判断した。西側の岸は溝状遺構ＳＤ200の西岸と同じくし、急傾斜で落ち込む。東岸は調査区外となるため不明である。南壁では砂利層とは異なる灰黄色（2.5Y7/2）の粗い砂層が立ち上がる状況にあり、流れに勢いの違いがあった可能性がある。調査区の北半側では、灰黄色（2.5Y7/2）の２～10cm大の礫を多量に含む粗い砂を標高135.0m付近まで掘削したところで青灰色シルトが現れたため、流路の底とした。調査区の南半側では西岸付近を135.1m付近まで掘削したところで青灰色シルトが現れた。南東隅では135.1m付近で青灰色シルトが現れた。調査区の中央では礫を多量に含む灰黄色（2.5Y7/2）の砂層を現地表下3.0m程度、標高134.4m付近まで掘削したが、粗い砂層から地下水の自噴が始まったこ



第33図　Ｆ拡張区ＳＤ205遺物出土状況



第34図　Ｆ拡張区ＮＲ206平面図

とから掘削を終了した。砂利層内からは土師器が出土した。

自然流路ＮＲ206は調査区の南西から北東方向へ流れていたものが次第に北方向へと流れを変え、最終的には溝状遺構ＳＤ200の流れへと変わったものと推測できる。

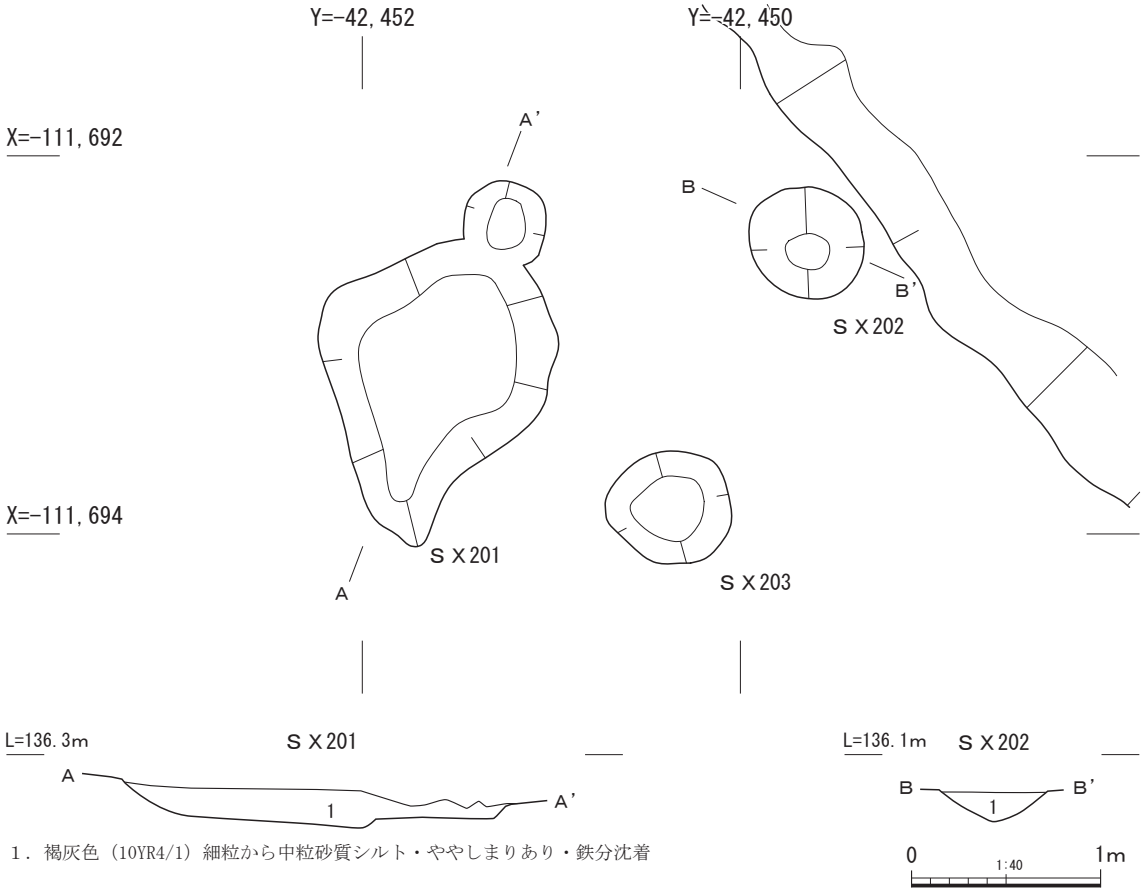
調査区は、法貴谷川が形成した扇状地内にある。位置と環境の項目でも記した通り、扇状地内には埋没流路の痕跡が読み取れる部分がある。今回調査を行った自然流路ＮＲ206はその地形と重なる。導水が容易なことから水源として長期間利用され続けたものと思われる。

（３）その他の遺構

土色変化ＳＸ201（第35図）　s11区で検出した不整形の土色変化で、長軸は2.05m、短軸は1.08m、検出面からの深さは0.24mである。埋土は細かい砂の混じる褐灰色（10YR4/1）質シルトで、ややしまりがあり、鉄分が沈着する。側面はなだらかで、人為的に構築されたとする確証はない。

土色変化ＳＸ202（第35図）　s10区で検出した円形の土色変化である。直径0.55mほどで、検出面からの深さは0.18mである。埋土は細かい砂の混じる褐灰色（10YR4/1）質シルトで、ややしまりがあり、鉄分が沈着する。出土遺物はない。擂鉢状を呈しており、人為的に構築されたとする確証はない。

土色変化ＳＸ203（第35図）　s11区で検出した不整形の土色変化で、長軸は0.62m、短軸は0.38



1．褐灰色（10YR4/1）細粒から中粒砂質シルト・ややしまりあり・鉄分沈着

第35図　Ｆ拡張区ＳＸ201・202平面図

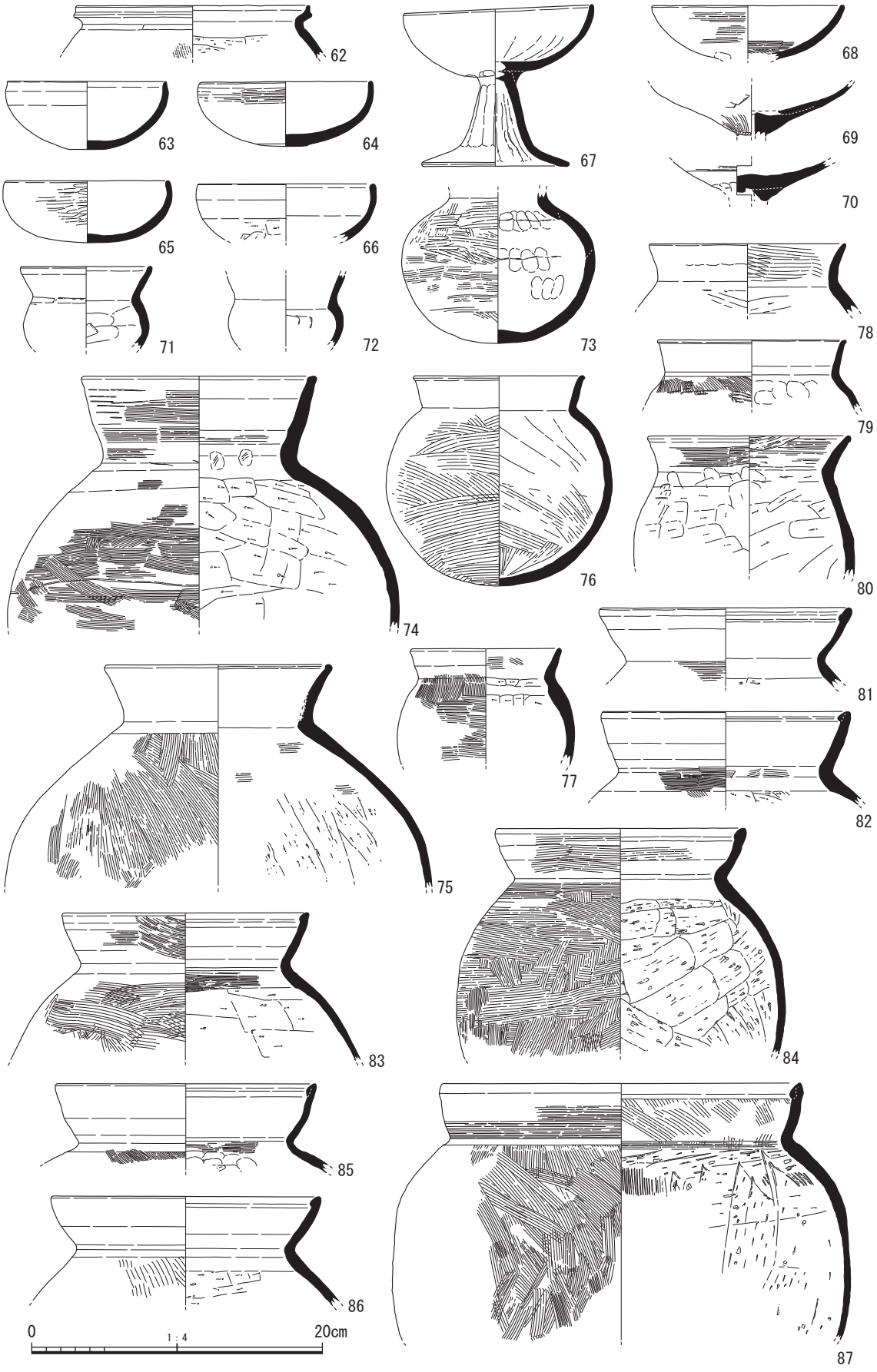
ｍで、検出面からの深さは0.14ｍである。埋土は灰褐色土で、鉄分が沈着する。遺物の出土はなく、人為的に構築されたとする確証はない。

土色変化ＳＸ204（第34図）　t11区で検出した不整形の土色変化で、長軸は0.99m、短軸は0.41ｍで、検出面からの深さは0.15ｍである。埋土は褐灰色シルトである。暗渠の杭列が打ち込まれ、横木が添えられた状況にある。木片も出土し、暗渠に伴う堆積層と考えられる。出土遺物は須恵器の小片が２点あるが、時代が大きく離れており、いずれも流れ込み資料と判断した。

暗渠（第28図）　中世以前の遺構面直上で検出した。南東－北西方向に枝を払っただけの長い丸木を平行に並べ、石を入れて構築している。ここから90度方向を変え、南西－北東方向へも枝分かれする流れを作っている。南東－北西方向の暗渠は北から約43度西へ振る。西側には丸木杭列が南東－北西方向へのびている。南で長い丸太を押さえている状況にあることから、畦畔を作っていた可能性もある。杭列は北から約41度西へ振る。一連の構築物は、方向を同じくし、中世以前の遺構面直上にある。現代の畦畔とも並行することから、近世以降の耕作に伴い構築されたものである。

３）出土遺物

溝状遺構ＳＤ200（第36～38図・第39図132～134）　下層に自然流路ＮＲ206があり、境界が曖昧な箇所があるが、黒褐色土から出土した遺物を溝状遺構ＳＤ200出土遺物として扱う。62は弥



第36図　F拡張区SD200出土遺物１（土師器ほか）

生土器、63～87は土師器、88～109は須恵器、110・111は白磁、112は製塩土器である。

62は弥生土器である。t9区土層観察用の畔１の黒褐色土から出土した甕である。口縁端部を上方に短く立ち上げ、凹線を施す。体部外面をハケ、内面をケズリで調整する。畿内Ⅴ様式に相当する。

63～66は土師器椀である。いずれも丸底で、63は口縁端部を強くナデで反りをもたせ、64～66は端部を丸く納める。外面の調整は、63がナデ、64・65がヘラミガキ、66がヘラケズリで施す。63・64はa10区土器集中箇所⑥（第32図）、65はa10区土器集中箇所②、66はa10区畔２黒褐色土から出土した。

67～70は土師器高杯である。67はa10区土器集中箇所⑦、69・70はa10区畔２の黒褐色土から出土した。67の杯部は半球状で、脚部は屈折して開く裾部をもつ。脚柱部は面取りを行う。68はa9区から出土した半球状の杯部である。69・70は杯部の下半部のみで、杯部の形状は不明である。

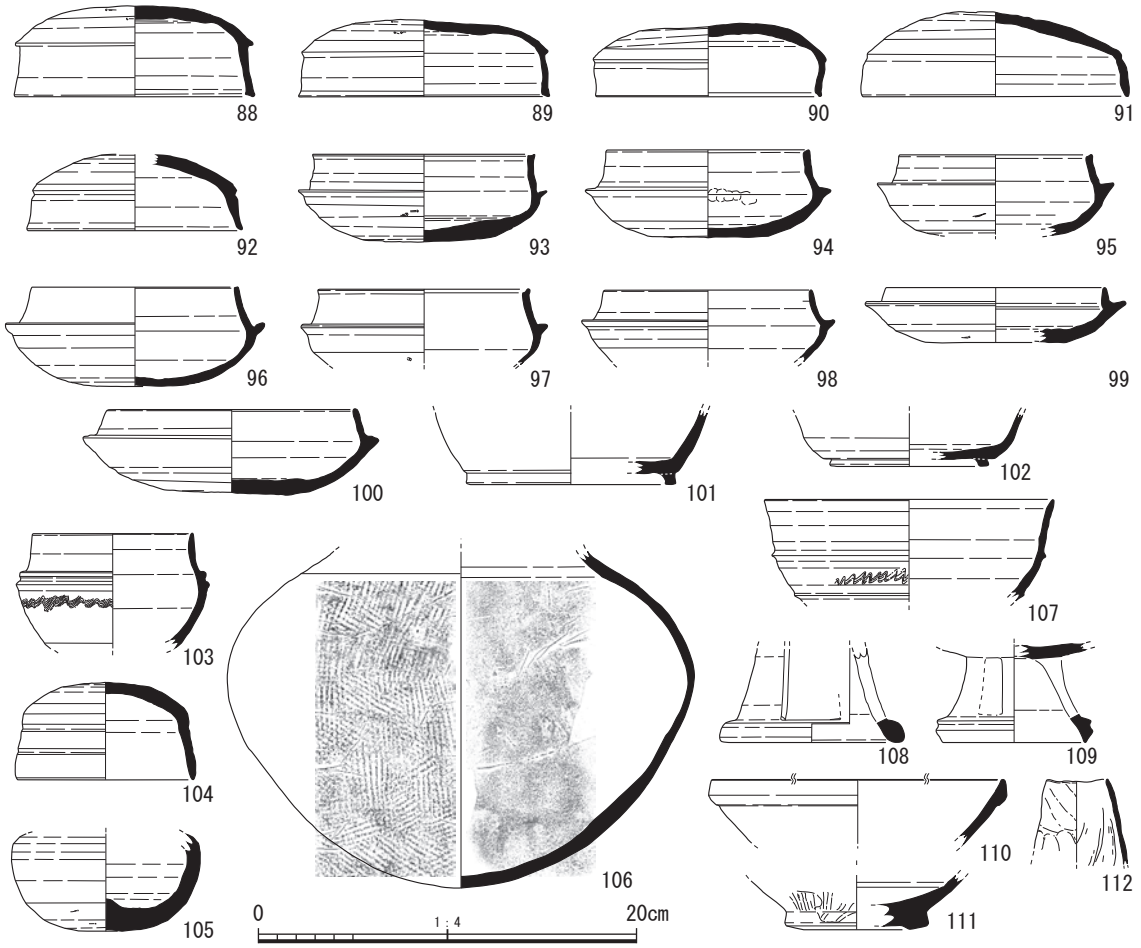
71・72は小型丸底壺である。t9区土層観察用の畔1の黒色粘質土内から出土した。72は口縁部も欠く。71・72ともに口径9.0cm程度、器高7.0cm前後と推測する。底部を欠くが、丸底と思われる。扁球形の体部に短く「く」字形に開く口縁部がのる。体部最大径と口縁部径は大差がない。

73～75は土師器壺である。73はa10区土器集中箇所⑧から出土した。口縁部を欠く。球形に近い体部をもち、外面に粗いハケ調整を施す。74は、体部下半を欠くが、卵形の体部をもつと思われる。a10区の土器集中箇所⑦から出土した。口径は15.8cmである。口縁部は「く」字形に開き、真っ直ぐにのびた口縁端部に面をつくる。体部外面は細かいハケ調整を施し、内面はヘラケズリ調整を施し仕上げている。口縁端部に目立った肥厚は認められないものの、布留式新段階の壺である。75は、a10区の土器集中箇所⑥から出土した。口縁部が外反ぎみに立ち上がり、端部をわずかに肥厚する。体部外面は細かいハケ調整を施し､内面はヘラケズリ調整を施し仕上げている。布留式新段階の壺である。

76～80は土師器甕である。口縁部を外反させ、端部をナデで仕上げる。77・78は端部を丸く納め、76･79･80は端部を外側にやや丸みをもたせる。76～78は外面にハケによる調整がみられる。80は体部外面をヘラ状の工具でなでるような調整を行う。77・78・80の体部内面調整にはケズリ痕が認められる。79の外面にはタタキののちハケによる調整がみられる。76はa10区土器集中箇所⑥、77はa10区土器集中箇所⑦、78はa11区、79はa10区、80はa10区土器集中箇所⑭の出土である。

81～87は口縁端部が肥厚する甕である。口縁部を外反させ、端部をやや内湾させる。いずれも体部外面にはハケ調整を施し、内面はケズリ調整を行う。布留式新段階の甕である。87は体部に比べて口縁部径が大きく、立ち上がり短いため、他の甕とは印象を異にする。地域色の可能性がある。81はa11区土器集中箇所④、82・85はa10区から、83はa10区土器集中箇所⑤、84はa9区土器集中箇所⑫、86はa10区土器集中箇所⑥、87はa10区土器集中箇所⑬で出土した。

88～92は須恵器杯Ｈ蓋である。88・89・91・92は、溝状遺構ＳＤ16と溝状遺構ＳＤ200との接点付近（a11区）で出土した。88はa10区土器集中箇所⑤、89はa10区土器集中箇所①からの出土で



第37図　Ｆ拡張区遺物SD200出土遺物２（須恵器ほか）

ある。90は溝北側（s9区）から出土した。形状から数型式に分かれる。88は鋭い稜線をもち、口縁端部に面をもつ。口径12.6cm、器高4.8cmで、角張った形状を呈する。89・90は稜線が不明瞭となり、口縁端部も面をもつものの斜めに収める。89は口径13.2cm、90は復元口径11.8cmである。90は内面にタタキ痕を残す。88・89は田辺編年ＴＫ208、90は田辺編年ＭＴ15並行期の可能性が高い。91・92は稜線が丸く、凹線によって強調させ、口縁端部は面をもたせず斜めに終わる。復元口径は91が14.0cm、92が15.8cmと比較的大きい。92は内面にタタキ痕を残す。田辺編年ＴＫ10並行期の可能性が高い。

93～100は受け部と立ち上がりをもつ須恵器杯Ｈ身である。93・94はa9区土器集中箇所⑫からの出土で、95～100は、a11区の溝状遺構ＳＤ16と溝状遺構ＳＤ200との接点付近から出土した。93～98は立ち上がりが比較的長い。93は立ち上がりが直線的で、真上にたちあがり、口縁端部に段状の面をもつ。受け部はやや上方に鋭くのび、体部との接合面に溝ができる。回転ヘラケズリを受け部付近まで施す。口径11.7cm。田辺編年ＴＫ208並行期の可能性が高い。94～97は立ち上がりが斜めに内傾する。95・97は口縁端部に段状の面をもつ。95の復元口径は10.1cm、97の復元口径は11.0cmである。94は口縁端部の面が斜めで、96は細く平坦である。94の復元口径は10.6cm、96の口径は10.8cmである。田辺編年ＭＴ15並行期の可能性が高い。98は立ち上がりが

斜め内側に傾き、口縁端部に面をもたない。復元口径は10.9cmである。99・100は立ち上がりが比較的短い。口径に比べ器高が低く、扁平な器形となる。99の復元口径は11.5cm、100の復元口径は13.0cmである。田辺編年ＴＫ43型式前後である可能性が高い。

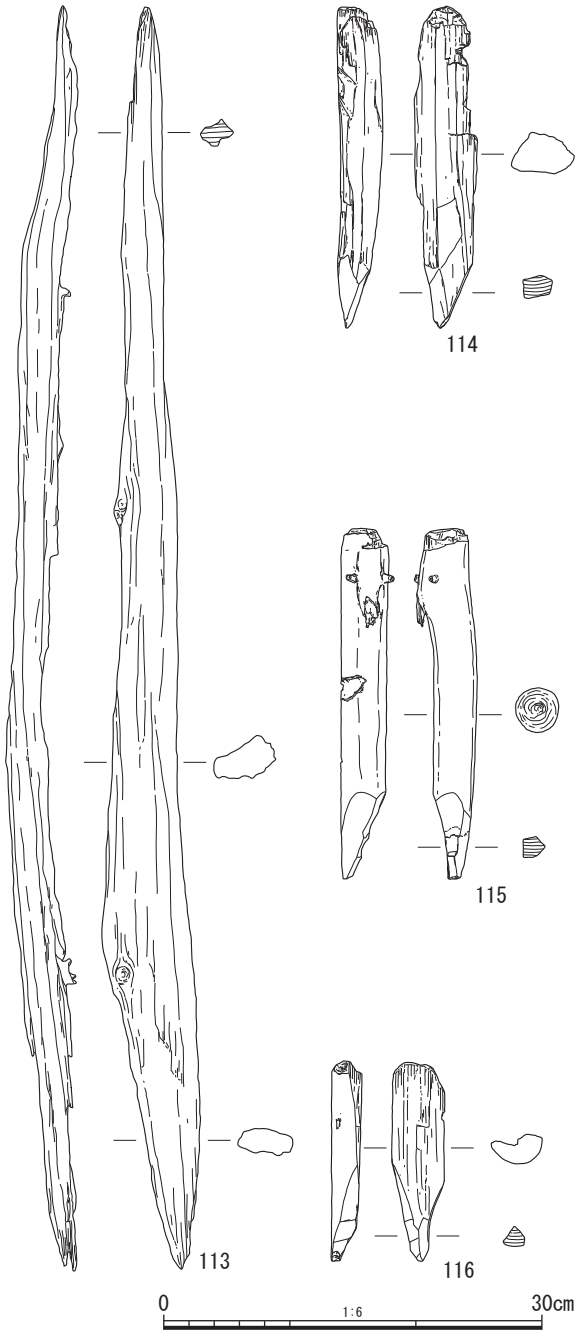
101・102は須恵器杯Ｂの底部である。101は底部端に、102は底部のやや内側に貼り付け高台をもつ。101はa10区、102は溝北側s9区からの出土である。８世紀以降のとなる可能性が高い。

103はa9区土器集中箇所⑫から出土した須恵器取っ手付碗である。肩部の凸帯を２条まわし、下に波状文を巡らす。取っ手の接合箇所は残存していない。田辺編年ＴＫ208型式並行期の可能性が高い。

104はa9区出土の須恵器壺蓋である。復元口径9.3cm、器高5.2cmである。体部に２条の凹線を巡らす。天井部は丸く高い。

105は溝北側にあたるs10区出土の須恵器壺の体部である。体部上半から上を欠くため、器種は特定できない。

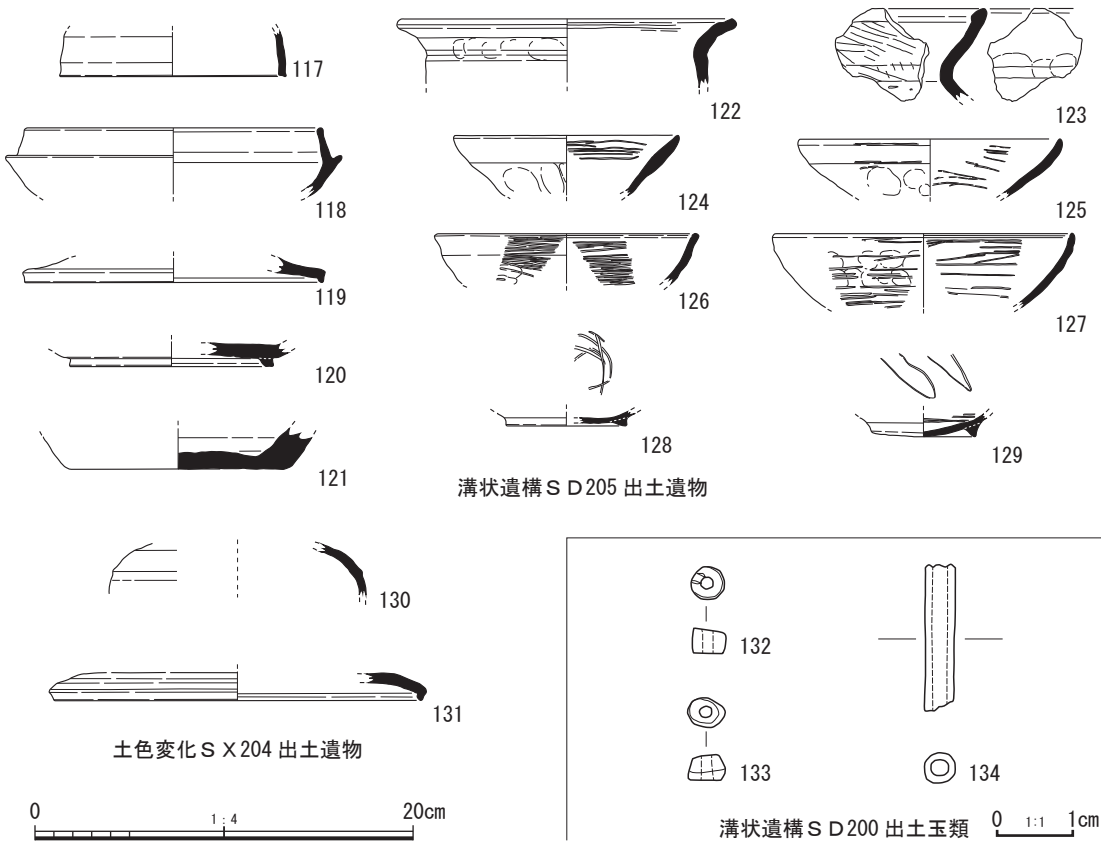
106はa10区土器集中箇所⑪出土の須恵器甕である。口頸部を欠く。体部最大径が体部中央からやや上がったところにある。器壁は薄く、外面に格子タタキを施す。



第38図　Ｆ拡張区溝状遺構SD200出土遺物３
（木製品）

107～109は須恵器高杯である。107はa11区出土の杯部で、体部下半に凸帯を２条まわし、その間に波状文を巡らす。田辺編年ＴＫ208型式並行期の可能性が高い。108・109は低脚高杯の脚部である。108は裾部を丸く納め、109は三角に角立たせている。いずれも３方向に方形の透かし穴をもつ。108はa11区土器集中箇所④、109はa10区土器集中箇所⑪からの出土である。

110・111は、白磁碗である。110は溝北側s9区出土の口縁部、111はa9区出土の底部の破片である。溝状遺構ＳＤ200出土として取り上げてはいるが、いずれも調査区東側上層の出土であり、溝状遺構ＳＤ205に帰属する可能性が高い。口縁は折返し断面三角形の玉縁をつくる。高台内の刳りは浅く、底部は肉厚である。高台の幅も広い。見込みに沈圏線がある。いずれも白磁碗Ⅳ類



第39図　Ｆ拡張区SD205ほか出土遺物４

で、11世紀末ごろである。

112は製塩土器である。a11区から出土した。直径3.2cmの内傾する口縁部の破片である。器壁は薄くなでられ、灰白色(10YR7/1)を呈する。

溝内からは、土器に混じって木製品が出土している。113、115、116はa10区およびt10区から出土した。114はa9区土器集中箇所⑫から出土した。113は残存長100.2cm、幅7.0cm、厚さ3.2cmである。芯取り材で、明確な加工痕は認められない。不均整な形状で、反りをもつため、本来の用途は不明である。114は芯取り材で、外側の一部を用い、片側を尖らせ、杭としたものである。残存長25.6cm、幅5.0である。115は細い丸木の片側を尖らせ、杭としたものである。残存長27.8cm、直径4.2cmである。116は細い丸木を半裁し片側を尖らせ、杭としたものである。残存長15.8cm、直径4.1cmである。

溝状遺構ＳＤ200埋土上部から玉類が３点出土した。いずれも緑色凝灰岩系の石材を用いている。132・133は臼玉、134は管玉である。

132・133はa11区から出土した臼玉である。132は、直径4.5mm、長さ3.5mm、孔径1.5mmで、重さ1.2ｇである。133は直径5.0mm、孔径1.5mm、長さ3.5mm、重さ0.9ｇである。

134は管玉である。a10区出土。直径4.0mm、長さ19.5mm、孔径2.0mmで、重さ0.5ｇである。暗オリーブ灰色(5GY4/1)を呈する。

溝状遺構ＳＤ205(第39図117～129・第40・41図)　土師器や須恵器、瓦器の破片が出土してい

るが、いずれも小片で摩滅がみられる。122・123は土師器、117～121は須恵器、124～129は瓦器である。また、木製品として杭８本を取り上げた。

117は須恵器杯蓋の口縁部である。118は、受け部をもつ杯Ｈ身の破片である。いずれも古墳時代後期の須恵器ではあるが、小片で摩耗が著しく、遺構年代を決める指標とはならない。

119は、つまみをもつ須恵器蓋の口縁部の破片である。端部に折り返しがある。a9区から出土した。

120は、須恵器杯Ｂの底部である。貼り付け高台をもつ。奈良時代以降のものと思われる。いずれも小片で、摩耗が著しく、遺構年代を決める指標とはならない。

121は須恵器の底部である。復元した底の直径が11.3cmで、壺の底部と思われる。摩耗がみられる。中世陶器の可能性がある。a9区から出土した。

122・123は土師器の口縁部破片である。122は頸部を段階的に外反させる。123は口縁端部内面を肥厚する布留式並行期の土器である。いずれもa9区から出土した。小片で、摩耗が著しく、遺構年代を決める指標とはならない。

124～129は瓦器椀の破片である。124～127は口縁部、128・129は底部である。124はt9区から出土した。体部下半に指オサエの痕跡が残る。13世紀後半の資料である。125はa9区から出土した。体部下半に指オサエの痕跡が残る。13世紀の資料である。126は口縁端部内面に沈線をめぐらす。12世紀前半の資料である。127はa9区から出土した。口縁端部内面に沈線をめぐらす。11世紀末の資料である。128・129は、いずれもa9区から出土した底部付近の破片である。断面三角形の貼り付け高台をもつ。見込みには暗文を施した痕跡が認められる。13世紀の資料である。

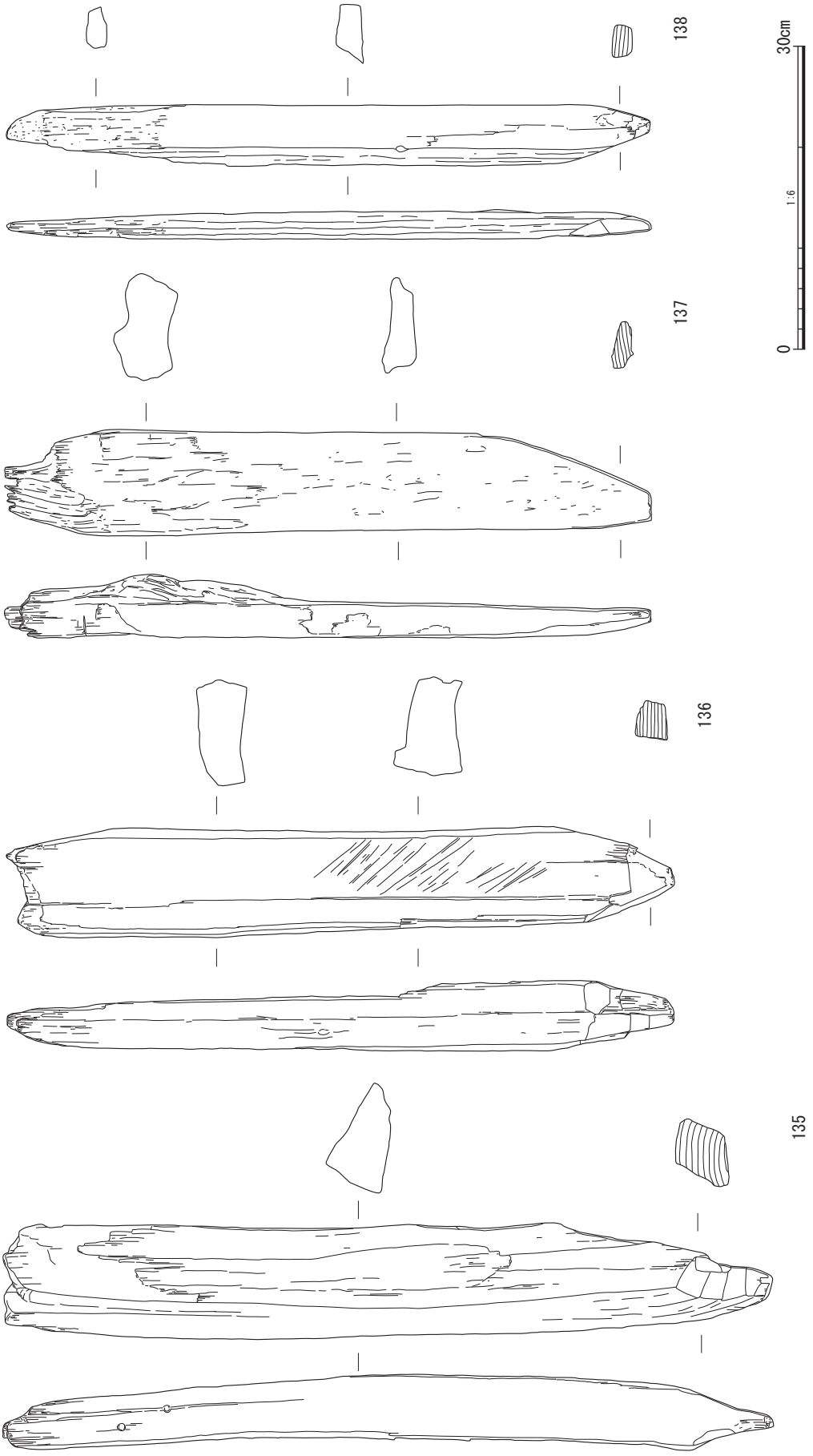
135～142は杭である。135は残存長76.2cm、幅10.8cmである。136は残存長66.3cm、幅10.8cmである。137は、残存長64.0cm、幅10.8cmである。138は残存長63.8cm、幅6.1cmである。139は残存長72.4cm、幅9.6cmである。140は残存長59.0cm、幅8.0cmである。141は残存長62.0cm、幅7.6cmである。142は残存長71.2cm、幅6.2cmである。

土色変化ＳＸ204出土遺物(第39図130・131)　130・131は須恵器である。いずれも小片である。130は杯蓋で、肩部に退化した稜線をもつ。摩滅が著しい。古墳時代後期のものと思われる。131はつまみをもつ杯蓋の口縁部の破片である。端部に折り返しがある。奈良時代以降のものと思われる。これらの遺物はＳＸ204の時期を特定するものではない。

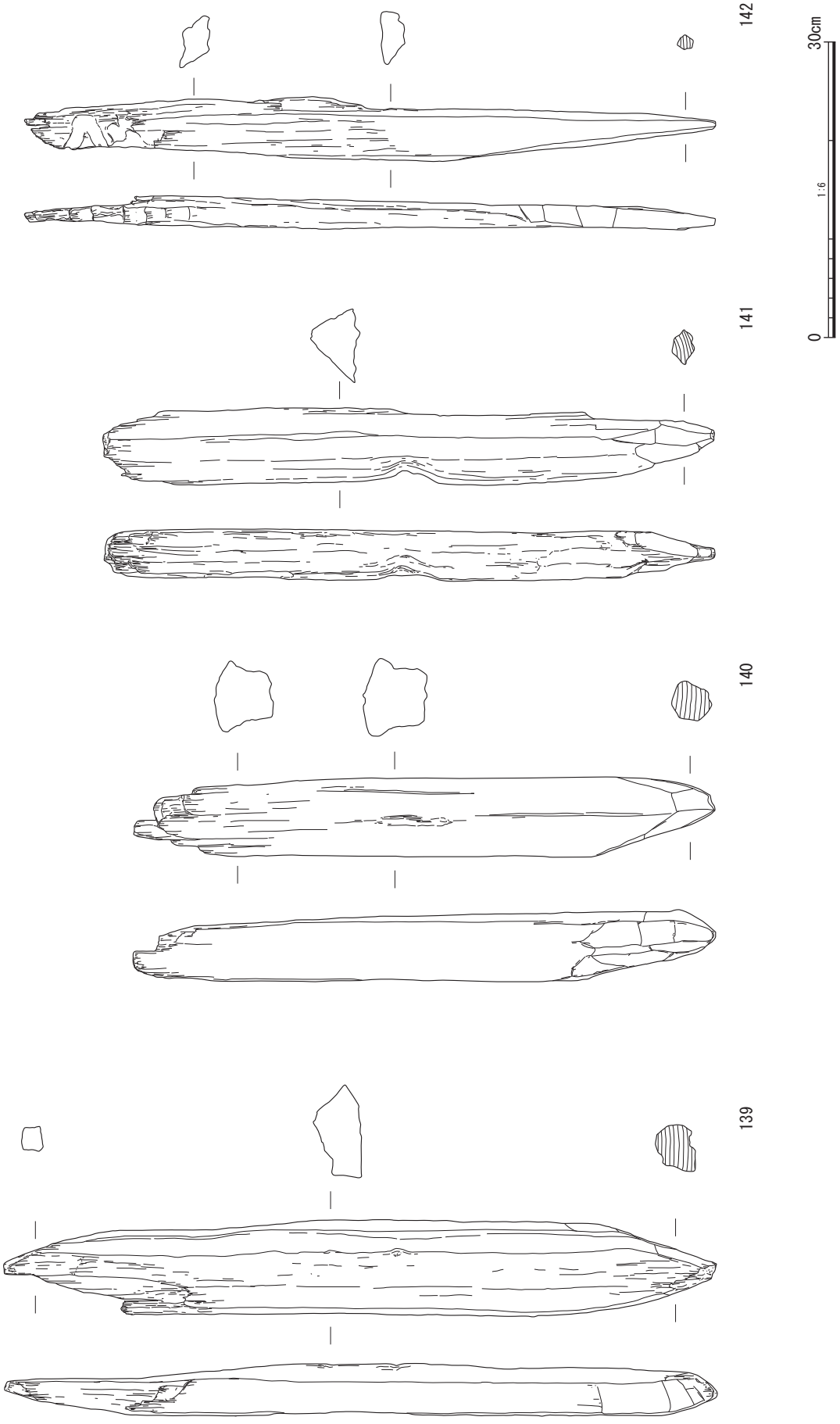
自然流路ＮＲ206（第42図）　自然流路内から出土した遺物である。上位には溝状遺構ＳＤ200や溝状遺構ＳＤ205などの遺構があり、境界が曖昧な箇所もある。ここでは自然流路の埋土である砂利層から出土した遺物を扱う。

143・144は土師器高杯である。143は脚部である。a10、b10区から出土した。144は脚柱部である。a9区から出土した。

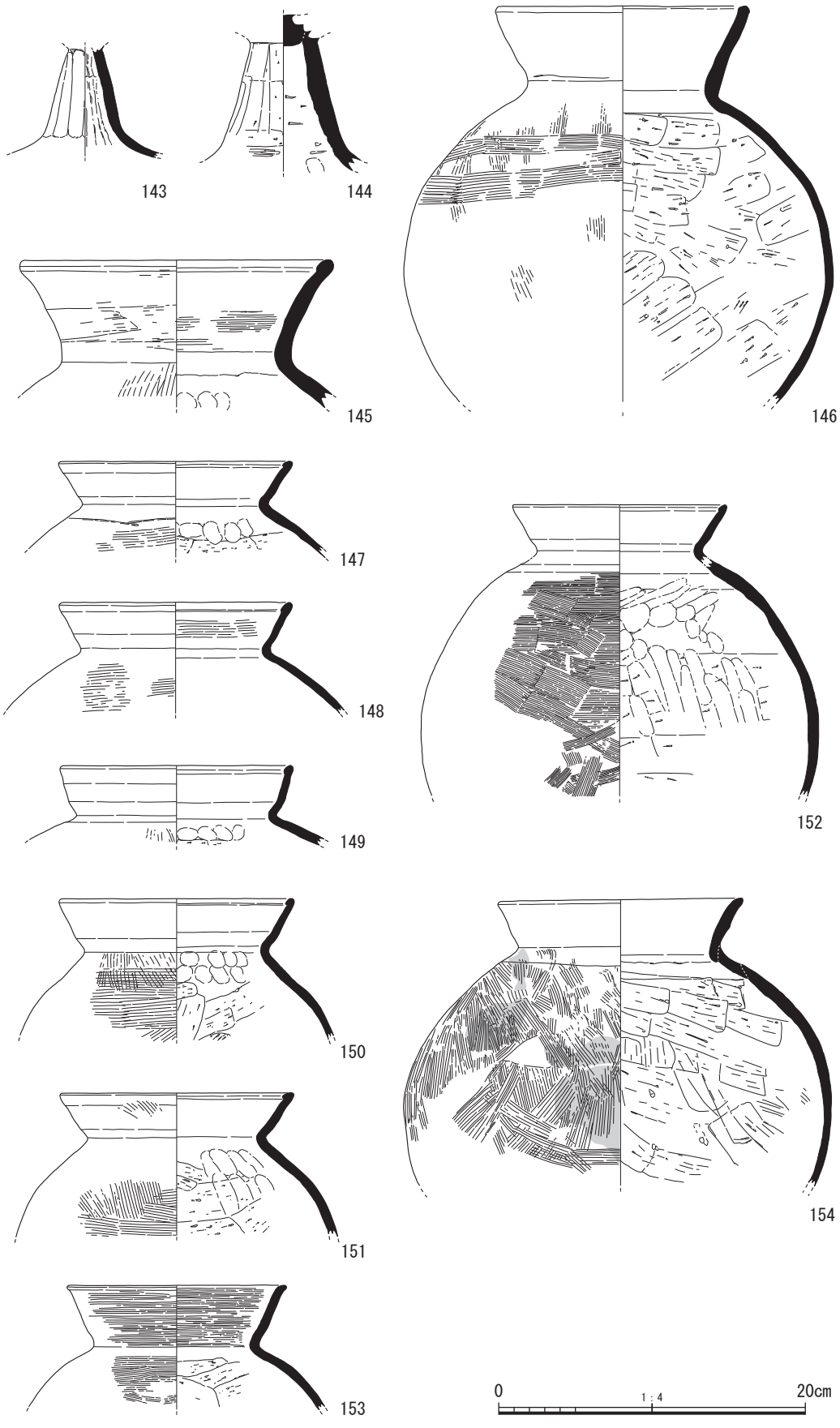
145・146は土師器壺である。口縁部が比較的長く、外反することから壺とした。145は口縁端部内面を肥厚し、段をつくる。体部外面に縦方向の粗いハケ調整を施し、内面に指頭圧痕を残す。口縁部付近の破片ではあるが、布留式新段階の土器の特徴をもつ。145・146ともにa9区から出土



第40図　F拡張区溝状遺構SD205出土木杭1



第41図　Ｆ拡張区溝状遺構ＳＤ205出土木杭２



第42図　F拡張区自然流路ＮＲ206出土遺物

した。

147～152は口縁端部が肥厚する甕である。147・150・151は体部外面は縦方向のハケ調整を施したのち、肩部に横方向のハケ調整を施す。150はa10・b10区砂利層、147・148はa9・a10区砂利層、151・149はa10区砂礫層、152はa9区から出土した。

153・154は土師器甕である。153・154は口縁部を外反ぎみに立ち上げ、口縁端部をナデて仕上げる。153はb9区から出土した。154はa9・a10区砂利層から出土した。

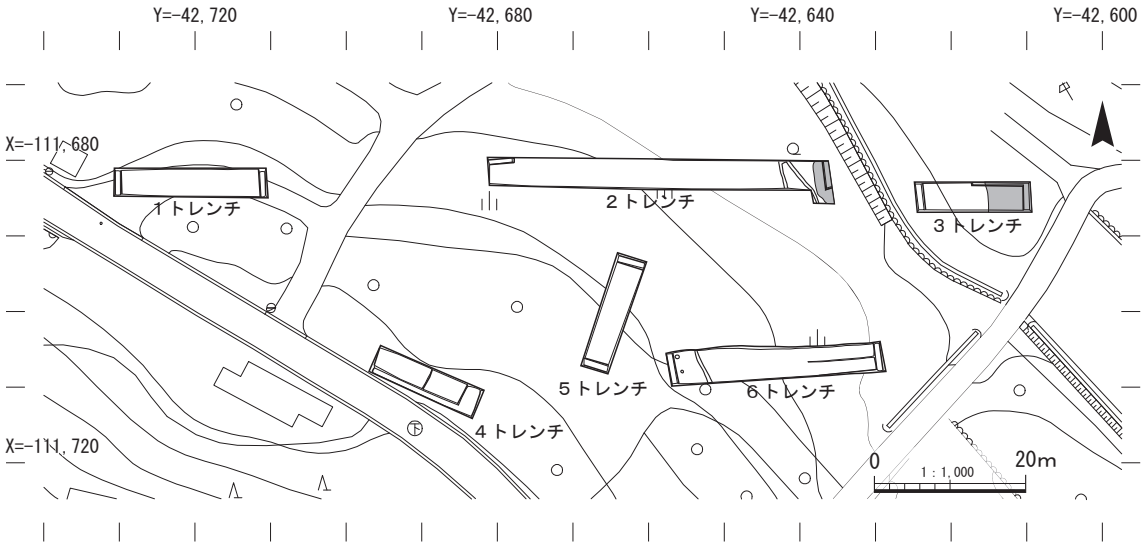
４）小結

Ｆ拡張区では溝状遺構２条、遺物を含む自然流路１条を検出した。位置と環境の項目でも触れたとおり、Ｆ拡張区は埋没流路の範囲と重なっており、自然流路ＮＲ206がそれにあたると考えられる。溝状遺構ＳＤ200・ＳＤ205と自然流路ＮＲ206は互いに重複しているが、自然流路ＮＲ206の埋没過程のある段階でＳＤ200が利用され、自然流路ＮＲ206と溝状遺構ＳＤ200が埋没後にＳＤ205が掘削されている。自然流路ＮＲ206から出土した遺物は古墳時代前期から中期にかけての土師器が中心で、溝状遺構ＳＤ200からは同様の時期の土師器にくわえて、古墳時代中期から後期の須恵器が出土した。自然流路ＮＲ206は調査区の南西から北東方向へ流れていたものが次第に北方向へと流れを変え、最終的には溝ＳＤ200の流れへと変わったものと推測できる。また、Ｆ地区の調査で検出された溝状遺構ＳＤ16はＦ拡張区で溝状遺構ＳＤ200と接続している。ところがＦ地区では溝状遺構ＳＤ16から須恵器は出土しなかった。溝状遺構ＳＤ16が埋没したのちも導水しやすい水源として利用されたようである。（三好博喜）

８．小規模調査（第６次調査－２）

１）調査の概要

小規模調査では６か所に調査トレンチを設定し、重機掘削の後、人力掘削を行い、遺構および遺物の有無の確認を行った（第43図）。また、断ち割り溝を設け、下層の状況確認を行った。各ト



第43図　第６次調査小規模調査区トレンチ配置図

レンチの状況は以下のとおりである。

１トレンチ（第44･45図）　小規模調査区内では西側の高位にあたる地域に設定した。幅約4.0m･長さ約20.0mのトレンチである。現地表面の標高は、142.8m程度である。表層に0.1mほどの礫を多く含む黄橙色の粗い砂層があり、表層を除去すると礫を含む黄橙色のシルト質の砂層となった。地表下1.6m程度まで掘削を行ったが、深くなるほど砂層の粒子は細かくなり、含まれる礫は大きくなった。調査の結果、安定した地盤を確認することはできず、顕著な遺構および遺物は認められなかった。

２トレンチ（第44・45図）　幅約4.0m・長さ約45.0mのトレンチである。東端では遺物包含層を認めたため、広がりを確かめるために幅約3.0mで南側へ約2.0m拡張した。現地表面の標高は140.0mから141.0m程度である。

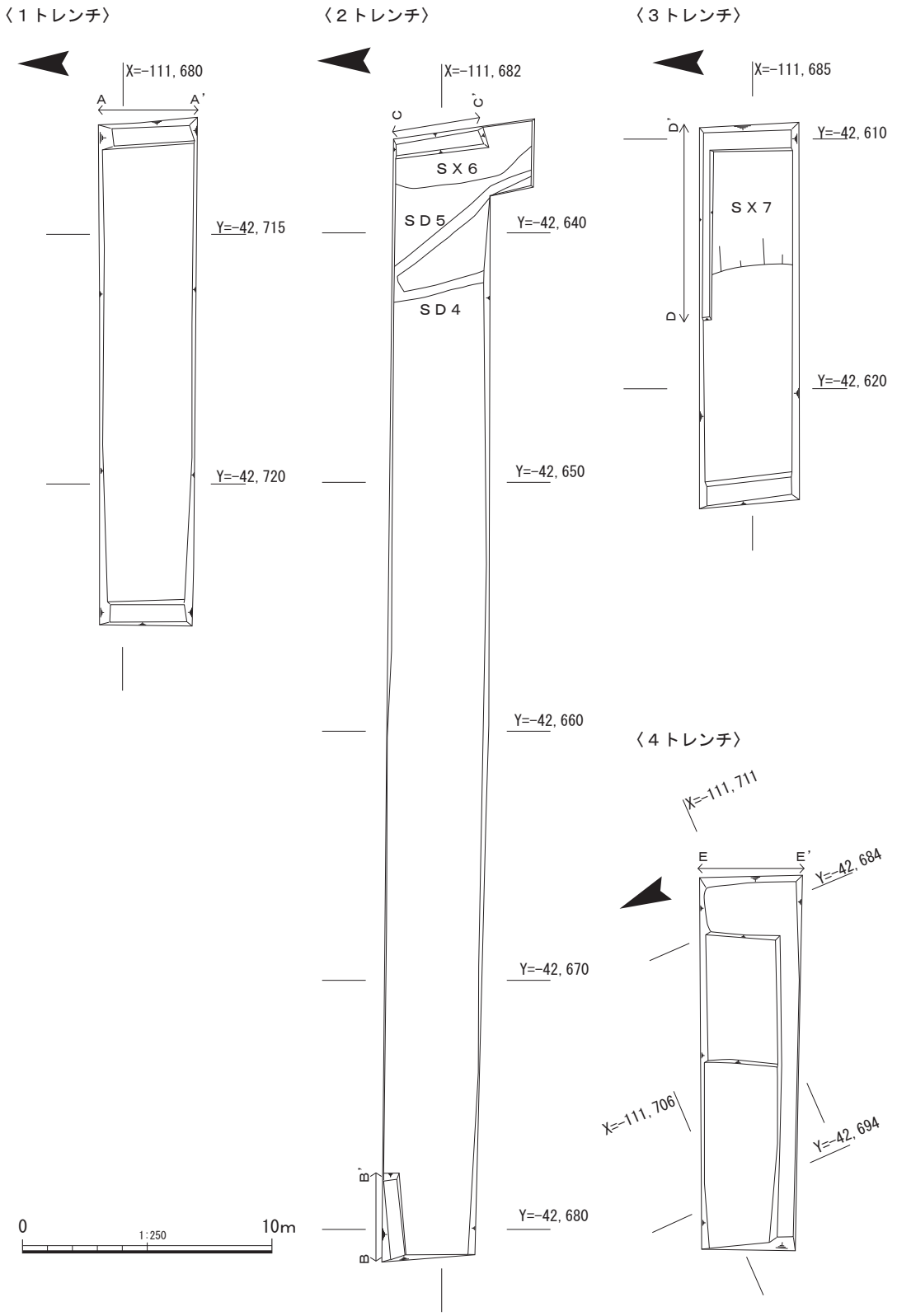
西側の表層は礫を多く含む褐灰色の粗粒砂で、この層を除去すると小礫を多量に含むにぶい黄橙色粗粒砂が0.4m程度堆積する。続いて締りのある礫を多量に含むにぶい黄褐色粗粒砂が0.4m程度堆積し、礫を含みしまりの強いシルト質の灰白色砂層と変わっていく。地表下1.4m程度まで掘削したが、この地点では顕著な遺構および遺物を確認できなかった。

東側の表層はシルト質の黄灰色砂で、表層を除去すると礫を多量に含むシルト質の灰黄褐色砂が0.1m程度堆積する。この層が遺物包含層となっている。下層には礫を多量に含むしまりの強いにぶい黄橙色砂が0.5m程度堆積し、さらに礫を多量に含み灰白色のしまりの強いシルト層から礫を多量に含みしまりの強い灰白色砂層へ、その後シルト質の灰白色砂層へと変わっていく。

遺物包含層ＳＸ６はトレンチ東端のわずかな箇所でしか確認できなかったが、調査対象地の東側および南側に広がっていく可能性が高い。遺物包含層ＳＸ６からは土師器の小破片５点と須恵器の小破片１点が出土した。遺物包含層の直下にある礫を多量に含むしまりの強いにぶい黄橙色砂層上面が遺構面となる。また、東側では溝状の土色変化を２条確認した。溝状遺構ＳＤ４は幅約0.6mの南北方向の溝である。検出段階で土師器の小破片が５点出土した。溝状遺構ＳＤ５は幅約0.6mの南北方向の溝である。検出段階で土師器の小破片が10数点、須恵器の小破片が２点出土した。須恵器の中には端部を折り返す杯蓋があり、８世紀程度の年代が想定される。暗渠の可能性もあるが、構築年代は特定できていない。

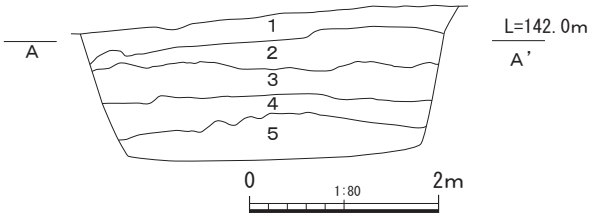
３トレンチ（第44・45図）　幅約4.0m・長さ約15.0mのトレンチである。現地表面の標高は139.5m程度である。小規模調査区内では東側の低位にあたる地域に設定した。表土は灰黄色砂層で、下層に続く褐灰色シルト質砂層までを除去したところ東側に遺物包含層を確認した。遺構面と思われる地盤は礫を多量に含む灰白色粗粒砂層で、東側に向けて低くなる緩い傾斜をなし、褐灰色細粒砂質シルトが遺物包含層ＳＸ７となっている。ＳＸ７からは須恵器小破片数点と土師器の小破片が数十点出土した。

４トレンチ（第44・45図）　小規模調査区内では西側にあたり、調査対象地内では最高所に設定した幅約４m・長さ約15mのトレンチである。現地表面の標高は、145.0m程度である。表層から１m程度の深さまではシルトを含む砂層で、２～20㎝の礫を多く含んでいる。表土下1.5m付



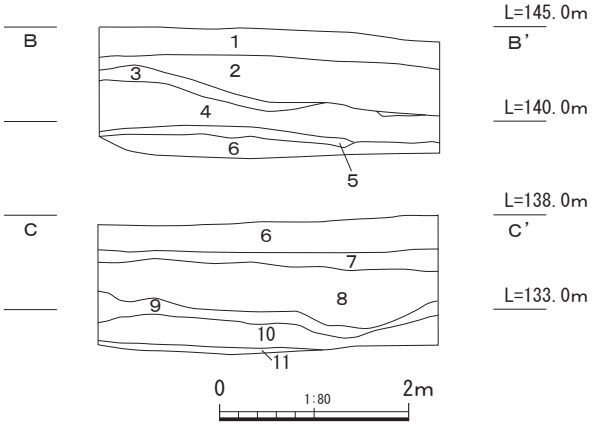
第44図　第６次調査小規模調査区１~４トレンチ平面図

【1トレンチ】



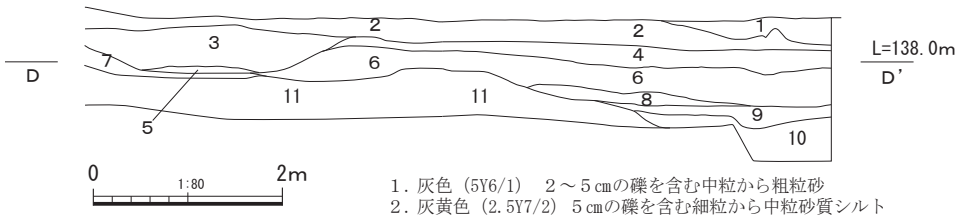
1．黄橙色（10YR8/6）２～５㎝の礫を含む粗粒砂
2．黄橙色（10YR8/6）５㎝の礫を含むシルト質細粒から中粒砂
3．黄灰色（10YR5/1）５㎝の礫を含むシルト質細粒から中粒砂
4．灰黄色（2.5Y7/2）５～10㎝の礫を少量含むシルト質細粒砂
5．灰白色（5Y7/2）　10㎝の礫を多量に含むシルト質細粒砂

【2トレンチ】



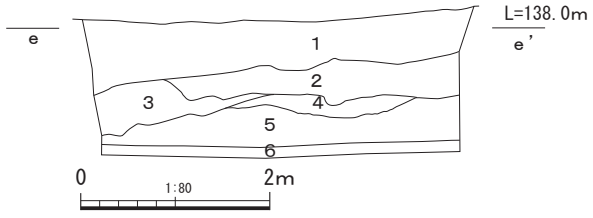
1．褐灰色（10YR5/1）２～５㎝の礫を含む細粒から中粒砂〈耕作土〉
2．にぶい黄橙色（10YR6/4）粗粒砂質小礫〈盛土〉
3．明赤灰色（2.5Y7/2）粗粒砂質シルト
4．にぶい黄褐色（10YR5/4）粗粒砂質小礫〈土石流堆積物〉
5．灰白色（10Y7/1）細粒砂質シルト〈土石流堆積物〉
6．灰白色（7.5Y7/1）２～10㎝の礫を含むシルト質細粒から中粒砂〈土石流堆積物か〉
7．灰黄褐色（2.5Y5/2）２～５㎝の礫を多量に含むシルト質細粒から中粒砂〈土石流堆積物か〉
8．にぶい黄橙色（10YR6/3）５～20㎝の礫を多量に含む中粒から粗粒砂〈土石流堆積物・礫支持・淘汰悪い〉
9．灰白色（10Y7/1）５～10㎝の礫多量を含む細粒から粗粒砂質シルト
10．灰白色（10Y7/1）５～10㎝の多量礫を含む細粒から粗粒砂
11．灰白色（7.5Y7/1）　シルト質細粒から中粒砂

【3トレンチ】



1．灰色（5Y6/1）　２～５㎝の礫を含む中粒から粗粒砂
2．灰黄色（2.5Y7/2）５㎝の礫を含む細粒から中粒砂質シルト
3．褐灰色（10YR5/1）　５～10㎝の礫を多量に含むシルト質細粒から中粒砂
4．褐灰色（10YR5/1）　２～５㎝の礫を含むシルト質細粒から粗粒砂
5．褐灰色（10YR5/1）　中粒から粗粒砂
6．褐灰色（10YR4/1）　２～５㎝の礫を多量に含むシルト質細粒から粗粒砂
7．灰白色（7.5Y7/2）細粒から中粒砂質シルト
8．灰黄色（2.5Y6/2）５㎝の礫を少量含む細粒砂質シルト
9．褐灰色（10YR5/1）　細粒砂質シルト
10．褐灰色（10YR4/1）　極細粒から中粒砂質シルト
11．灰白色（5Y7/2）　２～５㎝の礫を多量に含む粗粒砂から小礫〈土石流堆積物か〉

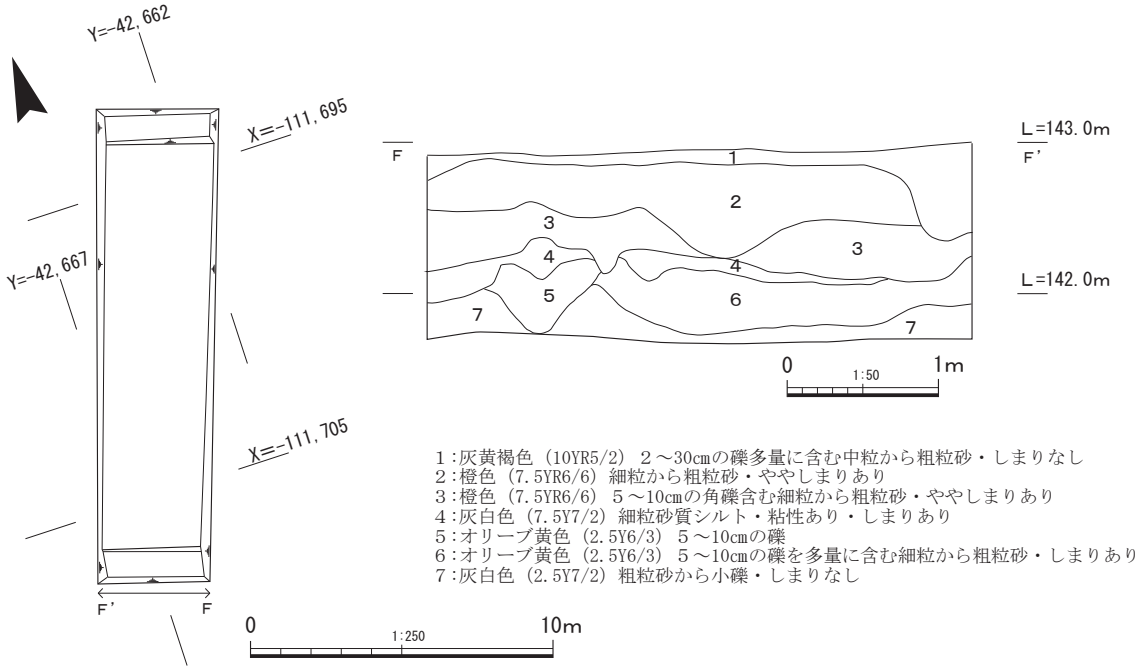
【4トレンチ】



1．浅黄色（5Y7/3）２～10㎝の礫を含む細粒から粗粒砂質シルト　〈現代盛土〉
2．褐灰色（10YR5/1）２～５㎝の礫を含む細粒から中粒砂質シルト
3．灰黄色（2.5Y7/2）５～10㎝の礫を多量に含む細粒から粗粒砂
4．灰白色（5Y7/2）５～20㎝の礫を多量に含むシルト質細粒砂
5．灰白色（5Y7/2）５～20㎝の礫を多量に含む細粒砂質シルト
6．明黄褐色（10YR7/6）５～20㎝の礫を多量に含む中粒から粗粒砂〈土石流堆積か〉

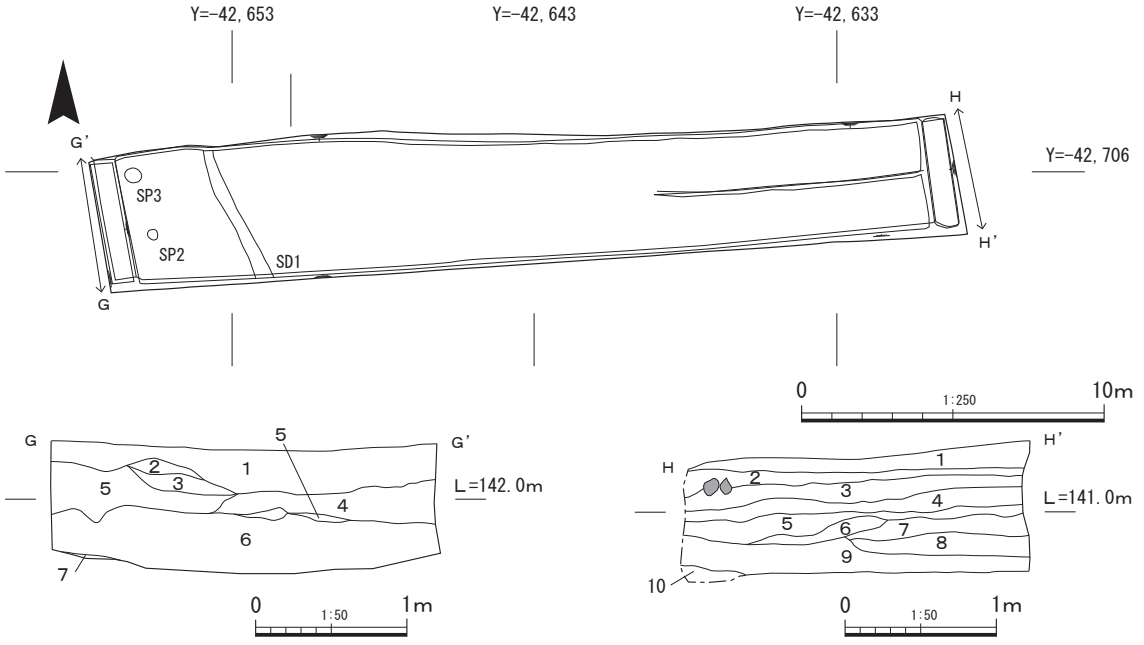
第45図　第６次調査小規模調査区１~４トレンチ断面図

〈５トレンチ〉



1:灰黄褐色（10YR5/2） ２～30㎝の礫多量に含む中粒から粗粒砂・しまりなし
2:橙色（7.5YR6/6） 細粒から粗粒砂・ややしまりあり
3:橙色（7.5YR6/6） ５～10㎝の角礫含む細粒から粗粒砂・ややしまりあり
4:灰白色（7.5Y7/2） 細粒砂質シルト・粘性あり・しまりあり
5:オリーブ黄色（2.5Y6/3） ５～10㎝の礫
6:オリーブ黄色（2.5Y6/3） ５～10㎝の礫を多量に含む細粒から粗粒砂・しまりあり
7:灰白色（2.5Y7/2） 粗粒砂から小礫・しまりなし

〈６トレンチ〉



1:灰黄褐色（10YR5/2） ２㎝の礫を少量含むシルト質細粒から粗粒砂・しまりなし
2:灰白色（10YR7/1） ２～５㎝の礫を含むシルト質中粒から粗粒砂・しまりなし
3:灰黄色（2.5Y7/2） ２～５㎝の礫を含むシルト質中粒から粗粒砂・しまりあり
4:灰黄褐色（10YR6/2） ２～５㎝の礫を含むシルト質細粒から粗粒砂・しまりあり・炭化物含む・鉄分沈着
5:灰黄褐色（10YR6/2） ２～５㎝の礫を多量に含む細粒から粗粒砂質シルト・やや粘性あり・しまりあり・鉄分沈着
6:褐灰色（10YR6/1） 細粒から中粒砂質シルト・やや粘性あり・ややしまりあり・炭化物含む
7:にぶい黄橙色（10YR6/3） ５㎝の礫を少量含む細粒から中粒砂質シルト・やや粘性あり・ややしまりあり
8:褐灰色（10YR4/1） 細粒砂質シルト粘性あり・しまりあり
9:褐灰色（10YR6/1） ５～20㎝の礫を多量に含む細粒から中粒砂質シルト・しまりあり・炭化物含む
10:黄灰色（2.5Y6/1） ２㎝の礫を多量に含む粗粒から小礫・ややしまりあり

第46図　第６次調査小規模調査区５・６トレンチ平・断面図

近まで掘削を行ったが、顕著な遺構および遺物は認められなかった。

５トレンチ（第46図）　幅約4.0m・長さ約16.0mのトレンチである。現地表面の標高は、143.0m程度である。表土直下は礫を多く含む砂質土であり、掘削深度が1.0mを超えると灰白色の粗粒砂や小礫の堆積層へと変わった。調査の結果、顕著な遺構および遺物は認められなかった。

６トレンチ（第46図）　幅約4.0m・長さ約28.0mのトレンチである。現地表面は緩い傾斜をなしており、トレンチ西側高位での標高は142.8m程度、東側の低位では141.5m程度である。西側の表層は礫を多量に含む黄灰色の砂層で、続いて灰黄色の砂層となる。灰黄色砂層を除去したところでしまりのある黄灰色粗粒砂層となった。上面で精査したところ、ピット状の土色変化２か所と溝状の土色変化１条を確認した。東側の表層は灰黄褐色や灰白色の砂層で、続いて灰黄色や灰黄褐色の砂層へと続く。これらの堆積層を除去したところでしまりのある褐灰色の砂質シルト層に変わり、安定地盤と判断した。

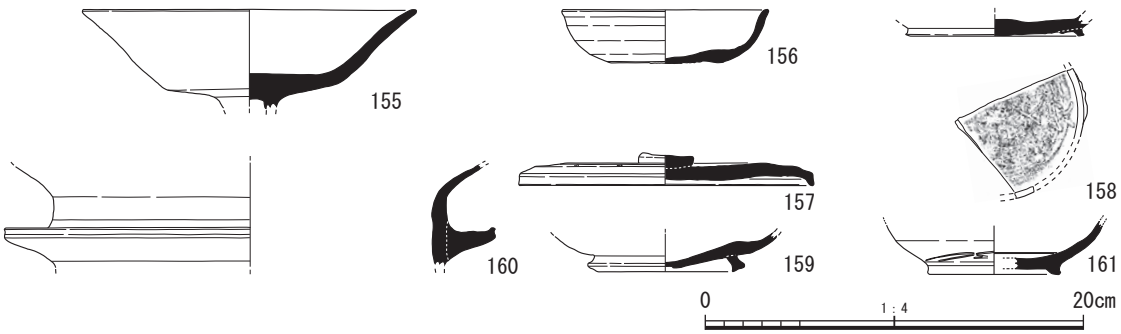
溝状遺構ＳＤ１は幅約0.8mの南北方向の溝である。検出段階で土師器・須恵器の小破片が１点ずつ出土した。ピットＳＰ２は径約0.6mで円形である。検出段階で土師器の小破片１点が出土した。ピットＳＰ３は径約1.1mの円形である。検出段階で須恵器と土師器の小破片が１点ずつ出土した。須恵器は焼成が非常に悪い。立ち上がりがわずかに残る杯身で、古墳時代末期に位置づけられる。包含層からは、須恵器片が出土した。西側ではピット・溝などを検出した。

２）出土遺物

２トレンチ（第47図155）　東側で検出した包含層から高杯などの土師器および須恵器が出土した。155は地表下0.3mの黒褐色包含層内から出土した土師器の高杯の杯部である。平底の杯部から口縁部が開いて立ち上がる。脚部を欠くが、中空の脚柱部となる。

３トレンチ（第47図156・157）　東側で検出した厚さ約30cmの包含層から古代の土師器・須恵器が出土した。156は地表下0.5mの黒色砂礫層から出土した須恵器の杯身Ａである。口径11.0cm程度で、底部に回転ヘラ切り痕を残す。157は須恵器の杯蓋である。口径15.0cm程度で、口縁端部を折り返し、扁平なつまみを付す。

６トレンチ（第47図158～160）　東側で検出した包含層から土師器・須恵器が出土した。158は須恵器の杯身Ｂである。高台径は8.8cmに復元でき、底部外面の高台内に「大穴」と内から外へ向かって縦書きで刻書されている。表面調整が終了したのちに刻んだものである。159は須恵器



第47図　第６次調査小規模調査区出土遺物

の壺底部か杯Ｂと思われる。直径8.0cmほどの高台を付す。160は包含層から出土した土師器の羽釜である。小片に分かれており、鍔の直径を復元すると26.0cm程度となる。全体に摩滅が著しい。

包含層（第47図161） 小規模調査後、調査範囲拡張中に緑釉陶器椀が出土した。内外面ともに薄く釉薬がかかるが高台周辺は露胎になっている。内面底部やや上方には細く浅い沈線がめぐり、底部に直接重ね焼きの痕跡が残る。外面は施釉前に横方向のミガキが施される。高台は削り出しで成形する。胎土は精良である。篠窯跡群で生産されたものと推定され、器壁の厚さや高台の形状から前山２・３号窯出土資料よりは新しく、黒岩１号窯出土資料[注12]よりは古い。10世紀前半[注13]と考えられる。

３）小結

６か所のトレンチ調査の結果、１トレンチ、２トレンチ西側、４トレンチ、５トレンチを設定した調査対象地西側では、礫混じりの砂層が主体で、顕著な遺構および遺物が確認できなかった。一方、調査対象地東側の２トレンチ東端、３トレンチ東側、６トレンチでは遺物包含層を確認し、ピット状や溝状の土色変化を検出した。３か所で確認できた包含層は、奈良・平安時代の遺物が多く、古代以降に堆積したと推測される。このことから２トレンチ東側、３トレンチ、６トレンチを含む東側の1,200㎡をＫ地区として本調査を行うこととなった。 （三好博喜）

９．Ｋ地区の調査（第９次調査）

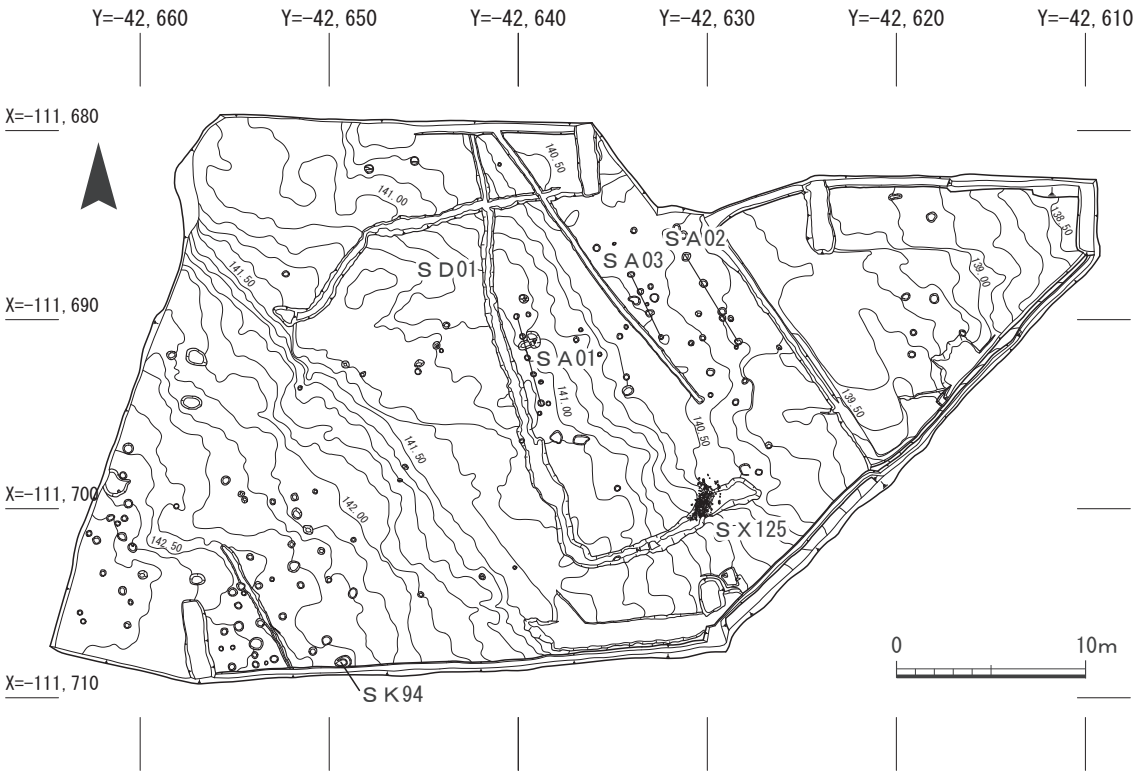
１）調査の概要

Ｋ地区の調査は、第６次調査の小規模調査で確認した遺構全容の把握や遺構の展開などを確認するため、面的な発掘調査を実施した。調査区の重機掘削、遺構検出作業の一部は令和２年度に実施し、翌３年度に本格的な遺構検出および掘削作業を実施した。

調査区は、犬飼遺跡の西に位置している。平野から丘陵部にかけての微高地になっており、本報告の犬飼遺跡の範囲では最高所に位置している。南北4.2～30.0m、東西50.0mの東に向かって窄まるような形の調査区である。調査区内の標高は最高所142.8m、最低所138.5mで、比高4.3mである。現地表面から最大1.0m程度現在の盛土が堆積しており、一部薄く遺物包含層が残存していた。遺構面は土石流堆積層の上面で検出した。遺構の調査が完了したのちに行った断ち割りでは、調査区下層には、遺物を含まない谷状地形と考えられる堆積を２か所確認した。谷状地形は、調査区の中央付近をピークに北側、南側に下る。下層の状況を含めて考えると、当地における人間活動が行われる以前の谷を埋めた土石流による堆積が遺構検出面のベース層になっていると考えられる。検出した遺構は浅く、本来の生活面は現在の削平により流出しているものと考えられる。

２）検出遺構

Ｋ地区では、区画溝ＳＤ01、集石遺構ＳＸ125、土坑ＳＫ94、柵列ＳＡ01～03を検出した。遺構は、調査地東、西である程度まとまりをもって検出していたが、建物を復元することはできなかった。



第48図　Ｋ地区平面図(1/400)

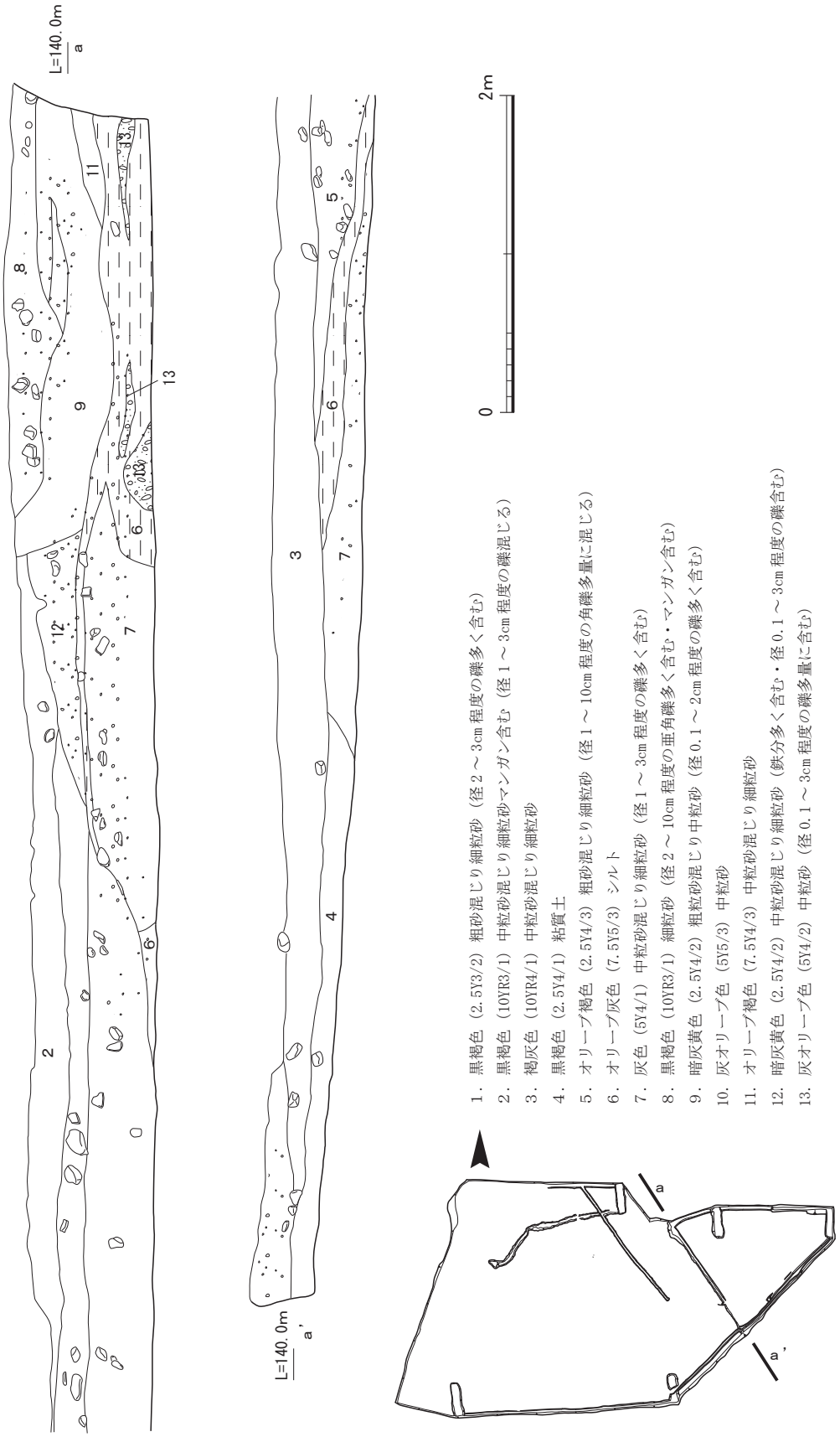
区画溝ＳＤ01（第50図）　調査区中央で検出した区画溝である。溝は途中で東に屈曲し、Ｌ字状を呈している。検出長16.6m、検出幅0.6～0.9mである。Ｌ字に折れる箇所が最高所に位置し、北と東に向かって下がっていく。埋土は礫を含む粗～中粒砂で、その層中に須恵器、土師器が混じる。断面ｃ－ｃ'では水性由来と考えられるシルトを確認している。周辺は溝がやや広くなっていることから、溝が機能している時には、滞水するような状況であった可能性がある。ただし、全体を通じて、水の流れを示すような堆積は確認できていない。

集石遺構ＳＸ125（第50図）　区画溝ＳＤ01の東側で検出した。調査区内に散見する石材に比べ、円礫の割合が高いことから、人為的に搬入、配された可能性がある。L字の区画溝の内側、柱穴が密集する側に位置することなどから、生活空間の基礎や護岸のような機能を想定することができる。須恵器杯身・杯蓋が出土している。

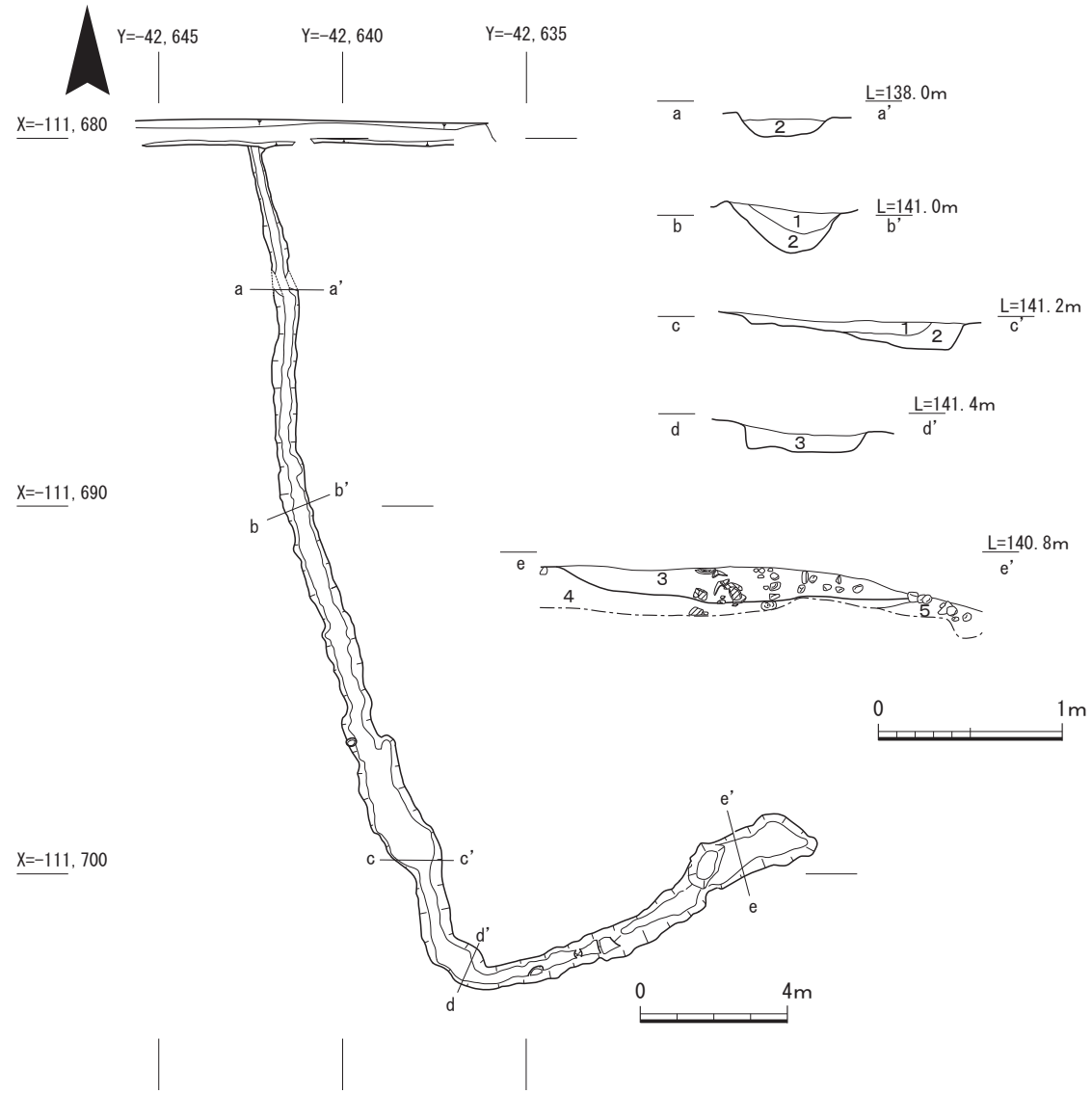
柵列ＳＡ01（第51図）　区画溝ＳＤ01東で検出した柵列である。検出長4.8mである。深さは0.1～0.2mと残存状況は悪い。柱穴は約1.0mで配される。区画溝ＳＤ01と並行している。

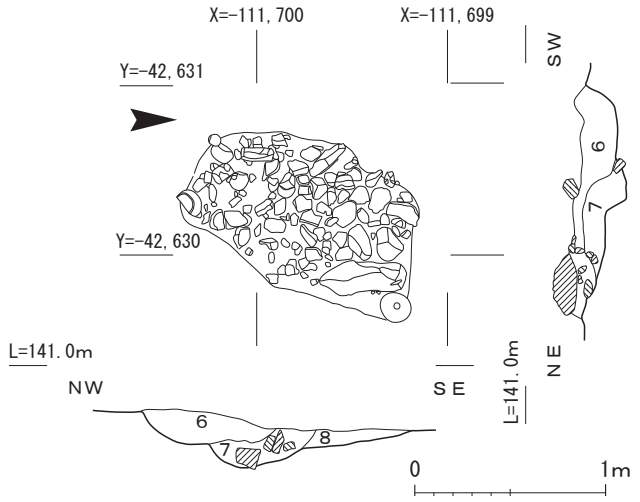
柵列ＳＡ02（第51図）　区画溝ＳＤ01から約10m東で検出した柵列である。検出長5.2mである。深さは0.1～0.2mと残存状況は悪い。柵列として検出したが、柵列ＳＡ03と合わせて建物を構成する可能性もある。

柵列ＳＡ03（第51図）　柵列ＳＡ01と柵列ＳＡ02の間で検出した。検出長3.7mである。深さは0.1～0.2mと残存状況は悪い。柵列として検出したが、柵列ＳＡ02と合わせて建物を構成する可能性もある。



第49図　K地区土層横断図(1/40)

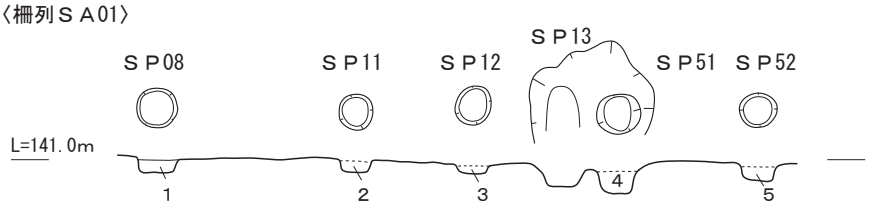




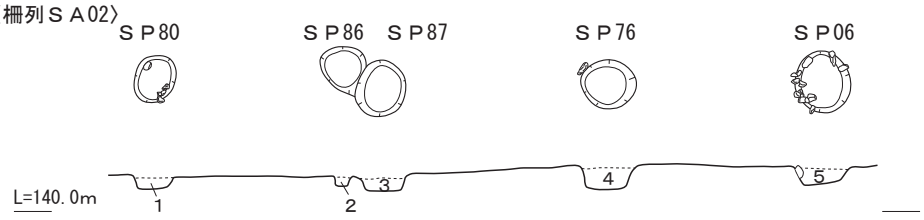
1．暗灰黄色（2.5Y 4/2）中粒砂混細粒砂
〈径2cm程度の礫含む 土器片含む 炭化物混じる〉
2．暗灰黄色（2.5Y 4/2）粗砂混細粒砂
〈径1cm程度の礫含む 土器片含む 炭化物混じる〉
3．暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）シルト質極細粒砂
4．オリーブ褐色（2.5Y 4/3）中粒砂質細粒砂質土
〈径10cm程度の礫が混じる 遺物含む 〉
5．オリーブ褐色（2.5Y 4/3）中粒砂質細粒砂質土
〈径1cm程度の礫少量混じる〉
6．オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂質細粒砂
7．暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）中粒砂質シルト
〈土器片含む〉
8．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質細粒砂

第50図　K地区溝状遺構SD01、集石遺構ＳＸ125平・断面図

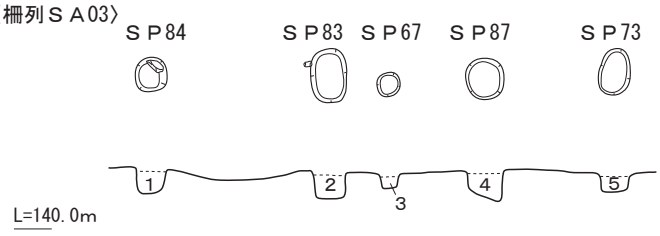
〈柵列ＳＡ01〉

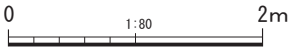


〈柵列ＳＡ02〉



〈柵列ＳＡ03〉





柵列ＳＡ01

１．黄褐色（2.5Y5/3）中粒砂質細粒砂
２．暗灰黄色（2.5Y5/2）粗粒砂質中粒砂
（径 1cm 程度の礫混じる）
３．暗灰黄色（2.5Y5/2）粗粒砂混中粒砂（径 1cm 程度の
４．暗灰黄色（2.5Y4/2）粗粒砂質中粒砂
（径 1cm 程度の礫混じる）
５．にぶい黄色（2.5Y6/3）中粒砂質細粒砂
（径 3cm 程度の礫混じる）

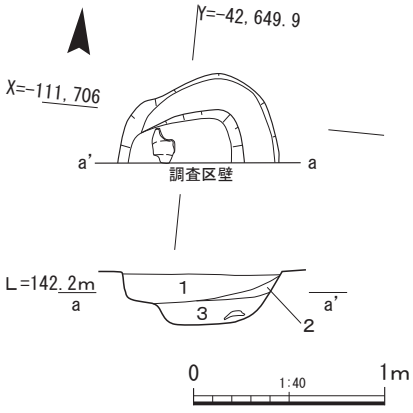
柵列ＳＡ02

１．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質細粒砂
（マンガン含む・径 1cm 程度の礫混じる）
２．暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂質細粒砂
（マンガン少量混じる・径 1cm 程度の礫含む）
３．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質細粒砂
（マンガン混じる・径 0.5cm 程度の礫少量混じる）
４．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質細粒砂
（マンガン含む・径 0.5cm 程度の礫混じる）
５．オリーブ褐色（2.5Y4/3）粗粒砂質細粒砂
（マンガン含む・径 0.5cm 前後の礫多く含む）

柵列ＳＡ03

１．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質細粒砂
（マンガン含む・ブロック灰色（5Y6/1）少量混じる）
２．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質細粒砂
（マンガン含む・径１～ 2cm 程度の礫混じる）
３．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂
（マンガン含む・径 0.1cm 程度の礫含む）
４．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質細粒砂
（マンガン含む・径 1cm 程度の礫混じる）
５．暗灰黄色（2.5Y4/2）粗粒砂質中粒砂
（マンガン含む・径 1cm 程度の礫混じる）

第51図　Ｋ地区柵列ＳＡ01～03平・断面図(1/60)



１．暗灰黄色（2.5Y5/2）粗粒砂
（径２cm程度の礫混じる）
２．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂質細粒砂
（径１～ 10cm 程度の礫混じる）
３．オリーブ褐色（2.5Y4/3）粗粒砂質細粒砂

第52図　Ｋ地区土坑ＳＫ94平・断面図(1/40)

土坑ＳＫ94（第52図）　調査区南西で確認した土坑である。直径0.84m、深さ0.28mである。土坑は２段で掘削されており、埋土最下層から土師器甑が出土している。

３）出土遺物

区画溝ＳＤ01（第53・54図）　162～164はかえりをもたない須恵器杯Ｂの蓋である。162は宝珠形をとどめた宝珠つまみが付く。天井外面部はヘラ切り後にケズリで仕上げる。163，164の宝珠つまみは扁平で、163はヘラ切り後にケズリで仕上げる。164は、ヘラ切り後にナデで仕上げる。

165～190は、須恵器杯Ａ身である。165～175は口径10.0～12.5cm、176～190は口径12.6～15.2cmの一群である。平坦な底部から緩やかに外反ぎみに立ち上がる口縁を有する。底部はヘラ切り後ナデまたは不調整である。口縁の大きさで製作方法に大きな差異は認められない。小口径のものは、杯Ｇ身の可能性もあるが、対応する蓋がないのでその可能性は少ないと判断した。179は稜椀の可能性もある。中位よりもやや下位に稜をもち、口縁部がほぼ斜め上方にまっすぐ伸びる。

191～205は須恵器杯Ｂである。口径が10.0cmから18.7cmと幅がある。191・193～198は高台がやや外に踏ん張りぎみの一群で、内端面が接地するものや外端面が接地するものがある。この一群では16.0cm前後以下のものでは底部はヘラ切りのちナデ、または不調整、16.0cm前後以上のものは下ヘラ切りのちケズリで仕上げる。193は、底部外面に墨書と考えられる跡が認められる。判読はできない。192・199～205は平坦な底部から緩やかに外反ぎみに立ち上がる口縁を有する。高台が台形を呈している。

206は壺底部である。底部はケズリで仕上げる。小片のため器種は不明である。

207は須恵器甕である。体部の外面にはタタキのちカキメ、内面には当て具痕がそれぞれみられる。

208～210は土師器甕の口縁である。208は、頸部が「く」字状に屈曲する。口縁端部が内傾する。内外面ともにハケで仕上げている。209は頸部が垂直に立ち上がる。口縁端部はやや外反ぎみにおさめる。210は口縁部が直線的に斜め上方に延びる。体部外面には粗いハケメがみられる。長胴の甕か。

211は土師器鍋である。口縁端部はやや三角ぎみにおさめる。

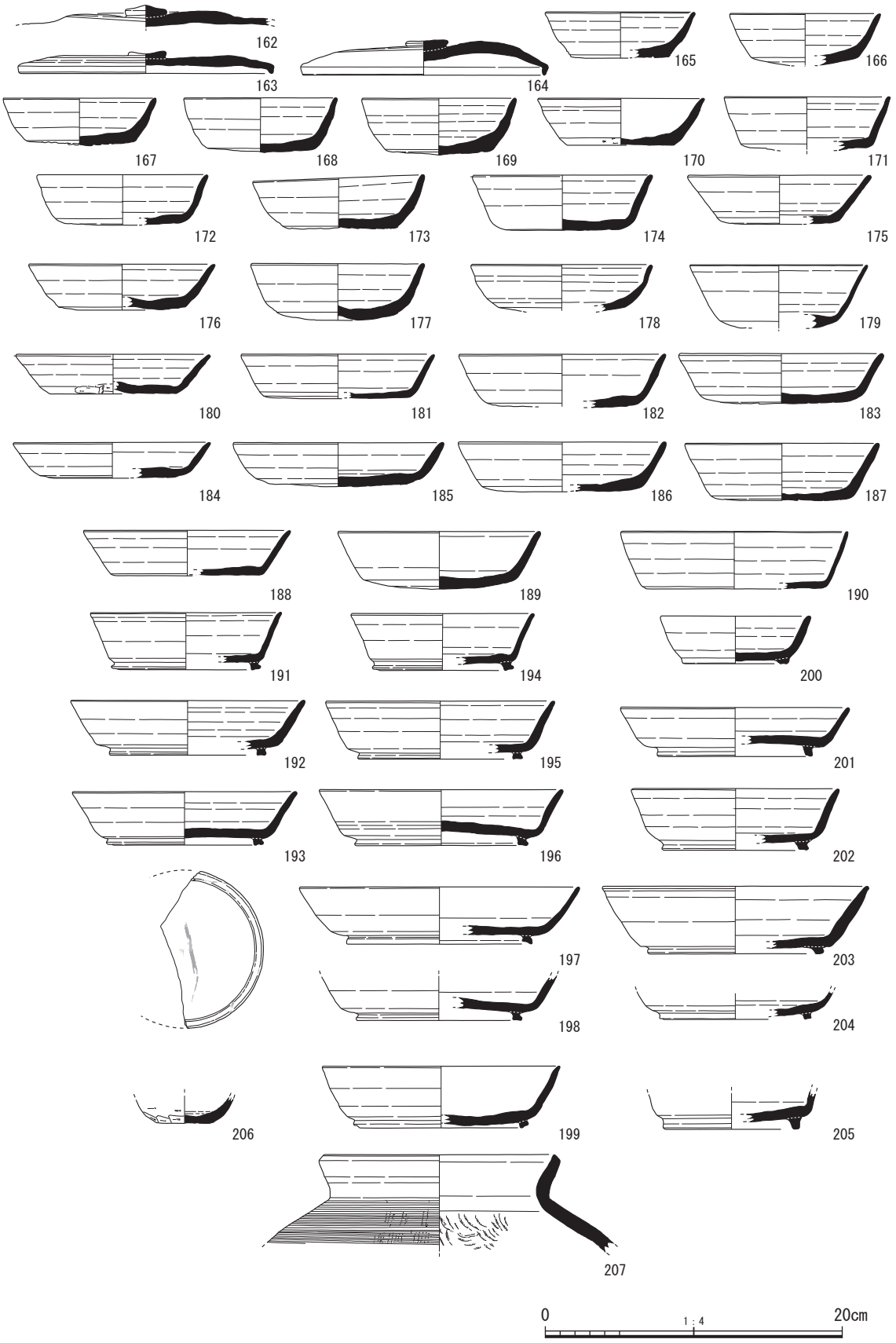
212は土師器高杯の脚柱部である。213のような皿状の杯部が取り付くものと思われる。

213は、土師器高杯Ａである。皿状の杯部の直径は25.3cmで、口縁部内面に二段放射暗文を施している。口縁端部はやや巻込みぎみである。底部に剥離と思われる痕跡が認められる。

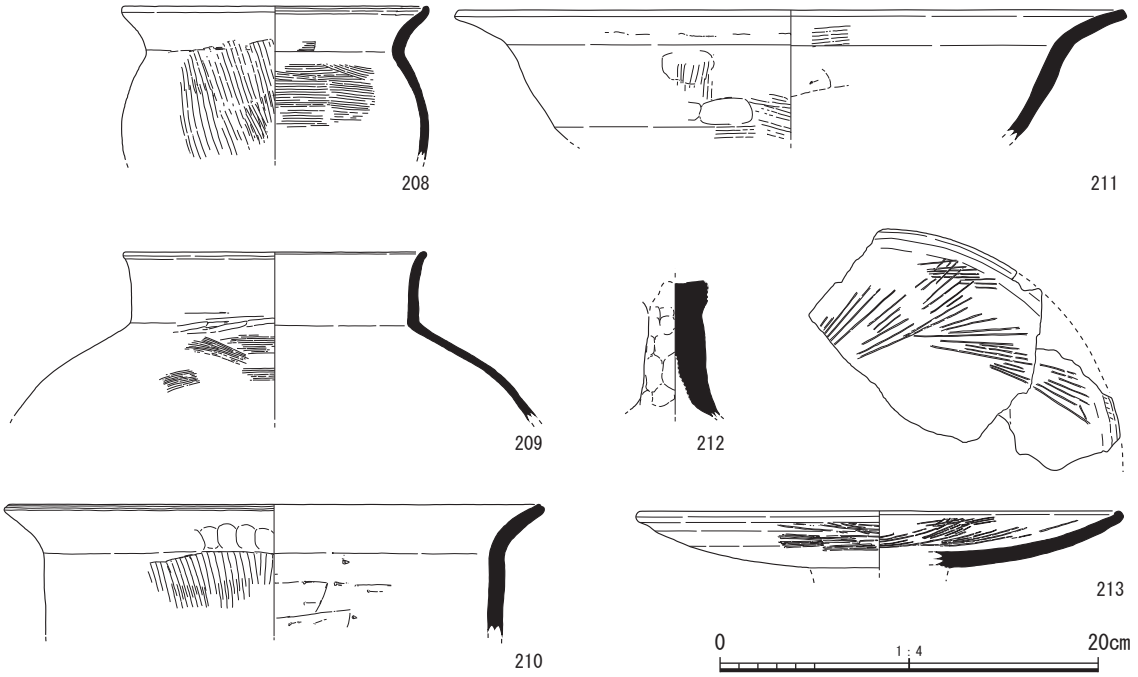
集石遺構ＳＸ125（第55図214・215）　214はかえりをもたない須恵器杯Ｂ蓋である。受部径16.1cmである。天井部外面は回転ケズリで仕上げる。

215は須恵器杯Ａ身である。口径11.7cmである。平坦な底部から緩やかに外反ぎみに立ち上がる口縁を有する。底部はヘラ切り後ケズリで仕上げる。214と同一の遺構から出土しているが、受部径と口径に5.0cm程度の違いが認められることからセットではないと考えられる。

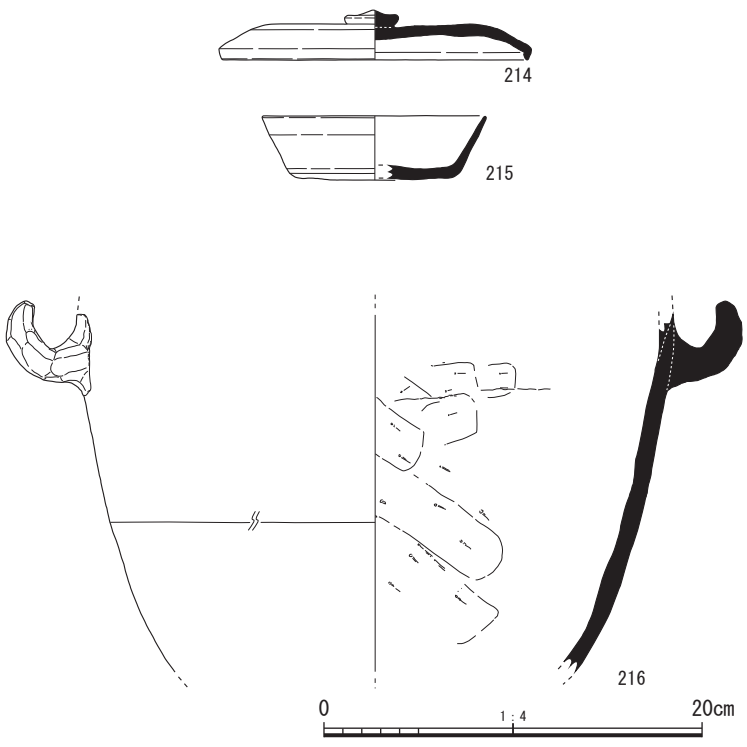
土坑ＳＫ94（第55図216）　216は土師器甑である。砲弾形を呈し、鉤状の把手を貼り付ける。外面は摩耗が著しく調整は不明である。内面にはユビオサエ、ナデがみられる。



第53図　Ｋ地区ＳＤ01出土遺物１（須恵器）



第54図　K地区SD01出土遺物２（土師器）



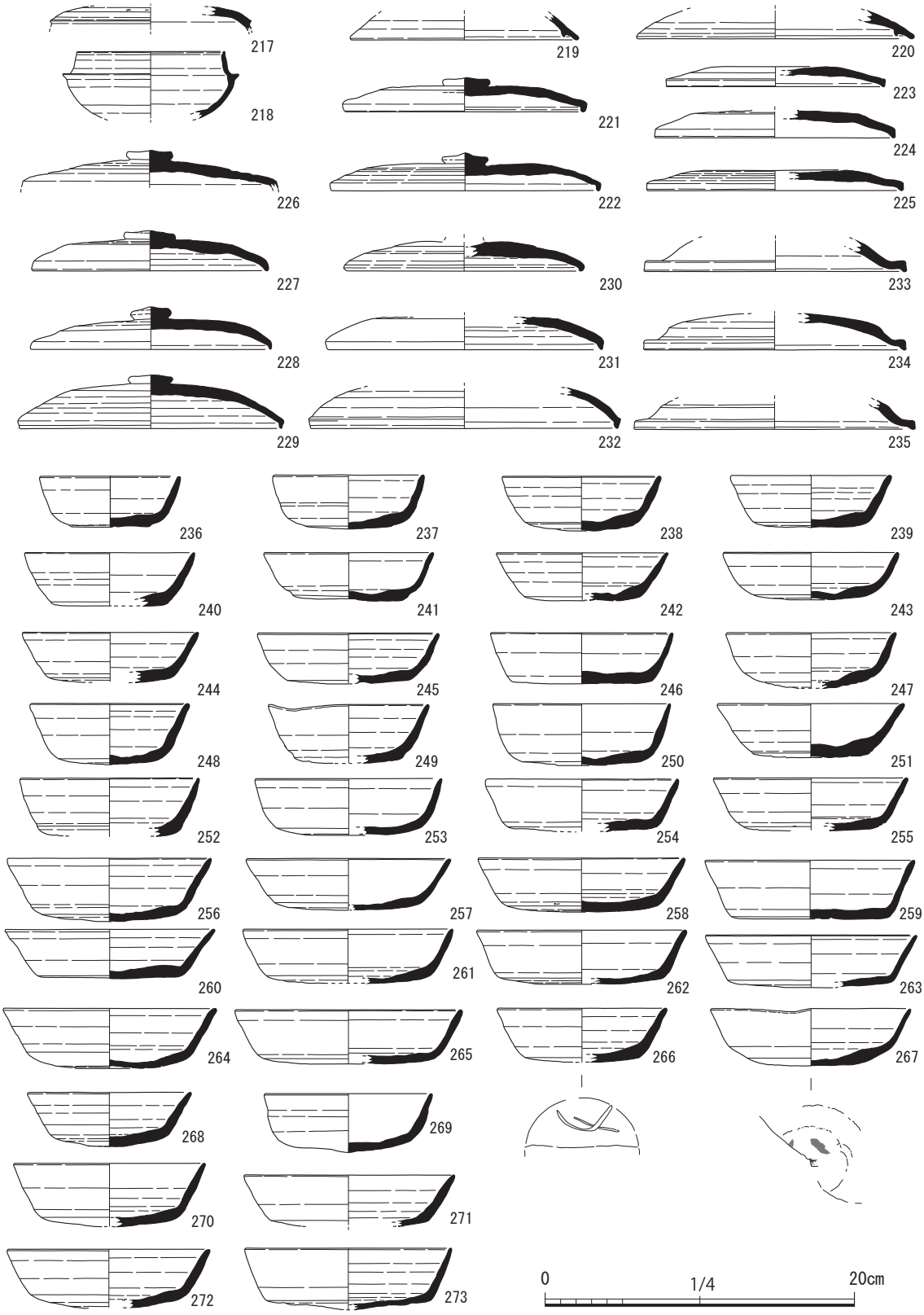
第55図　K地区集石遺構SX125、土坑SK94出土遺物

包含層（第56～60図）　217は須恵器杯H蓋である。小片ではあるが、天井外面にはヘラケズリを施す。

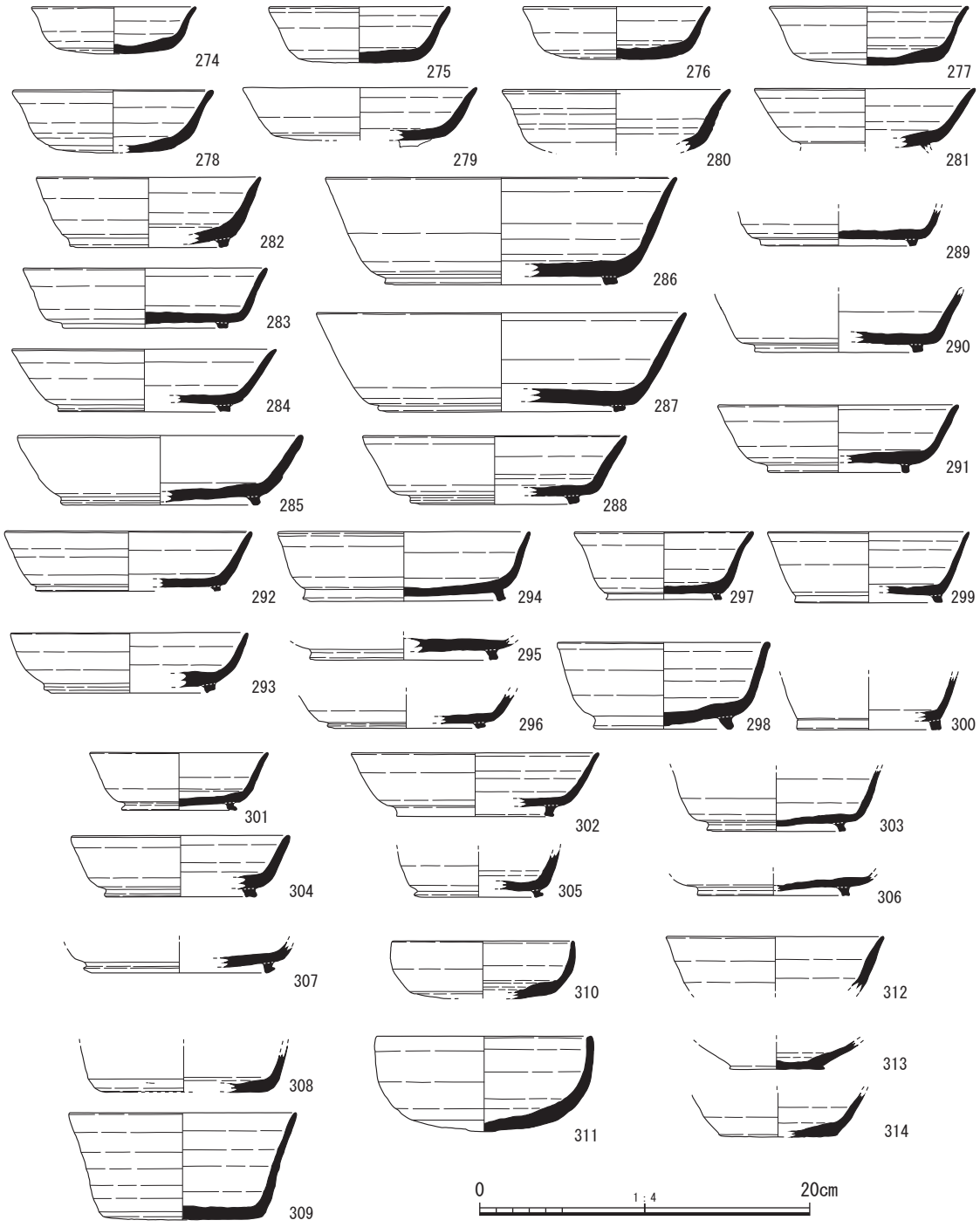
218は須恵器杯H身である。口縁の立ち上がりは高く、やや深い杯部をなす。口縁端部に明確な段をなす。ともに田辺編年TK47型式に併行するもので、古墳時代後期に帰属する。

219・220はかえりをもつ須恵器杯Bの蓋である。小片のため詳細は不明であるが、219ではヘラケズリの痕跡がみられる。

221～235は須恵器杯Aまたは杯Bの蓋である。221～226はやや扁平で、背の低い蓋である。221・222は、つまみを持ち、頂部にヘラケズリを施す。223～225はつまみを欠損しているが、



第56図　Ｋ地区包含層出土遺物１（須恵器）



第57図　K地区包含層出土遺物２（須恵器）

頂部にケズリの痕跡がみられる。口縁端部を下方におさめる。226はつまみを持ち、頂部にヘラケズリを施す。口縁が欠損しているが、破面の状況から221などと同じような形状であると考えられる。227～232は頂部がやや丸みを帯び、口縁端部をやや内側におさめる。頂部はナデで仕上げるもの、ケズリで仕上げるものがある。233～235は口縁部を外側に屈曲させ、端部はやや台形におさめる。須恵器皿Ｂ蓋の可能性もある。

236～280は須恵器杯Ａ身である。小口径のものは杯Ｇ身の可能性もあるが、杯Ｇ蓋が見当たら

ないのでそのように判断した。236は口径8.6cmを測る。237は口径9.6cmの個体である。やや垂直傾向を持ちつつも緩やかに外反ぎみに立ち上がる口縁を有する。底部は丸みを帯びている。全体に摩耗が著しく、調整は不明である。238～255・266は、口径10.0～12.5cmの一群である。口縁部は緩やかに外反ぎみに立ち上がる。ヘラケズリを施すものとヘラ切りのちナデまたは無調整のものがある。また底部がやや丸みを帯びるものと平坦なものもある。247～249は口径に比べて杯部がやや深い。250はほかに比べて口縁部が垂直ぎみにたちあがる。266は底部に丁寧なナデを施したのちヘラ描きをしている。256～265・267は、口径12.5～14.5cmの一群である。緩やかに外反ぎみに立ち上がる口縁を有する。口縁端部は、丸くおさめる。底部外面にはヘラケズリを施すものとヘラ切りのちナデまたは無調整のものがある。また底部がやや丸みを帯びるものと平坦なものもある。267は底部に墨書と考えられるものがあるが、判読はできない。268～273は底部がやや丸底傾向にある一群である。口径や口縁部の立ち上がりなどはその他の杯A身と大きな違いはない。274～280は口縁端部がやや外に広がる傾向にある一群である。口径は9.8～14.0cmと幅がある。277は外面に自然釉が明瞭にかかる。

281～307は須恵器杯Ｂ身である。281～296は四角もしくは台形の高台を持つ一群である。平坦な底部から緩やかに外反ぎみに立ち上がる口縁を有する。口径は13.5～22.3cmで、幅をもつ。297～300は口縁に対して杯部がやや深い一群である。口径が10.8～12.7cmである。出土した杯Ｂ身の中では口径が小ぶりである。301～307は、高台がやや外に踏ん張りぎみの一群である。口径が10.8cmから18.7cmと幅がある。高台の内端面が接地するものや外端面が接地するものがある。305は杯部下位から高台にかけて釉が認められる。

308・309は須恵器椀もしくは鉢である。309の口径は13.6cmである。扁平な底部から垂直ぎみに口縁が立ち上がる。

310・311は須恵器杯Ｇ身もしくは椀である。311は口径12.9cmである。丸みを帯びた底部を有する。

312は杯部がやや深い須恵器杯Ｂ身であろう。口縁がやや外反傾向のある杯Ａ身の可能性もあるが、口縁の立ち上がりがＫ地区で出土する杯Ａ身とは異なることから杯Ｂ身とした。ただし、底部、口縁部が欠損しているため、明らかな杯Ｂ身としての報告は避ける。

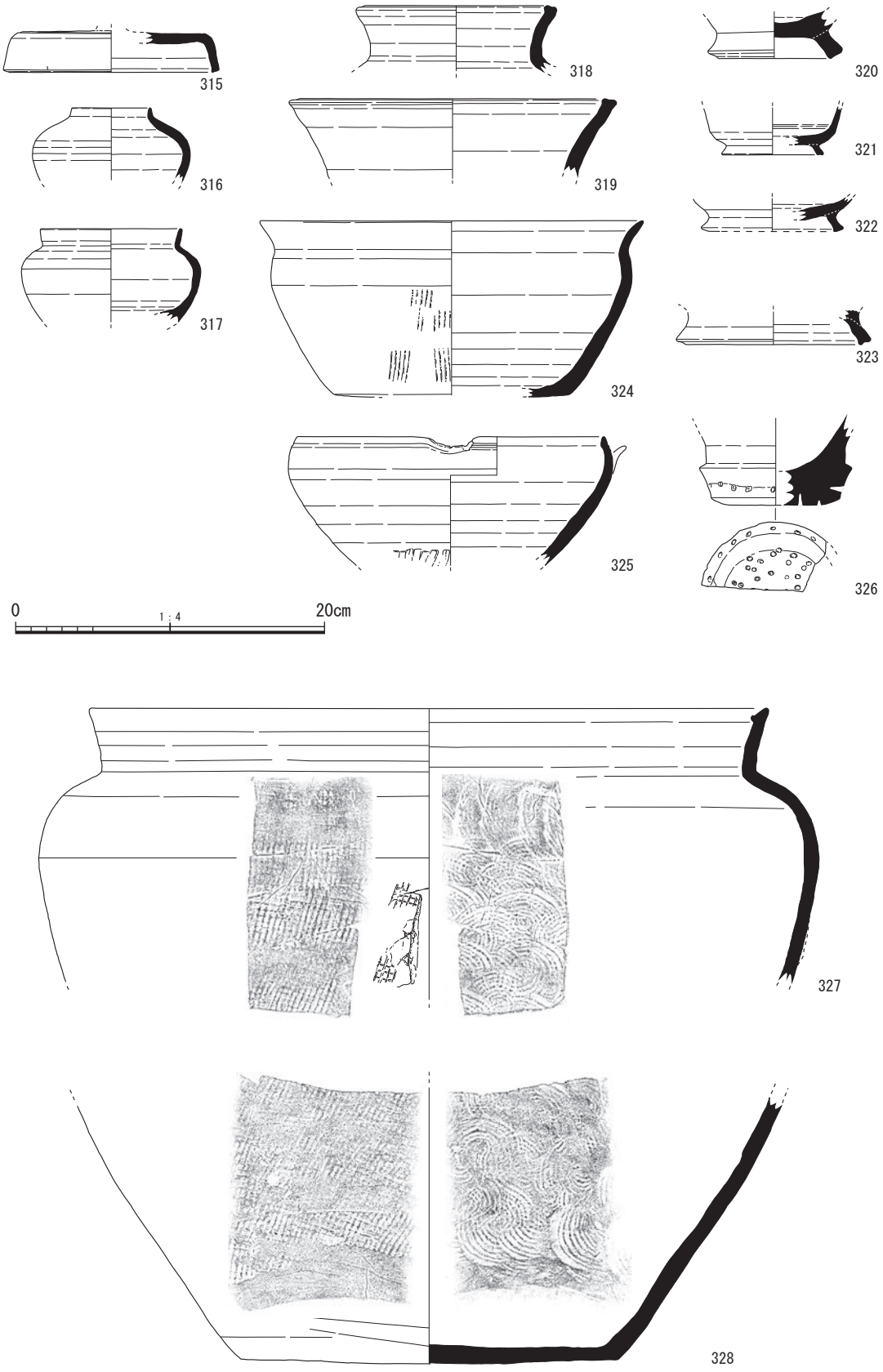
313は須恵器椀の底部である。小片のため詳細が不明であるが、底部は糸切りのちケズリで仕上げる。

314は須恵器杯Ａ底部である。復元ではあるが底部径が7.2cmとやや小さい値を示すため、杯以外の器種である可能性もある。

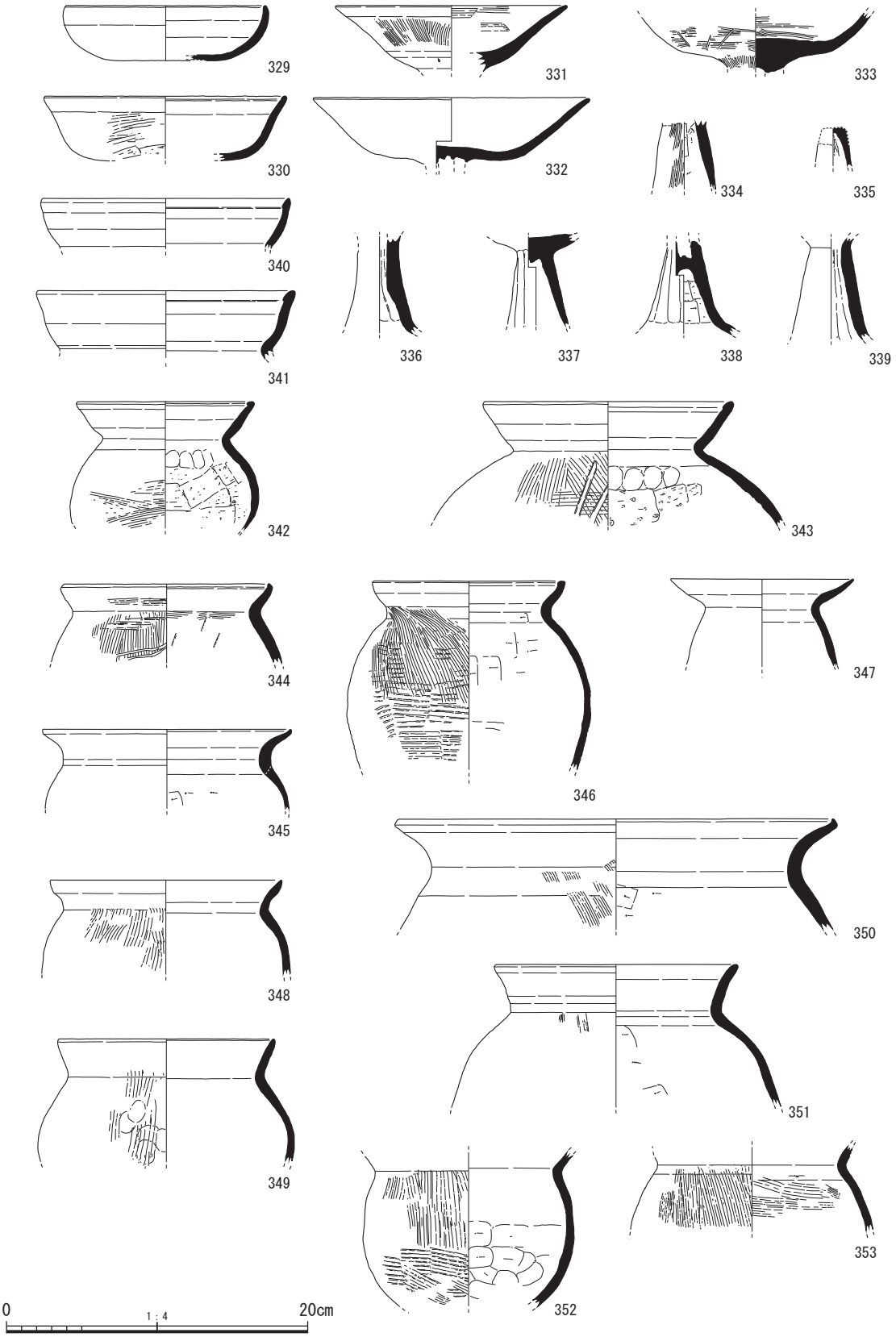
315は須恵器壺Ａ蓋である。口径13.2cmである。頂部はヘラケズリで仕上げ、灰オリーブ色の釉が認められ灰釉陶器の可能性がある。つまみが欠損したと思われる痕跡がみられる。

316・317は須恵器壺Ａである。316は口径5.0cmである。口縁は短く、垂直気味に立ち上がる。317は口径9.0cmである。口縁はやや斜め上方に開く。

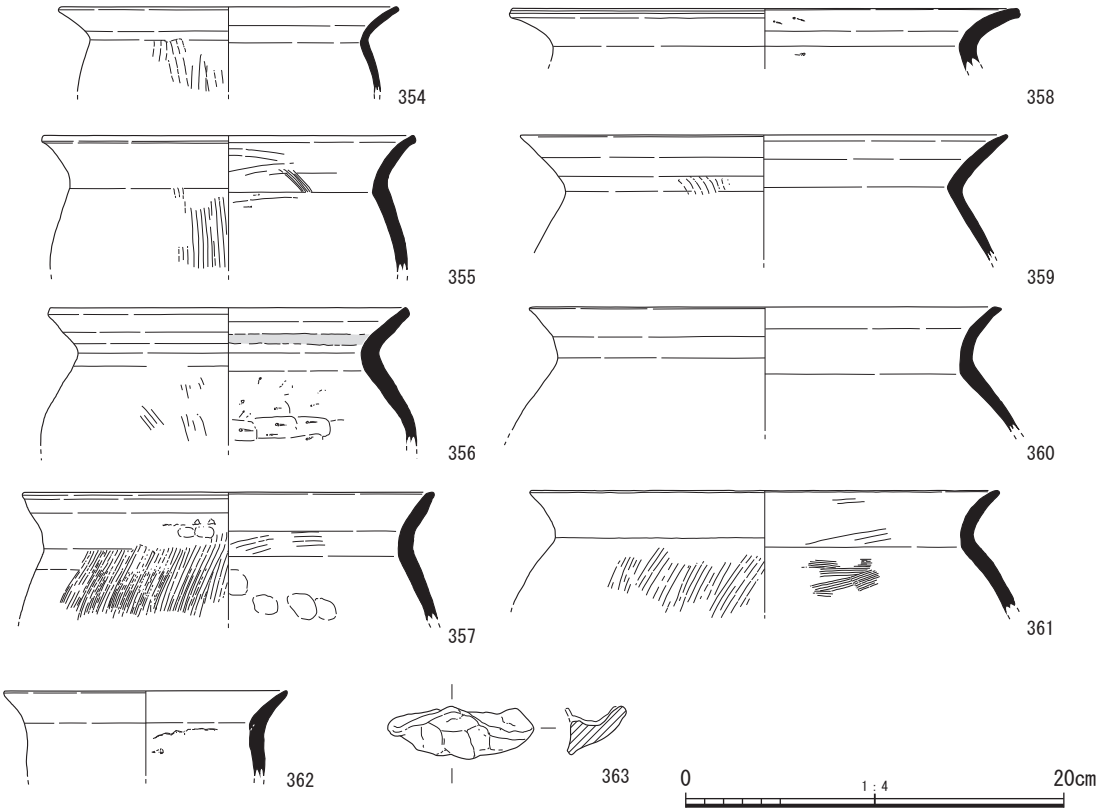
318・319は須恵器壺口縁である。318は肩部以下を欠損し、全体は不明である。口縁端部をや



第58図　K地区包含層出土遺物３（須恵器）



第59図　K地区包含層出土遺物４（土師器）



第60図　K地区包含層出土遺物５（土師器）

や内へつまみだす。319は須恵器壺または甕口縁である。肩部以下は欠損し、全体が不明である。口径は19.7㎝である。ともに口縁端部をやや内へつまみだす。

320～323は須恵器壺底部である。高台の内端面が接地するものや外端面が接地するものがある。320は全体的に肉厚で、四角の高台をつける。321は平坦な底部から緩やかに外反ぎみに立ち上がり、高台が台形を呈している。杯Ｂ身の可能性もある。323はやや高い高台が付く。

324～326は須恵器鉢である。324は須恵器鉢Ｄである。口縁部は外反し、口縁端部を丸くおさめる。外面は、底部から立ち上がり部にかけてタタキを施す。325は須恵器片口鉢である。口縁は内彎ぎみにたちあがる。口縁端部に外側に開く口をもつ。底部にはケズリがみられる。326は須恵器鉢Ｆ底部である。底部には0.5㎝程度の貫通しない孔が多数ある。先端のとがった工具によってあけられている。

327・328は須恵器甕Ｃである。

329・330は土師器杯である。329は口縁端部内側に沈線がみられる。外面にミガキ、ケズリがみられる。

331～339は土師器高杯である。331～333は杯部である。331は外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメがみられる。333は内外面ともにハケメがみられる。331・332に比べて肉厚な印象である。334～339は土師器高杯脚部である。334は外面に縦方向のハケメがみられる。337・338は明瞭なケズリがみられる。

340～362は土師器甕である。340～343の口縁端部は内側へつまみ出し、肥厚させる。頸部には

ナデ調整を施し、「く」の字にする。347の口縁は強く外反させる。350は、口縁端部を上方につまみだし三角形を呈する。354～361の口縁端部は斜め上方に丸くおさめる。355は強いナデにより、端部に段が付く。356は頸部内側に煤が付着する。362は口縁部がほぼ直線的に斜め上方に延びる。体部外面には粗いハケメがみられる。長胴の甕か。

363は土師器鉢または甑の把手である。

４）小結

Ｋ地区では、区画溝１条、柵列３条、多数の柱穴群を検出した。

区画溝ＳＤ01からは奈良時代前半の須恵器、土師器が出土しており、この時期に機能していたものと考えられる。また調査区からは破片数にして10,000点をこえる土師器と2,000点をこえる須恵器が出土しており、これまでの犬飼遺跡の調査と比較すると大量の土器が出土した。詳細については総括の項で触れるが、須恵器については供膳具の数が特に多く、貯蔵具はやや少ない。土師器については図化できなかった資料を含めても、供膳具はあまり多くなく、煮炊具がほとんどを占める。Ｋ地区は削平が著しく、遺跡の全体像が不明瞭である。ただ、遺構密度に比べ、遺物の出土量が多いことは、調査区周辺に奈良時代の遺構が埋没している、または埋没していた可能性を示唆している。（竹村亮仁）

１０．総 括

１）第４・６次調査溝状遺構ＳＤ16について

第４・６次調査ではＦ地区・Ｆ拡張区から幅0.9m、深さ最大1.0mの溝状遺構が、北西から南東方向に40m以上にわたって検出された。この溝状遺構ＳＤ16は、令和元年にＦ地区の北側でほ場整備に伴う調査が行われたＧ地区でも検出されており、確認された総長は100mにおよぶ。溝状遺構ＳＤ16の底面の標高は北西側が低く、南東側のＦ拡張区において溝状遺構ＳＤ200および自然流路ＮＲ206と接続しており、溝状遺構ＳＤ200および自然流路ＮＲ206から取水することを目的に掘削された溝と考えられる。Ｆ地区では溝状遺構ＳＤ16の埋土から土師器が出土しており、これらの土師器は古墳時代前期後葉から中期初頭頃のものである。

大堰川流域における古墳時代の溝の利用について検討した尾崎裕妃の論(注14)によると、亀岡盆地周辺における溝状遺構(注15)は70例を超えるが、その多くは弥生時代後期から古墳時代前期、あるいは古墳時代後期の土器が出土するという。古墳時代中期の須恵器が出土する例もあるが、古墳時代前期の土器が出土する溝状遺構は少なく(注16)、溝状遺構ＳＤ16との比較検討が難しい。また、溝状遺構の性格についても明らかになった例は多くない。しかし、周辺の遺構との関連性や埋土の堆積状況などから性格が推定できる溝状遺構もあるため、時期は異なるが、弥生時代終末から古墳時代前期の土器が出土した溝状遺構および古墳時代中期・後期の土器が出土した溝状遺構のうち、性格が推定される例と溝状遺構ＳＤ16を比較し、性格を検討する。尾崎の検討をもとに、性格が推定された溝状遺構をまとめたのが付表２である。削平の影響度合いによって単純に比較できないが、灌漑水路としての利用が想定される遺構は、自然流路に手を加えて溝状遺構として利用した

付表２　南丹波地域で検出された溝状遺構一覧

遺跡名	次　数	遺構名	幅（m）	深さ（m）	断面形	時　期	性　格	文　献
犬飼遺跡	4	ＳＤ16	0.9	1.0	逆台形	古墳前期後半～中期初頭		本稿
	7	ＳＤ7031			Ｕ字形	古墳時代前期以降		注19
		ＳＤ7084	1.5	1.0		飛鳥時代前半埋没		
		ＳＤ7134	1.2～2.0	0.3	逆台形			
野条遺跡	17	ＳＤ１	2.8～5.5	0.3～0.4	逆台形	弥生後期末～古墳初頭	灌漑区画	注20
		ＳＤ２	0.6	0.4	逆台形	弥生後期末～古墳初頭	灌漑区画	
		ＳＤ５	1.2～1.4	0.3～0.4	逆台形	弥生後期末～古墳初頭		
		ＳＤ６	0.6～0.8	0.2	Ｕ字形	弥生後期末～古墳初頭		
		ＳＤ10	0.4～0.7	0.2～0.3	逆台形	弥生後期末～古墳初頭		
		ＳＤ13	0.4	0.35	逆台形	弥生後期末～古墳初頭		
		ＳＤ14	0.5～0.9	0.1		弥生後期末～古墳初頭		
		ＳＤ15	1.0	0.3		弥生後期末～古墳初頭		
		ＳＤ26	0.5～0.8	0.4		弥生後期末～古墳初頭		
室橋遺跡	17	ＳＤ17202	2.5	1.1	Ｖ字形	古墳前期末～中期初頭	区画	注21
		ＳＤ17207	1.3～1.5	0.85	逆台形	古墳中期後半～後期前半	区画	
		ＳＤ17401	5.0	2.4	逆台形	弥生後期後半～古墳初頭	灌漑水運	
池尻遺跡	12	ＳＤ01	4.0～6.0	1.0～1.3	Ｖ字逆台形	古墳後期～古代	灌漑	注22
八木嶋遺跡	2	ＳＤ01	2.4	0.3～0.5		古墳後期	灌漑	注23
千代川遺跡	3	ＳＤ01	10.0	1.5		古墳時代前期	灌漑区画	注24
		ＳＤ02	3.0	1.2		古墳時代前期	区画	
		ＳＤ03	4.0	1.2		古墳時代前期	区画	
		ＳＤ07	1.5	1.0		古墳時代前期	区画	
北金岐遺跡	１・２	Ｂ－ＳＤ01	6.0～9.0	1.5～2.0		弥生後期～古墳初頭	灌漑排水	注25

場合が多く、規模の大きなものが多い。一方で居住域や建物群の区画として利用された溝状遺構は、規模も様々である。溝状遺構ＳＤ16は規模で比較すると区画溝と近いが、Ｆ拡張区で溝状遺構ＳＤ200および自然流路ＮＲ206と接続することを踏まえると、水路として利用された可能性が高い。しかし溝状遺構ＳＤ16は直線的で、派生する水路はＧ地区を含めても確認できておらず、周辺の水田に水を供給したとは考えにくい。調査地周辺の地形形成過程を検討した辻(注17)によると法貴谷川扇状地とその下流側に広がる平坦な氾濫原は、古墳時代以降には現在の地形と同様に、段丘化が進行しており、弥生時代には水がかりが悪い状況で、犬飼川や曽我谷川から直接分水する

ことが難しい状況にあったという。現在でも調査地周辺の水田は法貴谷川のかなり上流から取水し下流側へ供給している。これを踏まえると、溝状遺構ＳＤ16は現在、埋没流路となっている溝状遺構ＳＤ200および自然流路ＮＲ206から取水し、下流側の水田へ水を供給するための水路として機能したと推定される。近年､曽我部町内の調査では古墳時代前期後半から中期初頭にかけて、自然流路に井堰や護岸を設けて利用した事例が複数検出されている(注18)。古墳時代前期から集落が成立し始める法貴谷川扇状地上では、古墳時代前期後半には集落が発展し、水がかりの悪い土地でも水田耕作ができるように扇状地全体で地域開発を行っていたことを示すものである。当地域では古墳時代前期後半が、集落形成や地域開発の本格化という、一つの画期と捉えられる。

（名村威彦）

２）Ｋ地区出土土器の検討

第６・９次調査では、Ｋ地区から10,000点を超える土師器の破片、2,000点を超える須恵器の破片が出土した。Ｋ地区では後世の削平の影響を受けており、遺跡の性格を示しうる遺構はほとんど残存していなかったが、Ｌ字にのびる区画溝ＳＤ01の南東側で土坑の密度が高く、区画の中に構造物があったことを推定させる。区画溝ＳＤ01から出土した須恵器は８世紀前半と考えられ、またＫ地区包含層から出土した須恵器も一部、古墳時代のものを含むが、ほとんどが７世紀後半から８世紀前半に位置づけられるものである。既往の調査も含めて、当該期の遺物が多量に出土したのはＫ地区が初めてであり、犬飼遺跡の性格を示す上で、出土した土器の組成を検討することが必要である。そこで、出土土器の検討をとおして犬飼遺跡の様相の一端を明らかにしたい。

土器の検討に当たって、まず７～８世紀のＫ地区出土土器の器種構成とその比率を復元してみたい。器種構成については、整理作業において土器片が接合し、実測可能になった個体から復元しており、Ｋ地区では土師器について杯・皿・高杯・甕・甑・鍋が、須恵器について蓋・杯Ａ身・杯Ｂ身・杯Ｇ蓋・杯Ｇ身・椀・甕・壺蓋・壺・鉢がある。

器種組成の比率については、各器種の個体数の復元が求められる。出土遺物から個体数を復元する方法はいくつか挙げられ、器種構成の比率を復元するには、個体識別法と口縁部計測法を用いることが望ましい。しかし、犬飼遺跡Ｋ地区の出土土器は包含層資料のため細片化したものも多く、処理の都合上、口縁部計測法を用いなかった。方法的に不十分なものではあるが、個体識別法と破片数計算法を用い、以下の通り復元した。

まず、整理作業で接合を行い実測可能になった個体と、明確な破片の接点はないものの明らかに同個体であることがわかる土器については、個体識別法により個体数を数えた(付表３･４「個体識別法」)。次に、個体識別法によって計数した個体を除いた残りの土器については、複数の破片が接合した個体は接合した状態で１点として計数し、接合しなかった破片はそのまま１点として計数した(付表３・４「破片計測法Ａ」)。個体識別法においても破片数計算法においても、複数の器種に同定しうる個体・破片および、全く器種同定できない資料があらわれる。全く器種同定ができない資料については分析の対象から外し、複数の器種に同定しうる破片については、個体識別法で識別できた器種の比率で配分すること(注26)とする(付表３・４「個体識別法Ｂ」「破片計測

付表３　土師器の器種と個体数

	杯	皿	高杯	杯・皿・高杯	甕	甑	鍋	甕・甑・鍋
個体識別法	2.0	1.0	12.0	－	22.0	2.0	1.0	－
破片計測法Ａ	－	－	25.0	12.0	－	－	－	13,612.0
破片計測法Ｂ	0.6	0.3	28.6	－	11,978.6	1,089.0	544.5	－
破片個体数換算	0.0	0.0	－	－	194.5	17.7	8.8	－
総個体数	2.0	1.0	37.0	－	216.5	19.7	9.8	－

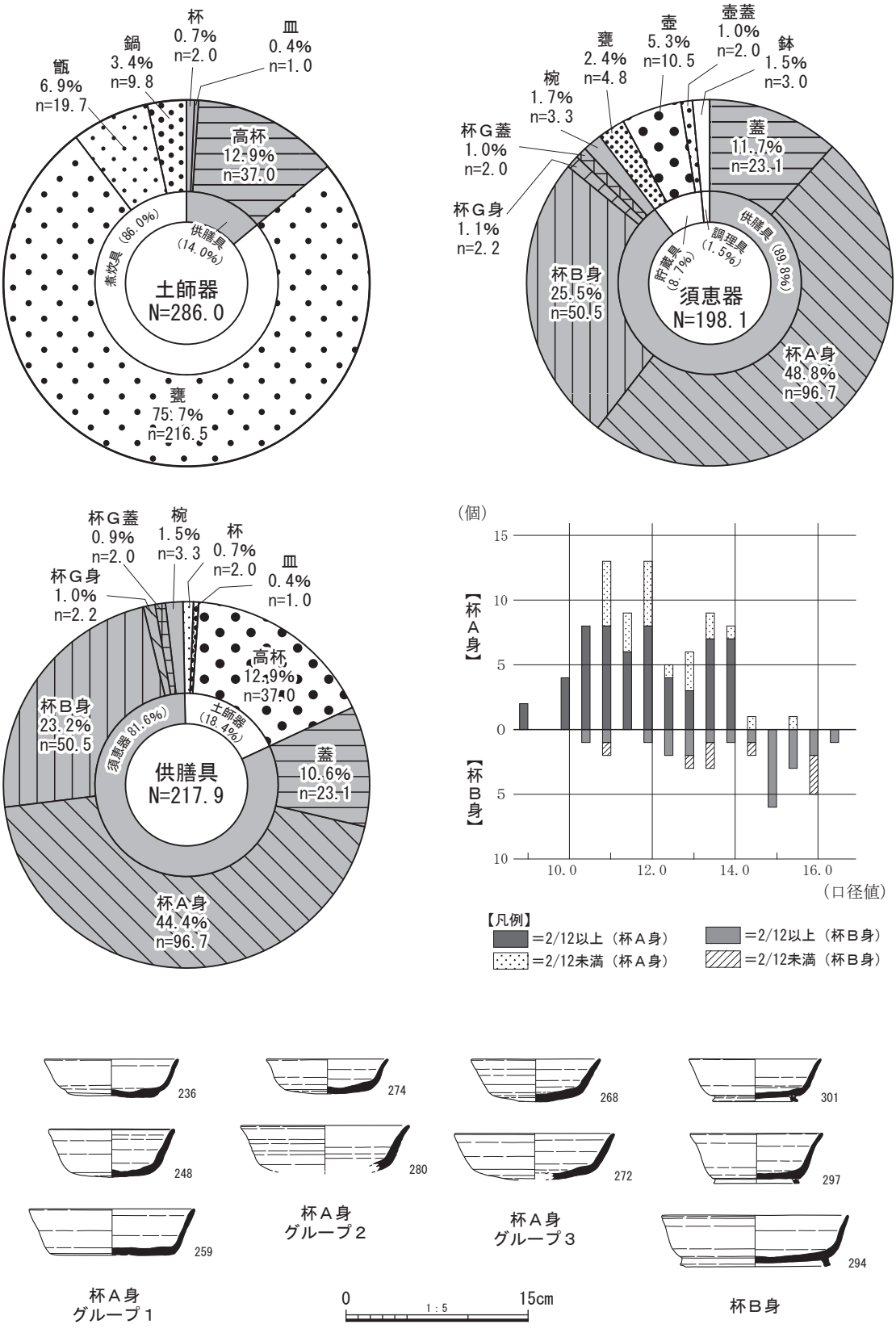
付表４　須恵器の器種と個体数

	蓋	杯Ａ	杯Ｂ	杯Ｇ身	杯Ｇ蓋	椀	杯・椀	甕	壺	甕・壺	壺蓋	鉢	不明
個体識別法Ａ	20.0	82.0	43.0	2.0	2.0	3.0	2.0	4.0	10.0	－	2.0	3.0	－
個体識別法Ｂ	20.0	83.3	43.7	2.0	2.0	3.0	－	4.0	10.0	－	2.0	3.0	－
破片計算法Ａ	146.0	275.0	79.0	－	－	－	766.0	222.0	23.0	68.0	－	－	694.0
破片計算法Ｂ	146.0	758.2	332.4	11.8	－	17.7	－	241.4	71.6	－	－	－	－
破片個体数換算	3.1	14.7	7.5	0.2	－	0.3	－	0.8	0.5	－	－	－	－
総個体数	23.1	96.7	50.5	2.2	2.0	3.3	－	4.8	10.5	－	2	3	－

法Ｂ」)。例えば、杯Ａ身あるいは杯Ｂ身と判断できる破片については、杯Ａ身の破片と杯Ｂ身の個体数についての比率「82：43」で配分している。

さて、破片数計算法の数値から器種組成を求める場合、個体数に換算する係数が必要となる。この係数は、犬飼遺跡Ｋ地区で出土した土器のうち、破片の接合によって完形に復元された個体を複数抽出し、１個体あたりの破片数の平均値とすれば良い。しかし、条件を満たす個体はなかったため、先行研究で例示された、消費遺跡包含層出土資料の係数(注27)を援用した。土師器杯および皿は先行研究における杯Ａの係数89.4を、土師器甕・甑・鍋については、先行研究における土師器鍋の係数61.6を使用した。須恵器については先行研究に従い、須恵器杯Ａ身については51.7片、須恵器杯Ｂ身については44.5片、須恵器甕については298.3片、須恵器壺については144.8片とする。また、蓋については先行研究に例示されていないため、先行研究に示された須恵器杯Ａ身と須恵器杯Ｂ身のデータを合計して係数を求め、46.7片としておく。この係数を用いて、破片数を個体数に換算したの(注28)が付表３・４「破片個体数」である。また、個体識別法の結果と合わせて、犬飼遺跡Ｋ地区出土土器について器種ごとに復元した個体数を示したのが付表３・４「総個体数」である。

ここで、土師器の器種構成とその比率をみてみると、煮炊具の比率が高い(第61図左上)。供膳具の破片資料を同定することが難しく、逆に煮炊具は、小片を含めると出土数がかなり多く、同定も曖昧になる傾向があり、破片計測法から個体数を復元した際に偏りが発生し、較差が出た可能性もある。ただ、個体識別できたものでも供膳具はかなり少なかったことからも、ある程度は本来の比率を反映していると見て良いであろう。供膳具の中では特に高杯が目立つ。一方、須恵器の器種組成をみてみると、供膳具の比率が約９割、貯蔵具が１割未満となっている(第61図右上)。須恵器は土師器に比べ、個体識別が容易であり本来の比率に近いと考えられる。供膳具についてはほとんどが杯Ａおよび杯Ｂが占める。さらに土師器と須恵器の両者について供膳具の比



第61図　土師器と須恵器の器種組成および須恵器杯A・Bの細分

率をみると（第61図左下）、８割以上が須恵器である。

さて、供膳具の７割近くを占める杯Ａ身および杯Ｂ身について口径の大きさについて度数分布を確認した（第61図右下）。検討に際して、実測を行った杯Ａ身79点、杯Ｂ身35点の口径を５㎜ごとに振り分けた。なお、完形の杯身はほとんどなく、ほぼ全て同心円法によって口径を復元している。復元された口径については残存率が2/12（1/6）を下回ると特に信頼性が著しく低下する。この点を考慮し、残存率2/12以上とそれ未満に分けて計数した。また、杯Ｂ身については口径17.0cm以上の個体が４点存在するが、残存率が1/12程度と信頼度に欠けることから外れ値と判断して検討から除外している。

杯Ａ身では13.1～14.0cmの間に分布の山があり、10.1～12.0cmの間にもやや分布の山が認められた。杯Ａ身の口径に関しては、9.6～13.0cmの間に度数分布がややばらついており、この範囲に含まれる個体の中で時期差をもつものがある可能性もあるが、相対的に口径の大きい１群（杯Ａ-Ⅰ）と小さい１群（杯Ａ-Ⅱ）が同時期に存在する。口径の大きな群は平坦な底部から緩やかにやや外反ぎみに立ち上がり、全体的に形態に統一性がある。口径の小さな群は全体的に底部がやや分厚く、杯Ｇ身とも見える、やや杯部の深いものもある。さらに詳しくみると３つのグループに分けられる可能性がある。グループ１は同一型式としながらも、規格性が認められず、口径の違いで形態がやや異なることも特徴といえるだろう。杯Ａ身全体の８割を占める。グループ２は、明確な特徴として、口縁端部の外反が認められるものである。グループ３は底部がやや丸底を呈するものである。底部の調整によって生じる違いの可能性も否定できない。これらの一群は一定数出土していることから、１グループとしてみていいだろう。グループ２・３は口径10.0～14.0cmと幅をもつことも特徴といえる。これらの違いは、製作者の違いや製作域の違いなどを示しているものと考えられる。

杯Ｂ身では、14.6～16.0cmの間に分布の山があり、11.6～14.0cmの間にも山が確認できる。杯Ｂについても杯Ａ身と同様に相対的に口径の大きい１群（杯Ｂ-Ⅰ）と小さい１群（杯Ｂ-Ⅱ）が同時期に存在していると言える。杯Ｂ-Ⅰは口径に対して、器高が4.0cm程度と扁平な印象を受ける。杯Ｂ-Ⅱは杯Ｂ-Ⅰに比べ、やや深い。なお、杯Ａ身では口径12.1～13.0cmの個体は相対的に少なく、杯Ｂ身と対照的である。

最後に、上記の土器様相から犬飼遺跡Ｋ地区の性格について予察を試みたい。まず、器種組成について注目したいことは須恵器杯Ａ、須恵器杯Ｂ、土師器の杯・皿・高杯の存在である。さらに、須恵器の供膳具については法量分化が認められること、須恵器杯Ａ身・杯Ｂ身には相対的に浅い形態と深い形態が存在することも重要な要素である。なお、前述の通り口径残存率の低さから17.0cmをこえる大型の杯Ｂ身については検討対象から除外したが、法量分化した杯Ｂ身の中に極少数、大型のものが混じる可能性がある。

古代宮都における「律令的土器様式」の器種構成について検討した小田裕樹によると、「律令的土器様式」における食膳具は基本器種、付加的器種、補完器種からなるとする[注29]。小田が挙げる基本器種とは土師器の杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａおよび須恵器の杯Ａ・杯Ｂであり、台付・平底形態であ

ることを最大の特徴とする。さらに上位要素として法量分化の複雑性と台付器種・暗文土師器の多さを挙げ、下位要素として基本器種の欠落と補完器種による置換を挙げる。また基本器種とは別に、宮都で多く見られ、周辺遺跡では少量にとどまる器種を付加的器種の中でも上位器種と考え、土師器の高杯Ａ、皿Ｂと須恵器の皿Ｂなどの大型食膳具を挙げる。そして上位器種および基本器種の上位要素は宮都や官衙遺跡に特徴的に見られる器種・要素とする。ただし、上位器種は周辺遺跡でも出土しており、その存在をもって遺跡の性格を即断することはできないとする。

この視点では、犬飼遺跡Ｋ地区出土土器は、「律令的土器様式」と捉えてよく、さらに法量分化の点において基本器種の上位要素を含み、土師器高杯Ａという上位器種も存在することが指摘できる。ただし、暗文のある土師器は少なく、特に土師器の杯と皿が非常に貧弱であること、杯Ａに丸底形態のものがあることから、完全に宮都と同じ「律令的土器様式」とはできない。しかし、「律令的土器様式」を部分的に模倣していることは認めても良いだろう。近年、地方官衙の土器様相については、宮都の土器様相と共通する部分を有しながらも、一部の組成を省く、地域に特徴的な器種を加える、土師器よりも須恵器が優勢であるなどの多様な様相を示すことが明らかになっており(注30)、犬飼遺跡Ｋ地区出土土器もそうした要素の一端を示すものと考えられる。そして、上位機種・上位要素の存在や部分的模倣による「律令的土器様式」の発現は、犬飼遺跡Ｋ地区周辺に官僚制の発達した宮都の生活様式に類する生活形態が存在したことを示唆する。

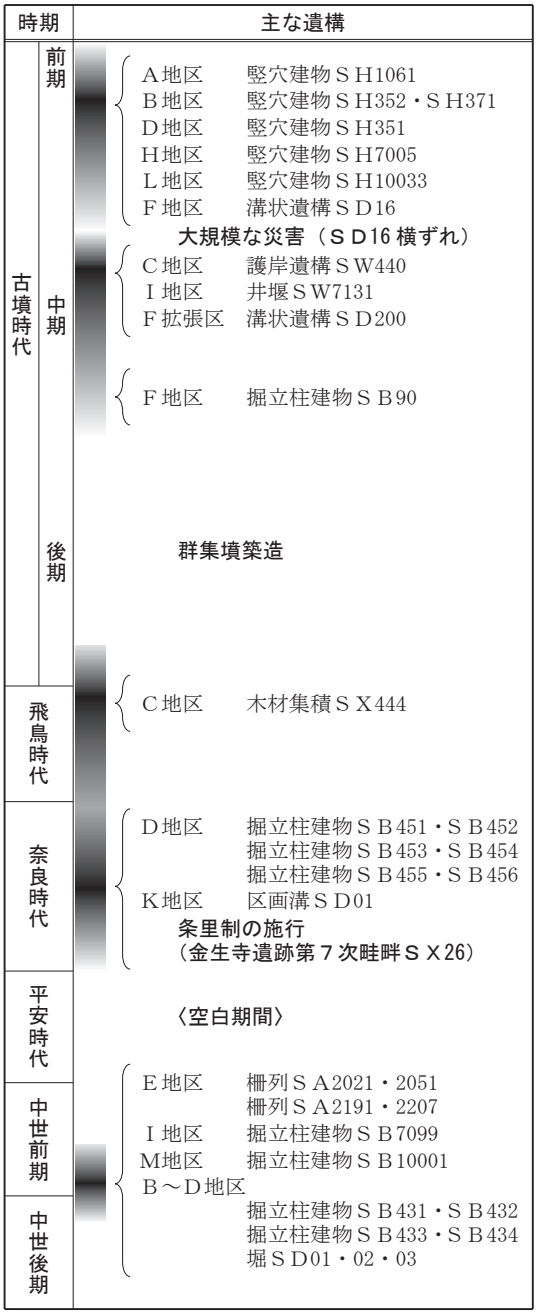
７世紀後半から８世紀という非常に広い時間幅かつ包含層出土の資料を扱っており、誤謬も多いとは思うが、犬飼遺跡Ｋ地区周辺に地方官衙的な性格を持つ施設が存在した可能性を指摘したいのである。この「地方官衙的な性格を持つ施設」が果たした役割については、すでに犬飼遺跡第４次調査の小規模調査の小結でも触れた通り、摂津方面への交通に関わる駅家のような公的施設(末端官衙)があり、地方官人が居住したものと考えたい。　　(竹村亮仁、名村威彦)

３)各時代の犬飼遺跡の様相

今回の調査では古墳時代前期後半から奈良時代までの遺構を検出した。これまでの12次におよぶ調査でＡ～Ｎ地区まで20,000㎡以上が調査され、古墳時代前期後半以降については、地域の歴史を明らかにする遺構が確認されている。最後に、既往の調査も含めて犬飼遺跡の各時代の代表的な遺構を概観し、第４・６・９次調査の成果を位置づけたい。

古墳時代前期後半から中期初頭にかけては、Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｆ・Ｈ・Ｌ地区と広範囲で竪穴建物を検出しており、本書で報告した溝状遺構ＳＤ16も含めて、集落の形成とそれに伴う開発が積極的に行われたと言える。

古墳時代中期初頭から前半にかけては、住居跡は確認できないが、Ｃ・Ｉ地区では木製品を伴う護岸遺構や井堰も検出されており、古墳時代前期後半から中期前半にかけては連続的に居住と開発があったことが想定される。一方で、溝状遺構ＳＤ16埋土が横ずれを起こしており、溝状遺構ＳＤ16埋没後のある段階で大規模な災害が発生している。Ｆ拡張区の溝状遺構ＳＤ200や自然流路ＮＲ206に関しては、埋土の横ずれが確認できないこと、また古墳時代中期末の遺物が出土したＦ地区掘立柱建物ＳＢ90の埋土も横ずれが発生しておらず、災害は溝状遺構ＳＤ200埋没前



第62図　犬飼遺跡の各時代の様相

に発生している。このことから、災害の被害を受けながらも復興し、土地利用を継続させたようである。

ところが、古墳時代後期になると犬飼遺跡では明確な遺構が確認できない。犬飼遺跡の西側には、霊仙ヶ岳の麓に法貴北古墳群や法貴古墳群をはじめとする古墳の密集地帯が存在しているにもかかわらず、こうした古墳群の造営母体となる集落が犬飼遺跡では見当たらない。古墳時代中期まで災害の被害を受けても犬飼遺跡に居住した人々は、古墳時代後期には姿を消しており、その要因は外在的であることが予想される。

古墳時代後期の空白期間を経て、次に遺構が確認されるのは飛鳥時代である。Ｃ地区ではこの時期の木材集積遺構が確認されており、明確な遺構はないもののＣ地区やＫ地区の包含層から当該時期の土器が出土しており、集落の存在が推定できる。奈良時代になるとＤ地区で小規模ながら掘立柱建物群が確認でき、Ｋ地区では大量の土器とともに区画溝を検出した。前項で詳しく述べたが、交通の要衝にかかわる末端官衙が存在した可能性がある。また犬飼遺跡に隣接する金生寺遺跡では第７次調査で正方位に沿う奈良時代の畦畔が確認され、この時期に条里制が施行された可能性が指摘される(注31)。

平安時代になると再び空白期間が訪れる。亀岡盆地周辺の集落遺跡は、９世紀になると一部の集落を除いて、廃絶することが指摘されており(注32)、基本的には犬飼遺跡も他の集落と同様に利用されなくなったようである。ただし、Ｋ地区では包含層資料ではあるものの底部糸切による須恵器食膳具の底部や緑釉陶器が出土しており、集落域を変えて利用された可能性は十分考えられる。

中世前期後半(13世紀前半から14世紀初頭)には再び建物が確認できる。詳細は既往の報告(注33)で述べられており、ここでは詳しく触れないが、13世紀前半には開発が進み、こうした開発を主導していった在地領主と関連して、Ｂ～Ｄ地区で確認された大規模な堀を備える方形居館が現れるのである。

以上、犬飼遺跡の各時代における様相を概観した結果、いくつかの画期が指摘できる。集落と

して土地利用が始まった古墳時代前期後半、何らかの外的要因によって集落が姿を消す古墳時代後期初頭、公的な施設の設置が予想される奈良時代前半、その機能が失われる平安時代初頭、そしてふたたび開発の始まる中世前期後半(13世紀)である。こうした犬飼遺跡の画期が、古墳を含む曽我部町内の遺跡の動向、あるいは亀岡盆地周辺の集落遺跡の動向や、宮都の変化や政治体制の変遷などの広範囲におよぶ歴史的変動と連動するか否か、今後の検討が望まれる。(名村威彦)

注１　京都府2023『令和４年度　公共事業評価調書【再評価(平成24年事前評価)】 一般国道423号(法貴バイパス)事業整備事業』

注２　遺跡周辺の地理的環境については、以下の文献を参考にした。
井上穎纘1995「第１章 亀岡の自然環境」『新修亀岡市史』本文編第１巻 新修亀岡市史編纂委員会
井上穎纘1996「付図 亀岡市の地形分類図」『新修亀岡市史』資料編第４巻 新修亀岡市史編纂委員会
桐井理揮・辻 康男・森 将志2022「地理的環境」『京都府遺跡調査報告集』第185冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注３　遺跡周辺の歴史的環境については、個別の報告書のほか以下の文献を参考にした。
桐井理揮2022「歴史的環境」『京都府遺跡調査報告集』第185冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
亀岡市史編纂委員会1965『亀岡市史』亀岡市
亀岡市史編さん委員会1995『新修亀岡市史』本文編第１巻　亀岡市
亀岡市史編さん委員会2000『新修亀岡市史』資料編第４巻　亀岡市

注４　中澤　勝2012『市内遺跡発掘調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第82集　亀岡市教育委員会

注５　浅田洋輔2021「丹波国における墨書土器の集成とその傾向」『京都府埋蔵文化財論集』第８集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注６　桐井理揮ほか2022「犬飼遺跡第２・３次」『京都府遺跡調査報告集』第185冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注７　桐井理揮ほか2023「犬飼遺跡第７・10次」『京都府遺跡調査報告集』第190冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注８　荒木瀬奈ほか2023「金生寺遺跡第３～５次」『京都府遺跡調査報告集』第191冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注９　桐井理揮2021「金生寺遺跡第５・７次」『京都府埋蔵文化財情報』第139号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注10　田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

注11　中村 浩編1980『陶邑』Ⅲ　大阪府文化財調査報告書第30輯 (財)大阪文化財センター

注12　水谷寿克ほか1989「篠窯跡群Ⅱ」『京都府遺跡調査報告書』第11冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注13　高橋照彦1995「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集 国立歴史民俗博物館

注14　尾崎裕妃2021「古墳時代の大堰川流域における溝の利用」『京都府埋蔵文化財論集』第８集(公財)

京都府埋蔵文化財調査研究センター

注15　古墳周溝および竪穴建物の周壁溝を除く。

注16　これは亀岡盆地周辺の古墳時代前期の土器の様相が明瞭ではなく、出土遺物の帰属時期の判断が難しいことに起因する可能性がある。

注17　辻　康男2022「調査地周辺の地形形成過程と微地形」『京都府遺跡調査報告集』第185冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注18　桐井理揮ほか2022「犬飼遺跡第２・３次」『京都府遺跡調査報告集』第185冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、桐井理揮ほか2023「犬飼遺跡第７･10次」『京都府遺跡調査報告集』第190冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注19　桐井理揮ほか2023「犬飼遺跡第７・10次」『京都府遺跡調査報告集』第190冊　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注20　高野陽子・古川 匠・大髙義寛2012「野条遺跡第17・19次」『京都府遺跡調査報告集』第150冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注21　辻本和美･高野陽子2010「室橋遺跡第15･17次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第139冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注22　岡﨑研一2007「池尻遺跡第12次」『京都府遺跡調査概報』第123冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注23　奥村清一郎・柴　暁彦・原田三壽1994「八木嶋遺跡」『京都府遺跡調査概報』第56冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注24　岡﨑研一・水谷寿克1984「千代川遺跡第３次」『京都府遺跡調査概報』第12冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注25　石井清司・田代 弘1984「北金岐Ｂ・Ｃ・Ｄ地点の調査」『京都府遺跡調査概報』第12冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注26　小数点以下四捨五入

注27　宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　国立歴史民俗博物館

注28　小数点第２位以下四捨五入

注29　小田裕樹2016「古代宮都とその周辺の土器様相－「律令的土器様式」の再検討－」『官衙･集落と土器』２　奈良文化財研究所

注30　奈良文化財研究所編2015『官衙・集落と土器』１　奈良文化財研究所
奈良文化財研究所編2016『官衙・集落と土器』２　奈良文化財研究所

注31　桐井理揮2021「金生寺遺跡第５・７次」『京都府埋蔵文化財情報』第139号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注32　桐井理揮・名村威彦2021「京都府における集落の構造と変遷－丹波国桑田郡内におけるケーススタディ－」『古代集落の構造と変遷』１　奈良文化財研究所

注33　桐井理揮ほか2022「犬飼遺跡第２・３次」『京都府遺跡調査報告集』第185冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、桐井理揮ほか2023「犬飼遺跡第７・10次」『京都府遺跡調査報告集』第190冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

付表５　土器観察表

（　）：復元値　[]：現存値　－：測定不可

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
1	須恵器	甕	第４次３トレンチ	包含層	15.2	15.8	－	7/12	灰（N6/0）	密	
2	須恵器	杯身	第４次３トレンチ	包含層	12.4	[2.7]	－	1/12	灰（7.5Y6/1）	密	墨書
12	須恵器	杯H蓋	F	ＳＢ90（ＳＰ77）	14.2	[4.0]	－	1/12以下	灰（N5/0）	密	
13	須恵器	高杯	F	ＳＢ90（ＳＰ77）	－	[5.0]	8.2	2/12	灰赤（2.5YR4/2） 灰（N5/0）	密	
14	土師器	甕	F	ＳＢ90（ＳＰ78）	－	[3.7]	－	1/12以下	橙（7.5YR7/6）	やや粗（2.0㎜以下の白色砂粒）	
15	土師器	壺か甕	F	ＳＢ90（ＳＰ91）	－	[4.1]	－	－	内面：黄灰（2.5Y4/1） 外面：にぶい黄褐（10YR5/3）	やや粗（2.0㎜以下の白色砂粒）	
16	土師器	小型丸底壺	F	ＳＤ16	11.6	7.0	－	1/12以下	にぶい橙（7.5YR6/4）	密(1.0㎜以下の白色砂粒)	
17	土師器	小形丸底壺	F	ＳＤ16	－	[5.2]	－	4/12	橙（5YR6/8）	密(0.5㎜以下の白色砂粒)	
18	土師器	小形丸底壺	－	ＳＤ16	9.3	8.6	－	11/12	橙（2.5YR7/8）	やや蜜(1.0㎜の透明砂粒、1.5㎜以下の白色･半透明･暗灰色砂粒)	
19	土師器	小型丸底壺	F	ＳＤ16	7.6	7.8	－	8/12	にぶい橙（7.5YR6/4）	やや粗（2.5㎜以下の白色砂粒）	
20	土師器	小形丸底壺	F	ＳＤ16	－	[3.3]	－	－	内面：にぶい橙（7.5YR7/3） 外面：にぶい橙（7.5YR7/4）	やや粗（1.0㎜以下の白色砂粒、1.0㎜以上の黒色砂粒、0.5～3.0㎜の赤茶色砂粒）	
21	土師器	壺	F	ＳＤ16	12.8	12.9	－	ほぼ完形	内面：橙（5YR6/6） 外面：にぶい橙色（7.5YR7/4）	粗（1.5㎜以下・2.0㎜の白色・透明砂粒、2.0㎜以下の赤茶色砂粒）	
22	土師器	壺	F	ＳＤ16	9.8	[9.4]	－	5/12	橙（5YR6/6）	密（2.0㎜以下の白色・灰色・赤色砂粒）	
23	土師器	壺	F	ＳＤ16	10.5	[3.3]	－	2/12	内面：橙（5YR6/6） 外面：にぶい褐（7.5YR6/3）	やや蜜(1.0㎜以下の白色･灰色砂粒)	
24	土師器	壺	F	ＳＤ16	14.0	[5.1]	－	1/12	にぶい黄橙（10YR6/4）	密（1.5㎜以下の白色・赤色砂粒）	
25	土師器	甕	F	ＳＤ16	13.7	[1.9]	－	1/12弱	橙（7.5YR7/6）	密	
26	土師器	甕	F	ＳＤ16	13.6	[2.3]	－	1/12強	黒褐（7.5YR3/1）	粗（4.0㎜以下の褐色・白色砂粒）	
27	土師器	甕	F	ＳＤ16	14.0	[4.5]	－	1/12以下	内面：にぶい黄褐（10YR5/4） 外面：黒（2.5Y2/1）	やや粗（1.5㎜以下の白色砂粒）	
28	土師器	甕	F	ＳＤ16	16.0	[3.1]	－	1/12以下	橙（7.5YR6/6）	やや粗（2.0㎜以下の白色砂粒）	
29	土師器	甕	F	ＳＤ16	15.4	[8.4]	－	4/12	明赤褐（5YR5/6）	やや粗（3.5㎜以下の白色砂粒）	
30	土師器	甕	F	ＳＤ16	14.5	[13.5]	－	10/12	浅黄（2.5Y7/4） 黒褐（2.5Y3/1）	やや粗（2.0㎜以下の白色砂粒）	
31	土師器	甕	F	ＳＤ16	15.8	[13.9]	－	3/12以上	にぶい褐色（7.5YR6/3）	粗（1.0㎜以下・2.0㎜の白色・半透明砂粒、1.0㎜以下の赤茶色・透明砂粒）	
32	土師器	甕	F	ＳＤ16	14.0	[5.5]	－	2/12	にぶい橙（7.5YR7/4）	やや粗(2.0㎜以下の白色･茶色砂粒)	
33	土師器	甕	F	ＳＤ16	14.0	[7.2]	－	2/12弱	にぶい黄橙（10YR7/2）	粗（2.0㎜以下の白色・半透明砂粒）	
34	土師器	甕	F	ＳＤ16	13.0	[12.2]	－	頸部：3/12弱 口縁部：1/12以下	内面：にぶい黄橙（10YR6/4） 外面:にぶい橙（7.5YR6/4）	やや粗(1.0㎜以下の白色･半透明・赤茶色砂粒)	
35	土師器	甕	F	ＳＤ16	－	[11.3]	－	1/12以下	内面：褐灰（7.5YR4/1） 外面：にぶい橙（5YR6/4）	粗（5.0㎜以下の白色・茶色・褐色砂粒）	
36	土師器	甕	F	ＳＤ16	－	[18.6]	－	－	にぶい黄橙（10YR7/3）	やや粗（2.0㎜以下の白色砂粒、3.0㎜以下の半透明砂粒、5.0～6.0㎜の半透明砂粒）	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
37	土師器	甕	F	ＳＤ16	17.9	[9.4]	－	3/12弱	灰褐（7.5YR4/2）	粗(2.0㎜以下の白色砂粒、雲母)	
38	土師器	高杯	F	ＳＤ16	17.1	14.1	13.1	10/12	褐灰（10YR6/1）	やや粗（3.0㎜以下の白色砂粒）	
39	土師器	高杯	F	ＳＤ16	13.9	12.7	10.5	口縁部：3/12弱 脚部：ほぼ完形	にぶい橙（7.5YR7/4）	粗（1.0㎜以下の黒色砂粒､2.0㎜以下の白色砂粒、3.0㎜以下の赤茶色砂粒）	
40	土師器	高杯	F	ＳＤ16	13.6	[4.2]	－	2/12	橙（7.5YR7/6）	密(2.0㎜以下の赤色砂粒)	
41	土師器	高杯	F	ＳＤ16	－	[5.8]	12.0	9/12	橙（5YR6/6）	やや粗(1.5㎜以下の白色・赤色砂粒)	
42	土師器	高杯	F	ＳＤ16	－	[7.5]	12.0	10/12	にぶい橙（7.5Y7/4）	密（2.0㎜の白色・赤色砂粒）	
43	土師器	小型鉢	F	ＳＤ16	10.0	4.8	－	6/12	にぶい黄（2.5Y6/3）	密（1.0㎜以下の赤色・白色砂粒）	
44	土師器	小型鉢	F	－	9.6	5.0	－	完形	にぶい黄橙（10YR6/4）	密（2.5㎜以下の白色・赤色砂粒）	
45	土師器	把手	F	ＳＤ16	長[6.5]	幅[2.8]	厚[2.6]	－	灰黄（2.5Y7/2）	密(2.5㎜以下の白色砂粒)	
49	土師器	鉢	F	ＳＰ141	11.8	6.4	－	4/12	橙（2.5YR6/8）	やや粗(1.0㎜以下の白色・半透明・赤茶色砂粒)	
51	土師器	甕	F	包含層	14.2	[10.6]	－	6/12弱	橙（5YR6/8）	粗（2.5㎜以下の長石、石英）	
53	土師器	高杯	F	包含層	－	[3.0]	14.6	3/12	橙（5YR7/6）	やや粗(1.5㎜以下の赤色・白色砂粒)	
54	須恵器	杯	F	包含層	－	[3.5]	－	2/12弱	灰白（N7/0）	密	
55	須恵器	杯H身	F	包含層	－	[2.4]	－	－	明青灰（5PB7/1）	密（1.0㎜以下の黒色・白色砂粒）	
56	須恵器	杯B身	F	包含層	－	[1.6]	9.6	2/12弱	灰（N7/0）	密	
57	須恵器	杯B身	F	包含層	－	[1.2]	17.8	2/12弱	灰白（5Y8/1）	密	
58	須恵器	高杯	F	包含層	－	[5.4]	9.9	3/12弱	内面：明青灰（5PB7/1） 外面:オリーブ黒（10Y3/1）	密	
59	須恵器	高杯	F	包含層	－	[4.4]	9.9	2/12弱	灰白（N8/0）	密	
60	須恵器	高杯	F	包含層	7.8	[2.2]	－	3/12	明青灰（5PB7/1）	密	
61	須恵器	平瓶	F	包含層	－	[4.2]	5.0	2/12	灰白（N8/0）	密	
62	弥生土器	甕	F拡張	ＳＤ200(t9)	15.9	[3.7]	－	1/12	にぶい黄橙（10YR6/3）	粗（0.5～1.0㎜の白色・灰色・黒灰色砂粒）	
63	土師器	杯	F拡張	ＳＤ200（集中部６）	10.8	4.7	－	2/12	内面：浅黄橙（7.5YR8/3） 外面:にぶい橙（7.5YR7/4）	やや粗（1.0㎜以下の赤茶色・黒色砂粒、2.0㎜以下の白色・灰色砂粒）	
64	土師器	杯	F拡張	ＳＤ200（集中部６）	11.7	4.5	－	8/12	橙（5YR6/6）	粗（0.5～2.0㎜の白色・白灰色・灰色砂粒）	
65	土師器	杯	F拡張	ＳＤ200（集中部２）	11.1	4.3	－	2/12	にぶい橙（5YR7/4）	やや密（0.5～1.0㎜の白色・灰色・赤色砂粒）	
66	土師器	杯	F拡張	ＳＤ200	12.0	[3.9]	－	3/12弱	橙（5YR6/6）	やや粗（1.0㎜以下・2.0～6.0㎜の白色・半透明・透明砂粒）	
67	土師器	高杯	F拡張	ＳＤ200（集中部７）	12.9	10.9	9.9	口縁部：3/12 底部：6/12強	橙（5YR6/6）	粗（0.5～2.0㎜の白色・白灰色・灰色・茶色砂粒）	
68	土師器	高杯	F拡張	ＳＤ200(a9)	13.1	[3.7]	－	2/12	にぶい黄橙（10YR6/3）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
69	土師器	高杯	F拡張	ＳＤ200	－	[3.6]	－	－	内面：灰褐（7.5YR5/2） 外面：にぶい橙（7.5YR7/4）	やや粗(1.0㎜以下の白色・半透明・透明砂粒、2.0㎜以下の茶色砂粒、2.0～3.0㎜の白色砂粒)	
70	土師器	高杯	F拡張	ＳＤ200	－	[2.8]	－	－	浅黄橙（7.5YR8/3）	やや粗(1.0㎜以下の雲母、1.5㎜以下の白色・赤茶色砂粒、2.0㎜以下の半透明砂粒)	
71	土師器	小型壺	F拡張	ＳＤ200(t9)	8.9	[5.7]	－	2/12	にぶい橙（7.5YR7/3）	密（0.5㎜の白色・灰色砂粒）	
72	土師器	小型壺	F拡張	ＳＤ200(t9)	－	[5.0]	－	－	橙（5YR6/6）	やや密（0.5～1.0㎜の白色・黒灰色・茶色砂粒）	
73	土師器	壺	F拡張	ＳＤ200（集中部８）	－	[10.4]	－	頸部：3/12弱	にぶい橙（7.5YR7/4）	やや密（0.5～2.0㎜の白色・白灰色・透明色・赤色砂粒）	
74	土師器	甕	F拡張	ＳＤ200（集中部７）	15.8	[17.4]	－	8/12強	外面：浅黄橙（7.5YR8/3） 内面：灰白（10YR8/1）	粗（1.0～3.0㎜の白色・半透明・灰色砂粒、1.0～2.0㎜の赤茶色砂粒）	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
75	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部６）	15.4	[15.4]	－	1/12 以下	灰黄褐（10YR6/2）	やや粗(0.5㎜の白色砂粒)	
76	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部６）	11.6	14.5	－	4/12	内面:にぶい褐（7.5YR5/3） 外面：にぶい赤褐（2.5YR5/4）	粗（0.5 ～ 1.0㎜の白色・灰色砂粒）	
77	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部７）	10.1	[8.0]	－	11/12 以上	内面：浅黄橙（10YR8/3） 外面:にぶい橙（7.5YR7/3）	粗（1.0㎜以下の透明砂粒、1.5㎜以下の白色砂粒、2.0㎜以下の半透明砂粒、4.0 ～ 5.0㎜の灰色・茶色砂粒）	
78	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	13.3	[4.8]	－	3/12 弱	にぶい黄橙（10YR7/3）	粗（0.5 ～ 2.0㎜の灰色・茶色・白色砂粒）	
79	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a10）	12.8	[4.7]	－	3/12 弱	内面：灰褐（7.5YR5/2） 外面:にぶい褐（7.5YR6/3）	密（0.5㎜以下の透明・黒色砂粒、1.0㎜以下の白色砂粒）	
80	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部 14）	12.6	[9.5]	－	口縁部：完形	内面:明褐灰（7.5YR7/ ２） 外面:にぶい褐（7.5YR6/3）	粗（1.0㎜以下の透明・黒色・赤茶色砂粒、1.0㎜以下・2.0 ～ 4.0㎜の白色・半透明砂粒）	
81	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部４）	17.0	[5.4]	－	3/12 弱	橙（5YR6/6）	やや粗(0.5㎜の白色砂粒)	
82	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a10）	16.9	[6.4}	－	3/12 弱	にぶい黄橙（10YR6/3）	やや粗（1.0㎜以下の白色・半透明・透明砂粒、2.0㎜の半透明砂粒、5.0 ～ 6.0㎜の赤色砂粒）	
83	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部５）	16.7	[10.2]	－	5/12 弱	灰褐（7.5YR4/2） 口縁内面：にぶい橙（5YR6/4）	やや粗(1.0㎜以下の透明・半透明砂粒、1.5㎜以下の白色砂粒)	
84	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部 12）	16.9	[15.6]	－	2/12	内面:にぶい橙（7.5YR6/4） 外面：橙（7.5YR6/6）	粗（0.5 ～ 2.0㎜の白色・透明色・灰色・白灰色砂粒）	
85	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a10）	17.8	[6.1]	－	3/12 強	橙（5YR7/6）	やや粗（1.0㎜以下・2.0㎜の赤茶色砂粒、1.5㎜以下の白色・半透明砂粒、4.0㎜の白色砂粒）	
86	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部６）	18.3	[7.5]	－	1/12	内面：浅黄橙（10YR8/3） 外面：灰白（7.5YR8/2）	粗（1.0㎜以下・1.5 ～ 2.0㎜の白色・半透明・赤茶色砂粒）	
87	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部 13）	24.6	[17.7]	－	7/12	にぶい橙（7.5YR6/4）	粗（4.0㎜以下の長石、石英、褐色砂粒）	
88	須恵器	杯Ｈ蓋	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部５）	12.6	4.8	－	10/12	内面：橙（7.5YR6/6） 外面：黄灰（2.5Y6/1）	密	
89	須恵器	杯Ｈ蓋	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部１）	13.2	4.1	－	10/12	灰（N5/0）	密	
90	須恵器	杯Ｈ蓋	Ｆ拡張	ＳＤ 200（s9）	11.8	3.9	－	1/12	灰白（N7/0）	密	
91	須恵器	杯Ｈ蓋	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	14.0	4.5	－	2/12	灰（N4/0）	密	
92	須恵器	杯Ｈ蓋	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	15.8	[4.8]	－	3/12	暗灰（N3/0）	密	
93	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部 12）	11.7	4.7	－	10/12	内面：灰褐（5YR5/2） 外面：灰（N4/0）	密	
94	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部 12）	10.6	[4.1]	－	2/12	灰（N5/0）	密	
95	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	10.1	[4.3]	－	2/12	内面：灰（N6/0） 外面：灰（5Y5/1）	やや密(0.5㎜以下の白色・黒色砂粒、1.0 ～ 5.0㎜の白色砂粒)	
96	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	10.8	5.3	－	5/12	内面：褐灰（7.5YR4/1） 外面：灰（N5/0）	密	
97	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	11.0	[4.0]	－	3/12 弱	灰（N5/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
98	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	10.9	[3.8]	－	2/12 弱	灰白（N7/0）	やや粗(1.0㎜以下の灰色・黒色砂粒、1.5㎜以下の白色砂粒)	
99	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	11.5	2.9	－	3/12	内面：灰白（2.5Y7/1） 外面：灰（N6/0）	やや密（1.0㎜以下の大の白色・黒色砂粒）	
100	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a11）	13.0	4.6	－	3/12	灰（N5/0）	密	
101	須恵器	杯Ｂ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（a10）	－	[3.8]	11.1	4/12 弱	灰白（N7/0）	密(0.5㎜以下の灰色砂粒、1.0㎜以下の白色砂粒)	
102	須恵器	杯Ｂ身	Ｆ拡張	ＳＤ 200（s9）	－	[2.8]	8.4	2/12 強	灰白（N7/0）	密（極細粒の白色砂粒）	
103	須恵器	取っ手付碗	Ｆ拡張	ＳＤ 200（集中部 12）	8.4	[6.1]	－	2/12	灰（N5/0）	密	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
104	須恵器	壺蓋	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (a9)	9.3	5.2	－	3/12	灰（N4/0）	密	
105	須恵器	壺	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (s10)	－	[5.1]	－	3/12 弱	内面：灰白（Y7/0） 外面：褐灰（10YR6/1）	やや密(1.0㎜以下の白色・黒色砂粒、2.0～3.0㎜の白色砂粒)	
106	須恵器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (集中部 11)	－	[17.8]	－	6/12	内面：青灰（5PB6/1） 外面：青灰（5PB5/1）	密(0.5㎜以下の黒色砂粒、1.0～1.5㎜の白色砂粒)	
107	須恵器	高杯	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (a11)	15.2	[5.4]	－	1/12	灰（N6/0）	密(1.0㎜以下の白色砂粒)	
108	須恵器	高杯	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (集中部４)	－	[5.0]	9.8	2/12 強	灰白（10YR7/1）	密(1.0㎜以下の白色砂粒)	
109	須恵器	高杯	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (集中部 11)	－	[5.2]	7.5	3/12 弱	青灰（5PB6/1～5/1）	密（1.0㎜以下の白色・半透明砂粒）	方形三方透孔
110	陶磁器	椀	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (s9)	15.4	[3.4]	－	1/12	素地：白（N9/0） 釉：灰黄（2.5Y7/2）	密	白磁
111	陶磁器	椀	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (a9)	－	[2.9]	7.6	4/12	素地：白（N9/0） 釉：灰黄（2.5Y8/1）	密（0.5㎜以下の白色・黒色砂粒）	白磁
112	土師器	製塩土器	Ｆ拡張	ＳＤ 200 (a11)	3.2	[4.5]	－	口縁部：完形	灰白（10YR7/1）	密（0.5㎜の白色･黒灰色･茶色砂粒）	
117	須恵器	杯蓋	Ｆ拡張	ＳＤ 205	11.9	[2.4]	－	1/12 強	明青灰（5PB7/1）	密	
118	須恵器	杯Ｈ身	Ｆ拡張	ＳＤ 205	15.4	[3.6]	－	1/12 以下	灰白（N7/0）	やや粗(1.0㎜以下の白色・黒色砂粒)	
119	須恵器	蓋	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (a9)	15.7	[1.3]	－	1/12 強	灰白（N7/0）	密	
120	須恵器	杯Ｂ身	Ｆ拡張	ＳＤ 205	－	[1.2]	10.7	1/12 強	灰白（N7/0）	密（1.0㎜以下の白色・赤色砂粒）	
121	須恵器	－	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (a9)	－	[2.2]	11.3	1/12	灰白（N7/0）	密	
122	土師器	－	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (a9)	17.5	[3.6]	－	2/12 弱	灰黄褐（10YR4/2）	粗（1.5㎜以下の白色・黒色・褐色砂粒、石英）	
123	土師器	甕	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (a9)	－	[4.8]	－	－	にぶい赤褐（5YR5/4）	やや粗(2.0㎜以下の長石、赤色砂粒)	
124	瓦器	椀	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (t9)	11.8	[3.2]	－	2/12 弱	灰（N4/0）	密	
125	瓦器	椀	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (a9)	13.8	[3.0]	－	1/12	暗灰（N3/0）	密	
126	瓦器	椀	Ｆ拡張	ＳＤ 205	13.6	[2.6]	－	1/12	黒（N2/0）	密	
127	瓦器	椀	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (a9)	15.7	[3.9]	－	2/12 弱	暗灰（N3/0）	密	
128	瓦器	椀	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (a9)	－	[0.7]	6.2	3/12 弱	暗灰（N3/0）	密	
129	瓦器	椀	Ｆ拡張	ＳＤ 205 (a9)	－	[1.2]	5.4	7/12 弱	暗灰（N3/0）	密	
130	須恵器	杯Ｈ蓋	Ｆ拡張	ＳＸ 204	－	[3.1]	－	－	灰白（N7/0）	密	
131	須恵器	蓋	Ｆ拡張	ＳＸ 204	19.4	[1.5]	－	1/12 以下	灰（N7/0）	密(0.5㎜以下の白色砂粒)	
143	土師器	高杯	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a10・b10)	－	[7.2]	－	－	にぶい黄橙（10YR7/3）	やや粗（0.5㎜の白色・灰色砂粒）	
144	土師器	高杯	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a9)	－	[10.1]	－	－	にぶい黄褐（10YR5/3）	粗（3.0㎜以下の茶色・赤色･肌色砂粒、長石、石英）	
145	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a9)	19.7	[9.8]	－	3/12 弱	にぶい黄橙（10YR7/2）	粗（0.5～1.0㎜の白色・透明色･灰色･黒灰色砂粒）	
146	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a9)	16.2	[26.0]	－	口縁部：完形	灰白（10YR）	粗(3.0㎜以下の灰色・淡い橙色・白色砂粒)	
147	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a9・a10)	14.8	[6.3]	－	2/12 強	にぶい黄橙（10YR6/3）	粗（0.5～1.0㎜の白色・灰色・茶色砂粒）	
148	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a9・a10)	14.8	[7.3]	－	4/12	にぶい橙（7.5YR6/4）	粗（0.5～1.0㎜の白色・灰色砂粒）	
149	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206	14.8	[5.2]	－	2/12 弱	にぶい黄橙（10YR6/3）	粗（0.5～1.0㎜の白色・茶褐色砂粒）	
150	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a10・b10)	15.0	[9.2]	－	3/12 弱	にぶい黄橙（10YR6/3）	粗（0.5～1.0㎜の白色・灰色・黒灰色・茶色砂粒）	
151	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a10)	15.0	[9.4]	－	2/12 弱	にぶい黄褐（10YR5/3）	粗（0.5～1.0㎜の白色・白灰色砂粒）	
152	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a9)	13.8	[19.0]	－	2/12 弱	内面：灰白（10YR8/2） 外面：浅黄橙（10YR8/3）	粗（1.5㎜以下の白色・半透明・赤茶色・黒色砂粒）	
153	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (b9)	14.0	[8.2]	－	2/12	にぶい黄橙（10YR6/3）	やや粗（0.5～1.5㎜の白色・灰色砂粒）	
154	土師器	甕	Ｆ拡張	ＮＲ 206 (a9・a10)	15.8	[18.8]	－	口縁部：11/12	灰白（10YR8/2）	やや密（1.0㎜以下の白色砂粒、3.0㎜以下の半透明砂粒、5.0㎜の半透明砂粒）	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
155	土師器	高杯	第６次２トレンチ	包含層	17.6	[5.2]	－	1/12 強	浅黄橙（7.5YR8/4）	粗（0.5 ～ 2.0㎜の白色・黒灰色砂粒）	
156	須恵器	杯身	第６次３トレンチ	包含層	10.8	2.9	－	口縁部：1/12 弱 底部：4/12	灰（N6/0）	密（0.5㎜の白色・灰色砂粒）	
157	須恵器	蓋	第６次３トレンチ	包含層	15.4	1.7	－	3/12	灰白（7.5Y7/1）	密（0.5 ～ 1.0㎜の白色砂粒）	
158	須恵器	杯Ｂ身	第６次６トレンチ	包含層	－	[1.1]	8.8	4/12 弱	灰（N6/0）	やや粗（0.5㎜以下の黒色砂粒、1.5㎜以下の白色砂粒）	線刻「大穴」
159	須恵器	杯Ｂ身	第６次６トレンチ	包含層	－	[2.0]	7.1	6/12 強	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N5/0）	やや密（0.5 ～ 1.0㎜の白色・黒灰色砂粒）	
160	土師器	羽釜	第６次６トレンチ	包含層	－	[5.5]	－	3/12 弱	浅黄橙（10YR8/3）	やや粗（0.5 ～ 2.0㎜の白色・灰色・白灰色砂粒、3.0㎜の灰色砂粒）	
161	緑釉陶器	椀	K	包含層	－	[2.6]	7.0	4/12 強	釉：灰オリーブ（5Y6/3） 素地：灰白（N7/0）	密	
162	須恵器	蓋	K	ＳＤ01	－	[1.4]	－	－	灰白（N7/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
163	須恵器	蓋	K	ＳＤ01	17.0	1.5	－	4/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
164	須恵器	蓋	K	ＳＤ01	16.2	2.3	－	6/12 弱	灰（N6/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
165	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	10.0	3.1	－	4/12 弱	灰（N6/0）	密（0.5㎜の白色・黒灰色砂粒）	
166	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	10.0	[3.5]	－	2/12	灰白（7/0）	密（0.5㎜の白色・黒灰色砂粒）	
167	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	10.2	3.2	7.5	口縁部：12/12 弱 底部：完形	灰（N6/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
168	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	10.2	3.7	－	6/12	灰白（7.5Y7/0）	密（0.5㎜の白色・黒灰色砂粒）	
169	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	10.2	3.8		5/12	灰白（7.5Y7/0）	密（0.5 ～ 1.0㎜の白色・黒灰色砂粒）	
170	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	11.0	3.2	－	1/12	灰（N6/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
171	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	11.0	[3.6]	－	3/12	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（5Y5/1）	粗（0.5㎜の白色砂粒）	
172	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	11.4	3.4	－	3/12	灰白（N7/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
173	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	11.4	2.4	－	口縁部：10/12 弱	灰（N5/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
174	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	11.9	3.7	－	5/12	灰（N6/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
175	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	12.2	3.3	－	口縁部：1/12 底部：4/12	灰白（2.5Y7/1）	密（0.5㎜の白色砂粒）	自然釉
176	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	12.5	3.1	－	2/12	灰（N6/0）	やや粗(0.5㎜の白色砂粒)	
177	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	11.5	3.8		5/12	灰（N5/0）	やや粗（0.5 ～ 1.0㎜の白色砂粒）	
178	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	12.0	[3.2]	－	2/12 弱	灰（N6/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
179	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	11.9	[4.2]	－	6/12 弱	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N6/0）	やや粗(0.5㎜の白色砂粒)	
180	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	13.0	2.7	－	口縁部：1/12 底部：3/12	灰白（N7/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
181	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	12.9	3.0	－	3/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
182	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	13.8	[3.6]	－	3/12	内面：灰（N5/0） 外面：灰（N6/0）	密（0.5 ～ 1.0㎜の白色砂粒）	
183	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	13.6	3.4	－	6/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5㎜の白色・黒灰色砂粒）	
184	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	13.2	2.4	－	1/12	灰白（N7/0）	密（0.5㎜の白色・茶色・黒灰色砂粒）	
185	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	14.0	3.0	－	3/12	灰白（7.5Y7/1）	やや粗（0.5㎜の白色・黒灰色砂粒）	
186	須恵器	杯Ａ身	K	ＳＤ01	14.0	3.4	－	2/12	灰白（7.5Y7/1）	密（0.5㎜の白色・黒灰色砂粒、2.0㎜の白色砂粒）	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（cm）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
187	須恵器	杯A身	K	SD 01	12.9	3.9		口縁部：3/12 底部：5/12	灰白（7.5Y7/1）	密（0.5mmの白色・黒灰色砂粒）	
188	須恵器	杯B身	K	SD 01	13.9	3.1	－	口縁部：1/12 底部：5/12	灰白（7.5Y7/1）	密（0.5mmの白色砂粒）	
189	須恵器	杯B身	K	SD 01	13.5	3.9	－	5/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色・黒灰色砂粒）	
190	須恵器	杯B身	K	SD 01	15.2	3.9	－	1/12 強	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
191	須恵器	杯B身	K	SD 01	12.8	3.9		1/12 以下	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N6/0）	粗（0.5mmの白色・黒灰色砂粒）	
192	須恵器	杯B身	K	SD 01	15.7	3.7	－	4/12	内面：灰白（5Y7/1） 外面：灰（5Y6/1）	密（0.5mmの白色砂粒）	
193	須恵器	杯B身	K	SD 01	15.0	3.6	10.6	5/12 強	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
194	須恵器	杯B身	K	SD 01	12.3	3.8	－	4/12 弱	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N5/0）	粗（0.5mmの白色･黒灰色･茶色砂粒）	
195	須恵器	杯B身	K	SD 01	15.3	3.9	11.0	4/12	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
196	須恵器	杯B身	K	SD 01	16.3	3.8	11.4	3/12	灰白（2.5Y7/1）	密(1.0mm以下の白色砂粒)	
197	須恵器	杯B身	K	SD 01	18.7	3.9	12.4	口縁部：1/12 以下 底部：4/12 弱	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N6/0）	やや密(0.5mm以下の白色･黒色砂粒、1.0mmの黒色砂粒)	自然釉
198	須恵器	杯B身	K	SD 01	－	[3.0]	11.0	5/12	灰白（7.5Y7/1）	密（0.5mmの白色砂粒）	
199	須恵器	杯B身	K	SD 01	15.9	4.2	10.8	6/12	内面：灰白（N7/0） 外見：灰（N6/0）	やや密(1.0mm以下の白色･灰色砂粒、1.5～2.0mmの白色砂粒)	
200	須恵器	杯B身	K	SD 01	10.0	3.2	7.0	5/12 弱	灰（N6/0）	密（0.5～1.0mmの白色・黒灰色砂粒）	
201	須恵器	杯B身	K	SD 01	15.3	3.3	10.3	3/12 強	灰（N6/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
202	須恵器	杯B身	K	SD 01	13.8	4.2	－	2/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
203	須恵器	杯B身	K	SD 01	17.8	4.6	－	2/12 弱	灰白（2.5Y7/1）	密（0.5mmの白色・黒灰色砂粒）	
204	須恵器	杯B身	K	SD 01	－	[1.9]	10.2	4/12 弱	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N5/0）	粗（0.5mmの白色・黒灰色砂粒）	
205	須恵器	杯B身	K	SD 01	－	[2.5]	9.2	8/12 弱	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N5/0）	やや粗(0.5mmの白色砂粒)	
206	須恵器	壺底部	K	SD 01	－	[1.9]	3.9	7/12	内面：灰白（N7/0） 灰（N6/0）	やや密（1.5mm以下の白色砂粒）	
207	須恵器	甕	K	SD 01	15.4	[5.5]	－	1/12 強	灰白（N7/0）	やや粗（0.5mmの白色・黒灰色・灰色砂粒）	
208	土師器	甕	K	SD 01	16.0	[8.1]	－	2/12	内面：浅黄橙（10YR8/4） 外面:にぶい橙（7.5YR6/4）	やや粗（0.5～2.0mmの白灰色・白色・灰色・茶色砂粒）	
209	土師器	甕	K	SD 01	15.8	[8.9]	－	3/12 弱	浅黄橙（10YR8/4）	粗（0.5～1.0mmの白色・黒灰色・灰色・茶色砂粒）	
210	土師器	長胴甕	K	SD 01	28.0	[6.9]	－	1/12 以下	体部内面・外面：橙（5YR7/6） 口縁内面:灰白（7.5YR8/2）	粗（1.5mm以下の赤茶色・灰色砂粒、2.0mm以下の白色・半透明砂粒、雲母）	
211	土師器	鍋	K	SD 01	35.1	[6.9]	－	2/12 弱	内面:橙（7.5YR7/6）外面:にぶい橙（5YR7/4）	やや粗(2.0mm以下の白色･茶色砂粒)	
212	土師器	高杯	K	SD 01	－	[7.2]	－	－	外面：橙（5YR6/6）～灰白（7.5YR）	やや密(0.5mm以下の白色･黒色砂粒、雲母)	
213	土師器	高杯A	K	SD 01	25.3	[3.0]	－	4/12 強	内外面：橙（5YR7/6） 内面一部：浅黄橙（7.5YR8/4）	やや粗（0.5～3.0mmの赤茶色砂粒、1.0mm以下の白色砂粒）	
214	須恵器	蓋	K	SK 125	16.1	2.7	－	ほぼ完形	灰白（N7/0）	密(0.5mm以下の黒色砂粒、1.0mm以下・1.5～2.0mmの白色砂粒)	
215	須恵器	杯A身	K	SK 125	11.7	3.4	－	4/12	灰白（2.5Y7/1）	密（極細粒の黒色砂粒、1.0mm以下・1.5～2.0mmの白色砂粒）	
216	土師器	甑	K	SK 94・SP 94	－	[19.6]	－	－	内面：灰白（7.5YR8/1） 外面：橙（7.5YR7/6）	粗（1.0～3.0mmの茶色・灰色・白色砂粒）	
217	須恵器	杯H蓋	K	－	－	[1.5]	－	－	灰（N6/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
218	須恵器	杯H身	K	包含層	9.4	[4.3]	－	1/12 以下	灰白（N7/0）	やや密（0.5mm以下の白色砂粒、1.0mm以下の黒色砂粒）	
219	須恵器	蓋	K	包含層	14.6	[1.6]	－	2/12 弱	灰白（2.5Y8/1）	密（極細粒・2.0mmの白色砂粒、1.0mm以下の灰色砂粒）	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
220	須恵器	蓋	K	包含層	17.6	[1.8]	－	2/12 弱	内面：灰白（N7/0）外面：灰（N6/0）	密（0.5㎜以下の白色・黒色・茶色砂粒）	
221	須恵器	蓋	K	包含層	15.3	2.2	－	3/12	灰白（N7/0）	密(1.0㎜以下の白色砂粒)	
222	須恵器	蓋	K	包含層	17.2	1.5	－	1/12 以下	灰白（N7/0）	密(1.0㎜以下の白色砂粒)	
223	須恵器	蓋	K	包含層	14.0	[1.3]	－	3/12 弱	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N6/0）	密(1.0㎜以下の白色砂粒、器表に1.0㎜以下の黒色砂粒)	
224	須恵器	蓋	K	包含層	15.4	[1.75]	－	4/12 弱	内面：灰白（2.5Y8/1） 外面：灰白（N7/0）	やや粗(1.0㎜以下の白色・黒色砂粒、2.0㎜以下の暗灰色砂粒)	
225	須恵器	蓋	K	包含層	16.4	[1.3]	－	2/12 以上	灰（N6/0）	密（0.5㎜以下・2.0㎜の白色砂粒）	緋襷
226	須恵器	蓋	K	包含層	－	[2.4]	－	1/12	灰（N6/0）	密(0.5㎜以下の白色砂粒、1.0㎜以下の黒色砂粒)	自然釉
227	須恵器	蓋	K	包含層	15.1	2.6	－	1/12 以下	内面：灰白（2.5Y8/1） 外面：灰白（N7/0）	やや粗(1.0㎜以下の白色・灰色砂粒、2.0～3.0㎜の灰色砂粒)	
228	須恵器	蓋	K	ＳＫ131	15.5	2.8	－	10/12	内面：灰白（N7/0） 外面：黄灰（2.5Y6/1）	粗（1.0㎜以下・1.5～7㎜の白色砂粒、1.5㎜以下の灰色砂粒）	
229	須恵器	蓋	K	包含層	16.8	3.5	－	8/12	内面：灰（N6/0） 釉：黄褐（2.5Y5/4）	密(0.5㎜以下の黒色砂粒、1.0㎜以下の白色砂粒)	自然釉
230	須恵器	蓋	K	包含層	15.1	[1.9]	－	3/12 弱	灰白（N7/0）	やや粗(1.0㎜以下の白色・黒色砂粒)	自然釉
231	須恵器	蓋	K	包含層	17.7	[2.1]	－	2/12 弱	灰白（N7/0）	密（1.0㎜以下の白色・黒色砂粒､2.0㎜の白色砂粒）	
232	須恵器	蓋	K	包含層	19.8	[2.6]	－	1/12 強	内面：灰白（N7/0）釉：灰オリーブ（5Y5/3）	密（0.5㎜以下の黒色・白色砂粒）	自然釉
233	須恵器	蓋	K	包含層	16.7	[2.0]	－	1/12	灰白（N7/0） 口縁端部外面：オリーブ黒（5Y3/1）	密（1.0㎜以下の黒色・白色砂粒、1.5～3.0㎜の白色砂粒）	
234	須恵器	蓋	K	包含層	16.8	[2.3]	－	2/12	灰白（N7/0）	密(0.5㎜以下の白色砂粒)	
235	須恵器	蓋	K	包含層	18.0	[1.8]	－	1/12	灰（N6/0）	密（0.5㎜以下・1.0～1.5㎜の白色砂粒）	
236	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	8.9	3.3	－	3/12 弱	灰（N6/0）	やや粗(1.0㎜以下の白色・黒色砂粒、5.0㎜の灰色砂粒)	
237	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	9.6	3.5	－	3/12	灰白（2.5Y8/1）	やや粗(1.0㎜以下の灰色・白色・赤茶色砂粒、2.0㎜の灰色砂粒)	
238	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.1	3.6	－	3/12 強	内面：灰（N5/0） 外面：灰（N6/0）	粗（0.5～1.0㎜の白色砂粒）	
239	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.3	3.4	－	6/12 弱	灰（N6/0）	密（0.5㎜の白色砂粒）	
240	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.8	3.5	－	3/12 強	灰白（2.5Y7/1） 外面口縁付近：灰（N6/0）	やや粗（1.0㎜以下の白色砂粒、2.0㎜以下の灰色砂粒）	
241	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.8	3.2	－	5/12 強	青灰（5PB6/1）	やや密(1.0㎜以下の白色・黒色砂粒、2.0㎜の白色砂粒)	
242	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	11.0	3.1	－	1/12 以下	内外面体部：灰白（N7/0） 外面底部：灰白（2.5Y8/1）	密（0.5㎜以下の白色・黒色砂粒）	
243	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	11.1	3.1	－	4/12	灰（N4/0）	密（0.5～1.0㎜・2.0～5.0㎜の白色砂粒）	
244	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	11.2	[3.2]	－	4/12	灰（N6/0）	やや密(1.0㎜以下の白色・黒色砂粒)	
245	須恵器	杯Ａ身	K	－	11.6	3.3	－	口縁部：1/12 以下 底部：3/12	灰（N6/0）	やや粗(0.5㎜の白色砂粒)	
246	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	11.7	3.3	－	4/12 弱	灰白（N7/0）	密（1.0㎜以下の白色・黒色砂粒）	
247	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.8	3.6	－	2/12 弱	灰白（2.5Y7/1）	密（0.5㎜以下の白色・黒色砂粒）	
248	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.1	4.0	－	3/12	灰白（5Y7/1）	粗（0.5～1.0㎜の白色砂粒）	
249	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.2	[3.7]	－	6/12	灰（N5/0）	やや密（1.0㎜以下の白色砂粒）	
250	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	11.4	4.0	－	1/12 以下	灰白（2.5Y8/1）	やや粗（0.5㎜以下の黒色砂粒、1.5㎜以下の白色砂粒）	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
251	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	11.9	3.5	—	1/12以下	明褐灰（7.5YR7/1）	密（0.5mm以下の黒色砂粒、1.5mm以下の白色砂粒、3.0mmの灰色砂粒）	
252	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	11.5	[3.7]	—	1/12以下	灰白（N7/0）	やや粗（1.0mm以下の白色・黒色砂粒、2.0mmの黒色砂粒）	
253	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	12.0	3.7	—	2/12	灰白（7.5Y7/1）	粗（0.5～1.0mmの白色・黒灰色・茶色砂粒）	
254	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	12.3	[3.4]	—	4/12	内面：灰（N6/0） 外面：灰（N4/0）	密（1.0mm以下・1.5～2.0mmの白色砂粒）	
255	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	12.4	[3.4]	—	3/12	灰白（N7/0）	密（1.0mm以下の白色・黒色砂粒、2.0mmの白色砂粒）	
256	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.0	4.1	—	3/12	灰白（N7/0）	密（1.0mm以下の白色・灰色砂粒）	
257	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.1	3.4	—	2/12	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
258	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.2	3.5	—	3/12以上	灰白（N7/0）	密（1.0mm以下の白色砂粒）	
259	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	6.8	3.8	—	3/12	内面：灰白（N7/0） 外面：灰白（N8/0）	密（1.0mm以下の白色・黒色砂粒）	
260	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.4	3.2	—	1/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm以下の黒色砂粒、1.0mm以下の白色砂粒）	
261	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.4	3.5	—	3/12	内面：灰白（N8/0） 外面：灰白（N7/0）	密（0.5mm以下の黒色砂粒、1.0mm以下の白色砂粒）	
262	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.4	3.5	—	6/12弱	灰白（N7/0）	やや粗（0.5mm以下の黒色砂粒、1.0mm以下・2.0～4.0mmの白色砂粒）	
263	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.5	3.4	—	3/12強	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
264	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.6	3.9	—	4/12	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
265	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	14.5	3.5	—	1/12以下	灰白（2.5Y7/1）	密（0.5mm以下の白色砂粒）	
266	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	12.8	3.7	—	1/12以下	内面：灰（N6/0） 外面：灰（N5/0）	密（極細粒の黒色砂粒、0.5mm以下・1.0～2.0mmの白色砂粒）	ヘラ記号
267	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.8	3.5	—	2/12弱	灰白（N7/0）	密（0.5mm以下・1.5～2.0mmの白色砂粒）	墨書
268	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.4	3.5	—	2/12	明青灰（5PB7/1）	密（1.0mm以下の白色・暗灰色砂粒）	
269	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	12.2	[4.1]	—	3/12	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N6/0）	密（0.5mm以下の白色・茶色砂粒）	
270	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.7	3.8	—	8/12	内面：青灰（5B6/1） 外面：灰（N6/0）	やや粗（1.0mm以下の白色・黒色砂粒、2.0mmの白色砂粒）	
271	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.6	[3.3]	—	3/12	灰白（N7/10）	密（1.0mm以下の白色砂粒）	
272	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.0	[3.8]	—	2/12	灰白（N7/0）	密（0.5mmの白色・黒灰色砂粒、3.0mmの白色砂粒）	
273	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.2	4.0	—	4/12	内面：灰白（2.5Y7/1） 外面：灰白（N7/0）	密（0.5mm以下の白色・黒色砂粒）	自然釉
274	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	9.8	2.9	—	3/12弱	明青灰（5PB7/1）	やや蜜（1.0mm以下・1.5～3.0mmの白色砂粒）	
275	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	10.8	3.4	—	3/12	内面：灰（N6/0） 外面：灰（N5/0）	密（1.0mm以下の白色砂粒）	
276	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	11.2	3.2	—	3/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm以下の黒色砂粒、1.0mm以下の白色砂粒）	
277	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	12.0	3.6	—	2/12弱	灰（N5/0）	粗（0.5～1.0mmの白色砂粒）	
278	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	12.0	3.8	—	2/12	灰（N6/0）	密（0.5mmの白色砂粒）	
279	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	14.0	[3.2]	—	4/12弱	灰白（N7/0）	やや密（0.5mm以下の黒色砂粒、1.0mm以下の白色砂粒）	
280	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	13.6	[3.7]	—	2/12強	内面：明紫灰（5RP7/1）	密（0.5mm以下の黒色砂粒、1.0mm以下・2.0mmの白色砂粒）	自然釉
281	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	13.3	[3.7]	—	3/12	灰（N5/0）	密（0.5mmの白色・黒灰色砂粒）	
282	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	13.5	4.3	8.8	1/12以下	内面：灰白（2.5Y7/1） 外面：灰（N6/0）	やや粗（1.0mm以下の白色・黒色砂粒）	
283	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	14.6	3.7	9.7	2/12強	内面：灰白（2.5Y8/1） 外面：灰白（N7/0）	密（0.5mm以下の黒色砂粒、1.0mm以下・2.0mmの白色砂粒）	
284	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	16.0	3.8	10.4	1/12	灰白（N7/0）	やや粗（0.5mmの白色・黒灰色砂粒）	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
285	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	17.2	4.2	11.8	口縁部：1/12 以下 底部：4/12	灰白（2.5Y8/2）	粗（0.5 ～ 2.0mm の白色・黒灰色砂粒）	
286	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	21.2	6.5	12.8	口縁部：1/12 以下 底部：3/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の灰色砂粒、1.0mm 以下の白色砂粒）	
287	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	22.3	6.0	－	1/12	灰白（N7/0）	密（1.0mm 以下の白色・黒色砂粒）	
288	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	15.8	4.2	9.2	口縁部：1/12 以下 底部：4/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒、2.0mm の白色砂粒）	
289	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	14.4	4.1	8.2	2/12	灰白（2.5Y8/1）	密（極細粒の灰色砂粒、1.0mm 以下の白色砂粒）	
290	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	－	［2.2］	8.7	7/12 弱	内面：明紫灰（5P7/1） 外面：灰黄褐（10YR6/2）	密（1.0mm 以下の白色・黒色・薄茶色砂粒）	
291	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	－	［3.5］	9.2	3/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒）	
292	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	14.8	3.7	11.2	口縁部：3/12 底部：4/12 弱	内面：灰白（7.5Y7/1） 外面：灰（N6/0）	粗（0.5 ～ 1.0mm の白色・茶色砂粒）	
293	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	14.3	3.7	10.4	2/12 弱	内面：褐灰（10YR4/1） 外面：灰（N5/0）	密（0.5mm の白色砂粒）	
294	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	15.2	4.2	－	2/12 強	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1.0mm 以下の白色砂粒）	
295	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	－	［1.3］	10.6	3/12	灰白（N7/0）	密（1.0mm 以下の白色砂粒）	
296	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	－	［2.0］	8.6	3/12	内面：灰白（N7/0） 外面：灰白（2.5Y7/1）	密（1.0mm 以下の白色・薄茶色砂粒）	自然釉
297	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	10.8	4.1	6.8	1/12 以下	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・灰色砂粒）	
298	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	12.7	5.3	8.2	6/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm の白色砂粒）	
299	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	12.2	4.3	9.0	2/12 弱	内面：灰（N6/0） 外面：灰オリーブ（7.5Y5/2）	密（0.5mm の白色砂粒）	
300	須恵器	鉢	K	包含層	17.9	［5.8］	－	2/12 弱	灰白（2.5Y8/2）	密（0.5mm の白色砂粒）	
301	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	10.8	3.5	6.7	5/12 弱	灰（N7/0）	密（1.0mm 以下の白色砂粒）	
302	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	14.8	3.9	9.4	2/12 弱	内面：灰白（N7/0） 外面：灰（N6/0）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1.0mm 以下の白色砂粒）	
303	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	－	［3.7］	7.7	4/12 弱	灰白（N7/0）	密（1.5mm 以下の白色砂粒）	
304	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	13.2	3.7	－	1/12 以下	灰（N6/0）	密（0.5mm の白色砂粒）	
305	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	－	［2.8］	7.0	2/12	内面：灰白（N7/0） 素地：灰白（2.5Y8/1） 釉：灰黄（2.5Y7/2）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1.0mm 以下の白色砂粒）	
306	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	－	［1.3］	9.1	4/12 弱	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1.0mm 以下の白色砂粒）	
307	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	－	［1.9］	10.6	2/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒）	
308	須恵器	椀Ａ身	K	包含層	－	［2.8］	9.4	3/12 弱	灰白（N7/0）	密（1.0mm 以下の白色・黒色砂粒、1.5 ～ 2.0mm の白色砂粒）	
309	須恵器	椀Ａ身	K	包含層	13.6	6.5	－	3/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1.0mm 以下の白色砂粒）	
310	須恵器	杯Ｇ身	K	包含層	10.9	［3.5］	－	3/12	内面：灰（N6/0） 外面：褐灰（10YR6/1）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1.0mm 以下の白色砂粒）	
311	須恵器	杯Ｇ身	K	包含層	12.9	5.8	－	6/12	灰白（N7/0） 外面口縁部：灰白（2.5Y7/1）	密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1.5mm 以下の白色砂粒）	
312	須恵器	杯Ｂ身	K	包含層	13.0	［3.3］	－	1/12	灰（N6/0）	やや密（1.0mm 以下・3.0mm の白色砂粒）	
313	須恵器	椀	K	包含層	－	［1.7］	5.8	7/12	灰（N6/0）	密（0.5mm 以下の白色砂粒）	
314	須恵器	杯Ａ身	K	包含層	－	［2.7］	7.2	5/12	灰白（N7/0）	密（0.5mm 以下の白色・黒色砂粒）	
315	須恵器	蓋	K	包含層	13.2	［2.8］	－	4/12 弱	内面：灰白（N7/0） 釉：灰オリーブ（5Y5/3）	やや密（0.5mm 以下の黒色砂粒、1.0mm 以下・2.0mm の白色砂粒）	自然釉

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
316	須恵器	短頸壺	K	包含層	5.0	[4.7]	－	5/12 弱	灰白（N7/0）	やや密(1.0㎜以下の白色・黒色砂粒)	
317	須恵器	短頸壺	K	包含層	9.0	[6.0]	－	2/12 弱	内　面：　灰（Ｎ６／０） 外面：黄灰（2.5Y5/1）	密（1.0㎜以下の白色・黒色砂粒)	
318	須恵器	甕	K	包含層	11.8	[4.3]	－	5/12	外　面：　灰（Ｎ６／０） 釉：オリーブ灰（10Y5/2）	密	
319	須恵器	甕	K	包含層	19.7	[5.2]	－	2/12 弱	内 面：灰 白（2.5Y7/1） 外面：灰白（N7/0）	密（0.5㎜以下・1.0㎜の白色砂粒)	
320	須恵器	壺	K	包含層	－	[3.1]	7.3	9/12	灰（N6/0）	やや粗（0.5㎜の白色砂粒、0.5～1.0㎜の黒灰色砂粒)	
321	須恵器	壺	K	包含層	－	[3.1]	6.4	3/12 弱	明青灰（5PB7/1）	密（極細粒の白色・黒色砂粒、1.0～2.0㎜の黒色砂粒)	
322	須恵器	壺	K	包含層	－	[2.1]	9.2	2/12 弱	灰（N5/0）	やや粗（0.5㎜以下の茶色砂粒、1.5㎜以下の白色砂粒)	
323	須恵器	壺	K	包含層	－	[2.1]	11.3	2/12 弱	灰白（N7/0）	密(0.5㎜以下の黒色砂粒、1.0㎜以下の白色砂粒)	
324	須恵器	鉢	K	包含層	24.6	11.4	－	3/12 弱	内 面：灰 白（2.5Y8/1） 外面：灰白（N8/0）	やや粗(1.0㎜以下の白色・灰色砂粒、2.0㎜の白色砂粒)	
325	須恵器	片口鉢	K	包含層	19.8	[8.4]	－	2/12	灰白（2.5Y8/1）	密(0.5㎜以下の黒色砂粒、1.0㎜以下の白色砂粒)	
326	須恵器	すり鉢	K	包含層	－	[5.7]	6.2	5/12 弱	灰白（N7/0）	密(1.0㎜以下の白色砂粒)	
327	須恵器	甕	K	包含層	43.7	[17.7]	－	2/12 弱	内　面：　灰　白（N7/0） 外面：灰（N5/0）	密(2.0㎜以下の白色砂粒)	
328	須恵器	甕	K	包含層	－	[17.0]	24.4	底　部：4/12 弱	内　面：　灰　白（N7/0） 外面：灰（N5/1）	密(2.1㎜以下の白色砂粒)	
329	土師器	杯	K	包含層	13.2	3.7	－	4/12	橙（5YR7/6）	密（0.5㎜の白色砂粒)	
330	土師器	杯	K	包含層	16.0	[4.3]	－	1/12 以下	橙（5YR7/6）	密（0.5～2.0㎜の白色・灰色砂粒)	
331	土師器	高杯	K	包含層	15.2	[4.4]	－	6/12	にぶい橙（7.5YR7/4）	やや粗(1.0㎜以下の白色・半透明・黒色砂粒、1.5～2.0㎜の白色砂粒)	
332	土師器	高杯	K	包含層	18.3	[4.5]	－	8/12 弱	橙（7.5YR7/6）	粗（0.5～1.0㎜の白色・灰色・透明色砂粒)	
333	土師器	高杯	K	包含層	－	[3.9]	－	－	にぶい橙（7.5YR7/4）	粗（0.5～2.0㎜の白色・白灰色・黒灰色砂粒)	
334	土師器	高杯	K	包含層	－	[4.5]	－	－	浅黄橙（7.5YR8/4）	やや粗(1.0㎜以下の茶色・黒色・白色・半透明砂粒)	
335	土師器	高杯	K	包含層	－	[2.6]	－	－	浅黄橙（7.5YR8/4）	やや粗(1.5㎜以下の白色・茶色・黒色砂粒)	
336	土師器	高杯	K	－	－	[6.5]	－	－	浅黄橙（10YR8/3）	密（0.5㎜の白色･黒灰色･茶色砂粒)	
337	土師器	高杯	K	包含層	－	[6.0]	－	－	にぶい黄橙（10YR7/3）	粗（0.5～1.0㎜の白色・灰色・茶色砂粒)	
338	土師器	高杯	K	包含層	－	[6.2]	－	－	浅黄橙（7.5YR8/3）	粗（0.5～1.0㎜の白色・黒灰色・茶色・灰色砂粒)	
339	土師器	高杯	K	包含層	－	[6.7]	－	－	橙（5YR6/6）	密（0.5㎜の白色砂粒)	
340	土師器	甕	K	包含層	16.3	[3.4]	－	1/12	にぶい褐（7.5YR5/4）	粗（1.0㎜以下の白色・半透明砂粒、1.5㎜以下の茶色砂粒、2.0～3.0㎜の半透明砂粒)	
341	土師器	甕	K	包含層	16.9	[4.5]	－	1/12 強	にぶい橙（7.5YR6/4）	粗（1.5㎜以下の白色・赤茶色砂粒、2.0㎜以下の半透明砂粒)	
342	土師器	甕	K	包含層	11.6	[5.4]	－	9/12	内面：明黄褐（10YR7/6） 外面:にぶい橙（7.5YR6/4）	粗（0.5～1.0㎜の白色・白灰色・茶色砂粒)	
343	土師器	甕	K	包含層	16.4	[8.2]	－	6/12 弱	明赤褐（5YR5/6）	粗（0.5～2.0㎜の白色・白灰色砂粒)	
344	土師器	甕	K	包含層	13.6	[5.2]	－	1/12 強	にぶい橙（7.5YR7/4）	粗（0.5～1.0㎜の白色・灰色・黒色砂粒)	
345	土師器	甕	K	包含層	16.4	[5.2]	－	1/12 以下	内　面：　橙（5YR7/6） 外面：にぶい橙色（7.5YR6/4）	粗（1.0㎜以下の透明・黒色砂粒、1.0～3.0㎜の白色・赤茶色砂粒、1.5㎜以下の半透明砂粒)	
346	土師器	甕	K	包含層	12.6	[12.5]	－	2/12	内 面：灰 白（10YR8/1） 外面：黒褐（10YR3/1）	粗（1.0～1.5㎜の茶色・灰色砂粒、1.0～2.0㎜の白色・半透明砂粒)	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点（小区画等）	法量（ｃｍ）			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
347	土師器	壺	K	包含層	12.1	[5.7]	－	4/12	浅黄橙（7.5YR8/4）	やや粗（1.0㎜以下の半透明・赤茶色砂粒、2.0㎜の赤茶色砂粒）	
348	土師器	甕	K	包含層	15.8	[6.2]	－	－	内面：灰白（7.5YR8/2）外面:にぶい橙（7.5YR7/4）	粗（2.0㎜以下の赤茶色・黒色・白色・半透明砂粒）	
349	土師器	甕	K	包含層	14.2	[8.15]	－	1/12	内面：灰白（10YR8/2）外面：にぶい褐（7.5YR6/3）	粗（0.5～1.0㎜の灰色・茶色・白灰色砂粒）	
350	土師器	甕	K	包含層	28.8	[7.3]	－	3/12強	内面：橙（2.5YR6/6）外面：淡橙（5YR8/4）	粗（2.0㎜以下の赤茶色・白色・半透明・黒色砂粒）	
351	土師器	甕	K	包含層	15.8	[9.5]	－	2/12弱	灰白（7.5YR8/1）	やや粗（極細粒の白色砂粒、1.0㎜以下の灰色砂粒、1.5㎜以下の赤茶色砂粒）	
352	土師器	甕	K	包含層	－	[10.2]	－	－	内面：浅黄橙（7.5YR8/4）外面：浅黄橙（7.5YR8/3）	粗(0.5㎜以下の黒色砂粒、1.0㎜以下の白色・半透明・赤茶色砂粒、1.5～2.0㎜の半透明砂粒、雲母）	
353	土師器	甕	K	包含層	12.5	[5.7]	－	2/12	褐（7.5YR4/3）	粗（1.0㎜以下の赤茶色・透明砂粒、2.0㎜以下の白色・半透明砂粒）	スス付着
354	土師器	甕	K	包含層	17.7	[4.5]	－	1/12以下	明褐灰（7.5YR7/2）	やや粗（1.0㎜以下の白色・茶色・赤茶色・半透明・黒色砂粒、2.0～3.0㎜の茶色・白色砂粒）	
355	土師器	甕	K	包含層	19.5	[7.2]	－	3/12弱	内面:にぶい褐（7.5YR5/3）外面：にぶい橙（5YR6/4）	やや粗(1.0㎜以下の白色・半透明・透明・黒色・赤茶色砂粒、雲母、2.0㎜の白色砂粒）	
356	土師器	甕	K	包含層	18.8	[7.3]	－	2/12強	内面:にぶい褐（7.5YR5/3）外面：明赤褐（2.5YR5/6）	粗（1.0～2.0㎜の赤茶色砂粒、1.0～3.0㎜の白色・半透明砂粒、3.0～4.0㎜の灰色砂粒）	スス付着
357	土師器	甕	K	包含層	21.6	[6.8]	－	1/12以下	内面：灰白（7.5YR8/2）外面：にぶい橙（5YR7/3）	やや粗（1.0㎜以下の黒色砂粒、1.5㎜以下の茶色砂粒）	
358	土師器	甕	K	包含層	26.6	[3.2]	－	1/12	内面：褐灰（10Y5/1）外面：灰白（10YR8/2）	やや粗（1.0㎜以下の透明砂粒、2.0㎜以下の白色・半透明砂粒、雲母）	
359	土師器	甕	K	包含層	25.6	[6.7]	－	1/12以下	橙（2.5YR6/6）	やや粗(1.5㎜以下の白色・茶色砂粒、2.0～4.0㎜の白色砂粒、2.0～5.0㎜の灰色砂粒）	
360	土師器	甕	K	包含層	24.2	[6.6]	－	1/12以下	灰白（7.5YR8/1）	粗（1.0㎜以下の白色砂粒、1.0～3.0㎜の薄茶色砂粒）	
361	土師器	甕	K	包含層	24.6	[6.45]	－	2/12弱	灰白（2.5Y8/2）	密（0.5～1.0㎜の白色・黒灰色・白灰色砂粒）	
362	土師器	甕	K	包含層	14.9	[4.5]	－	3/12強	橙（5YR6/6）	粗（1.0㎜以下の赤茶色砂粒、2.0～3.0㎜以下の白色・半透明砂粒、4.0～5.0㎜の半透明砂粒、雲母）	
363	土師器	把手	K	包含層	長[2.6]	高[3.2]	幅[7.7]	－	灰白（7.5YR8/2）	やや粗（1.0㎜以下の白色砂粒、1.5㎜以下の赤茶色・半透明砂粒）	

付表６　木製品観察表

報告番号	種　類	地区名	出土地点	法　量（ｃｍ）			備　考
				長さ	幅	厚さ	
5	建築部材	第４次調査 ３トレンチ	包含層	154.0	24.0	5.4	
6	板材	第４次調査 ３トレンチ	包含層	78.8	20.0	3.6	
7	板材	第４次調査 ３トレンチ	包含層	99.0	19.8	3.8	
8	板材	第４次調査 ３トレンチ	包含層	26.6	7.4	3.2	
9	板材	第４次調査 ３トレンチ	包含層	78.0	9.0	2.2	
10	杭	第４次調査 ３トレンチ	包含層	67.6	3.4	2.6	
11	板材	第４次調査 ３トレンチ	包含層	48.4	4.8	2.1	
46	杭	F	ＳＤ16	31.4	5.8	3.4	
47	杭	F	ＳＤ16	21.8	5.4	5.0	
48	杭	F	ＳＤ16	18.7	3.5	2.6	
113	杭	F拡張	ＳＤ200	100.2	7.0	3.2	
114	杭	F拡張	ＳＤ200	25.6	5.0	3.1	
115	杭	F拡張	ＳＤ200	27.8	4.2	3.5	
116	杭	F拡張	ＳＤ200	15.8	4.1	2.4	
135	杭	F拡張	ＳＤ205	76.2	10.8	6.0	
136	杭	F拡張	ＳＤ205	66.3	10.8	6.6	
137	杭	F拡張	ＳＤ205	64.0	10.8	5.6	
138	杭	F拡張	ＳＤ205	63.8	6.1	2.7	
139	杭	F拡張	ＳＤ205	72.4	9.6	4.8	
140	杭	F拡張	ＳＤ205	59.0	8.0	6.6	
141	杭	F拡張	ＳＤ205	62.0	7.6	5.0	
142	杭	F拡張	ＳＤ205	71.2	6.2	2.5	

付表７　金属製品観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	法量（ｃｍ）			重量	素材	備考
				長さ・径	幅	厚さ			
3	和釘	第４次調査 ３トレンチ	包含層	4.25	0.70	0.40	2.58	鉄	
4	熙寧元寶	第４次調査 ３トレンチ	包含層	2.45	（孔径） 0.7	0.13	3.92	青銅	北宋，初鋳1068年
50	咸平元寶	F	ＳＸ115	2.20	（孔径） 0.65	0.12	1.56	青銅	北宋，初鋳998年

付表８　玉類観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	法量（㎜）		備考
				径・幅	長（高）	
132	臼玉	F拡張	ＳＤ200 (a11)	4.5	3.5	
133	臼玉	F拡張	ＳＤ200 (a11)	5.0	3.5	
134	管玉	F拡張	ＳＤ200 (a10)	4.0	19.5	

２．令和４・５年度一般国道163号
精華拡幅事業関係遺跡発掘調査報告

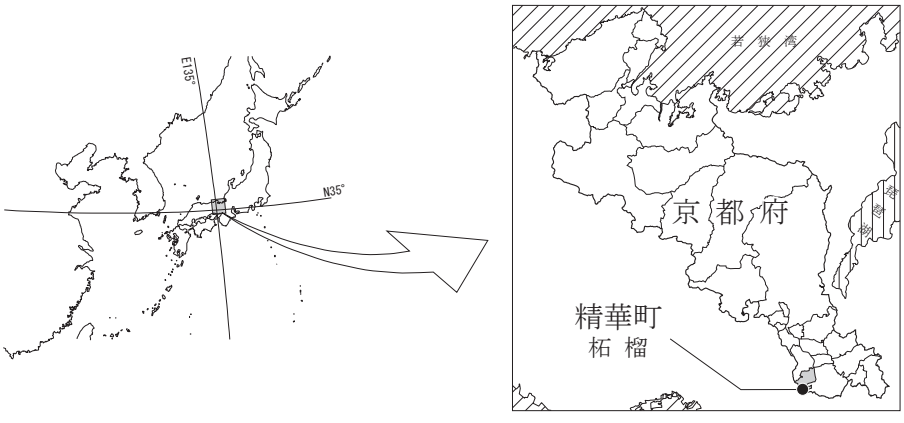
１．はじめに

国道163号は大阪市を起点とし、奈良県・京都府を経て終点である三重県津市までを結ぶ一般国道である。大阪・奈良から京都府内へと延びて来た道路は山田川に並行して東行し、木津川の南へと至る。泉大橋を経て木津川の北側に転じた後は、木津川沿いに三重県まで延びる。前者は大阪街道ないし清滝街道 、後者は伊賀街道(注1)を踏襲しており、近畿地方の東西を結ぶ古くからの主要な経路の一つである。また木津川付近では、京と大和を結ぶ南北経路と交差しており、現代でも大谷～上狛四丁町間（1.8㎞）は国道24号と163号との重複区間である。精華町・木津川市域の国道163号では慢性的な交通混雑が発生しており、渋滞緩和を目的として国土交通省により道路整備事業が実施されている。木津川市域では令和２年に木津東バイパスが開通しており、これに先立って平成27～30年度に岡田国遺跡第３～7次、平成28年度に金堀遺跡と天神山古墳群第２次の発掘調査を当センターが行っている。精華町域では、渋滞解消に加えて交差点での事故減少を目的として国道163号精華拡幅事業が実施されており、当センターにより平成26年度に乾谷遺跡と乾谷大崩遺跡の発掘調査を行っている。

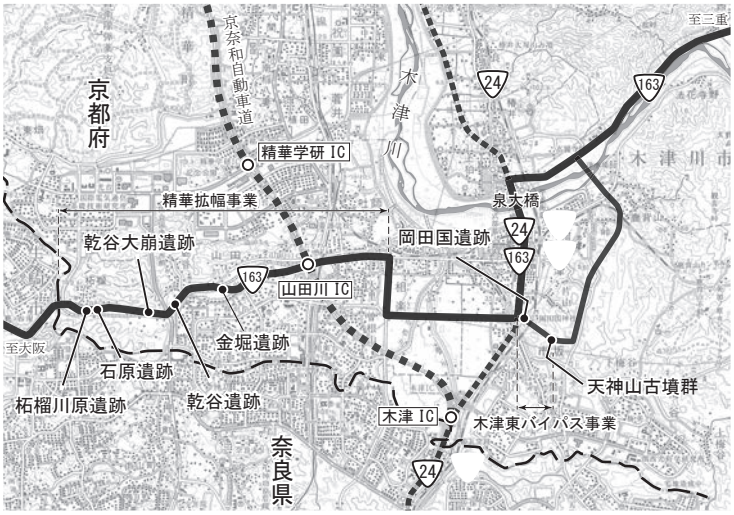
今回報告する柘榴川原遺跡と石原遺跡についても、国道163号精華拡幅事業として国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けたもので、令和４年度と令和５年度に発掘調査を実施した。現地調査にあたっては京都府教育委員会、精華町教育委員会からご指導・ご協力を頂いたくとともに、地元からご高配を賜った。

なお調査にかかる経費は国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所が全額負担した。

本文は現地調査を担当した調査課の加藤雅士・福山博章が執筆した。また当センターの増田富士雄理事からは、遺跡周辺の地質学に関する玉稿を頂いた。



第１図　精華町の位置



第２図　国道163号事業と遺跡調査

〔調査体制〕

令和４年度　柘榴川原遺跡

調査責任者　調査課長　小池　寛

調査担当者　調査課調査第１係長　森島康雄

同　主任　福山博章

調査場所　京都府相楽郡精華町柘榴川原・石原・松ケ平

現地調査期間　令和４年12月８日～令和５年２月28日

調査面積　900㎡

令和５年度　石原遺跡

調査責任者　調査課長　小池　寛

調査担当者　調査課調査第１係長　森島康雄

同　主任　加藤雅士

調査場所　京都府相楽郡精華町柘榴松ケ平・石原・芦谷

現地調査期間　令和５年５月12日～令和５年８月３日

調査面積　600㎡

〔整理作業体制〕

整理作業責任者　調査課長　小池　寛

整理作業担当者　調査課調査第１係長　森島康雄

同　主任　加藤雅士

同　主任　福山博章

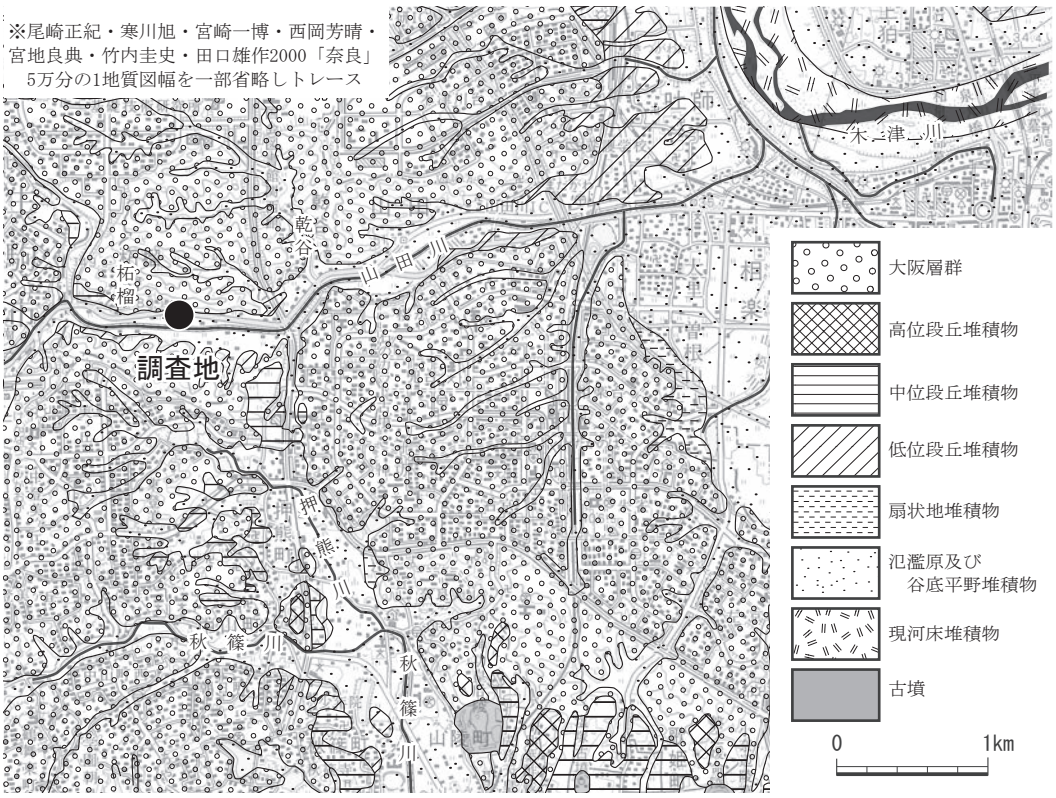
整理作業期間　令和５年４月３日～令和６年３月29日

２．遺跡の環境

１）地理的環境

精華町は京都府の南西端に位置している。町域の北は京田辺市と接しており、南と西はそれぞれ奈良県の奈良市と生駒市である。京都盆地の南端へ流れ出た木津川はすぐにその流れを東西から南北方向に変えているが、その北流する木津川が町域の東辺となっている。

精華町の地形は、木津川側から順に氾濫原、扇状地・段丘、丘陵が展開している(注2)。平野部である氾濫原は東西幅２km程度と狭く、大部分が丘陵部となっているが、関西文化学術研究都市に代表される丘陵上での土地利用が進んで以降は、町の人口が大きく増加している。京都府南部から奈良県・大阪府にかけての丘陵地帯は京阪奈丘陵と呼称されるが、このうち精華町周辺は田辺丘陵として区分される標高80～150m程度の大阪層群で構成されるものである。田辺丘陵と奈良丘陵の間には、山田川が東流して木津川に注いでいるが、乾谷以西の山田川の上流部は谷頭侵食による秋篠川(押熊川)からの河川争奪であることが知られている(注3)。今回報告する柘榴川原遺跡と石原遺跡が所在する精華町柘榴は、その山田川上流部に位置している。古くから続く柘榴の集落は山田川の氾濫を避けるかのように、左岸側の丘陵斜面である標高80～130mの場所に展開している。大阪街道やこれをほぼ踏襲する国道163号は、集落に接するように標高80mの等高線に並行する形で丘陵裾部を通過していたが、通行量の増大を受け、現在では集落を南へ迂回して谷底平野を通る経路に整備されている(注4)。今回の調査地は山田川左岸の谷底平野に位置し、各調査区は山田川からは約25～70mの距離にある。



第３図　周辺地質分布図

２）周辺遺跡

①縄文時代　奈良丘陵の北側では木津川市の大畠遺跡で突帯文期の流路が調査されているほか[注5]、奈良丘陵上にある奈良市の秋篠・山陵遺跡で晩期の土器埋設遺構や流路が調査されている[注6]。精華町全体を検索とすると、椋ノ木遺跡で炉跡・貯蔵穴や突帯文を中心とする中期末～晩期の土器が出土しているほか[注7]、大福寺遺跡では石匙が出土している[注8]。

②弥生時代　今回の調査地に近い、精華町の乾谷遺跡では石包丁が採集されている[注9]。木津川市にある現在では相楽山遺跡とされている地点では、丘陵の造成中に扁平紐式六区画袈裟襷文銅鐸が発見されている[注10]。銅鐸の埋納に関わった集落と考えられているのが、東の丘陵下に位置する木津川市の大畠遺跡であり、弥生時代中期の竪穴建物や方形周溝墓が調査されている[注11]。弥生時代後期では、木津川市の上人ケ平遺跡で竪穴建物跡などの集落が確認されている[注12]。

③古墳時代　相楽郡の木津川左岸で造られる最初の顕著な古墳は木津川市の瓦谷１号墳である[注13]。全長が51mある４世紀後半の前方後円墳で、使用されている埴輪が佐紀盾列古墳群と同一であるなどの特徴をもつが、その後しばらく目立った古墳が造られず中期に入ってようやく吐師七ツ塚古墳群や上人ケ平古墳群といった、中小規模の群集する古墳群が造られる。

上人ケ平古墳群は５世紀後半～６世紀前半の円墳や方墳が計17基確認されており、特徴的に円筒埴輪や家形をはじめとする形象埴輪が豊富である[注14]。吐師七ツ塚古墳群は５世紀代を中心とするもので、帆立貝形と方形の墳形を有しており[注15]、鏡・馬具など遺物が出土している。後期には音乗谷・白山・坊谷といった古墳が造られる[注16]。音乗谷古墳は６世紀前半の前方後円墳で、全長22mである[注17]。坊谷古墳は露出した横穴式石室が確認されており、墳丘については15m程度の円墳と考えられているが、前方後円墳の可能性も残している[注18]。奈良市の押熊王墓は径15m程度の円墳と考えられており、仲哀天皇の皇子である忍熊王に関わる古墳であるとの伝承がある。

古墳時代の集落としては、上人ケ平遺跡では前期～中期の竪穴建物と掘立柱建物が多数調査されている[注19]。大畠遺跡では古墳時代後期の掘立柱建物で構成される集落が確認されているのに加え、前期集落の存在も指摘されている[注20]。

④律令時代　石のカラト古墳は、奈良県との府県境上に位置しており、京都府側ではカザハヒ（風灰）の名称がある。発掘調査の結果、横口式石槨を有する上円下方墳であり、平城宮遷都前後である８世紀初頭の年代が与えられている[注21]。平城京遷都に際して、奈良丘陵周辺には瓦を供給するための官営工房群が展開しており、一体として「奈良山瓦窯群」と評価する向きもある[注22]。今回の調査地周辺では乾谷窯跡群と得所瓦窯群がある。乾谷瓦窯群では、確認されている２基のうち１基の発掘調査が行われており、半地下式の登窯であることが確認されている[注23]。一方の得所瓦窯群は平窯で、露出していた１基が確認されている。出土した瓦は平城京内で使われた８世紀中頃のものである。樋ノ口遺跡では奈良時代の築地や掘立柱建物が検出され、さらに平城宮式瓦や奈良三彩などの特徴的な遺物が出土している。孝謙天皇の行幸に関わる離宮に充てる説と山田寺に充てる説がそれぞれ提出されている[注24]。

⑤中近世　乾谷城山城跡は、谷筋が交差する位置の丘陵上にある。曲輪や堀切の存在が確認さ

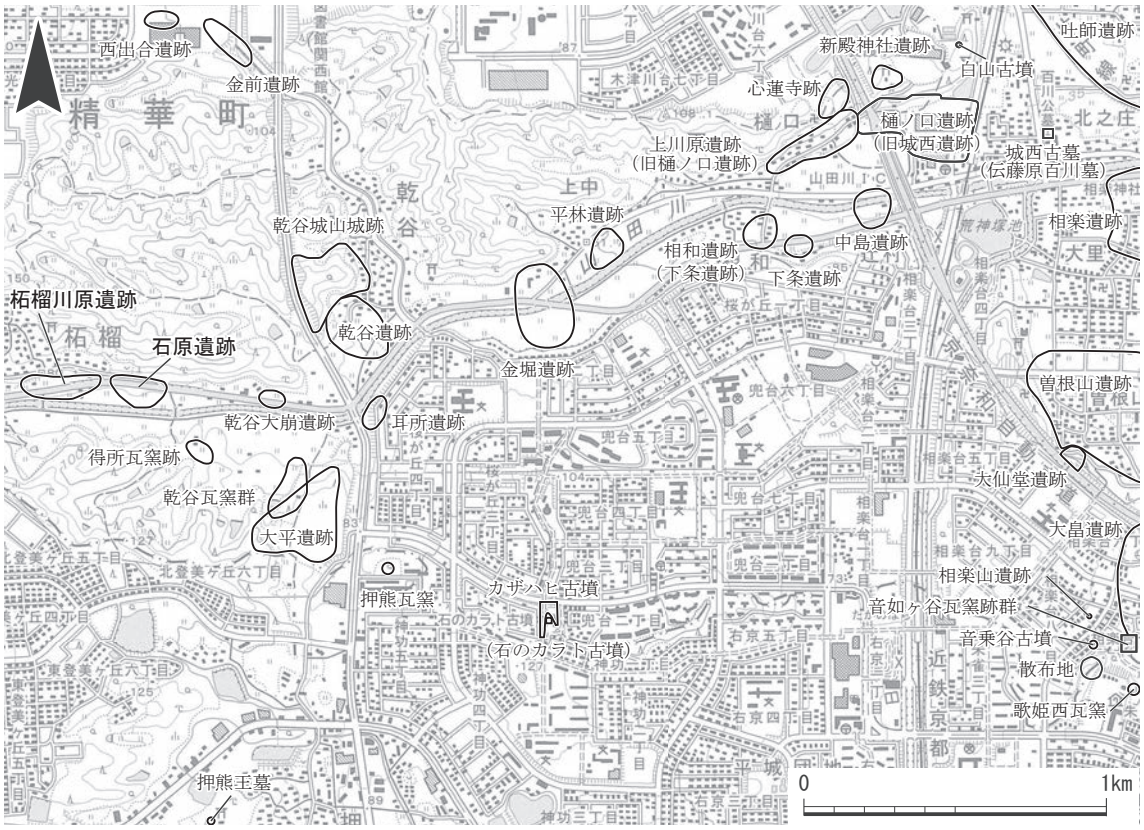
れる中世城跡である[注25]。今回の調査地とも近い乾谷遺跡では17世紀初めの畦畔で区画された水田と室町時代後半の遺物を含む堆積層が、乾谷大崩では中世から近世の畦畔を伴う水田が見つかっている[注26]。

３）歴史的環境

①文献　13世紀後半に作成された「大和国添下郡京北班田図」によると、現在の精華町柘榴・乾谷周辺は山城国に属しており、柘榴付近は「四条六里遊師里」とされていたことが分かる。また山田川の名称は「相楽川」であったようである。偽文書とされる「椿井文書」の１つではあるが、嘉吉元（1441）年の『興福寺官務牒疏』には、道昭が大化２（646）年に創建した「山田寺」がみえる。先述のとおり樋ノ口遺跡を「山田寺」に充てる考えがある。

平安時代以降には山田川周辺は荘園地となっているが[注27]、主要な街道に面しているため度々戦乱の舞台となっており、永正４（1507）年には大和勢との戦闘で柘榴村が焼かれている（「多聞院日記」永正４年10月１日条）。後の江戸時代には禁裏や寺社領となっている。

②行政　元禄郷帳（1700～02年）に柘榴村の名前がみえ、明治22（1889）年の町村制施行時には乾谷・山田・東畑の各村と合併して山田荘村となる。昭和26（1951）年に川西村と合併して精華村、昭和30（1955）年に現在の町制へと移行している。　（加藤雅士）



第４図　周辺遺跡分布図

（1）柘榴川原遺跡

1．はじめに

柘榴川原遺跡は相楽郡精華町柘榴末が平地先に所在し、山田川中流域の左岸に立地している。周辺は段丘が発達したやや開けた河谷である。当該遺跡では、遺物の散布が確認されていたが、過去に調査例はなく、本発掘調査が第1次調査となる。

今回の調査地は遺跡範囲の中央部分に位置する。調査区は国道163号の南側に5か所（1～5トレンチ）、北側に4か所（6～9トレンチ）の合計9か所に設定した。調査は令和4年12月8日から令和5年2月28日にかけて実施した。調査面積は900㎡である。

2．発掘調査の概要

1）基本層序

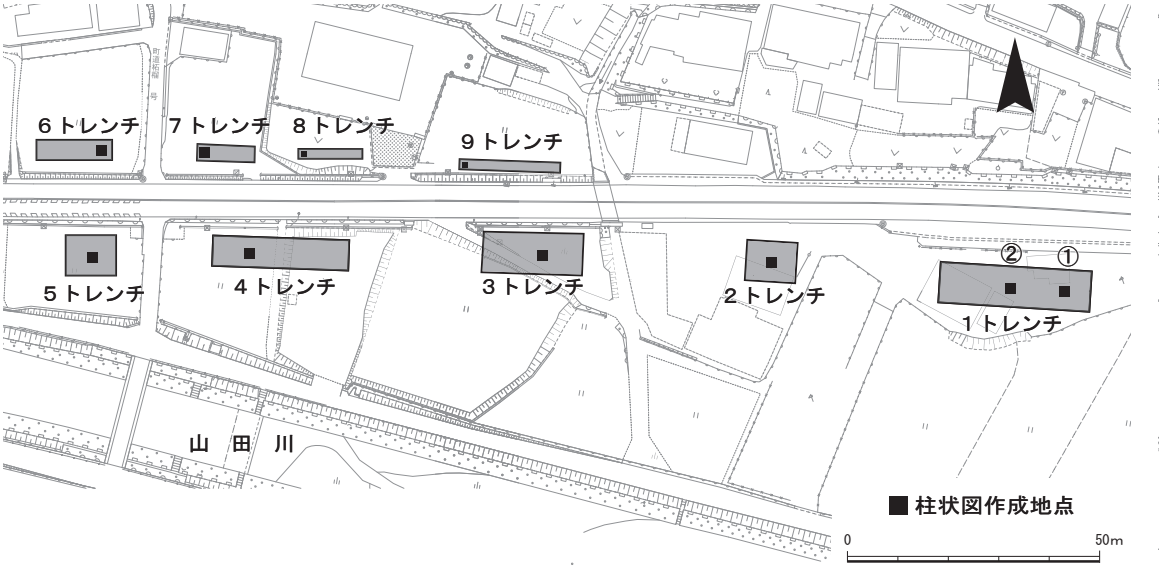
国道163号の北側（1～5トレンチ）と南側（6～9トレンチ）の調査区に分けて各トレンチの柱状図を示す（第6図）。柱状図の作成位置は第5図に示している。なお、1トレンチは東側（①）と西側（②）で堆積状況が異なるため2か所で柱状図を作成した。また、出土遺物が数少なかったため、炭化物を検出した層位で放射性炭素年代測定を実施した。放射性炭素の測定結果については、付編1として掲載している。

1～5トレンチ

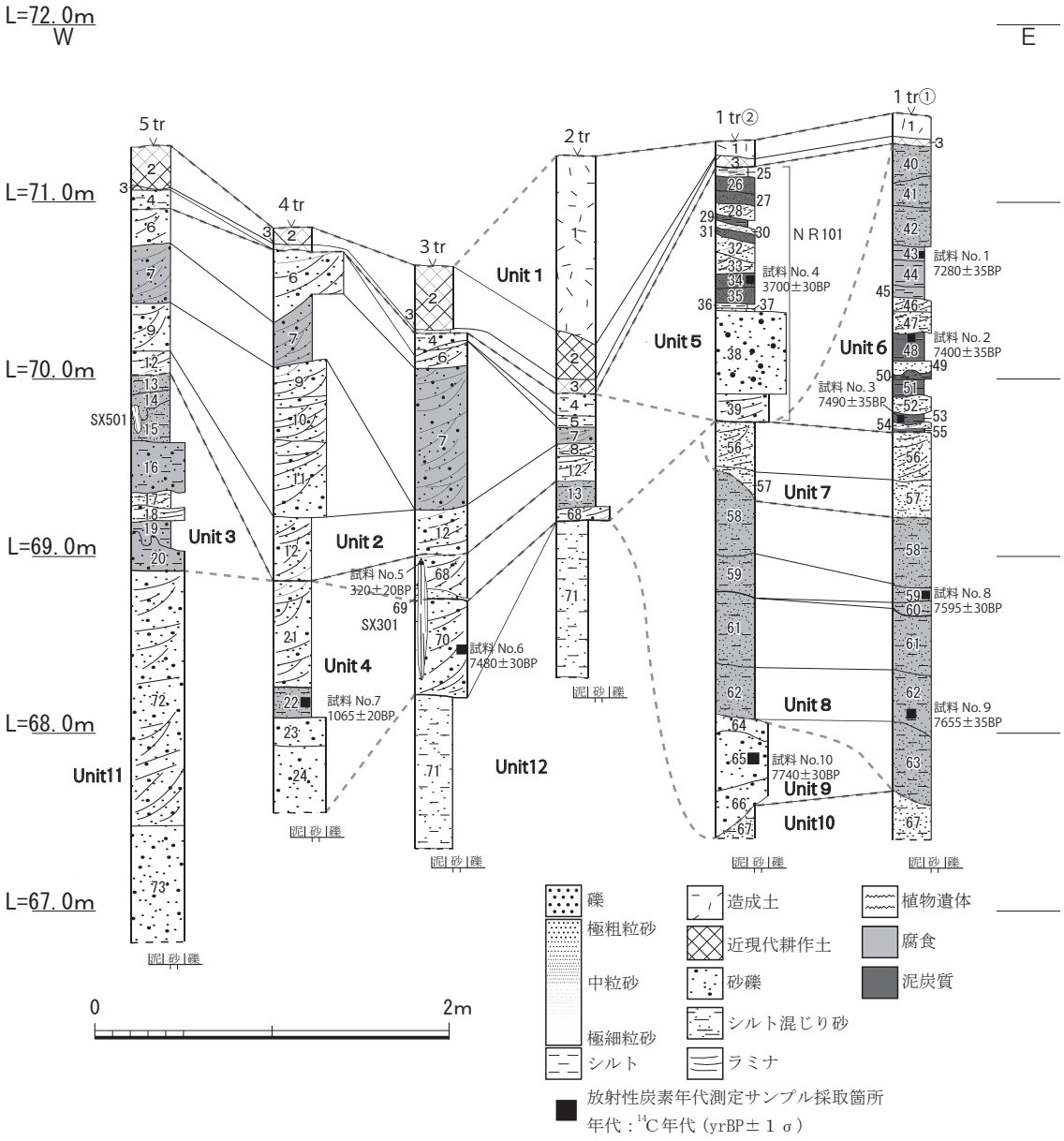
1～5トレンチでは、12の堆積ユニット（以下、堆積を省略）に区分できる。

ユニット1は現代の造成土、近現代の耕作土であり、全ての調査区で確認した（1～3層）。

ユニット2はラミナが発達した礫混じりの粗粒砂から細粒砂である（4～12層）。7層は土壌化しており安定的な状況を示す。2トレンチから5トレンチで確認でき、各堆積層の厚さは異なるが、層序は各トレンチで共通しており、洪水による河川流路堆積である。4～12層は5トレンチ



第5図　柘榴川原遺跡調査区配置図



１．造成土
２．暗褐色(10YR3/3)細粒砂混じりシルト　表土　現代耕作土
３．褐灰色(10YR6/1)シルト　床土　現代耕作土
４．褐灰色(10YR5/1)粗～細粒砂混じりシルト〈マンガンが斑点状に沈着〉耕作土
５．褐灰色(10YR5/1)細粒砂混じりシルト　耕作土
６．にぶい黄橙色(10YR7/3)粗～細粒砂〈径1～100mmまでの礫含む、マンガン沈着、ラミナ形成〉
７．にぶい黄橙色(10YR6/4)粗～細粒砂〈径1～10mmまでの礫含む、斑点状にマンガン沈着、ラミナ形成、土壌化〉
８．浅黄色(10YR7/4)細粒砂〈ラミナ形成〉
９．灰白色(10YR8/2)粗～細粒砂〈径１～10mmまでの礫含む、ラミナ形成〉
10．灰白色(10YR8/2)粗～細粒砂〈ラミナ形成〉
11．灰白色(10YR8/1)粗～細粒砂〈径1～30mmまでの礫含む、ラミナ形成〉
12．にぶい橙色(10YR7/3)粗～細粒砂〈径1～50mmまでの礫含む、ラミナ形成、ラミナに沿ってマンガン沈着〉
13．褐灰色(7.5Y6/1)シルト混じり細粒砂〈シルトと細粒砂が層状に混じる〉水田土壌
14．明褐灰色(7.5Y7/1)細粒砂〈シルトと細粒砂が塊・層状に混じる〉水田土壌
15．褐灰色(7.5Y5/1)シルト混じり細粒砂〈シルトと細粒砂が塊・層状に混じる。径1～10mmまでの礫含む〉水田土壌
16．褐灰色(7.5Y6/1)シルト混じり粗～細粒砂〈シルトと粗～細粒砂が塊・層状に混じる。径1～10mmまでの礫含む〉水田土壌
17．浅黄色(2.5Y7/4)細粒砂〈ラミナ形成〉洪水堆積
18．黄灰色(2.5Y6/1)粗～細粒砂〈径1～30mmまでの礫含む、ラミナ形成〉洪水堆積
19．黄灰色(2.5Y5/1)粗～細粒砂混じりシルト〈シルトと粗～細粒砂が塊状に混じる。径1～10mmまでの礫、炭含む〉耕作土
20．黄灰色(2.5Y4/1)シルト混じり粗～細粒砂〈シルトと粗～細粒砂が塊状に混じる。径1～10mmまでの礫含む〉耕作土
21．灰白色(10YR8/1)粗～細粒砂〈径1～20mmまでの礫含む、ラミナ形成、ラミナに沿ってマンガン沈着〉河岸段丘構成層
22．褐灰色(10YR6/1)細粒砂混じりシルト〈斑状にマンガン沈着、炭含む、土壌化〉河岸段丘構成層

第６図　１～５トレンチ柱状図

第６図土層名の続き

26. 黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂混じりシルト〈白灰色(2.5YR7/1)細砂と炭化した植物遺体がラミナ形成〉NR101埋土
27. 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混じりシルト〈白灰色(2.5YR7/1)細砂と炭化した植物遺体がラミナ形成〉NR101埋土
28. 浅黄色(2.5Y7/3)細粒砂〈ラミナ形成〉NR101埋土
29. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト〈炭化した植物遺体がラミナ形成〉NR101埋土
30. 灰白色(2.5Y7/1)細粒砂〈ラミナ形成〉NR101埋土
31. 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混じりシルト〈炭化した植物遺体がラミナ形成〉NR101埋土
32. 浅黄色(2.5Y7/3)細粒砂〈ラミナ形成〉NR101埋土
33. 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混シルト〈ラミナ形成〉NR101埋土
34. 灰白色(2.5Y7/1)細粒砂〈植物遺体多く含む〉NR101埋土
35. 灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂〈植物遺体がラミナ形成〉NR101埋土
36. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト〈ラミナ形成〉NR101埋土
37. 灰白色(2.5Y7/1)細粒砂〈ラミナ形成〉NR101埋土
38. 黄褐色(10YR5/8)礫～細粒砂〈ラミナ形成、一部に土砂流〉NR101埋土
39. 明黄褐色(10YR6/8)粗～細粒砂〈(褐灰色(10YR5/1)シルトを縞状に含む、ラミナ形成〉NR101埋土
40. 浅黄橙色(10YR 8/4)細粒砂混じりシルト〈マンガン、植物痕含む、土壌化〉旧耕作土
41. 灰白色(10YR8/1)細粒砂混じりシルト〈斑点状にマンガン沈着、植物痕含む、土壌化〉
42. 灰白色(10YR8/2)細粒砂混じりシルト〈斑点状にマンガン沈着、植物痕含む、土壌化〉
43. 黒褐色(10YR3/1)シルト〈植物痕含む、土壌化〉
44. 灰黄褐色(10YR6/2)シルト〈植物痕含む、斑点状にマンガン含む、土壌化〉
45. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト〈植物痕含む、土壌化〉
46. 灰白色(10YR8/2)細粒砂〈ラミナ形成〉
47. にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト混じり細粒砂〈ラミナ形成〉
48. 褐灰色(10YR4/1)シルト〈木、植物遺体痕含む〉
49. 灰白色(10YR8/2)細粒砂
50. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト混じり細粒砂
51. 褐灰色(10YR5/1)シルト〈斑点状にマンガン沈着〉
52. にぶい黄橙色(10YR7/3)シルト混じり細粒砂
53. 褐灰色(10YR5/1)シルト〈植物遺体含む〉
54. にぶい黄橙色(10YR7/3)細粒砂〈ラミナ形成〉
55. 黒褐色(2.5Y3/1)シルト
56. 灰白色(2.5Y8/2)細粒砂〈ラミナ形成〉
57. 明黄褐色(10YR6/6)シルト混じり細粒砂〈マンガン沈着、土壌化〉
58. 灰白色(2.5Y７/1)シルト混じり細粒砂〈植物痕、土壌化〉
59. 灰白色(2.5Y8/2)シルト混じり細粒砂〈土壌化〉
60. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト混じり細粒砂〈浅黄色(2.5Y7/3)細粒砂と互層、グライ化層わずかに土壌化〉
61. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト混じり細粒砂〈炭含む、グライ化層わずかに土壌化〉
62. 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混じりシルト〈炭含む、グライ化層わずかに土壌化〉
63. 黄灰色(2.5Y6/1)シルト混じり細粒砂〈炭含む、グライ化層わずかに土壌化〉
64. 灰白色(2.5Y7/1)粗～細粒砂　段丘構成層
65. 黄灰色(2.5Y5/1)粗～細粒砂〈植物(木)含む〉段丘構成層
66. 明黄褐色(2.5Y6/8)粗～細砂粒〈径1～30㎜の礫含む〉段丘構成層
67. 黄灰色(2.5Y6/1)シルト混じり細粒砂　段丘構成層
68. にぶい黄橙色(10YR5/4)粗～細粒砂〈径1～５ｍｍまでの礫含む、ラミナ形成、ラミナに沿ってマンガン沈着〉
69. 黄褐色(10YR5/8)細粒砂〈径1～10㎜の礫、褐灰色（10YR4/1)シルトのラグ含む〉
70. 浅黄橙色(10YR8/4)粗～細粒砂〈ラミナ形成、固く締まる〉段丘構成層
71. 褐灰色(10YR5/1)細粒砂混じりシルト〈固く締まる、同色のシルトと細粒砂をマーブル状に含む〉大阪層群
72. 明黄褐色(2.5Y6/6)粗～細粒砂〈径1～40㎜までの礫、シルトのラグ含む、マンガン沈着、ラミナ形成〉
73. 灰黄色(2.5Y7/2)粗～細粒砂〈径1～50㎜までの礫含む〉

で検出された近世の水田層の上層に堆積しており、近世以降の洪水層と判断できる。

ユニット３は礫混じりの粗粒砂からシルトで構成される(13～20・68・69層)。本来はユニット２と同様に水性堆積層で、洪水による堆積であるが、２トレンチと５トレンチでは、耕作土および水田として利用されていた。３トレンチでは谷部に堆積し、室町時代の木製構造物を埋没させる(68・69層)。出土遺物から、室町時代後半から江戸時代の年代と考えられる。

ユニット４は４トレンチで検出したシルト混じりの砂礫層である(21～24・70層)。22層(試料No.７)の放射性炭素の年代は９世紀末から11世紀後半であり、平安時代前期から中期に対比される。70層(試料No.６)は炭化物を含んだ砂礫層である。放射性炭素年代測定の結果は、約8,200～8,300年前で、縄文時代早期後葉に比定される。いずれも扇状地性の河川流路堆積物である。22層と70層で放射性炭素の年代値が逆転しているのは、谷地形の内部に堆積した層位であるためと考えられる。

ユニット５～10は１トレンチのみで確認された堆積層である。

ユニット５は自然流路ＮＲ101の河川流路堆積物である(25～39層)。25～37層は細粒砂と泥炭

質シルトの互層でレンズ状に堆積している。細粒砂ではラミナが発達し、泥炭質シルトでは枝葉を主とした植物遺体を多量に含む。最下層の38・39層は砂礫層であり、トラフ型斜行葉理が発達する。また、一部には土砂流の堆積物も認められる。34層（試料No.４）で放射性炭素年代測定を実施したところ約4,000年前であり、縄文時代後期前葉に比定される。

ユニット６は灰白色の細粒砂と泥炭質シルトが互層に水平堆積した層である（40～54層）。下層の細粒砂層では波状ラミナが形成されている。上層に向かうにつれて土壌化が進み、泥炭層は薄くなる。植物痕跡、樹根、植物擾乱を確認しており、植生の存在を確認した。放射性炭素年代測定を実施したところ、43層（試料No.１）では約8,100年前、48層（試料No.２）では約8,200～8,300年前、53層（試料No.３）では約8,300年前であり、全て縄文時代早期後葉の年代値を示した。

ユニット７はシルト混じりの細粒砂層である（56・57層）。粒径の細かい堆積層であり、56層では平行ラミナが形成されており、水中堆積と考えられる。

ユニット８はシルト混じりの細粒砂層（58～63層）である。58・59層は土壌化しており、細粒砂や有機質の薄層を挟む。60～63層は灰色のグライ化層であるが、わずかに黄色味がかっており、土壌化している。放射性炭素年代測定を行った結果、59層（試料No.８）で約8,400年前、62層（試料No.９）で約8,400～8,500年前で縄文時代早期後葉の年代値を示した。

ユニット９は砂礫層である（64～66層）。段丘礫と考えられる。65層には植物遺体を含む。65層（試料No.10）の放射性炭素年代は約8,500年前であり、縄文時代早期後葉の年代値であった。

ユニット10は１トレンチの最下層で検出したシルト混じりの細粒砂層である（67層）。ユニット９と不整合をなす。

ユニット11は５トレンチの最下層で検出した砂礫層である（72・73層）。扇状地性河川流路に相当する。ユニット4と11は隣接する調査区で検出された扇状地性河川流路であるが、層位の対応関係については不明である。

ユニット12は３トレンチと２トレンチの最下層で検出した71層である。２・３トレンチの最下層で検出した青灰色の固く締まったシルト層であり、大阪層群と考えられる。

このように、１トレンチのみ層序と堆積ユニットが異なる。ユニット３～10は段丘の構成層と考えられる。ユニット７～５では水性堆積層であり、水位の変動と堆積環境の変化を読み取ることができる。

放射性炭素年代測定の結果、ユニット４・６・８・９では縄文時代早期後葉の年代値を示しており、1トレンチのユニット６～９は縄文時代早期後葉にかけて一連に堆積し、現状の地形を形成した。その後、縄文時代後期前葉までには自然流路ＮＲ101が形成されることが判明した。

３トレンチの70層からも縄文時代早期後葉の年代値を得ており、１トレンチにおいてユニット６が形成されるのと同時期に周辺一帯においても堆積が進む環境下であったと考えられる。

２～５トレンチでは、ユニット１～４・11・12が共通する層序となる。ユニット４・11はユニット３・２へと上層に向かって連続してゆく。ユニット２の堆積状況から、近世以降に周辺一帯が洪水で埋没した様相を窺うことができる。各トレンチで下層の堆積状況が異なっているのは、

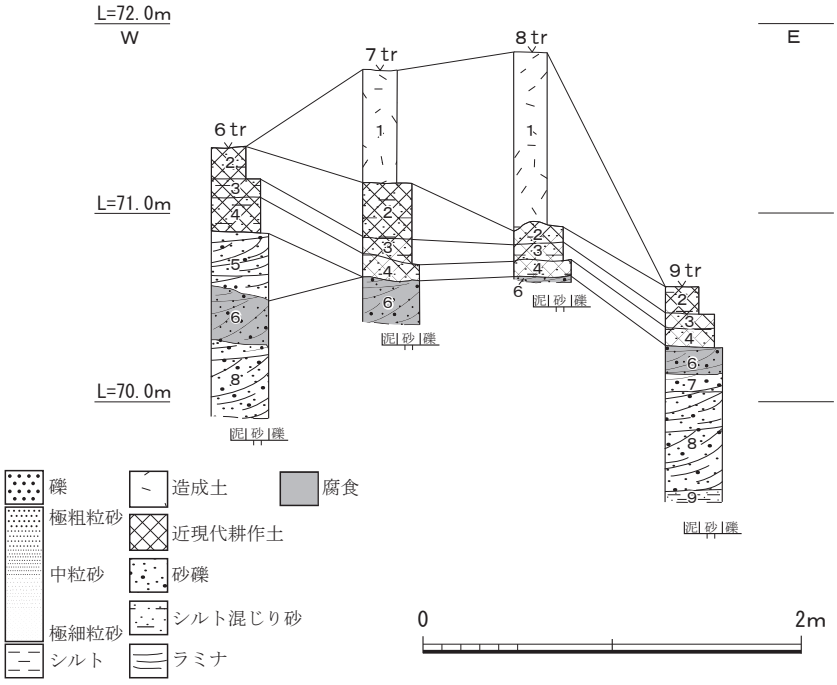
基盤となる地形が異なることに起因していると考えられ、小規模な谷や段丘など、微細な地形が埋没していると考えられる。また、遺構の検出数が少なく、人間活動が限定的であることも地形に起因すると考えられる。

６～９トレンチ

６～９トレンチの層序は共通しており、南側の１～５トレンチとも対応する。そのため同一のユニットで区分を行う。ユニット１は近現代耕作土であり、全ての調査区で確認できた（２・３・４層）。ユニット２はラミナが発達した砂礫層であり、水性堆積層である（５～８層）。６層は土壌化しており安定的な状況を示している。南側調査区の２～５トレンチの４～12層と対応する。９トレンチの最下層で検出した青灰色のシルト層は大阪層群と考えられ、ユニット12に対応する（９層）。

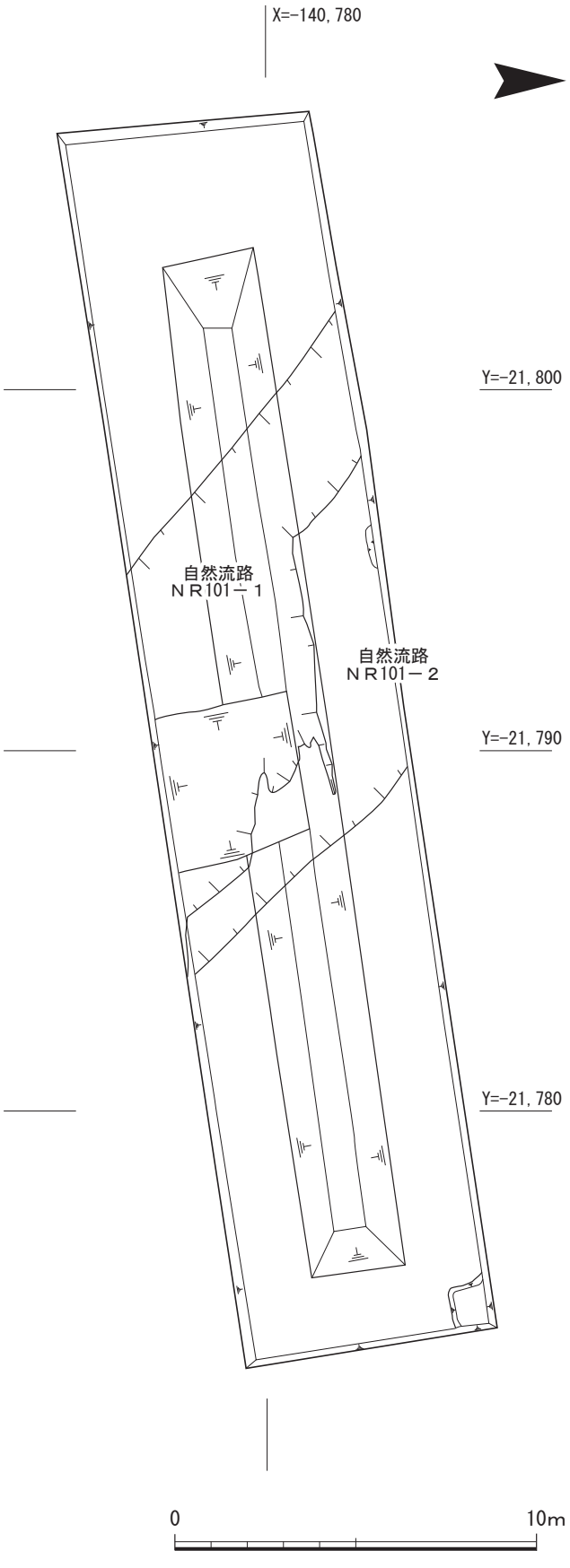
２）１トレンチ

現地表面の標高は71.56ｍを測る。表土である造成土の直下より、調査区の中央部から西部では、標高71.32～69.40ｍで自然流路ＮＲ101を検出した。また、調査区の中央部から東部では、灰白色の細粒砂と泥炭質シルトが互層に水平堆積した自然堆積層を検出した（40～54層）。標高71.32～70.38ｍ付近までは各層位は土壌化しており、マンガンの沈着や植物痕を確認した。標高70.38～69.70ｍ付近までは、有機物の腐食により、泥炭化した黒色シルト層と灰白色の砂層が交互に堆



１．造成土
２．現代耕作土
３．床土
４．旧耕作土
５．にぶい黄橙色（10YR7/3）粗～細粒砂〈径1～100ｍｍまでの礫含む、ラミナ形成、ラミナに沿ってマンガン沈着〉
６．にぶい黄橙色（10YR6/4）粗～細粒砂〈径1～10ｍｍまでの礫含む、斑点状にマンガン沈着、ラミナ形成、土壌化〉
７．灰白色（10YR8/2）粗～細粒砂〈径１～10ｍｍまでの礫含む、ラミナ形成〉
８．にぶい黄橙色（10YR7/3）粗～細粒砂〈径１～50ｍｍまでの礫含む、ラミナ形成、ラミナに沿ってマンガン沈着〉
９．褐灰色（10YR5/1）細粒砂混じりシルト〈固く締まる、同色のシルトと細粒砂をマーブル状に含む〉大阪層群

第７図　６～９トレンチ柱状図



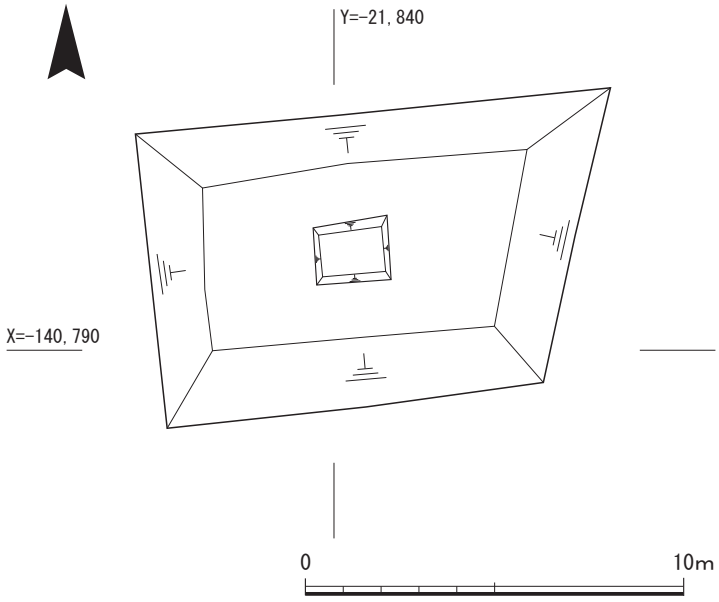
第８図　１トレンチ平面図

積した互層を呈する。灰白色砂層は細粒砂が波状ラミナを形成している。各層位には植物痕や樹根、植物擾乱が認められ、植生の存在を確認した。また、層理面が水平ではなく、波状を呈するのは、後世の地震による変形と推測される。標高69.50m付近からは白色の細粒砂層となる。平行ラミナを形成しており、水中の堆積構造を示す。このように、40～54層は一連の堆積層であり、下層の湖沼底堆積から上層にかけて氾濫原堆積物へと漸移していく様相が確認できる。

調査区の中央部において、重機による掘削を行った結果、標高69.00～67.40m付近で土壌化したシルト層(58～63層)を検出した。また、標高68.11m付近で砂礫層(64～66層)を検出した。62層と不整合となっている。段丘礫と考えられる。標高67.64m付近ではシルト混じりの細粒砂層を確認した(67層)。66・63層とは不整合である。標高67.40mまで掘削したが、遺構・遺物は認められなかった。

１トレンチの所在地は周辺の水田よりも標高が２m程度高く、周囲はコンクリートの擁壁で保護されていたが、縄文時代早期後葉に形成された自然地形であり、舌状に張り出す段丘の一部であることが判明した。

自然流路ＮＲ101　調査区の中央部から東部、標高71.32～69.40mで検出した自然流路である。古流向は北西から南東方向である。放射性炭素年代測定の結果、縄文時代後期前葉の堆積物を含む旧河道である。ＮＲ101の埋土は、河川流路堆積物であるユニット５(25～39層)で充填



第９図　２トレンチ平面図

されている。最下層の38・39層は砂礫層であるが、37層から25層では細砂と植物遺体を多量に含む泥炭質シルトがレンズ状に相互に堆積していることから、上層に向かうにつれ、流路幅が狭まり、水流も弱くなり、埋没してゆく様子が観察できる。

ＮＲ101は、基盤層となる調査区西側の自然堆積層（ユニット６）を削平している。また、自然流路と基盤層の層界では、砂礫が楔状に貫入し、基盤層が塊状に遊離しており、地震による変形が考えられる。

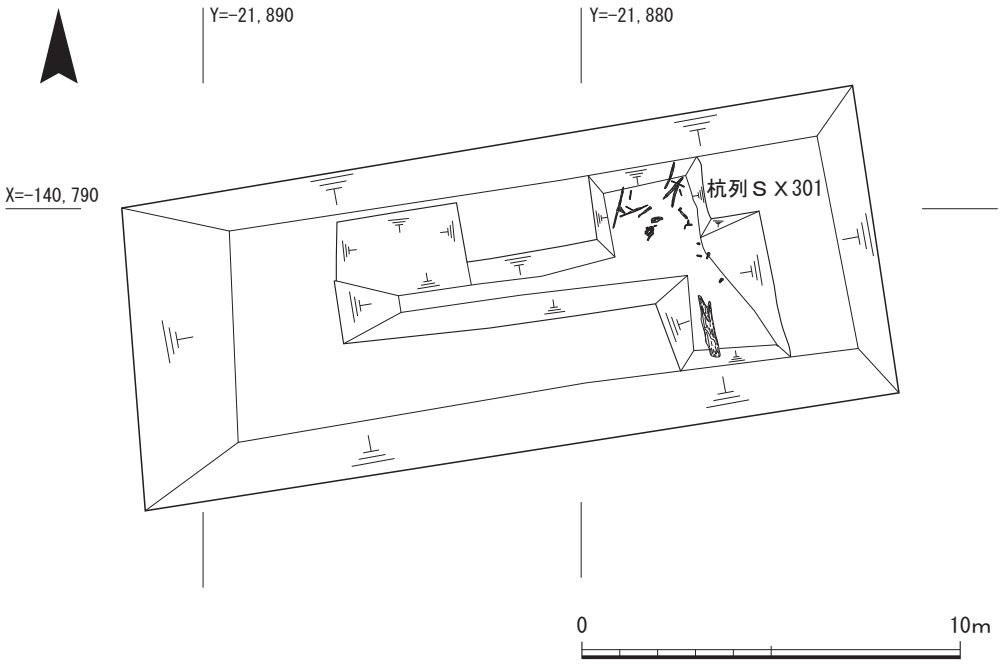
３）２トレンチ

現地表面の標高は71.36ｍを測る。表土から標高70.15m付近までは客土による造成が行われており（１層）、造成土の下層では黒褐色の近現代の耕作土層（２・３層）を検出した。標高69.92～69.74m付近からは粗粒から細粒砂混じりのシルト層を検出した（４・５層）。土色の異なるシルトや細砂が塊状に混じっているため、耕作土であると判断した。耕作土中からは近世の磁器、陶器などが出土した。標高69.74～69.21m付近で洪水砂層（7・8・12層）を検出した。標高69.42m付近はマンガンの沈着により褐灰色を呈する、土壌化した細砂混じりのシルト層（13層）であるため、水田土壌と考えられる。標高69.80m付近はラミナを形成する砂礫層（68層）であり、水性堆積層である。標高69.21m付近から下層は硬く締まった青灰色のシルト層（71層）であり、大阪層群と考えられる。

４）３トレンチ

現地表面の標高は70.72ｍを測る。表土から標高70.10m付近までは近現代の耕作土（２・３層）を確認した。近現代耕作土から下層の標高70.25～68.75m付近では洪水砂層を検出した（６・７・12・68・69層）。68・69層中からは杭列ＳＸ301を検出した。標高68.75m付近からは硬く締まった砂礫層（70層）を検出した。標高68.20m付近から下層は硬く締まった青灰色のシルト層（71層）であり、大阪層群と考えられる。

杭列ＳＸ301　調査区の東側で杭列ＳＸ301を検出した。杭列は70層に打設されており、洪水による堆積層である68･69層に埋没していた。北西から南東方向に1列に並んでおり、検出長2.9m、合計11本が出土したが、調査区外へも続くと考えられる。杭列周辺の精査を行ったが、溝などの遺構を検出することはできなかった。杭は最大長80cm、最大幅９cmの大型の杭であり、広葉樹



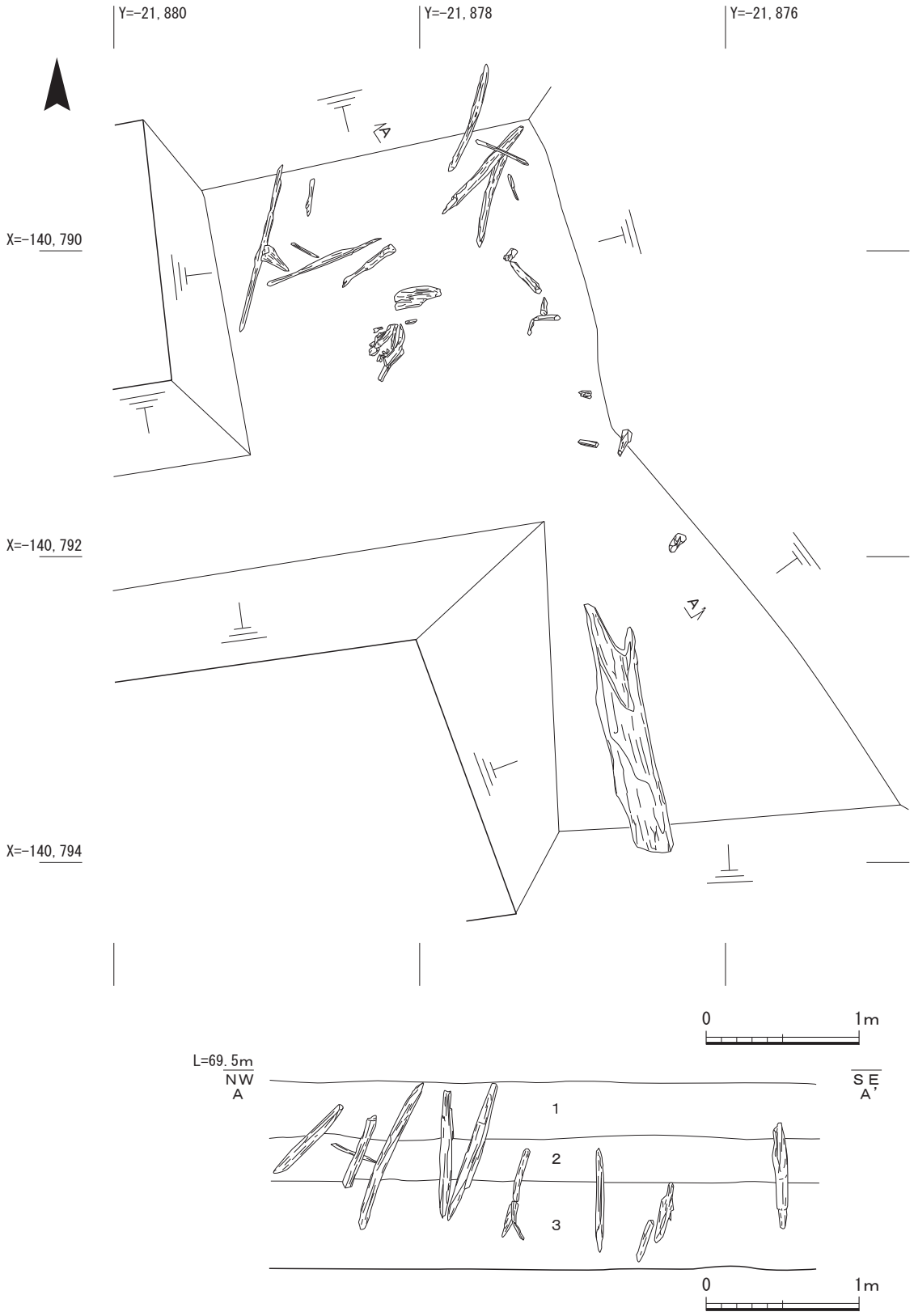
第10図　３トレンチ平面図

材を用いる。杭の間からは、木材と繊維状の有機物を検出した。残存状態が悪いため詳細は不明であるが、しがらみ状の構造物であったと推測される。また、直径30cmの大型の丸木材や小径木の丸木材を検出した。68層の杭列の周辺から土師器皿と瓦器椀の小片が出土したが、杭列の年代を確認するため、杭の最終形成年輪の放射性炭素年代測定を実施した（試料No.５）ところ、室町時代後期から江戸時代前期の年代が得られた。

調査区内では、70層が東に向けて低く傾斜する地形を呈しており、谷状の地形と考えられる。また、杭列を埋める68・69層も西から東に向けて厚く堆積しており、谷地形の高低差に沿って堆積していると考えられる。このように、杭列ＳＸ301は谷地形を一部改変して、水流を利用するための構造物であったと考えられる。現在も３トレンチの東側は狭小な谷地形であり、柘榴集落から山田川に向かう水路として利用されていることから、現代の水路の前身となる遺構と推測される。

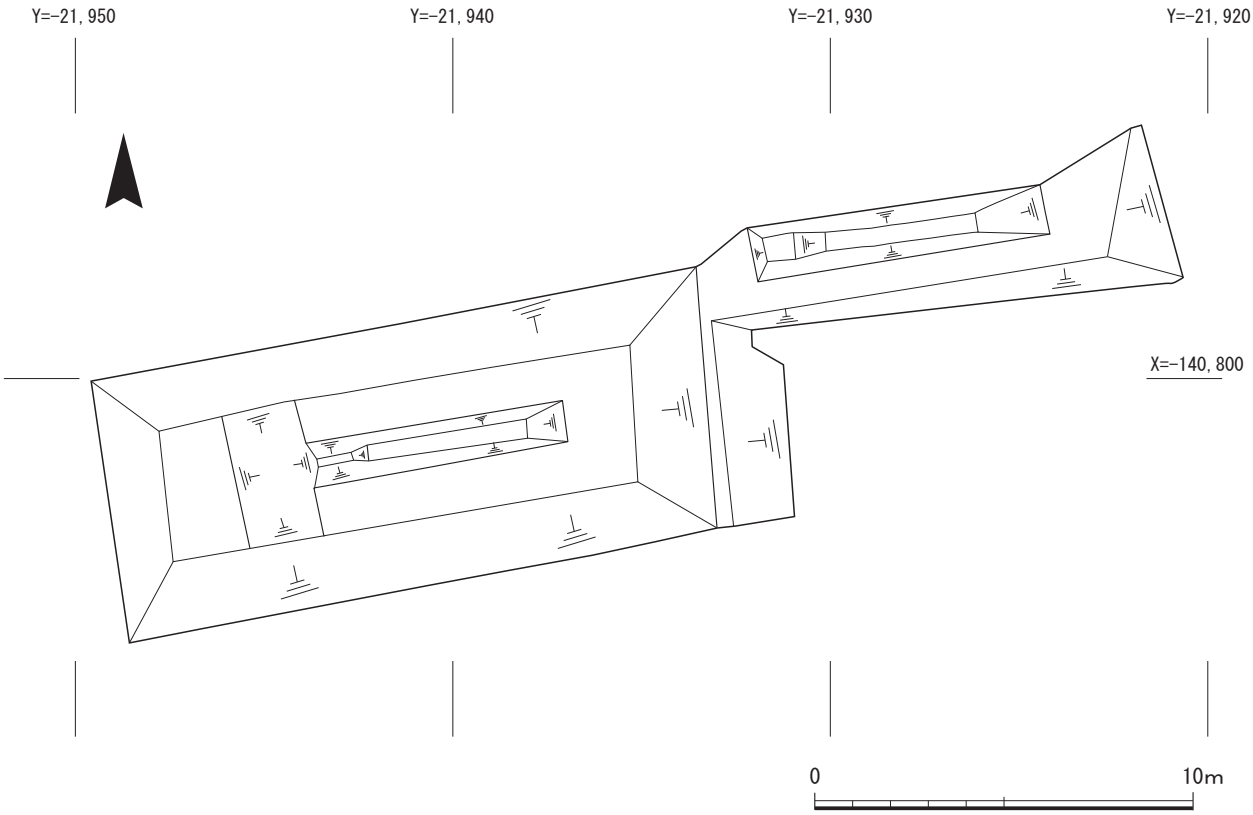
５）４トレンチ

現地表面の標高は東側で72.00m、西側で70.86mを測る。1.14mの高低差を有する。調査区東側では表土から標高70.19m付近までは現代の造成土を検出した。４トレンチの高低差は東側が客土による現代の造成が行われた結果であり、本来は平坦な地形であることを確認した。調査区西側では、表土から標高70.70m付近までは近現代耕作土（２・３層）を確認した。標高70.70mから68.26m付近までは、ラミナの発達する洪水砂層である（６・７・９・10・11・12・21層）。調査区西側において、重機による掘削を行った結果、標高68.26～68.09m付近で土壌化したシルトが混じる砂層（22層）を検出した。標高68.09m付近で砂礫層（23・24層）を検出した。標高67.54mまで掘削を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。



1．にぶい黄橙色(10YR5/4)粗～細粒砂〈径1～５㎜までの礫含む、ラミナ形成、ラミナに沿ってマンガン沈着〉
2．黄褐色(10YR5/8)細粒砂〈径1～10㎜の礫、褐灰色（10YR4/1)シルトのラグ含む〉
3．浅黄橙色(10YR8/4)粗～細粒砂〈ラミナ形成、固く締まる〉段丘構成層

第11図　３トレンチ 杭列SX301平・立面図



第12図　４トレンチ平面図

６）５トレンチ

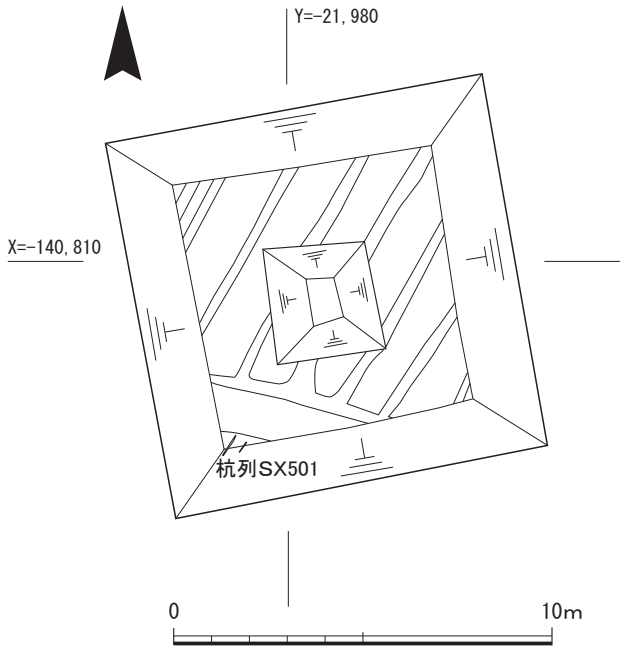
現地表面の標高は71.35ｍを測る。表土から標高70.96m付近までは近現代の耕作土（２・３層）を確認した。近現代耕作土から下層の標高70.96～70.00m付近では灰白色のラミナの発達する砂礫層である洪水砂層を検出した（４・６・７・９・12層）。

標高70.00～68.92m付近では、土壌化したシルト混じりの砂層を検出した（13・14・15・16層）。いずれの層も土色の異なるシルトと砂が塊状、層状に混ざっており、平面では、畦畔、足跡などを検出したことから、水田と考えられる。畦畔の間隔が狭いことから、小区画の水田と判断される。14・15層では杭列ＳＸ501を検出した。14層からは土師器、瓦器、陶器、磁器、木製品、漆製品などが出土しており、近世の水田であると認められた。そのほか、時期は異なるが、奈良時代の須恵器杯も出土した。15層からは土師器、陶器、木製品が出土し、16層からは漆皿と奈良時代の平瓦が出土した。

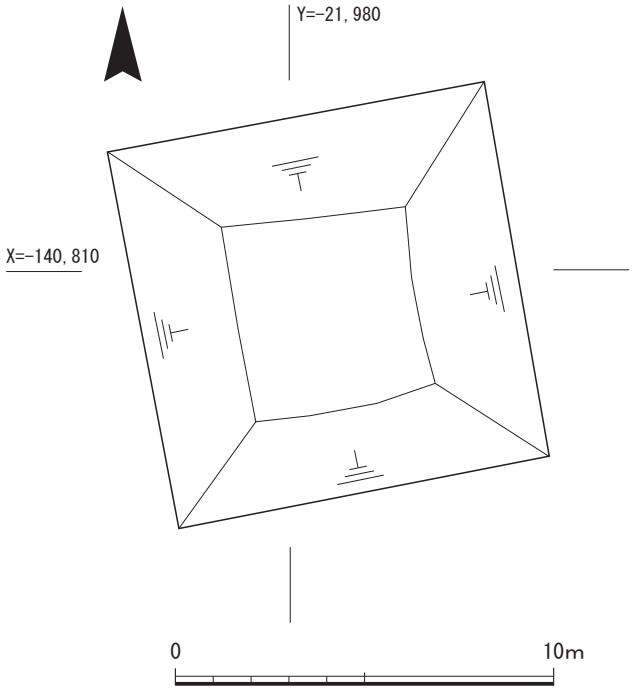
水田層の下層である標高69.38～69.18m付近ではラミナが発達する礫混じりの黄色砂層（17・18層）を検出した。洪水層であると考えられる。

標高69.18～68.92m付近では黄灰色の砂混じりのシルト層（19・20層）を検出した。 礫と炭化物とともに、シルトと砂が塊状に混じっていることから、耕作土と考えられる。畦畔が確認されず、13～16層の水田と土質が異なることから、畑であると考えられる。20層から瓦質土器と青磁の破片が出土したことから、室町時代後半の畑であり、18層の洪水によって廃絶した。

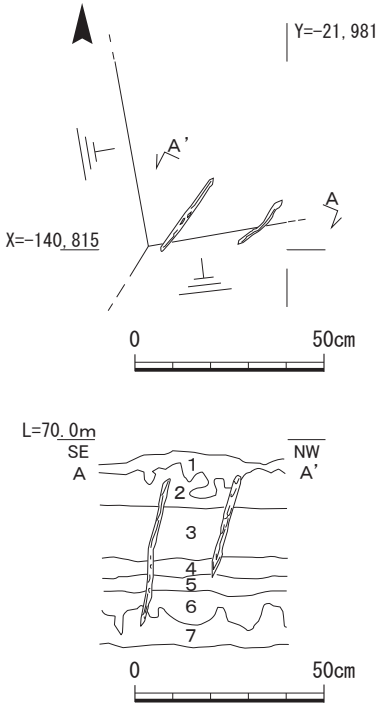
耕作土層の下層、標高68.92m付近からはラミナを形成する砂礫層（72層）となるため、段丘を



第13図　５トレンチ上層平面図



第14図　５トレンチ下層平面図

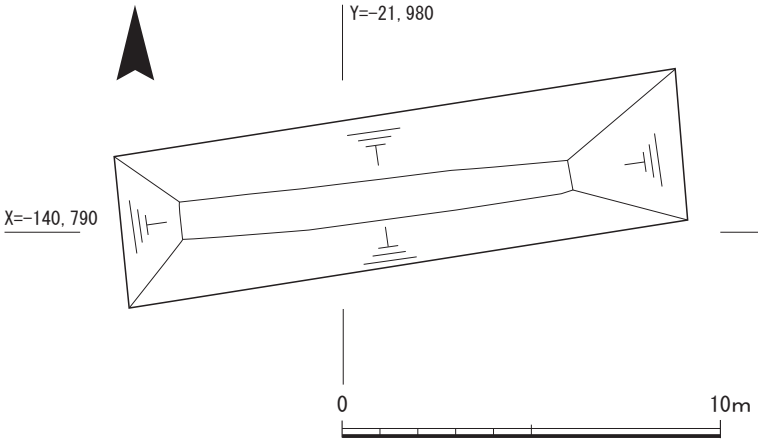


1．明褐灰色(7.5Y7/1)細粒砂　水田土壌
2．褐灰色(7.5Y5/1)シルト混じり細粒砂
〈径1～10mmまでの礫含む〉耕作土
3．褐灰色(7.5Y6/1)シルト混じり粗～細粒砂
〈径1～10mmまでの礫含む〉耕作土
4．浅黄色(2.5Y7/4)細粒砂
〈ラミナ形成〉洪水堆積
5．黄灰色(2.5Y6/1)粗～細粒砂
〈径1～30mmまでの礫含む、ラミナ形成〉
洪水堆積
6．黄灰色(2.5Y5/1)粗～細粒砂混じりシルト
〈径1～10mmまでの礫、炭含む〉耕作土
7．黄灰色(2.5Y4/1)シルト混じり粗～細粒砂
〈径1～10mmまでの礫含む〉耕作土

第15図　５トレンチＳＸ01平・断面図

構成する旧河道と判断される。調査区の中央部において、重機による掘削を行った結果、標高67.49m付近で砂礫層（73層）を検出し、標高66.82mまで掘削したが、遺構・遺物は認められなかった。

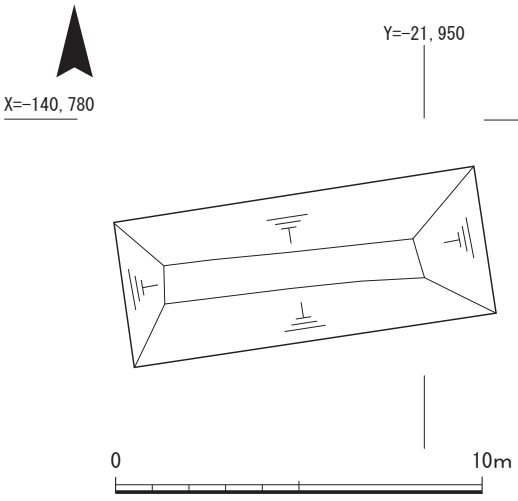
杭列ＳＸ501　調査区の南西側で杭列ＳＸ501を検出した。杭列は水田である15層に打設されており、上層の水田である14層に埋没していた。杭列は1列で東西方向に並んでおり、合計２本を検出し、検出長は0.4mを測る。杭は全長80～56cm、幅4cmの小径木を加工していた。15層の水田に伴う施設であったと考えられる。



第16図　６トレンチ平面図

７）６トレンチ

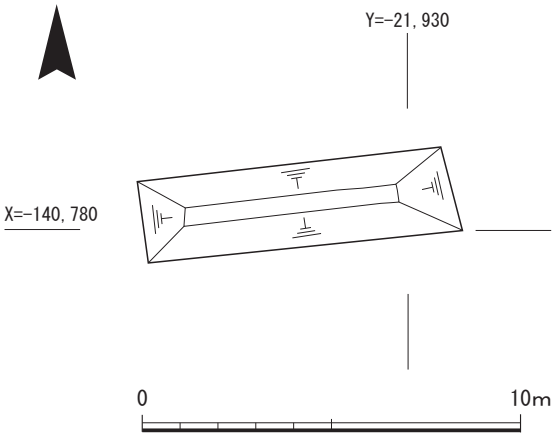
北側の調査区で最も西側に位置する調査区となる。現地表面の標高は71.46ｍを測る。表土から標高70.96m付近までは近現代耕作土（２・３・４層）を確認した。近現代耕作土から下層の標高70.96～69.78m付近ではラミナが発達する灰白色の礫層である洪水砂層（５・６・８層）を検出した。標高69.80ｍまで掘削を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。



第17図　７トレンチ平面図

８）７トレンチ

現地表面の標高は71.90ｍを測る。表土から標高71.19m付近までは現代の客土による造成（１層）が行われており、造成土下層では黒褐色の近現代の耕作土層（２・３・４層）を検出した。標高71.19～70.40m付近では土壌化した洪水砂層（６層）を確認した。標高70.38ｍまで掘削を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。



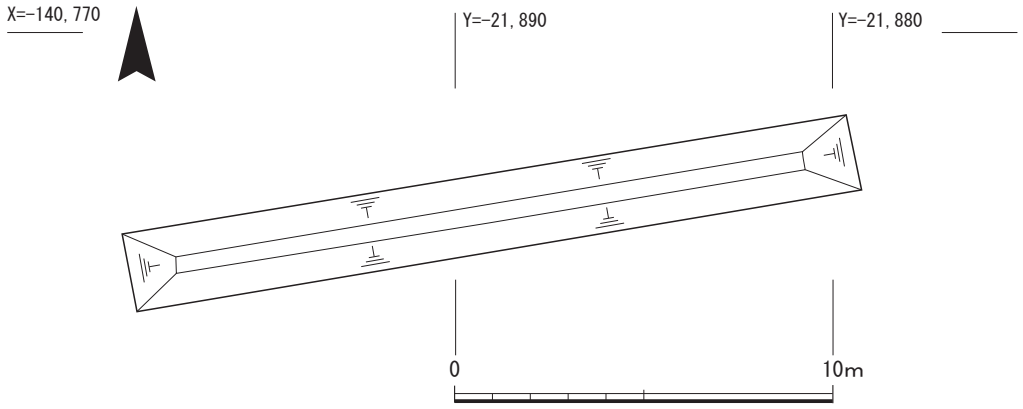
第18図　８トレンチ平面図

９）８トレンチ

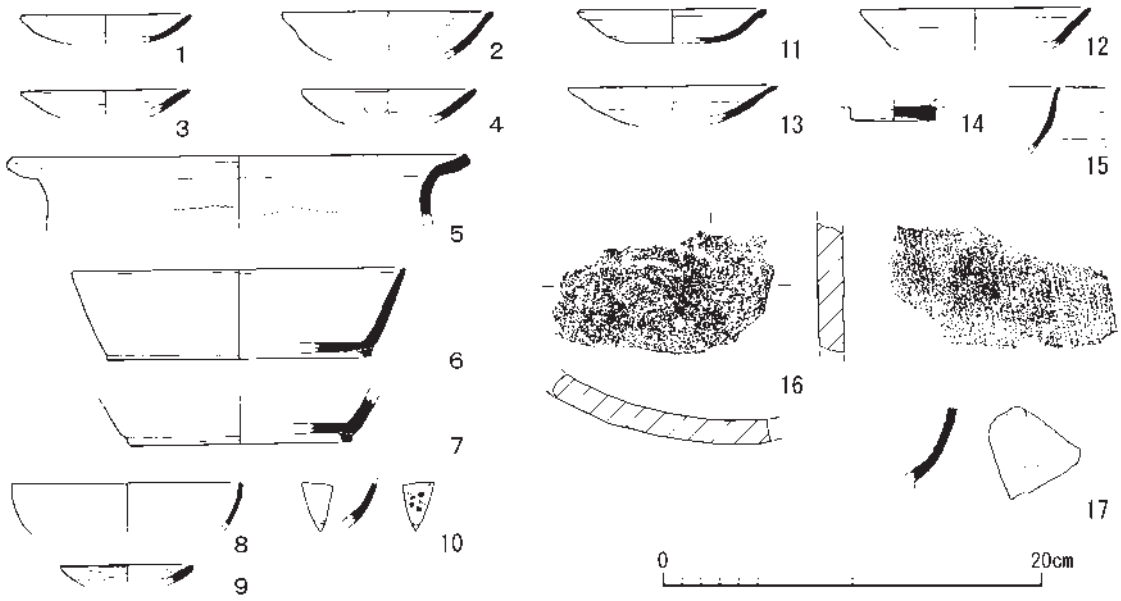
現地表面の標高は71.92ｍを測る。表土から標高70.88m付近までは現代の造成土（１層）である。造成土の下層では黒褐色の近現代耕作土層（２・３・４層）を検出した。標高70.56m付近で土壌化した洪水砂層（６層）を確認した。標高70.83ｍまで掘削を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

10）９トレンチ

北側の調査区で最も東側に位置する調査区である。現地表面の標高は70.62ｍを測る。表土から標高70.30m付近までは近現代の耕作土（２・３・４層）を確認した。近現代耕作土から下層の標高70.30～69.64m付近では、土壌化とマンガンの沈着により橙色を呈し、ラミナの発達した砂礫層である洪水砂層（６・７・８層）を検出した。標高69.64m付近から下層は硬く締まった青灰色のシルト層（９層）を確認した。大阪層群と考えられ



第19図　９トレンチ平面図



第20図　出土遺物１(土器)

る。９トレンチは、３トレンチ北側に位置しており、層厚は異なるが、層序は共通する。標高69.36mまで掘削を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。

３．出土遺物

１)土器

１・２は３トレンチ杭列ＳＸ301周辺の68層から出土した。１は土師器の皿である。口縁部内外面に強いナデを施す。２は瓦器の椀である。内面に粗いヘラミガキを施す。和泉型瓦器椀である。

３～17は５トレンチの水田および畑の層位から出土した。３～10は14層から出土した。３・４は土師器の皿である。いずれも口縁部内外面に強いナデを施すが、４は内面のナデの範囲が広い。５は土師器の羽釜である。口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。６・７は奈良時代の須恵器の杯である。いずれも底部に高台を貼り付ける。６は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。

７は軟質で灰色を呈する。

11～16は15層から出土した。11～13は土師器の皿である。いずれも口縁部内外面に強いナデを施す。11の口縁部外面は肥厚する。内面底部から体部には粗いナデを残す。14･15は陶器である。鉄釉を施す天目茶碗で瀬戸美濃系と考えられる。14は露胎の削り出し高台である。15は口縁部である。14・15は同一個体の可能性もある。16は奈良時代の平瓦である。焼成は軟質で、一枚づくりである。凸面には縄目叩きの痕跡を残し、凹面には布目を残す。17は20層から出土した。青磁椀の体部である。外面に鎬連弁文を施す。

２）木製品

18～28の木製品はいずれも５トレンチの近世の水田層である14・15層から出土している。18・19は不明木製品である。いずれも他の部材と組み合わせて使用する製品の一部材と考えられる。18は芯持ち丸木材の全面に面取り整形を行い､断面を不整形な楕円形に造り出す。中心部分には、両面穿孔で長軸1.7cm、短軸1.2cmの方形の孔を造り出す。両端部には加工痕を残し、小口面を平滑に整形する。19は両面を平滑に整形し板状に造り出すが、短辺部は湾曲している。追柾目材である。

20は加工木である。樹芯付近を用いる芯去り材であり、角柱状に造り出す。表面は平滑に整形するが、加工痕を残す。加工痕には刃こぼれ痕が確認できる。

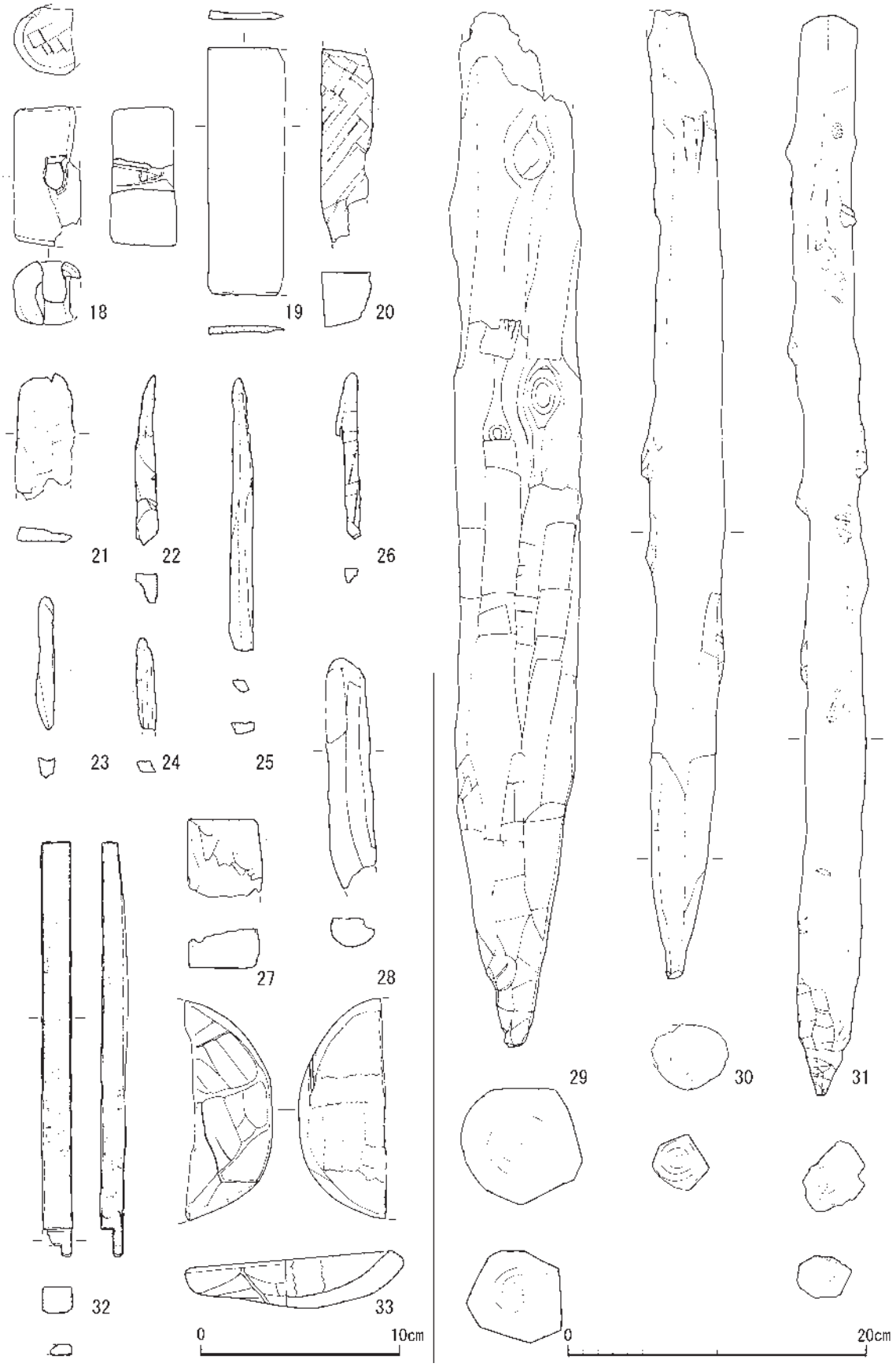
21～28は燃えさしである。いずれも端部の一部が火熱により炭化している。21は平坦な割材である。22は芯去りの削り出し材であり、表面は平滑であり、加工痕を残す。23は芯去りの削り出し材であり、加工痕を残す。24・25は芯去りの分割材で割肌を呈する。26は表面を成形した芯去りの削り出し材である。表面には刃こぼれ跡を残す加工痕が確認できる。27は丁寧に整形された芯去り材である。木製品の一部を転用した可能性もある。28小径木の芯去りの分割材である。片面には自然面を残す。

29～31は杭である。29・30は３トレンチＳＸ301の杭材である。いずれも枝を払った芯持ち丸木材を用いる。先端を加工して尖らせるほか、胴部にも加工痕を残しており、面取り整形を行うが、一部分に自然面を残す。ＳＸ301は合計11本の杭が出土したが、腐食が著しいため、図化可能なものをだけを報告する。

31は５トレンチＳＸ501の杭材である｡小径木の芯持ち丸木材を用いる｡胴部は枝を払っており、節の部分に枝払いの痕跡を明瞭に残す。樹皮を残しており、枝払い以外の加工は行っていない。細かい加工により先端部分を尖らせる。

３）漆製品

32・33は漆製品である。いずれも５トレンチの近世の水田層である14・15層から出土した。32は不明漆製品である。残存状態は悪いが、全面に漆を塗布している。端部の一方には段と浅い溝を造り出す。先端部には方形の抉りを施す。他の部材と組み合わせて使用したと考えられる。33は小型の漆皿である。木皿に漆を塗布しており、内面には漆刷毛の痕跡が明瞭に残る。外面は鱗状に切削し面を造り出す。口縁部は分厚く造り出し、外面に面取りを行う。



第21図　出土遺物２（木製品・漆製品）

４．ま と め

今回の調査では、２トレンチから近世の水田を検出した。また、５トレンチでは室町時代の畑から、近世の水田へと移り変わる耕作地であることが判明した。近世の水田では、畦畔で小区画の水田を整備していたほか、杭列ＳＸ501で水田に伴う施設を造成していた。

３トレンチでは、室町時代には谷地形に沿って杭を打ち込み、水路として利用していたと考えられる。このように、耕作地として利用された地点と地形を利用して水利を整備していたことが明確に確認できた。その他のトレンチからは遺構・遺物は検出されなかったが、近世の水田が同一の洪水層によって埋没する状況から、その後の洪水で付近一帯の地形が埋没し、水田地へと利用される現景観への履歴が明らかになった。

遺物は耕作地であったため少量であったが、堆積状況、放射性炭素の年代値と齟齬のない遺物が出土した。しかし、混入ではあるが、５トレンチから奈良時代の須恵器と平瓦が出土している。調査地周辺には、乾谷瓦窯跡、得所瓦窯跡が位置し、山田川の上流域には生駒窯跡群が位置しており、いずれも都城へ向けた窯業生産を行っていた。周辺の遺跡の立地から、当地域の都城との関連や山田川流域を介した流通について示唆を与えてくれる。今後の周辺地域の調査の進展が望まれる。

（福山博章）

付表１　柘榴川原遺跡出土土器観察表

報告番号	調査区	種類	器種	遺構	グリッド・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	調　整／備　考
1	3tr	土師器	皿	SX301	68層	8.8	(1.5)	－	1/12	外面：にぶい黄橙（10YR7/4）内面：にぶい橙（7.5YR7/4）	外面口：ナデ、外面底：オサエ、内面：ナデ
2	3tr	瓦器	椀	SX301	68層	11.0	(2.75)	－	1/12	暗灰（N3/0）・灰白（2.5Y8/1）	和泉型　外面：ナデ（摩滅）、内面：ミガキ
3	5tr	土師器	皿		14層（水田）	8.8	(1.3)	－	1/12未満	にぶい黄橙（10YR7/2）	外面口：ナデ、外面底：不調整・オサエ、内面：ナデ
4	5tr	土師器	皿		14層（水田）	9.0	(1.7)	－	1/12	にぶい橙（7.5YR7/4）・灰白（7.5YR8/1）	外面口：ナデ、外面底：オサエ、内面：ナデ
5	5tr	土師器	羽釜		14層（水田）	24.0	(3.4)	－	1/12未満	浅黄橙（7.5YR8/3）	外面：ナデ、内面：ナデ・板ナデ
6	5tr	須恵器	杯		14層（水田）	17.6	4.7	4.7	底1/12未満	外面:灰白(N7/0)、内面:灰(N6/0)	外面：回転ナデ、底：ヘラ切り・ナデ、貼り付け高台、内面：回転ナデ
7	5tr	須恵器	杯		14層（水田）	－	(2.5)	12.0	底1/12	外面：灰白（5Y7/1）・浅黄橙（10YR8/3）　内面：灰白（5Y8/1）	外面：回転ナデ、底：ヘラ切り・ナデ、貼り付け高台 内面:回転ナデ、軟質
8	5tr	瓦器	椀		14層（水田）	12.0	(2.3)	－	1/12未満	外面：灰白（N8/0）　内面：灰（N5/0）	内外面ともに摩滅
9	5tr	瓦器	皿		14層（水田）	7.0	(0.9)	－	口1/4	灰（10Y6/1）	外面：ミガキ、内面：沈線
10	5tr	磁器	椀		14層（水田）	－	(2.6)	－	1/12以下	釉：青灰（5B6/1）内面：明黄褐（10YR6/6）　断面：白（N9/0）	両面に染付による装飾　貫入有
11	5tr	土師器	皿		15層（水田）	9.8	(1.8)	－	1/12	灰白（10YR8/1）	外面口：ナデ、外面底：不調整、内面：板ナデ
12	5tr	土師器	皿		15層（水田）	12.0	(2.0)	－	1/12以下	にぶい黄橙（10YR7/2）	外面口：ナデ、外面底：不調整、内面：不定方向ナデ
13	5tr	土師器	皿		15層（水田）	11.0	(2.0)	－	1/12	灰白（2.5Y8/1）	外面口：ナデ、外面底：不調整、内面：不定方向ナデ
14	5tr	陶器	椀		15層（水田）	－	(0.95)	4.5	口1/3	釉：黒褐（10YR3/1）　断面：灰白 10YR8/2	外面底：ケズリ出し
15	5tr	陶器	椀		15層（水田）	－	(3.4)	－	底部完存	釉：灰白（5Y7/1）　断面：灰白（5Y8/1）	施釉、貫入有
16	5tr	瓦	平瓦		16層（水田）	－	(6.4)	－	1/12以下	灰白（10YR8/1）	凸面：縄叩き　凹面：布目痕　一枚づくり　軟質
17	5tr	青磁	椀		20層（畑）	－	(4.8)	－	1/12以下	釉：オリーブ灰（5GY6/1）断面：灰白（N8/1）	鎬連弁文　内外面ともに施釉

付表２　柘榴川原遺跡出土木製品・漆製品観察表

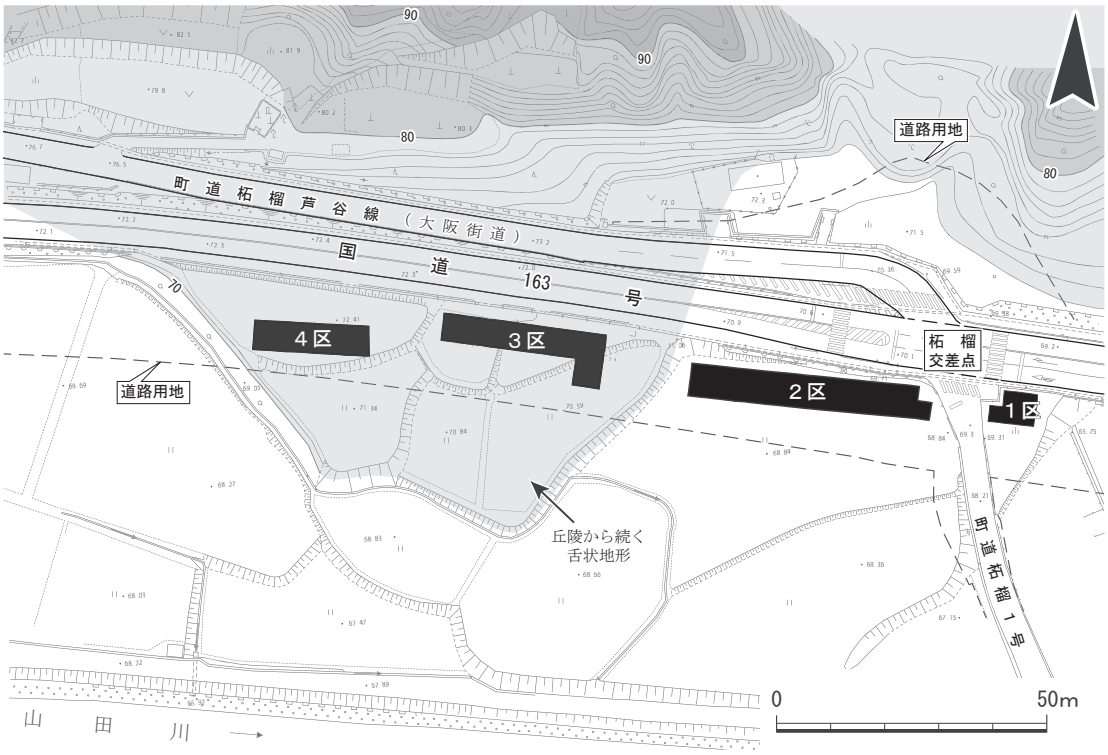
報告番号	調査区	種類	器種	遺構	グリッド・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	備考
18	5tr	木製品	不明木製品		15層（水田）	(7.1)	3.4	3.4	芯持削出	部材　端部切断　穿孔部残存長：長軸1.7cm、短軸1.1cm
19	5tr	木製品	不明木製品		14層（水田）	(12.6)	(3.9)	0.4	柾目	板材 断面わずかに湾曲する
20	5tr	木製品	加工木		15層（水田）	(9.8)	2.6	2.8	芯持削出	面調整した角材　部材か
21	5tr	木製品	燃えさし		14層（水田）	(6.4)	2.9	0.7	追柾目	板材か　端部が炭化
22	5tr	木製品	燃えさし		14層（水田）	8.6	1.1	1.5	割材	面取整形　先端炭化
23	5tr	木製品	燃えさし		14層（水田）	6.8	0.9	1.0	割材	加工痕残る　先端炭化
24	5tr	木製品	燃えさし		14層（水田）	(4.7)	0.9	0.6	割材	割材利用　先端炭化
25	5tr	木製品	燃えさし		14層（水田）	13.9	1.2	0.6	割材	割材利用　先端炭化
26	5tr	木製品	燃えさし		15層（水田）	8.4	1.1	0.7	割材	面取整形　両端炭化
27	5tr	木製品	燃えさし		15層（水田）	(4.0)	3.8	2.0	割材	角材または不明製品の転用か
28	5tr	木製品	燃えさし		15層（水田）	(11.7)	2.3	1.4	半裁材	自然面を残す棒材　枝打ち 先端炭化
29	3tr	木製品	杭	SX301	68・69層	(69.4)	8.6	7.8	芯持丸木	先端全面（8面）加工　先端から30cm上部程度まで自然面を残して加工する
30	5tr	木製品	杭	SX501	68・69層	(65.2)	5.0	4.4	芯持丸木	先端4面加工、自然面を残す　枝打ち
31	5tr	木製品	杭	SX501	14・15層（水田）	73.6	4.3	4.4	芯持丸木	先端3～4面加工、枝打ち
32	5tr	漆製品	不明漆製品		15層（水田）	21.1	1.5	1.3	割材	全面調整し漆塗布　端部に長1.5×幅1.5×厚0.5cmの結合部をつくり中央に長軸0.5×短軸0.4cmの穿孔、幅・深0.1cmの溝作る
33	5tr	漆製品	皿		16層（水田）	11.1	4.3	1.1	縦木取	口径11.0cm、残存器高2.9cm、口縁残存率１／２

（２）石原遺跡

１．はじめに

石原遺跡は精華町柘榴の北東部にあり、丘陵斜面に展開する古くからの柘榴の集落からは南東に300m程度離れた場所に位置する。遺跡が京都府の遺跡地図へ登載されるのは1985年刊行の『京都府遺跡地図』第２版からであり、散布地として東西50m・南北60mの範囲が登録されている。最新の遺跡地図では山田川左岸の谷底平野において東西約186m･南北約108mの範囲が、土師器･須恵器が採集される散布地として登録されている。今回の調査対象範囲は国道163号の南側にある南北幅約16m・東西約170mの範囲である。柘榴交差点北側にある町道柘榴芦谷線との分岐箇所の一部も発掘調査対象ではあるが、京都府教育員会との協議の結果、遺構の広がりを確認する目的で国道163号南側の部分を対象にして４か所の調査区を設定した。

調査地周辺は山田川が形成した谷底平野に分類されるが、より微細な地形を見ると北側から舌状に延びる地形の高まりがあり、ここに作られた水田は周辺よりも約１～２m高い標高にある。地理的環境の項でも述べた通り、山田川の谷底平野を通る現在の国道163号の経路は1970年代中頃までに整備されたものである。それまでは､丘陵上を通る現在の町道柘榴芦谷線の経路であり、これが大阪街道や清滝街道と呼ばれる歴史的な道でもあった。田辺丘陵から連なるこの舌状地形を境として大阪街道の経路が谷底平野と丘陵に分かれており、歴史地理的な転換点と言えるであろう。今回設定した調査区では、西側の３・４区が舌状地形の上にあり、東側の１・２区はその東下方に位置する。



第22図　調査区配置および周辺地形図

２．発掘調査の概要

１）１区の調査

今回の調査で最も東に設定した調査区で、柘榴交差点の南東角に位置する。調査着手前は、作付けがなされていない荒地となっていた場所である。調査区はＬ字形で東西8.4m・南北6.0mの大きさである。現地表高は国道路面とほぼ同じで、標高69.6m付近である。道路面にあわせて盛土がなされた場所であり、本調査区のすぐ東は崖状の地形となっており、以東の標高は本調査区の地表面よりも約４m低い。

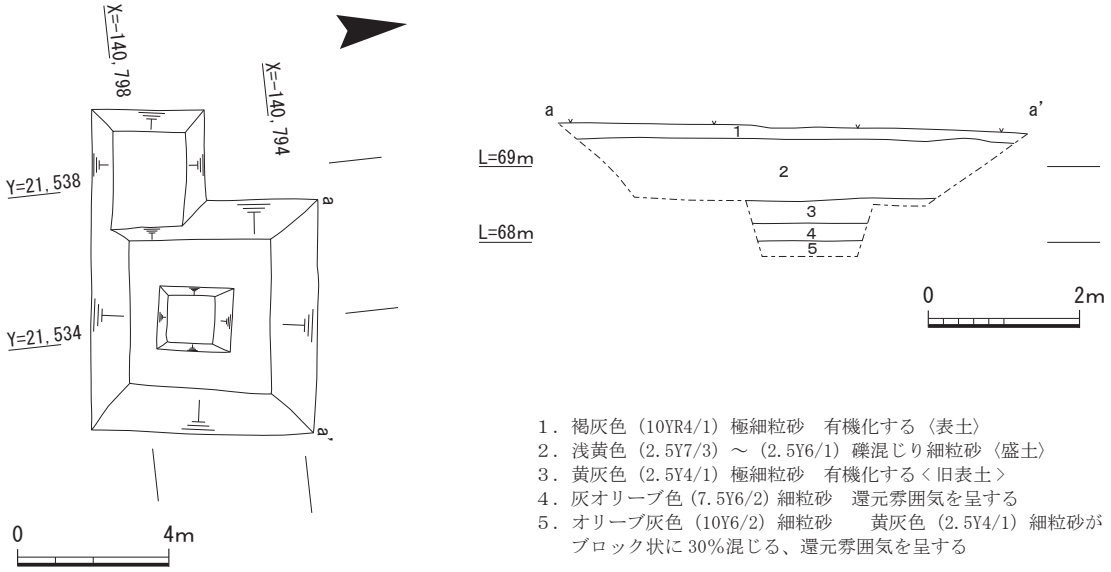
調査区の層位は、まず厚さ20cm程度の表土（第１層）があり、その下にコンクリートやビニール片を含む厚さ80cmの造成土（第２層）が入れられている。造成土下の黄灰色極細粒砂層（第３層）は厚さ35cmで有機化しており、造成以前に耕作が行われていた旧耕作土層と考えられる。旧耕作土下は標高67.8mまで掘削を実施し、第４・５層を確認している。第５層では黄灰色細粒砂土がブロック状に含まれており、第４・５層のどちらも人為的に動かされた層と判断される。掘削最深部の標高は２区で確認した遺構面よりも低くなり、狭小な調査区において身の丈を超える掘削深度となったため、これ以上の掘削は危険と判断とした。

平面および調査区断面の観察でも遺構は確認されず、遺物は重機掘削中に信楽焼甕を含む陶磁器片、近世瓦片が出土している。

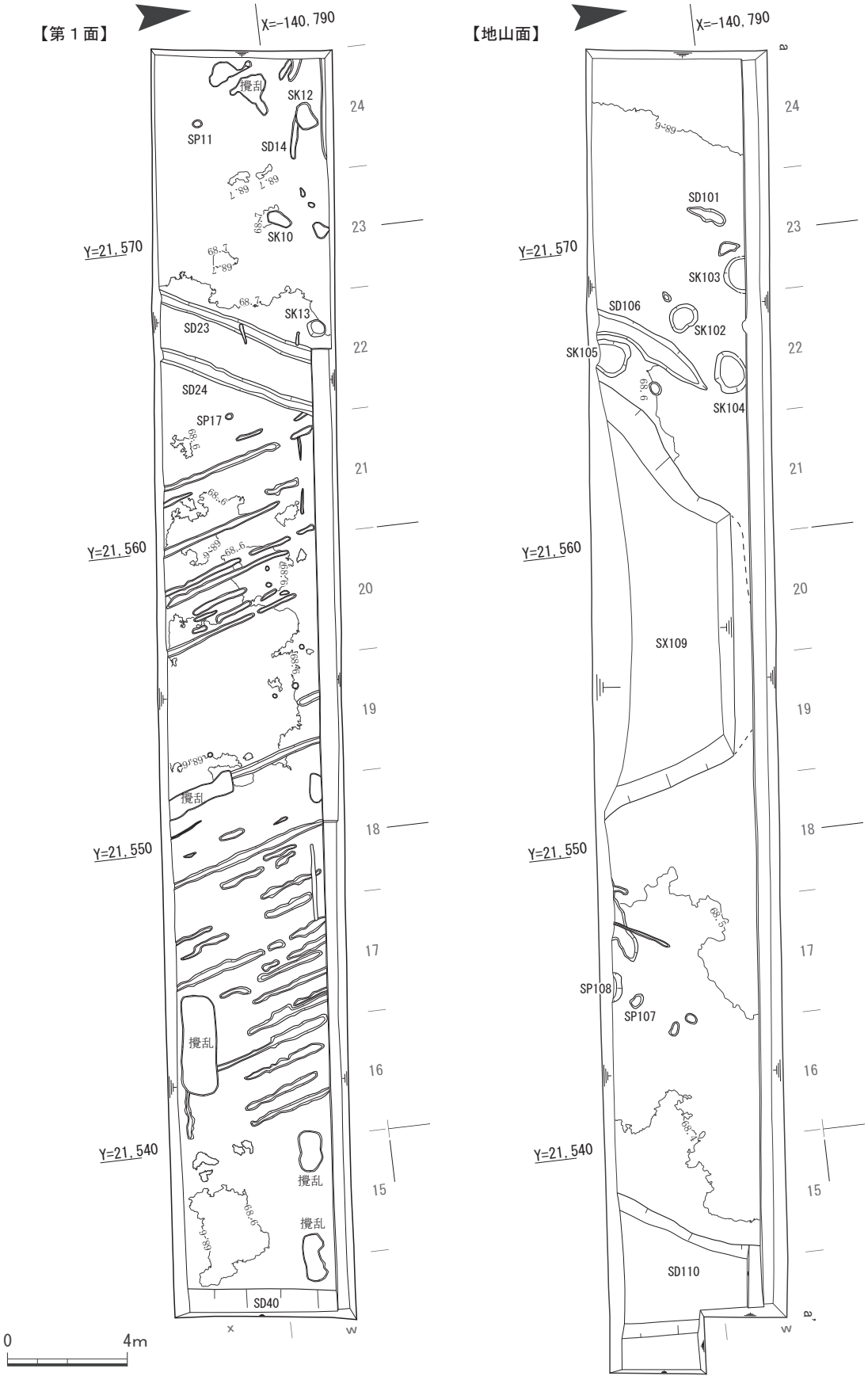
２）２区の調査

柘榴交差点の南西角の場所に設定した調査区である。調査着手前は水田となっていた場所で、調査区は南北幅6.0mで、東西の長さは42.5mである。現地標高は69.8～69.0m付近であり、西に向かって高くなる国道道路面との比高は、調査区の東端部で約0.7m、西端部で約２mある。

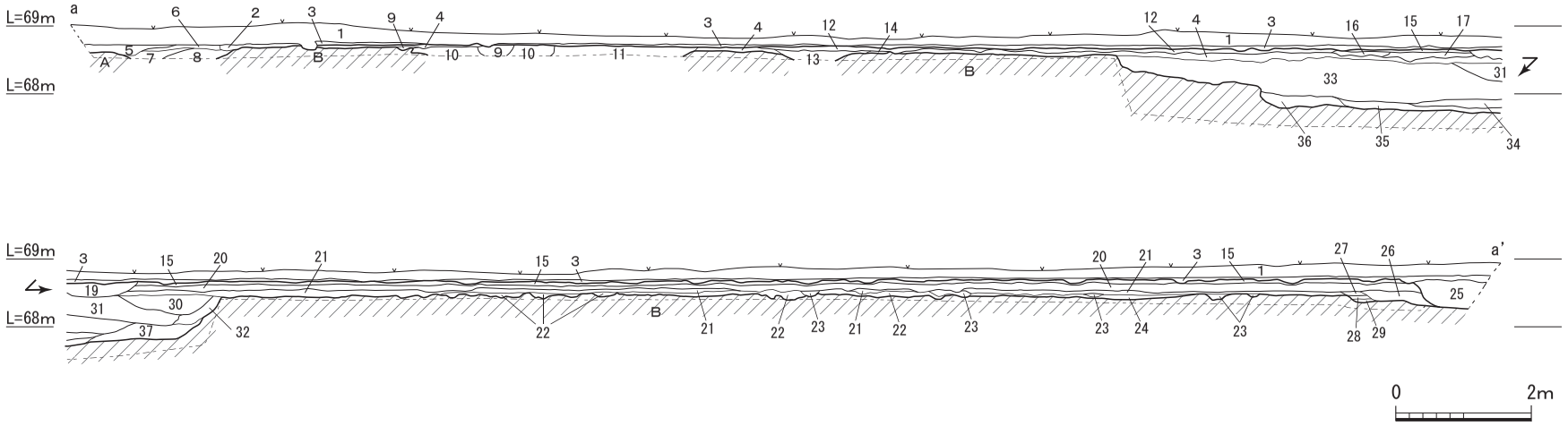
調査区の層位は、まず水田耕作土（第１層）があり、その下には厚さ５cmで第３層がある。第３層には中世の土師器皿・煮炊具片のほか、明治の磁器片が含まれている。第３層を除去した第15層上面では、耕作に関わると考えられる南北小溝群をはじめとする遺構を検出したため、第15層



第23図　石原遺跡１区平・断面図

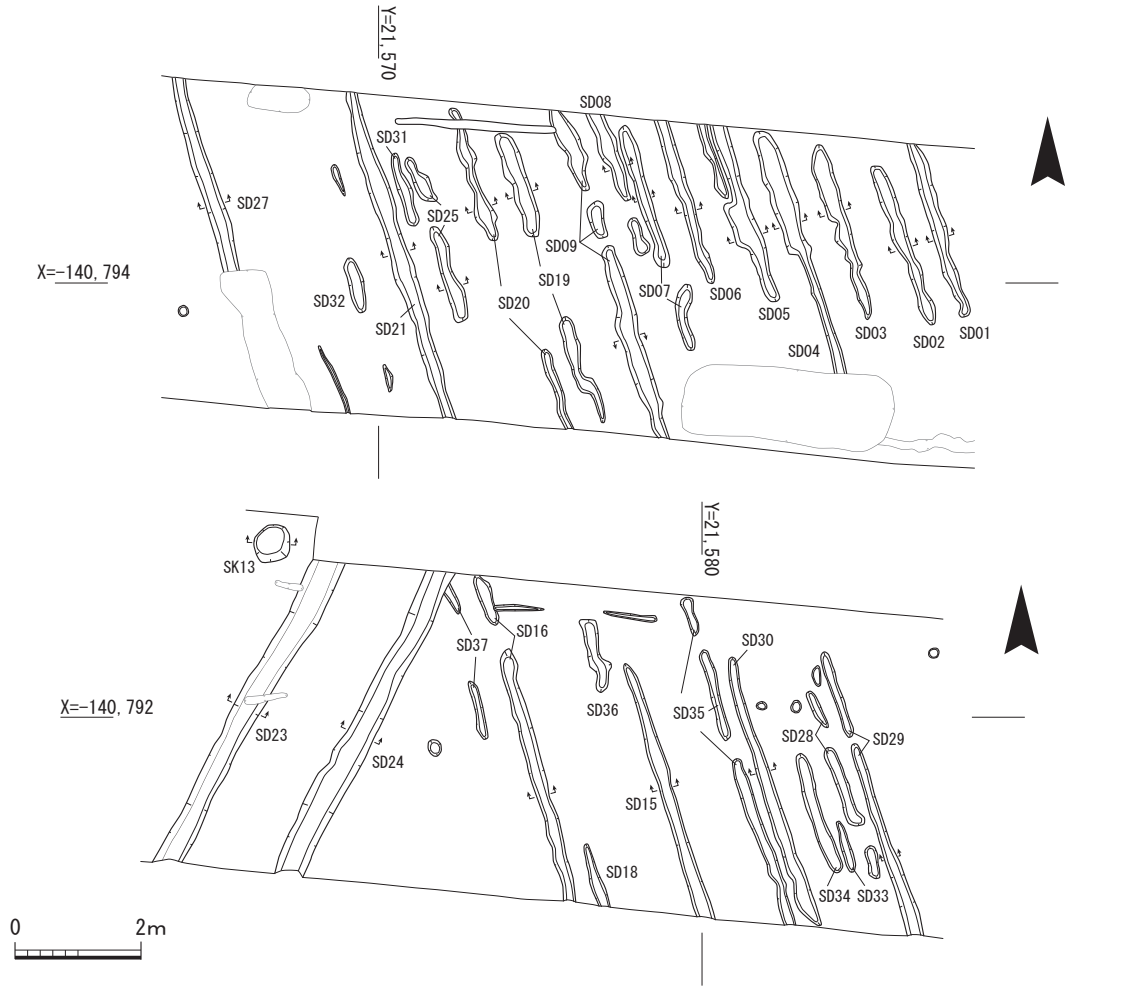


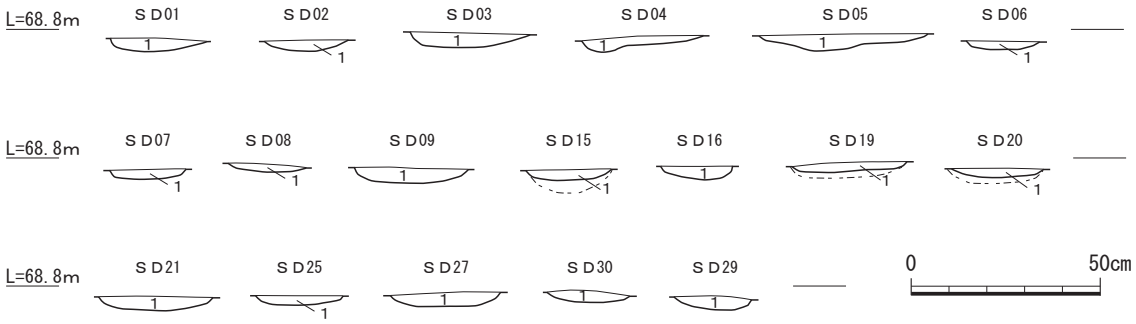
第24図　石原遺跡２区平面図



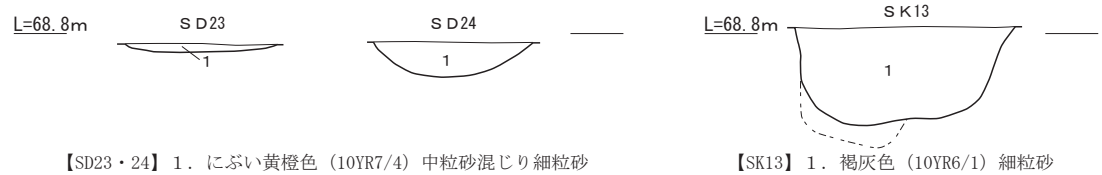
1．黄灰色（2.5Y4/1）極細粒砂　有機化する
2．灰白色（10YR7/1）細粒砂
3．灰白色（2.5Y7/1）細粒砂混じり極細粒砂　〈近世～近代の遺物を含む〉
4．明黄褐色（10YR6/6）細粒砂混じり極細粒砂　やや粘質　〈第１面〉
5．明赤褐色（5YR5/6）均質な極細粒砂　ラミナを呈する　〈水性堆積層〉
6．灰白色（5Y6/2）均質なシルト　酸化により橙色（7.5YR6/6）が20%混じる〈水性堆積〉
7．黄灰色（2.5Y6/1）細粒砂　いわゆる砂層
8．灰白色（10YR8/2）粗粒砂　いわゆる砂層　ラミナを呈する
9．淡黄色（2.5Y8/4）シルト混じり粗粒砂
10．にぶい黄橙色（10YR7/2）粗粒砂
11．浅黄橙色（10YR8/4）シルト　褐灰色（7.5YR6/1）褐灰がモザイク状に40%混じる
12．橙色（5YR6/6）粗粒砂混じり細粒砂
13．浅黄橙色（10YR8/4）細粒砂混じりシルト
14．灰白色（10YR8/2）均質なシルト
15．黄橙色（7.5YR7/8）細粒砂混じり極細粒砂　〈Ｉ面として調査〉
16．褐灰色（7.5YR6/1）シルト
17．浅黄橙色（10YR8/3）シルト
18．淡黄色（2.5Y8/3）シルト　にぶい黄橙色（10YR7/3）細粒砂が斑状に10%混じる
19．明褐灰色（7.5YR7/2）細粒砂混じりシルト
20．灰黄色（2.5Y7/2）細粒砂混じりシルト　径0.5cm大のマンガン斑が10%混じる
〈瓦器・土師器出土〉
21．灰黄褐色（10YR6/2）細粒砂混じりシルト　径0.5cm大のマンガン斑が10%混じる　〈土師皿出土〉
22．灰褐色（7.5YR6/2）シルト　やや有機化する　〈耕作溝か〉
23．灰黄色（2.5Y7/2）シルト　やや有機化する　〈耕作溝か〉
24．明黄褐色（10YR6/6）シルト
25．にぶい黄橙色（10YR7/2）粗粒砂混じり細粒砂〈SD40〉
26．明褐灰色（7.5YR7/1）シルト〈SD110〉
27．灰黄褐色（10YR6/2）細粒砂混じりシルト
28．黒褐色（7.5YR3/2）細粒砂混じりシルト　有機化する〈SD110〉
29．浅黄橙色（10YR8/4）シルト〈SD110〉
30．灰白色（2.5Y8/1）粗粒砂　径1～2cm大の円礫を多く含む
31．灰白色（10YR7/1）粗粒砂　径1cm大の円礫を多く含む
32．黄灰色（2.5Y6/1）シルト　浅黄橙色（10YR8/3）のブロックを含む
33．灰白色（10YR7/1）細粒砂混じりシルト
34．淡黄色（2.5Y8/3）均質なシルト　いわゆる砂層　〈水性堆積〉
35．灰白色（2.5Y7/1）シルト　粘質　〈静水の水性堆積〉
36．にぶい黄橙色（10YR7/2）細粒砂混じりシルト
37．灰白色（10YR7/1）細粒砂混じりシルト
Ａ．灰白色（7.5YR8/2）均質な極細粒砂　いわゆる微砂層
Ｂ．淡黄色（2.5Y8/3）極細粒砂

第25図　石原遺跡２区北壁土層断面図





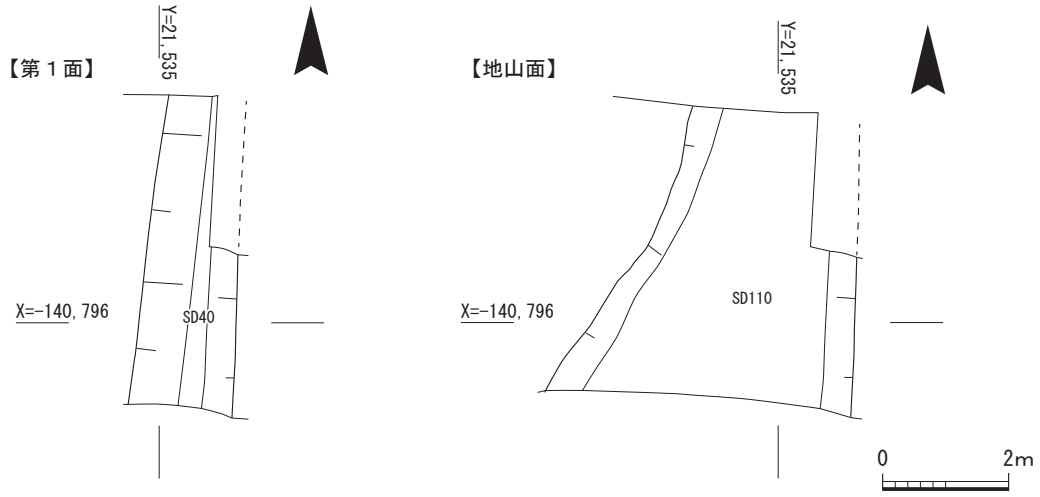
【小溝群】１．灰白色（2.5Y7/1）細粒砂　径0.5～2mm大の礫を少量含む　やや砂味が強い



【SD23・24】１．にぶい黄橙色（10YR7/4）中粒砂混じり細粒砂

【SK13】１．褐灰色（10YR6/1）細粒砂

第26図　石原遺跡２区第１面遺構平・断面図



第27図　石原遺跡２区ＳＤ40・110平面図

上面を第１面として調査を実施した。小溝が掘り込まれる第15層およびその下にある第12層は土師器皿の細片が含まれる層である。第１面での調査終了後にこれらを除去し、地山面で精査を実施したところ南北溝や大型落込みを検出した。調査区壁面を詳細に検討すると、地山上は水性の堆積層であり、山田川の氾濫により形成された層と考えられる。調査の終盤には、調査区の東端部で南北溝を確認するため、調査区南東部の一部を拡張した。その結果、溝の全体を検出するとともに、溝の完掘作業を行った。

①第１面検出遺構

小溝群ＳＤ01～09・15～16・18～21・25・27～37　調査区中央部の東西23ｍの範囲内で多数検出した小溝群である。溝の幅は0.19～0.34ｍ、深さは0.03～0.08ｍである。方位は北で19°西へ振れる。溝掘形間は0.14～0.56ｍの距離で整然と並んでいるが、中央の東西約４ｍの範囲では検出されない。埋土からは土師器が出土しているがいずれも細片であり、時期は不明である。調査区北壁の観察によると、小溝埋土と北壁第３層は一連のものである。よってこの小溝群は明治以降に第３層が上位を覆うかたちで堆積して廃絶したものと判断され、遺構自体もこれに近い時期のものと考えられる。

南北溝ＳＤ23・24　調査区西半部で検出した並行する２条の溝である。幅はＳＤ23が0.4ｍでＳＤ24が0.42ｍであり、深さはＳＤ23が0.03ｍでＳＤ24は0.1ｍである。方位は北で17°東へ振れる。溝掘形間の距離は1.2ｍである。ＳＤ23・24は平面的には明瞭に検出できたが、調査区北壁では対応する落込みを確認できなかった。小溝群との比較では、方位と溝幅が異なっている。小溝群の一部と考えられるＳＤ37を平面的に切っており、小溝群よりも新しい溝と判断される。性格は不明であるが、西側にある舌状地形の縁辺と並行であり、小溝群廃絶後に新たに耕作地を区画した溝の可能性が挙げられる。遺物はＳＤ24の埋土から天目茶椀の体部片が出土している。

南北溝ＳＤ40　調査区東端部で検出した南北方向の溝である。下層のＳＤ110と重複する位置にあり、東西幅は2.86ｍである。埋土は単一の層からなり、北壁土層断面図では第25層が対応する。

人為的に埋められたものと判断される。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ13　調査区北西部で検出した土坑である。径0.56ｍの明瞭な円形の掘形をもち、深さは0.24ｍである。遺物は陶器・磁器の細片が出土している。

②地山面検出遺構

南北溝ＳＤ110　調査区東端部で検出した南北方向の溝である。第１面で検出したＳＤ40と重複しており、東肩はＳＤ40と平面的に同じ場所にある。西肩は南に向かって広がっており、溝の幅は調査区北端で2.76ｍ、南端では4.8ｍを測る。深さは0.21ｍである。遺物の出土はない。

ＳＰ107・108　調査区東半部で検出したピットである。どちらも深さ0.1ｍで掘形は不整形であるが、埋土からは土師器皿が出土している。

池状落込みＳＸ109　調査区の中央で検出した大型の落込みで、検出した大きさは東西7.4ｍ、南北2.7ｍである。全体の一部を検出したのみであるが、掘形の北端部が調査区北端部付近にある形状に復原される。深さは0.73ｍで底面はほぼ平坦である。遺構底面に堆積する第34・35・36層は水性の堆積層であり、砂の粒径が小さい事などから静水状の環境であったと考えられる。これより上位の第30～33層は人為的に埋めたと判断される層である。これらの事から池状の地形であったと考えられるが、人為的に掘削されたものかの判断はつかない。遺物は、落込み南西隅の底面から土師器の羽釜や土師器皿が出土している。

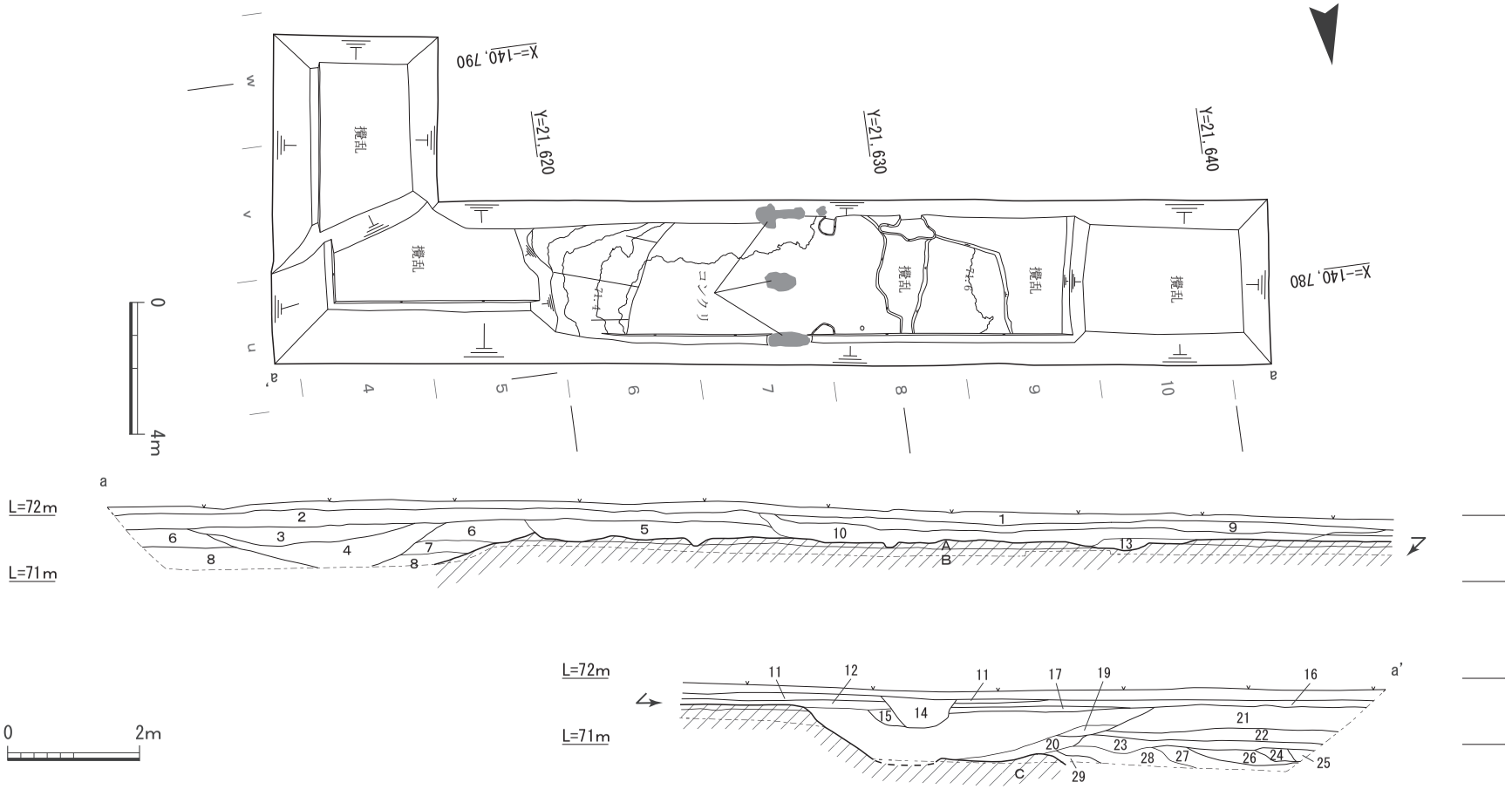
３）３区の調査

調査前は水田となっていた場所である。調査区は、北側２区画の水田および一段低い南側１区画の水田に跨っている。調査区の大きさは東西30.4ｍ、南北幅５ｍで南東部に南側へ５ｍの突出部を持つＬ字形である。南側の突出部は水田が一段低い部分に該当する。現地表面の標高は、北側の水田部分で標高72ｍ付近、南側の水田部分で標高71ｍ付近である。

調査区の層位は、表土の水田耕作土（第１・２層）の下はいずれも人為的に動かされたと判断される層（第５・11・12層）である。これらを除去すると調査区中央部の地表下0.3～0.5ｍにおいて、締まりの良い浅黄橙色極細粒砂混じりシルトの地山を検出した。大阪層群と考えられる。調査区西端部では地山が西へ向かって落ち込んでおり、落込み埋土（第７・８層）からは近世の瓦片が出土しているほか、落込み埋土を切り込む自然流路の痕跡（第３・４層）を壁面で確認している。調査区東端部も地山が東側に向かって大きく落ち込んでいる。複数段階に渡って掘削と埋戻しが行われたとみられ、埋土の一部（第23～27層）は現代のゴミを多く含んだ廃棄物層となっている。

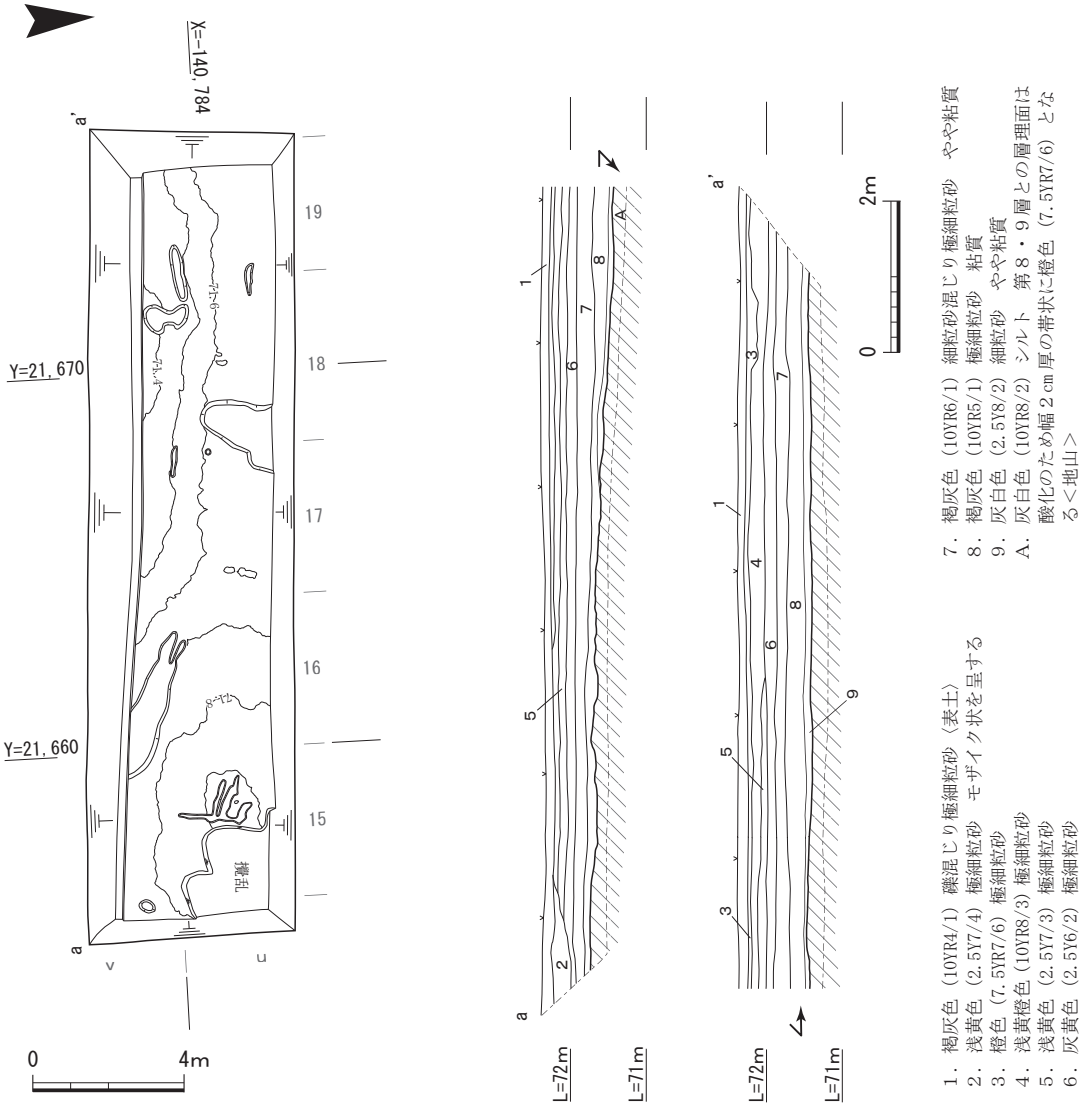
地山上で精査を実施したところ、国道に向けた広告看板を設置するための攪乱やコンクリート製の基礎を検出したが、遺構は見つからなかった。

遺物は地山面に掘られた攪乱から土師器細片、律令期とみられる須恵器片、近世・近代の磁器片、縄目瓦片、近世瓦片、近代の土管片が出土している。



1．黒褐色（10YR3/1）極細粒砂　有機化する〈耕作土〉
2．褐灰色（10YR6/1）極細粒砂　有機化する〈耕作土〉
3．浅黄色（粗粒砂混じり細粒砂）いわゆる砂層　部分的にラミナ構造が見られる　流水の痕跡
4．明緑灰色（5G7/1）粘質シルトと浅黄橙色（10YR8/3）粗粒砂が5㎝厚の互層となる　流水の痕跡
5．にぶい黄色（2.5Y6/3）シルト混じり粗粒砂
6．明緑灰色（10GY7/1）細粒砂混じりシルト　粘質
7．灰白色（5Y7/1）細粒砂混じりシルト　粘質
8．青灰色（5BG6/1）細粒砂混じりシルト
9．淡黄色（2.5Y8/3）細粒砂混じり極細粒砂〈基礎コンクリ掘形〉
10．褐灰色（7.5Y5/1）礫混じり細粒砂〈基礎コンクリ掘形〉
11．灰白色（10YR8/2）細粒砂混じり極細粒砂　やや有機化する
12．浅黄色（2.5Y7/3）細粒砂
13．にぶい黄橙色（10YR7/2）細粒砂
14．褐灰色（7.5YR5/1）細粒砂　〈暗渠掘形〉
15．灰白色（10YR7/1）細粒砂
16．灰白色（2.5Y8/2）極細粒砂
17．にぶい黄橙色（10YR7/4）細粒砂
18．灰白色（10YR7/1）細粒砂　浅黄橙色（10YR8/4）細粒砂のブロックが30%混じる
19．灰白色（2.5Y7/1）細粒砂
20．灰黄色（2.5Y7/2）細粒砂　浅黄橙色（10YR8/4）細粒砂のブロックが40%混じる
21．にぶい黄橙色（10YR7/4）細粒砂
22．灰白色（10YR7/1）粗粒砂混じり細粒砂
23．褐灰色（5YR5/1）細粒砂　炭化物を多く含む
24．褐灰色（10YR4/1）細粒砂　炭化物を多く含む
25．浅黄橙色（10YR8/4）細粒砂　モザイク状を呈する
26．暗灰黄色（2.5Y5/2）礫混じり細粒砂
27．黒褐色（7.5YR3/1）細粒砂
28．にぶい黄橙色（10YR7/4）粗粒砂混じり細粒砂
29．黄橙色（10YR8/6）細粒砂
A．浅黄橙色（10YR8/3）極細粒砂混じりシルト　粘質でやや砂味がある〈地山〉
B．浅黄橙色（10YR8/3）均質なシルト　粘質〈地山〉
C．灰白色（2.5Y8/1）細粒砂混じり極細粒砂　均質　いわゆる微砂層〈地山〉

第28図　石原遺跡３区平・断面図



第29図　石原遺跡４区平・断面図

４）４区の調査

今回の調査で最も西側に設置した調査区である。元々は水田として利用されていた場所であったが、拡幅事業に伴って調査直前は荒地となっていた。ここに東西21.6m、南北5.6mの調査区を設定した。現地表面の標高は72.4m付近である。

調査区の層位は、表土(第１層)下にある第３～５層は淘汰が悪く人為的に動かされたと判断される層である。整地がなされたものであろう。同じく第６～８層も人為的に動かされた土であるが、色調がやや暗く有機化している。整地される以前の旧耕作土層と考えらえる。第７・８層からはごく少量ではあるが、中世とみられる土師器細片が出土している。地山は締りの良い灰白色のシルトで大阪層群と考えられる。地山面は北東に高く、南西へ低くなっている。これは丘陵側から山田川へ向かって延びる舌状地形の西端部を反映している。

平面精査は第７層と第８・９層の上面、地山面で実施した。地山面上では不定形を呈する土色変化を数か所で検出したが、掘削してみるといずれも深さ５cm程度の薄い皿底状のものであった

ため、地山面の凹凸と判断した。このほか調査区の北東隅でガラス片を含む攪乱を検出した。

遺物は重機掘削中に土師器片、瓦器椀片、縄目瓦片が出土している。また地山面精査中に土師器皿細片が出土している。

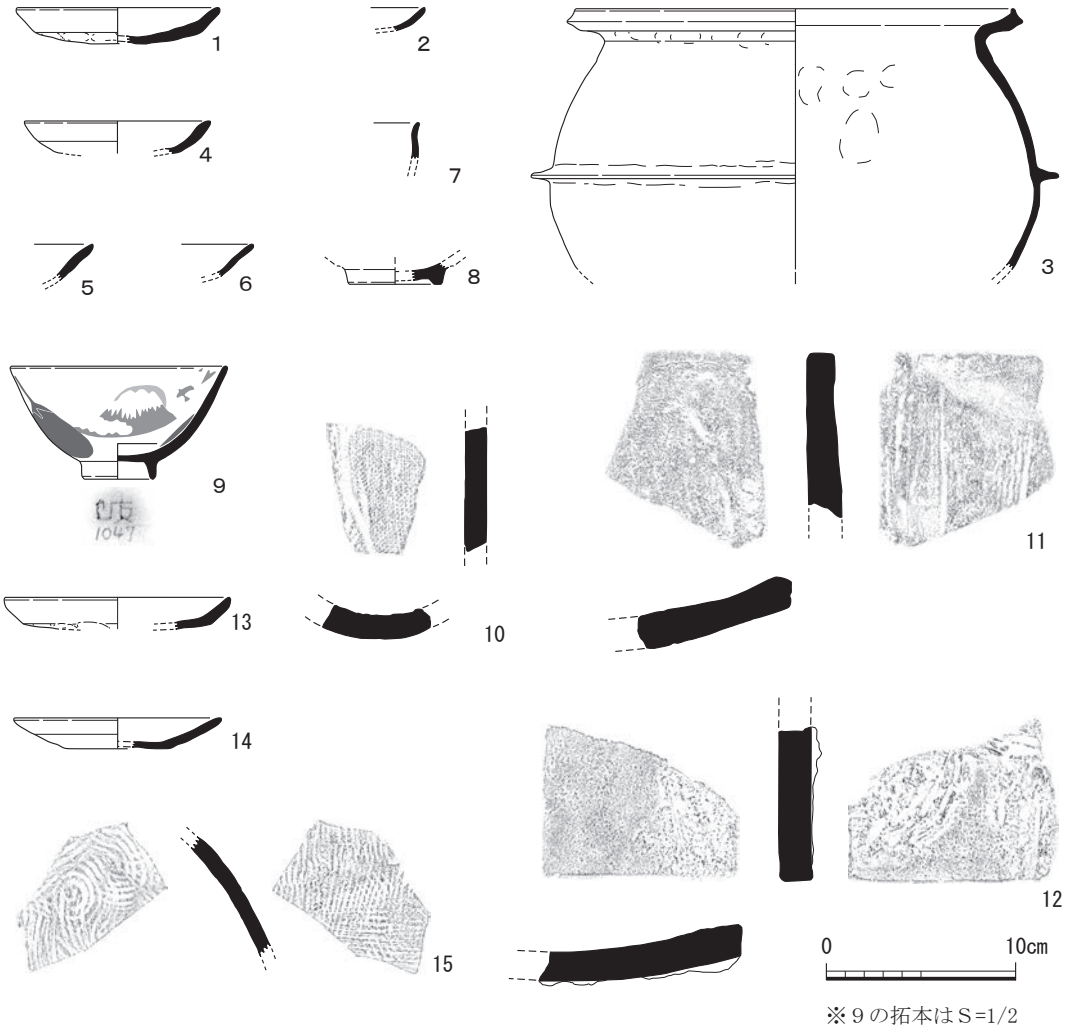
３．出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総量は、整理箱２箱分である。このうち２区からの出土品が１箱を占める。他の調査区は１区で遺物袋１袋分、３区で４袋、４区で６袋となっており、２区とそれ以外の調査区では出土遺物の量に差がある。ここで報告する遺物のうち、土師器皿については平尾正幸氏の編年と年代観を参照した(注28)。

１～８は２区からの出土した。１は地山面で検出したＳＰ107から出土した土師器皿である。底部との境に稜を有し、立ち上がる口縁部が短い点から６期頃(12世紀末～13世紀前半)のものと考えられる。２・３は地山面で検出した大型落込みＳＸ109の底面から出土した。２は土師器皿、３は土師質羽釜である。羽釜は胴部最大径付近に鍔を貼り付け、外反する口縁は端部をつまみ上げている。胴部器壁は３mmと薄く、胎土も精良な大和Ⅰ２型土釜である(注29)。胴部外面はナデ調整され煤が付着し、内面には調整時の凹凸が残る。大和型土釜の編年でⅢ-２型の時期(16世紀末～17世紀初頭)に相当するものと考えられる。４・５は第１面精査中、６は地山面精査中に出土したもので、いずれも土師器皿である。４は11段階以降(17世紀以降)のものであるものと考えられる。５は褐色系で砂粒を多く含む胎土で、外反する口縁の中程にやや厚みを持つもので、９・10期(15～16世紀前半)を中心とした年代が考えられる。６は橙色系で器壁が薄く、口縁が外反するもので10期(16世紀前半)を中心とした時期が考えられる。７・８は鉄釉の天目茶椀で瀬戸美濃系とみられる。どちらも北壁第３層相当層からの出土で、同一個体の可能性もある。底部である８は露胎の削り出しの輪高台である。高台脇のケズリ幅は不明であるが高台の断面形状は逆台形である。高台内側は一定の深さがあり、底部の器壁が薄い点から大窯第３・４段階～連房式登窯第１段階１・２(16世紀後半～17世紀前半)頃に位置付けられる(注30)。

９～12は３区から出土したものである。９は白色磁に彩色で鷹・富士・茄子を描いた「釉下彩富士山文飯碗」である(注31)。太平洋戦争時の統制陶器で、高台裏に統制番号「岐1047」の陽刻印がある。岐阜県瑞浪市の「山宋」が生産したものである。10～12はいずれも攪乱や攪乱層から出土した瓦で、10・11は布目・縄目を有するものである。12は焼成が硬質な近世瓦で、凹・凸面にスサが付着しており窯壁等に転用されたものとみられる。

13～15は４区から出土したものである。13は重機掘削中に出土した土師器皿である。口縁部の立ち上がりは比較的急で、口縁端部外面に面を有する。６段階頃(13世紀前半)にあてはまるものと考えられる。14は地山上で精査中に出土したものである。器壁が薄く、焼成が硬質である点は白土器に似るが、胎土にはやや砂味があり色調も赤味がかる。10・11段階頃(16・17世紀)のものと考えられる。15は調査区北東隅の攪乱から出土した須恵器甕の体部片である。外面に平行叩き痕、内面に同心円の当て具痕跡を有する。



第30図　石原遺跡出土遺物

４．ま と め

今回は、山田川の谷底平野に丘陵側から延びる舌状地形上と下方に調査区を設定して発掘調査を実施したが、舌状地形上にあたる３・４区では遺構が検出されなかった。また遺物の出土量も僅少で遺跡としての兆候は希薄であった。一方、舌状地形の下方では２区において中世末～近世を中心とする遺物が整理箱１箱分出土したが、そのほとんどは細片である。遺構についても中世末～近世頃にあたるピット・池状落込みや同時代の可能性のある溝、近代以降の小溝群を検出したが、建物跡などは見つかっていない。よって２区のある舌状地形の下方は、畑などの生産域として利用された場所と考えられる。古くから続く柘榴集落や大阪街道が山田川の氾濫を避けるように田辺丘陵斜面上に位置しており、２区を中心に出土した細片化の進んだ遺物は、丘陵斜面から流入したものと考えられる。その意味で調査地北方の丘陵斜面には中世末～近世の居住域が存在する可能性がある。

（加藤雅士）

付表３　石原遺跡出土遺物観察表

報告番号	調査区	種類	器種	遺構	グリッド・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整／備考
1	２区	土師器	皿	SP107	－	10.6	1.9	－	2.5/12	にぶい褐色(7.5YR6/3)	外面口：ナデ、外面底：オサエ、内面：ナデ
2	２区	土師器	皿	SX109	w21	－	(1.2)	－	－	橙色（2.5YR6/6）	外面：ナデ、内面：ナデ
3	２区	土師器	羽釜	SX109	w21	23.0	(13.8)	－	口3/12	灰白色（7.5YR8/2）～褐灰色（7.5YR4/1）	外面：ナデ、内面：ナデ
4	２区	土師器	皿	１面精査		9.6	(1.7)	－	3/12	にぶい赤褐色(5YR5/4)	外面：摩滅、内面：ナデ
5	２区	土師器	皿	１面精査	x15	－	(1.9)	－	－	暗褐色（7.5YR3/3）	外面：１段ヵナデ、内面：ナデ
6	２区	土師器	皿	地山面精査	－	10.9	(1.7)	－	1/12	明褐色（7.5YR5/6）	外面：ナデ、内面：ナデ
7	２区	陶器	椀	－	第３層	－	(1.8)	－	－	釉：黒褐色（10YR3/2）	－
8	２区	陶器	椀	－	w20・第３層	－	(1.1)	4.9	底3/12	釉：褐色（7.5YR4/3）胎：灰色（2.5Y8/2）	外面底：ケズリ出し
9	３区	磁器	椀	調査区中央攪乱	－	11.2	6.0	3.7	口8/12、底完存	胎：白色（Ｎ9/0）	－
10	３区	瓦	丸瓦	北壁（調査区東端部攪乱）	w・x・19・20	長さ(7.2)	幅(6.3)	－	－	黄灰色（2.5Y6/1）	凹面:布目、凸面:縄目（摩滅）
11	３区	瓦	平瓦	北壁（調査区東端部攪乱）		長さ(10.6)	幅(8.8)	－	－	灰白色（2.5Y8/1）	凹面：摩滅、凸面：縄目
12	３区	瓦	平瓦	調査区西端部攪乱		長さ(8.9)	幅(11.1)	－	－	紫灰色（5P6/1）	凹面：ナデ（スサ付着）、凸面：ナデ（スサ付着）
13	４区	土師器	皿	地山面精査	u19	11.8	(1.7)	－	2.5/12	橙色（5YR7/6）	外面口：ナデ、外面底：ナデ・オサエ、内面：摩滅
14	４区	土師器	皿	重機掘削		10.8	1.65	－	2/12	浅黄橙色（7.5YR8/3）	外面口：ナデ、外面底：ナデ・オサエ、内面：ナデ
15	４区	須恵器	甕	調査区北東隅攪乱		長さ(8.7)	幅(7.5)	－	－	外面：灰色（N5/0）内面：灰白色（N8/0）	外面：平行叩き痕内面：同心円当て具痕

注１　広義としての清滝街道である。狭義には大阪府と奈良県の県境境である清滝峠を越えた後、国道168号ルートを南下して奈良県斑鳩町へと至る道を指す。また山田川沿いの道についても伊賀街道と呼ぶ場合がある（精華町教育委員会1997）。精華町教育委員会1997「山田川流域の古絵図と古文書」文化財展示解説集

注２　尾崎正紀・寒川旭・宮崎一博・西岡芳晴・宮地良典・竹内圭史・田口雄作2000「奈良地域の地質」『地域地質研究報告　５万分の１地質図幅』京都（11）第52号　地質調査所。また個別の地形名称については（京都府農林部耕地課1981）に従った。京都府農林部耕地課1981『土地分類基本調査　大阪東北部・奈良・上野』

注３　武久義彦1995「大縮尺空中写真にみる奈良盆地の景観」『奈良女子大学地理学研究報告』Ⅴ　奈良女子大学文学部地理学教室

注４　整備の時期について、国土地理院２万５千分１地形図「奈良」で確認すると、昭和42年改測（昭和44年発行）までは丘陵斜面を通る従来のルートであったが、昭和50年修正（昭和51年発行）以後は谷底平野を通るルートである。

注５　岩松　保1999「大畠遺跡第３次」『京都府遺跡調査概報』第87冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注６　秋篠・山陵遺跡調査会1998『秋篠・山陵遺跡』奈良大学文学部考古学研究室

注７　河野一隆2002「椋ノ木遺跡第５次」『京都府遺跡調査概報』第105冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター。森島康雄・石崎善久2004「椋ノ木遺跡第６次」『京都府遺跡調査概報』第110冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター。村田和弘2011「椋ノ木遺跡第８次」『京都府遺跡調査報告集』第

143冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター。中川和哉・村田和弘・山崎美輪2012「椋ノ木遺跡第９・10次」『京都府遺跡調査報告集』第151冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注８　平良泰久1989「考古編」『精華町史』史料篇Ⅰ　精華町史編さん委員会

注９　平良泰久1996「第一章　精華のあけぼの」『精華町史』本文篇　精華町史編纂委員会

注10　木津町教育委員会1982『相楽山銅鐸出土地・大畠遺跡　発掘調査の記録』

注11　前掲注10（木津町教育委員会1982）、伊賀高弘・村田和弘2001「大畠遺跡第４・５次」『京都府遺跡調査概報』第96冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注12　石井清司・伊賀高弘・黒坪一樹・小池 寛・筒井崇史・中井英策・三辻利一1991『京都府遺跡調査報告書』第15冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注13　石井清司・有井幸宏・伊賀高広・筒井崇史・森島康雄1997『瓦谷古墳群』府遺跡調査報告書第23冊

注14　前掲注12。田中智子2008「ウワナベ古墳系列の埴輪をめぐる諸問題－上人ヶ平５号墳出土埴輪の検討から－」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

注15　平良泰久1984「考古篇」『木津町史』史料篇Ⅰ　木津町史編さん委員会

注16　前掲注９と同じ

注17　高橋克壽・村上隆・佐藤昌憲・佐々木良子2005『奈良山発掘調査報告』Ⅰ（石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査）奈良文化財研究所

注18　前掲注15と同じ

注19　前掲注12と同じ

注20　前掲注５、注11と同じ

注21　前掲注17と同じ

注22　石井清司2016『平城京を飾った瓦　奈良山瓦窯群』（シリーズ「遺跡を学ぶ」112）新泉社

注23　梅原末治・赤松俊英1933「山田荘村乾谷の瓦窯阯」『京都府史蹟名称天然記念物調査報告』第14冊

注24　伊野近富1992「樋ノ口遺跡」『京都府遺跡調査概報』第48冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター。足利健亮1991「樋ノ口遺跡を山田寺跡にあてる考証」『京都府埋蔵文化財情報』第42号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注25　千田嘉博2015「補12　乾谷城山城跡」『京都府中世城館跡調査報告書』第４冊（山城編２）京都府教育庁指導部文化財保護課

注26　村田和弘・福山章博2016「平成26年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第165冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注27　山田川流域の広い範囲を朝日庄とする考え（足利1996）のほか、柘榴・乾谷周辺に春日神社領である戌辛庄が存在したとの考え（奥田1985）がある。足利健亮1996「第四章第五節　町域と周辺の古代地理」『精華町史』本文篇　精華町史編纂委員会。奥田裕之1985「山田川沿いの歴史と史跡　精華町の自然と歴史を学ぶ会第４回見学会資料」『波布理曽能』第２号　精華町の自然と歴史を学ぶ会

注28　平尾政幸2019「土師器再考」『洛史　研究紀要』第12号（公財）京都市埋蔵文化財研究所

注29　菅原正明1983『文化財論叢』（奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集）奈良国立文化財研究所、川口宏海1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会

注30　藤澤良祐1999「瀬戸・美濃の天目について」『茶の湯の名碗－和物茶碗』茶道資料館、藤澤良祐」2007「総論」『愛知県史』（別冊 窯業 中世・近世 瀬戸系）愛知県史編さん委員会2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯　瀬戸市埋蔵文化財センター

注31　瑞浪市陶磁器資料館2012『特別展　番号の付されたやきもの　戦時下の瑞浪窯業生産』

付 編 1　放 射 性 炭 素 年 代 測 定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・辻　康男

1．はじめに

発掘調査に伴い採取された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調製データは付表４のとおりである。試料の採取位置を写真１に、測定試料を写真２に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

3．結果

付表５に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

付表４　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-49273	試料 No.1 調査区：1 トレンチ 採取位置：南壁	種類：土壌 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49274	試料 No.2 調査区：1 トレンチ 採取位置：東壁	種類：生の不明植物遺体 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49276	試料 No.3 調査区：1 トレンチ 採取位置：東壁	種類：生の不明植物遺体 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49277	試料 No.4 調査区：1 トレンチ 採取位置：北壁	種類：生の不明葉遺体 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49278	試料 No.5（杭材） 調査区：3 トレンチ	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49279	試料 No.6 調査区：3 トレンチ 層位：黄色砂層	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49280	試料 No.7 調査区：4 トレンチ 層位：深掘黄灰色シルト	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49341	試料 No.8 調査区：1 トレンチ 採取位置：基底部断割トレンチ 採取 No. サンプル 1	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49342	試料 No.9 調査区：1 トレンチ 採取位置：基底部断割トレンチ 採取 No. サンプル 3	種類：生の不明植物遺体 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49343	試料 No.10 調査区：1 トレンチ 採取位置：基底部断割トレンチ 採取 No. サンプル 4	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

４．考察

測定の結果（以下の較正年代は2σの値）は、以下のとおりである。

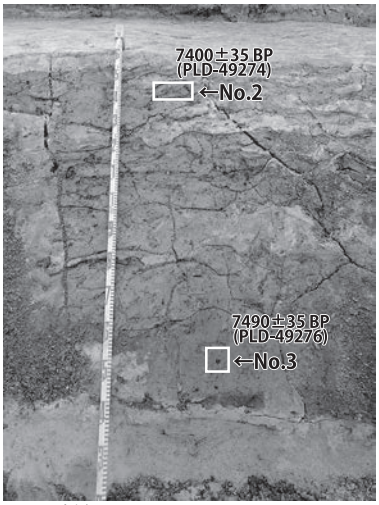
１トレンチの壁面の採取試料では、試料No.1（PLD-49273）の^{14}C年代が7280±35 BP、較正年代が8173～8020 cal BPである。試料No.2（PLD-49274）の^{14}C年代は7400±35 BP、較正年代は8338～8047 cal BPである。試料No.3（PLD-49276）の^{14}C年代は7490±35 BP、較正年代は8380～8194 cal BPである。試料No.4（PLD-49277）の^{14}C年代は3700±30 BP、較正年代は4146～3929 cal BPである。

１トレンチの基底部断割トレンチの採取試料では、試料No.8（PLD-49341）の^{14}C年代が7595±30 BP、較正年代が8425～8350 cal BPである。試料No.9（PLD-49342）の^{14}C年代は7655±35 BP、較正年代は8537～8384 cal BPである。試料No.10（PLD-49343）の^{14}C年代は7740±30 BP、較正年代は8589～8429 cal BPである。

３トレンチの試料No.5（PLD-49278）の^{14}C年代は320±30 BP、較正年代は1496～1641 cal ADで、



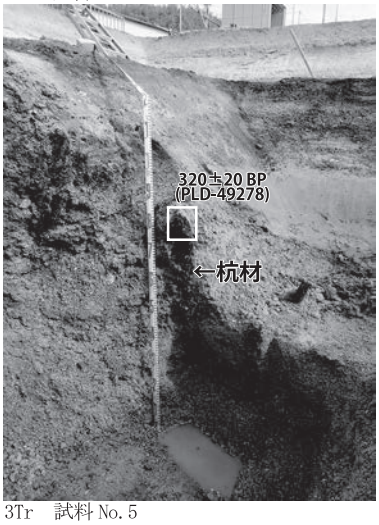
1Tr　試料No. 1



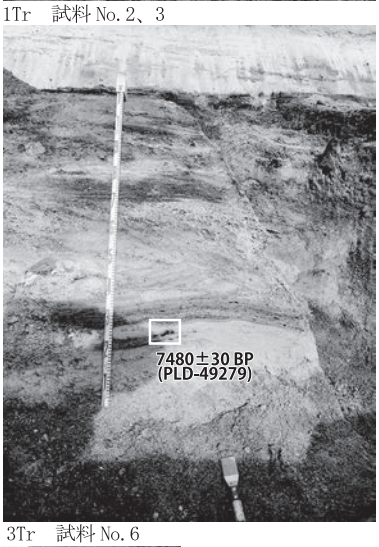
1Tr　試料No. 2、3



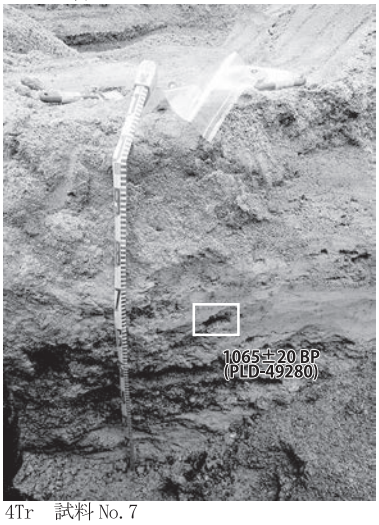
1Tr　試料No. 4



3Tr　試料No. 5



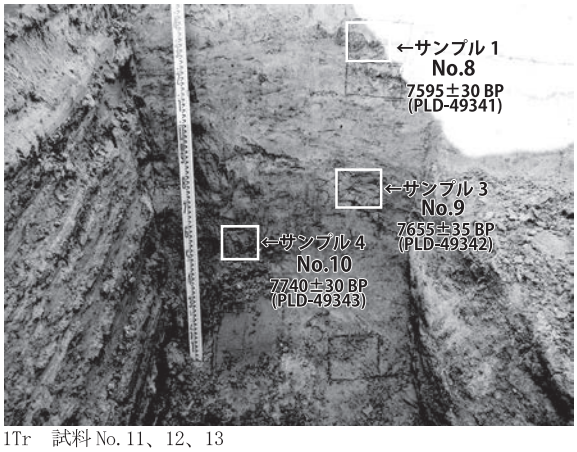
3Tr　試料No. 6



4Tr　試料No. 7



1Tr　No. 8、9、10を採取した深掘位置



1Tr　試料No. 11、12、13

写真1　試料の採集位置

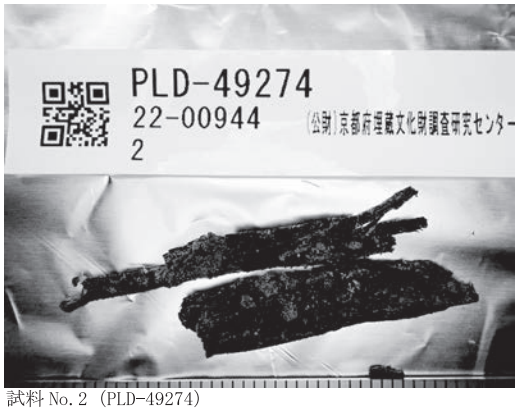
15世紀末～17世紀半ばの暦年代を示す。試料No.6（PLD-49279）の^{14}C年代は7480±30 BP、較正年代は8371～8194 cal BPである。

4トレンチの試料No.7（PLD-49280）の^{14}C年代は1065±20 BP、較正年代は897～1024 cal ADで、9世紀末～11世紀前半の暦年代を示す。

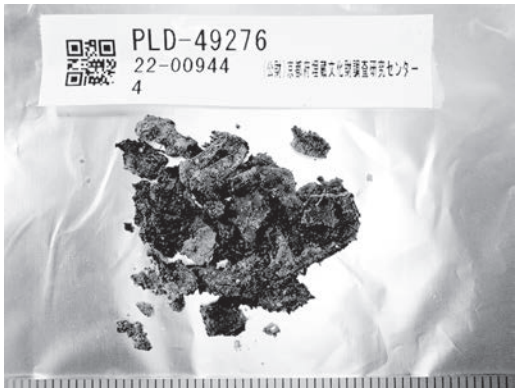
今回の測定結果のうち、縄文時代の年代値を示した試料については、小林（2017）の放射性炭素



試料 No. 1（PLD-49273）



試料 No. 2（PLD-49274）



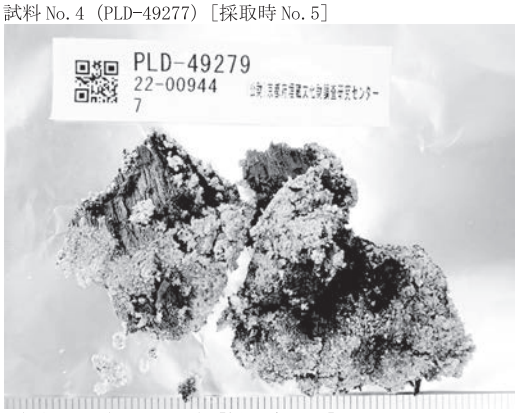
試料 No. 3（PLD-49276）［採取時 No. 4］



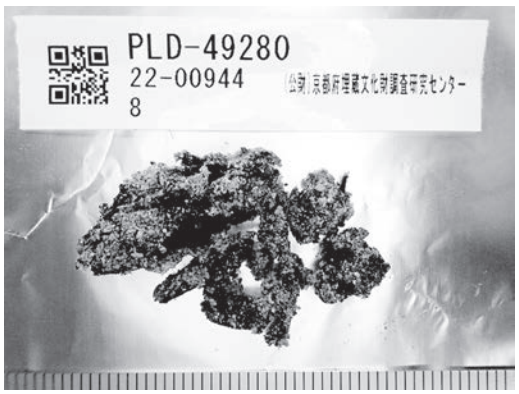
試料 No. 4（PLD-49277）［採取時 No. 5］



試料 No. 5（PLD-49278）［採取時 No. 6］



試料 No. 6（PLD-49279）［採取時 No. 7］



試料 No. 7（PLD-49280）［採取時 No. 8］

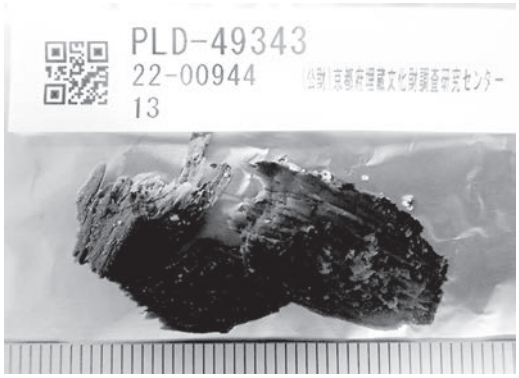


試料 No. 8（PLD-49341）［採取時 No. 11］

写真２　測定試料１



試料No.9（PLD-49342）［採取時No.12］



試料No.10（PLD-49343）［採取時No.13］

写真３　測定試料２

年代値と土器型式および年代観にもとづき、測定結果を評価する。また、縄文時代以降の年代値を示した試料の年代観については、児玉編(2018)の時期区分にもとづいた。

１トレンチの試料で、縄文時代早期後葉の年代値を示した試料は、壁面から採取した試料No.1、試料No.2、試料No.3と、基底部断割トレンチから採取した試料No.8、試料No.9、試料No.10である。また、縄文時代後期前葉の年代値を示した試料は、壁面から採取した試料No.4である。上記の1トレンチで採取した試料が示す年代値は、層位的にも矛盾がない。

一方、3トレンチの試料No.6も、縄文時代早期後葉の年代値を示す。3トレンチの試料No.5が示す暦年代は、室町時代後期～江戸時代前期に対比される。

また、4トレンチの試料No.7が示す暦年代は、平安時代前期～中期に対比される。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料のうち、試料No.6、試料No.7、試料No.8は、最終形成年輪を確認できない部位不明の木片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。一方、最終形成年輪が残っていた試料No.5と試料No.10の測定結果は、枯死もしくは伐採年代を示している。

引用・参考文献

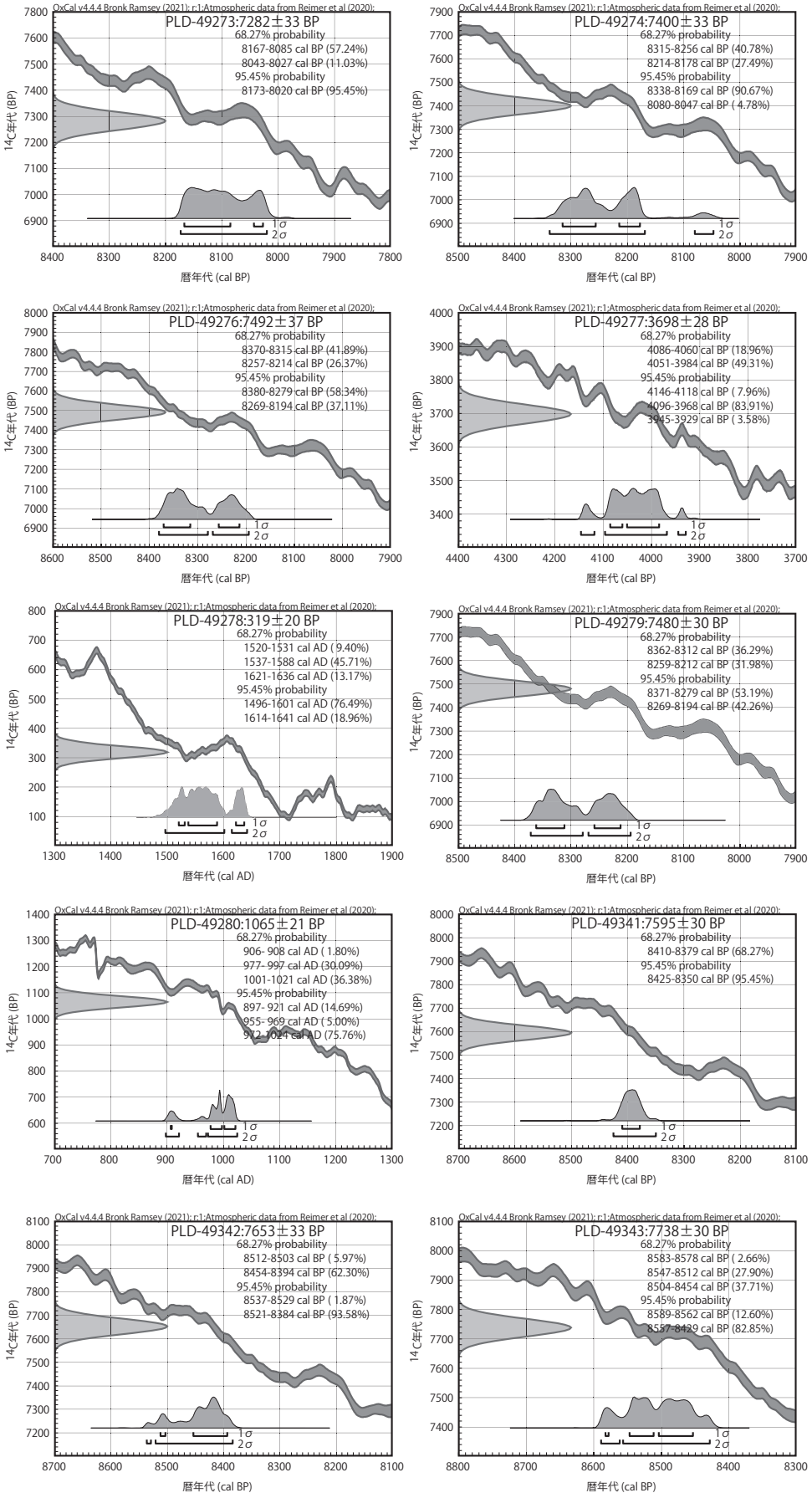
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

小林謙一(2017)縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－．263p，同成社.

児玉幸多編(2018)標準日本史年表．66p，吉川弘文館.

中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-49273:7282±33 BP
68.27% probability
8167-8085 cal BP (57.24%)
8043-8027 cal BP (11.03%)
95.45% probability
8173-8020 cal BP (95.45%)
PLD-49274:7400±33 BP
68.27% probability
8315-8256 cal BP (40.78%)
8214-8178 cal BP (27.49%)
95.45% probability
8338-8169 cal BP (90.67%)
8080-8047 cal BP (4.78%)
PLD-49276:7492±37 BP
68.27% probability
8370-8315 cal BP (41.89%)
8257-8214 cal BP (26.37%)
95.45% probability
8380-8279 cal BP (58.34%)
8269-8194 cal BP (37.11%)
PLD-49277:3698±28 BP
68.27% probability
4086-4060 cal BP (18.96%)
4051-3984 cal BP (49.31%)
95.45% probability
4146-4118 cal BP (7.96%)
4096-3968 cal BP (83.91%)
3945-3929 cal BP (3.58%)
PLD-49278:319±20 BP
68.27% probability
1520-1531 cal AD (9.40%)
1537-1588 cal AD (45.71%)
1621-1636 cal AD (13.17%)
95.45% probability
1496-1601 cal AD (76.49%)
1614-1641 cal AD (18.96%)
PLD-49279:7480±30 BP
68.27% probability
8362-8312 cal BP (36.29%)
8259-8212 cal BP (31.98%)
95.45% probability
8371-8279 cal BP (53.19%)
8269-8194 cal BP (42.26%)
PLD-49280:1065±21 BP
68.27% probability
906- 908 cal AD (1.80%)
977- 997 cal AD (30.09%)
1001-1021 cal AD (36.38%)
95.45% probability
897- 921 cal AD (14.69%)
955- 969 cal AD (5.00%)
972-1024 cal AD (75.76%)
PLD-49341:7595±30 BP
68.27% probability
8410-8379 cal BP (68.27%)
95.45% probability
8425-8350 cal BP (95.45%)
PLD-49342:7653±33 BP
68.27% probability
8512-8503 cal BP (5.97%)
8454-8394 cal BP (62.30%)
95.45% probability
8537-8529 cal BP (1.87%)
8521-8384 cal BP (93.58%)
PLD-49343:7738±30 BP
68.27% probability
8583-8578 cal BP (2.66%)
8547-8512 cal BP (27.90%)
8504-8454 cal BP (37.71%)
95.45% probability
8589-8562 cal BP (12.60%)
8557-8439 cal BP (82.85%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal BP)
暦年代 (cal AD)
1σ
2σ

第31図　暦年較正結果

付表５　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ 13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲		14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-49273 試料 No.1	-29.59 ± 0.24	7282 ± 33	7280 ± 35	6218-6136 cal BC (57.24%) 6094-6078 cal BC (11.03%)	6224-6071 cal BC (95.45%)	8167-8085 cal BP (57.24%) 8043-8027 cal BP (11.03%)	8173-8020 cal BP (95.45%)
PLD-49274 試料 No.2	-27.95 ± 0.23	7400 ± 33	7400 ± 35	6366-6307 cal BC (40.78%) 6265-6229 cal BC (27.49%)	6389-6220 cal BC (90.67%) 6131-6098 cal BC (4.78%)	8315-8256 cal BP (40.78%) 8214-8178 cal BP (27.49%)	8338-8169 cal BP (90.67%) 8080-8047 cal BP (4.78%)
PLD-49276 試料 No.3	-33.81 ± 0.26	7492 ± 37	7490 ± 35	6421-6366 cal BC (41.89%) 6308-6265 cal BC (26.37%)	6431-6330 cal BC (58.34%) 6320-6245 cal BC (37.11%)	8370-8315 cal BP (41.89%) 8257-8214 cal BP (26.37%)	8380-8279 cal BP (58.34%) 8269-8194 cal BP (37.11%)
PLD-49277 試料 No.4	-29.21 ± 0.21	3698 ± 28	3700 ± 30	2137-2111 cal BC (18.96%) 2102-2035 cal BC (49.31%)	2197-2169 cal BC (7.96%) 2147-2019 cal BC (83.91%) 1996-1980 cal BC (3.58%)	4086-4060 cal BP (18.96%) 4051-3984 cal BP (49.31%)	4146-4118 cal BP (7.96%) 4096-3968 cal BP (83.91%) 3945-3929 cal BP (3.58%)
PLD-49278 試料 No.5	-29.04 ± 0.17	319 ± 20	320 ± 20	1520-1531 cal AD (9.40%) 1537-1588 cal AD (45.71%) 1621-1636 cal AD (13.17%)	1496-1601 cal AD (76.49%) 1614-1641 cal AD (18.96%)	430-420 cal BP (9.40%) 413-362 cal BP (45.71%) 329-314 cal BP (13.17%)	454-349 cal BP (76.49%) 336-309 cal BP (18.96%)
PLD-49279 試料 No.6	-23.83 ± 0.18	7480 ± 30	7480 ± 30	6413-6363 cal BC (36.29%) 6310-6263 cal BC (31.98%)	6422-6330 cal BC (53.19%) 6320-6245 cal BC (42.26%)	8362-8312 cal BP (36.29%) 8259-8212 cal BP (31.98%)	8371-8279 cal BP (53.19%) 8269-8194 cal BP (42.26%)
PLD-49280 試料 No.7	-27.84 ± 0.14	1065 ± 21	1065 ± 20	906- 908 cal AD (1.80%) 977- 997 cal AD (30.09%) 1001-1021 cal AD (36.38%)	897- 921 cal AD (14.69%) 955- 969 cal AD (5.00%) 972-1024 cal AD (75.76%)	1044-1042 cal BP (1.80%) 973- 953 cal BP (30.09%) 949- 929 cal BP (36.38%)	1053-1029 cal BP (14.69%) 995- 981 cal BP (5.00%) 978- 926 cal BP (75.76%)
PLD-49341 試料 No.8	-30.57 ± 0.18	7595 ± 30	7595 ± 30	6461-6430 cal BC (68.27%)	6476-6401 cal BC (95.45%)	8410-8379 cal BP (68.27%)	8425-8350 cal BP (95.45%)
PLD-49342 試料 No.9	-27.62 ± 0.42	7653 ± 33	7655 ± 35	6563-6554 cal BC (5.97%) 6505-6445 cal BC (62.30%)	6588-6580 cal BC (1.87%) 6572-6435 cal BC (93.58%)	8512-8503 cal BP (5.97%) 8454-8394 cal BP (62.30%)	8537-8529 cal BP (1.87%) 8521-8384 cal BP (93.58%)
PLD-49343 試料 No.10	-22.77 ± 0.24	7738 ± 30	7740 ± 30	6634-6629 cal BC (2.66%) 6598-6563 cal BC (27.90%) 6555-6505 cal BC (37.71%)	6640-6613 cal BC (12.60%) 6608-6480 cal BC (82.85%)	8583-8578 cal BP (2.66%) 8547-8512 cal BP (27.90%) 8504-8454 cal BP (37.71%)	8589-8562 cal BP (12.60%) 8557-8429 cal BP (82.85%)

付載２．京都府南部精華町の柘榴川原遺跡の天然ダム湖堆積物

理事・京都大学名誉教授　増田富士雄

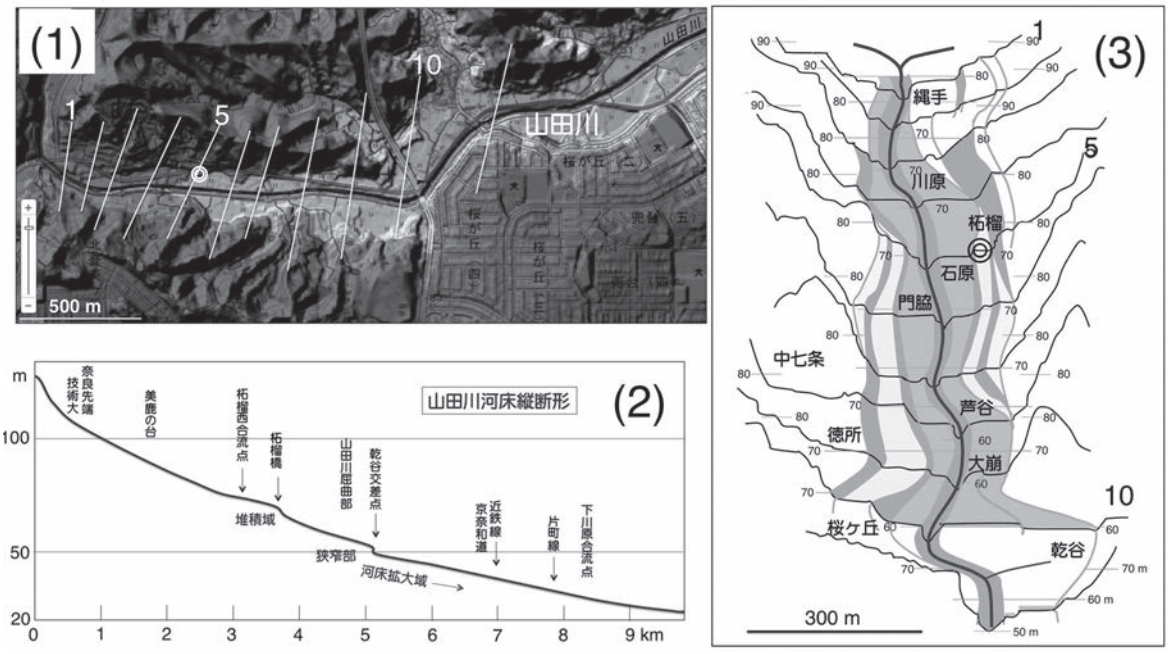
１．はじめに

京都府南部の柘榴川原遺跡の発掘現場の１トレンチで地層の観察を行った。この地層は暦年台でおよそ8,700年前から8,000年前のもので、河谷に沿ってできた細長い天然ダム湖とそこに流れ込んだ河川デルタの堆積物を主体とするものである。それに加え、この地層はその後の地震動による変形を受けていることが分かった。このような報告例の少ない特異な堆積物と地層の重なりであることが分かったのでここに報告する。

２．遺跡周辺の地形と観察地点

柘榴川原遺跡の１トレンチは、数10万年前～100万年前頃の大阪層群とよばれる地層からなる標高100～150mの丘陵地を開析して、東西に流れる山田川左岸の標高72mほどの段丘上に位置する（第32図(1)）。山田川の河床縦断形（第32図(2)）をみると、中流の調査地付近で勾配の変化点が認められる。平坦から急な段差という河床である．そこは柘榴西の合流点にできた小さな扇状地から、大崩－乾谷付近の河谷の狭窄部で河道の屈曲部に至る河谷がやや広がった地域である（第32図(3)）。

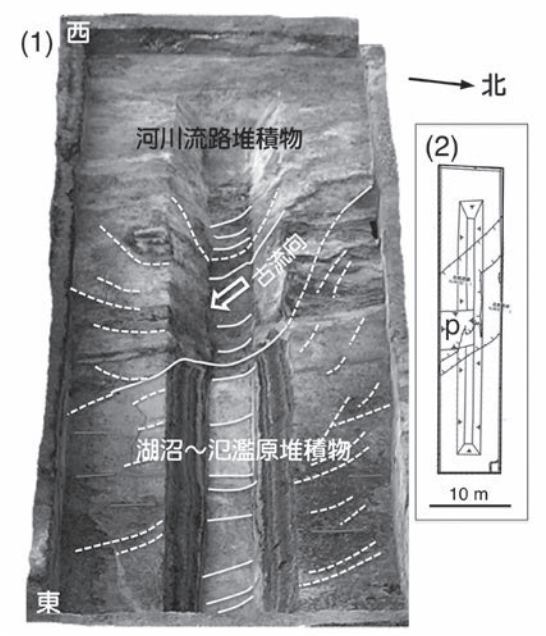
観察地点の１トレンチの詳細は、本文（６～11頁）を参照されたい。ここでの解析にはその発掘調査の過程で得られた写真の一部や年代値を利用させて頂いた。



第32図　柘榴川原遺跡周辺の地形

(1) 標高分布図、二重丸地点が調査地点、１～11は地形断面（3）の位置。　(2) 山田川河床の縦断形。

(3) 地形断面から作成した河岸段丘。国土地理院地図から作成



第33図　1トレンチ（平面）

(1) 地層面の線構造を実線・破線で表示、写真は縦方向が短縮されている。(2)実尺図。pは深掘り地点。

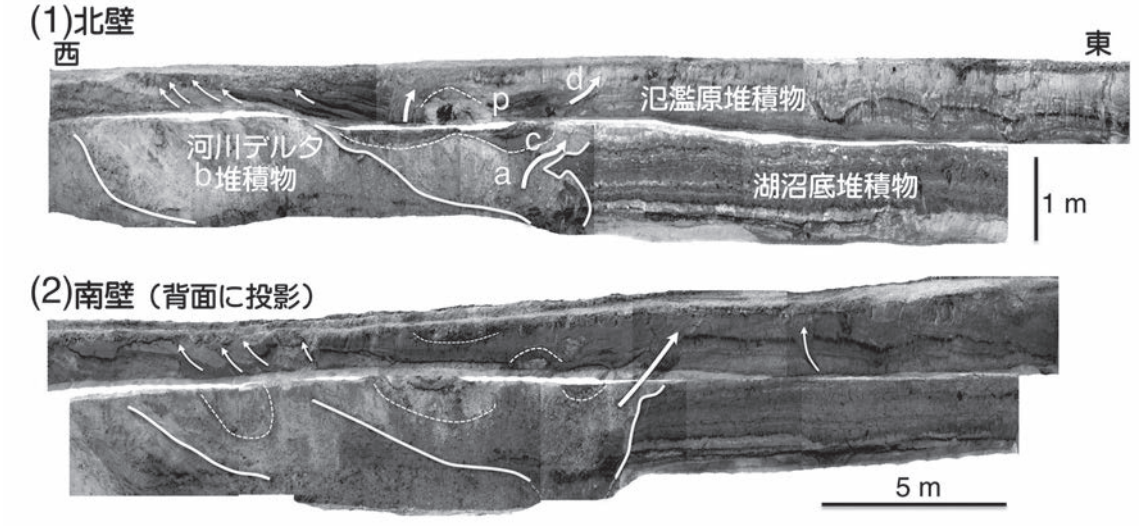
（1）堆積物の示す堆積環境とその変遷

1トレンチは長さ約34m、幅約6.5mで、およそ東西方向（N 80.5° E）に延びている（第33図(2)）。第33図(1)は東から西方向を撮影した写真を画像処理ソフトで変形させたものである。実尺図（第33図(2)）と比べ、長さ方向が短縮されていることに注意。写真の上方が西で下方が東になる。

このトレンチの堆積物は東と西で大きく異なる（第33図）。東側は灰色の泥質部で、西側は黄褐色の砂質部である。地層断面（第34図）でみると、西側の明色の砂質部が東側の水平な暗色の泥質部を谷状に削って接しているように見える。この断面図も縦横スケールが異なっていることに注意されたい。

西側の砂質部は、下部は含礫粗粒～細粒砂層で、明瞭なトラフ型斜交葉理が認められる（第35図(2)(3)）。そしてそれが側方に付加する堆積様式をとる。これは上位に氾濫原泥層が欠け上方細粒化の重なりが明瞭でない、砂礫堆を伴う網状流河川の流路堆積物である（増田1999）。その上位には塊状の砂礫層が重なり、上部が細粒砂に変化する淘汰の悪い土砂流堆積物（増田2021）がみられる（第35図(1)）。土砂流堆積物には側壁を削ったときに取り込まれたマッドクラスト（泥岩礫）が含まれる。この砂質部の分布の伸び（第33図）と堆積物の斜交葉理（第35図）の傾斜方向から求めた古流向は北西から南東である。

東部の泥質部は、灰黒色～灰白色の粘土やシルトや極細粒～細粒砂からなる平行層（厚さ約3



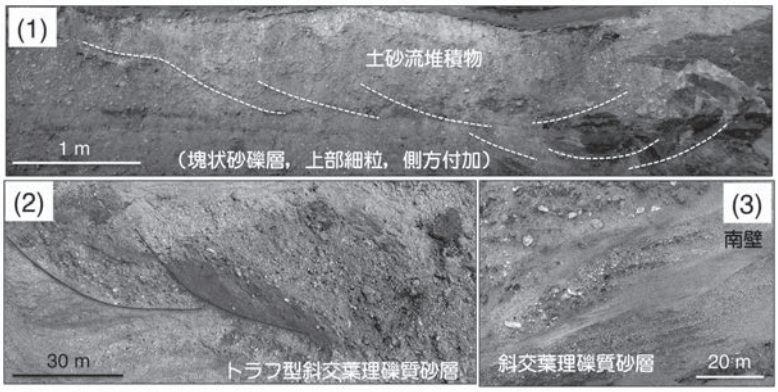
第34図　1トレンチ（断面）

(2) の南壁写真は、(1) の北壁断面に対応するように背面から投影している。矢印は水抜けの痕跡。a、b は第 35 図 (1) と (2) 地点、c d は第 35 図の (1) と (3) 地点、p は第 38 図の (1) 地点。写真は縦横スケールが異なる。

m)で(第36図)、植物片、根痕、炭化物、生痕、マンガンの斑点などがみられる。この泥質部には波浪で形成されたウェーブリップル葉理が多く認められる(第37図(1)～(4))。ウェーブリップルの峰の伸びの方向から求めた波の振動方向すなわち水塊の長軸方向はほぼ東西で、それは現在の山田川の谷の伸張方向と一致する。また、波浪でつくられた小型で波状のハンモック状葉理(HCS)もみられる(第37図(5)、第38図(1))。これらは後述するように変形作用を被っており、加えて上部ではそこに生息していた生物の生痕や上位から侵入した根痕や茎痕で乱されている(第37図(5))。

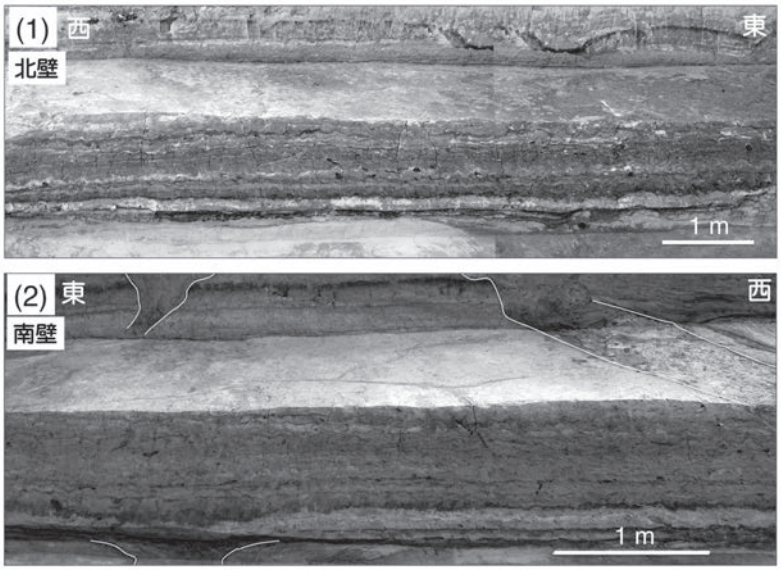
波浪堆積構造が多くみられることから、この泥質部の平行層は、ある程度の大きさの波浪が発生する滞水域の浅い湖底の堆積物であることがわかる。また、上部は洪水氾濫起源の逆級化層(増田・伊勢屋1985)や根痕などがみられることから、氾濫原堆積物である。

砂質部と泥質部の境界は第34図にみられるように、谷状あるいはノッチ状に砂質部上部の土砂流堆積物によって侵

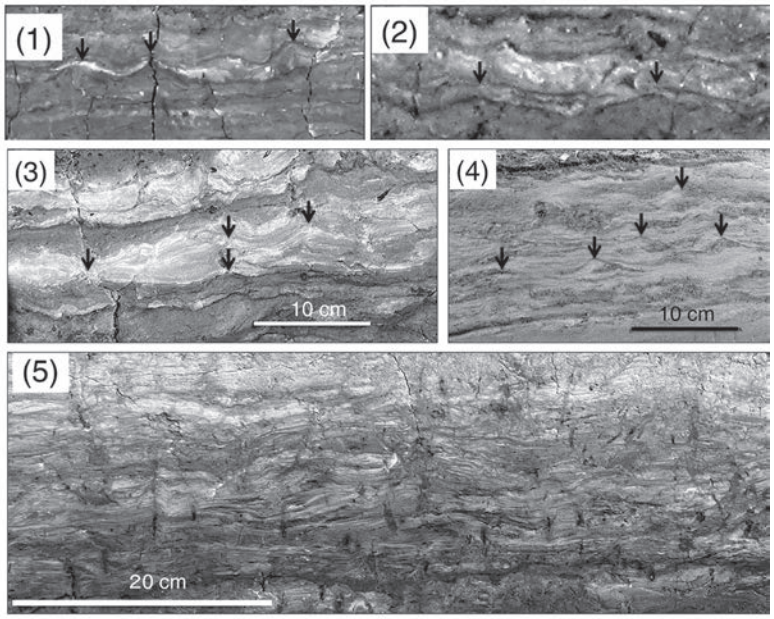


第35図　砂質部の河川性堆積物

写真(1)、(2)の地点は第34図のa、bに示す。

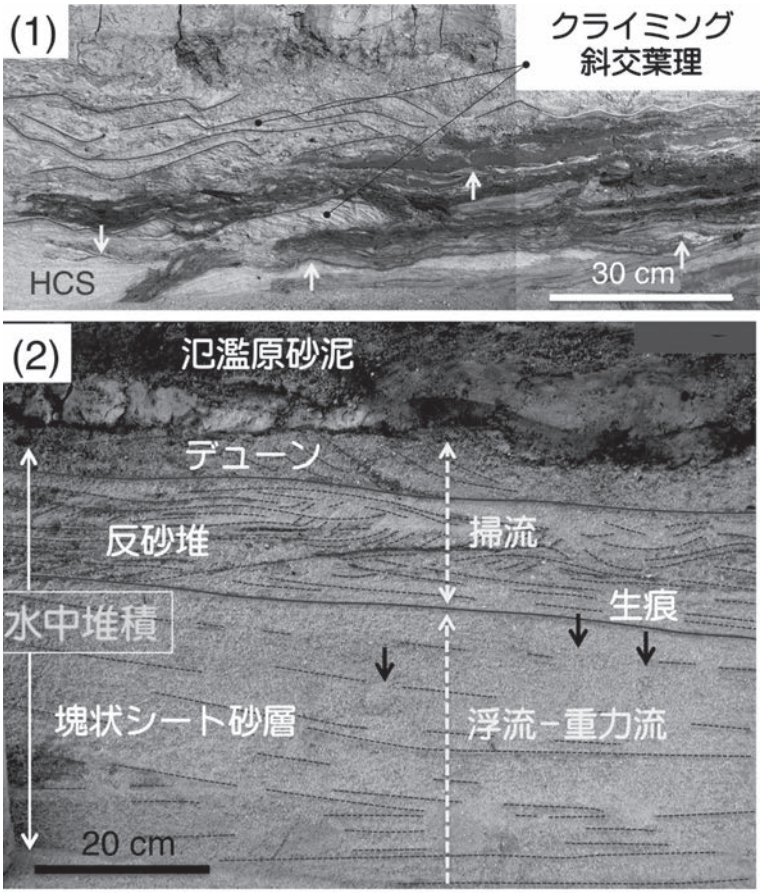


第36図　泥質部の湖沼～氾濫原性堆積物



第37図　泥質部の地層(第36図)にみられるウェーブリップル葉理

矢印はリップル峰部、(5)の縦の筋は上位層からの根痕、茎痕。

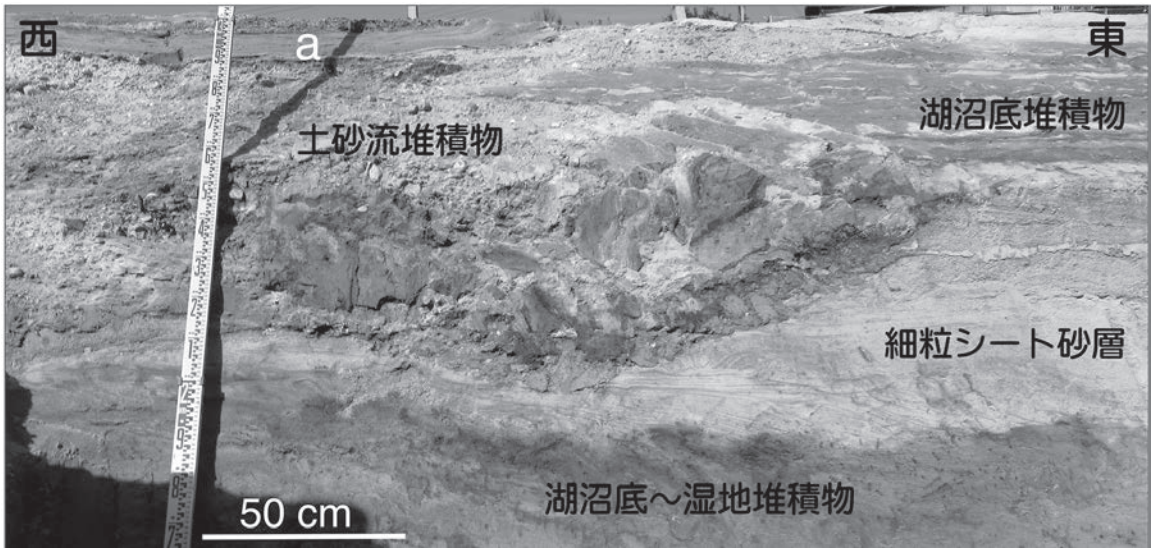


第38図　砂質部と泥質部の境界部
写真(1)は第34図のp地点、(2)は第39図のp地点。

食されている。一部では侵食された泥質部の泥層がその土砂流堆積物にマッドクラストとして取り込まれている（第35図(1)、第39図）。その境界部を詳細にみると、西側の砂質部と東側の泥質部とは指交状を呈して移り変わっている（第38図(1)）。しかも増水した河川流が水中に入り、土砂供給が多く長く続いた状態の水底でデューンやリップルといったベッドフォームが、次々と重なってできるクライミング斜交葉理砂層から側方で有機質の黒色砂質泥層へと変化している。そのフォーセット葉理の傾斜方向から求めた流向は西から東で、北西－南東に伸びた河川から広がって流れたことがわかる。第33図の泥質部にみられる線構造のトレース（破線）は、流路から拡散した流線を反映していると考えられる。さらにその延長部をみると、泥質部に細粒の淘汰の良い砂層がみられ（第38図(2)）、その堆積構造は氾濫流が水中で拡散してできる重力流起源の塊状シート砂層の平行層で、上部は掃流の低流砂階の平行葉理や斜交葉理、さらに高流砂階のバックセット葉理や反砂堆（アンティデューン）葉理など（増田2021）に変化している。すなわち泥質部は湖岸の浅い場所での水中堆積物であることがわかる。砂質部と泥質部の境界が指交関係を示す同時異相であることは、その産状から（第39図）明らかである。

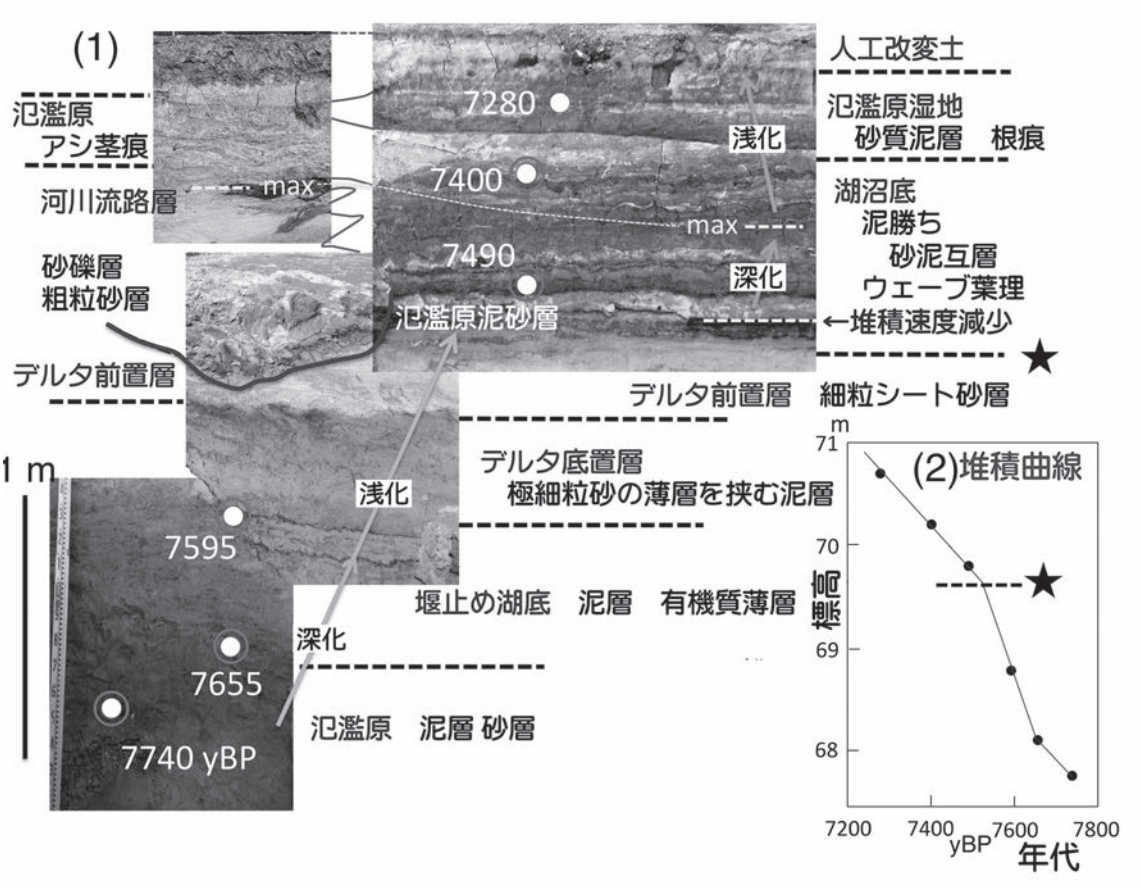
西側の砂質部の下部は河川の流路堆積物からなることはすでに述べた。このことと泥質部が浅い湖沼底堆積物であり、砂質部との境界の堆積物が氾濫流からの水中堆積物であり、指交関係を示すことを考えると、このトレンチの地層の主体は河川が湖沼に流れ込んだ場所、すなわち小規模な河川デルタの堆積物といえる。

以上のことと、一部で深掘りした地点（第33図(2)のｐ地点）で観察した下部の地層を加えた、地層全体の重なりから読みとると（第40図(1)）、観察した最下部は河川の氾濫原堆積物であり、その上位に極細粒砂や有機質層の薄層を挟む泥層から、砂泥細互層に変化し、細粒のシート砂層（第39図）に変化する。そして中部の泥層で陸化して氾濫原になっている。氾濫原の上に湖沼性の泥層から細互層（第39図）が重なり、再び滞水域の湖沼ができて、そこが河川の影響を受けるデル



第39図　砂質部と泥質部が同時異相を示す境界部

pは第38図(2)の地点、aは剥離して移動し上下に圧縮された泥層。



第40図　１トレンチの層序と堆積環境の変化

(2)はその堆積曲線、星印は対応する層準。上部３点の年代測定点は対応する層準に移動させて表示したもの。
年代は^{14}C年代値で、本文並びに付編１による。

タ環境となり、ついには陸化したのである。

この変化を現地の地形で想像してみると、段丘時代の山田川が狭窄部で土砂崩れなどによって堰き止められ、天然ダム湖が形成され、そこに山田川がデルタをつくって前進し、湖の消滅で再び河岸の氾濫原に戻ったのであろう。こうした小さな堰止め湖では気候に左右されて、水位の変動は激しく大きかったに違いない。わずかであるが変形したウェーブリップル葉理が認められることから、水域での堆積物であることがわかるが、湖底特有の青灰黒色の還元色のグライ化層が少なく、茶色に土壌化している部分も多い（本文第37図）ことからも、浅い水域で幾度も湿地状態になったことが伺える。年代値から推定すると水域や水付きの湿地であった継続期間は60年程度である（第40図）。年代値と標高のプロット（堆積曲線）は上方に堆積速度が増す曲線を描き（第40図(2)）、デルタの前進による埋積パターン（増田2000）を示している。残念ながら、現状では土砂崩れ地点の痕跡などは特定できていない。

その後、この地点は再び泥質層上部の平行泥層（第36図）で示される天然ダム湖の湖沼環境が成立した（第39図、第40図）。その湖沼環境はすでに述べたように波浪堆積構造が多く、青灰黒色のグライ化層からなることから、水位も高く水域も下部のものより大きかったといえる。この湖沼も河川デルタが前進して、土砂流が流れ込んだりして、100年程でまた河川の氾濫原湿地に戻り、ついには段丘化してしまったのである（第40図）。

（２）地震による地層の変形

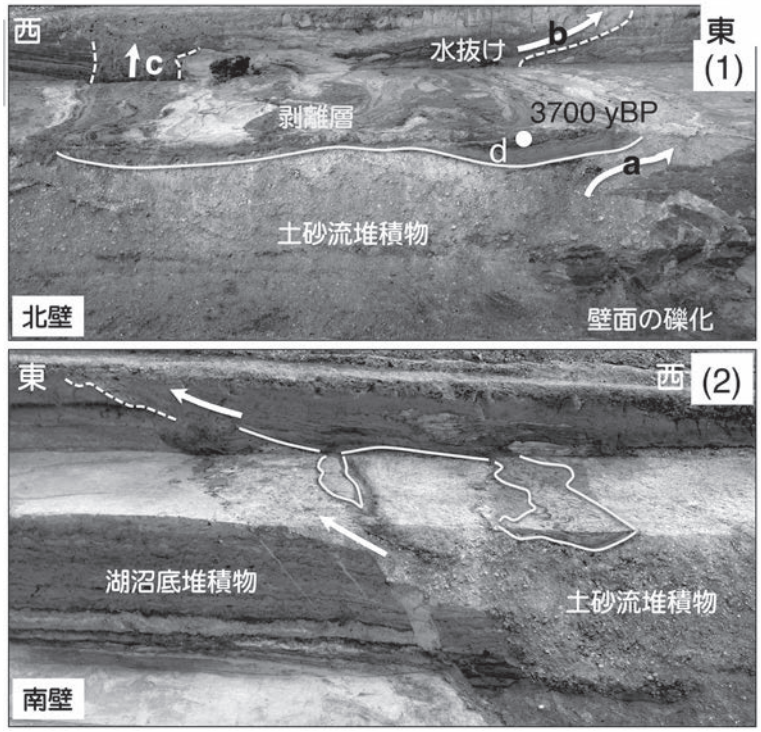
この地点の地層のもうひとつの特徴は、地層が著しく変形していることである。地層が流動化して褶曲し、噴砂や水抜け構造、さらには泥質層の一部が破壊し剥離して側方に滑動し、同層準の土砂流層の上に重なったような部分さえある（第39図のa、第41図(1)のｄ）。移動して定着した層と正常と思われる層のウェーブリップルの形を比較すると、移動した層（第39図a）は３～４割ほど上下に圧縮されている。

地盤の振動で発生する水抜け現象は、あたかも粒子間を水が抜けたかのような曲線を描く線構造をつくる（第34図、第41図の矢印）。水抜けは泥層の割れ目に入り込んだ砂の脈や、断面にラッパ型の注入脈をつくっている（第36図(2)、第41図(1)のc）。砂礫層では水抜けによって明らかに変化がみられる。水が抜けた方向に沿って上方が細粒化し、上方に砂だけが移動したような構造を示す（第42図(1)）。また水抜け方向に粒子の長軸を回転させ再配列している（第42図(2)）。こうした水抜け現象は層理面や葉理面、岩相境界面などを利用し、あるところから層理面を突き破って上方に抜けている。

変形はこのトレンチの地層全体に及んでおり、他のトレンチでみられる1,000年前以降の若い時代の地層（本文第６図（７頁）の柱状図参照）にはみられない。この地層の変形の原因は地震の震動が有力だと考える。大きく移動した泥質層の有機質砂層が示す3,700年前（^{14}C 年代）、4,146～3,929年前（暦年代）（第41図(1)）は、この出来事の年代を示している可能性があるのではと考えている。

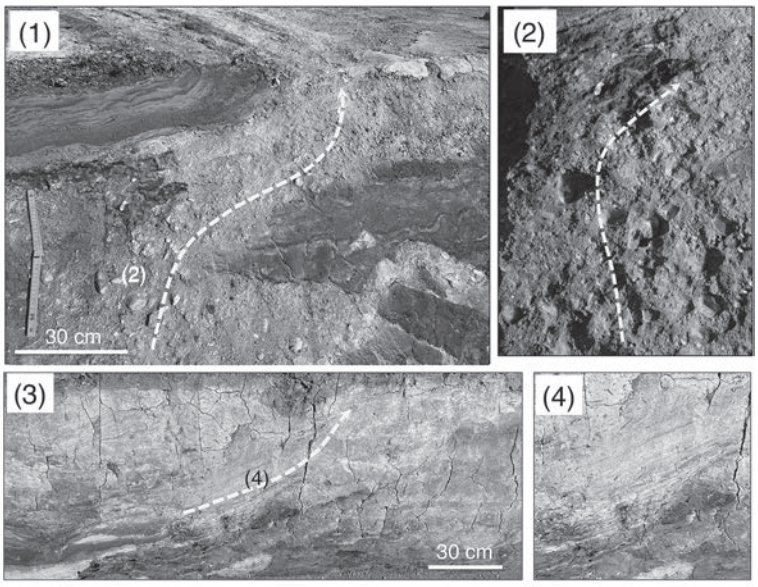
西側の砂質部も東に傾いて西側が盛り上がった産状を示している（第34図）。このトレンチのす

ぐ西側に南北軸の撓曲構造があって、その東翼部の縁辺にこの地層があたるのではと考えている。それは１トレンチの西側の２トレンチや３トレンチで下部に基盤の大阪層群が露出するからである。２トレンチや３トレンチでは上部が侵食され、若い地層に覆われてしまっている。この想定される南北軸の撓曲構造はこの地域の基盤の大阪層群の構造（三田村1992）に一致する。



第41図　変形した地層

aは第42図(1)、bは第42図(3)の地点。cは貫入脈状部、dは剥離層の基底。



第42図　液状化に伴う水抜け構造

矢印付き破線は水抜けルート、(1)、(3)内の数字は拡大写真(2)、(4)の位置。
(1)、(3)の位置は第34図のc、dに示す。

４．まとめ

(1) 柘榴川原遺跡の１トレンチの地層は、8,000年前～7,000年前の段丘時代の山田川の谷に浅い天然ダム湖ができ、そこに当時の山田川が北西から流れ込んでできたデルタ流路とその周囲の堰止め湖の堆積物からなる。

(2) 堰止め湖の湖底堆積物は洪水浮流起源の細粒砂層を挟む泥勝ち互層で、デルタ前置層は河川からの低流・高流砂階の堆積構造を示す掃流や重力流砂層で、弱いながらも波浪の影響が多く認められる。デルタ面の流路堆積物は網状河川の砂礫層や砂層で、土砂流砂礫層を挟んでいる。浅い湖沼では土砂流の急激な流入によって下位や側方の堆積物が大きく侵食されている。

(3) 天然ダム湖は山田川の東西の谷に広がったもので、水位変動が大きかった。その湖沼は少なくとも２回成立した。２回目の湖沼のほうが大きく長く存在した。堰止め湖は水位変動しなが

らも百年から数十年の期間存在したことが、^{14}C年代値から推定できる。

(4) 堆積後、地震動による変形が地層全体に影響した。そこでは地層の液状化、礫化、剥離・移動、断層、褶曲などの現象が起こった。この過程で発生した水抜け現象が地層に多く認められる。トレンチの西側部分には多少の傾動と隆起が発生し、南北性の軸をもった撓曲構造が形成されたことを示している。

参考文献

増田富士雄1999「透水層・帯水層のトレース：ダイナミック地層学からのアプローチ」『地下水技術』41(10) 1－15

増田富士雄2000「堆積曲線から求める年代と累重速度」『月刊地球』22(3)　pp.191-197.

増田富士雄2021「発掘現場でみられた高速度流・高濃度流堆積物」『京都府埋蔵文化財論集』第８集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.449-458.

増田富士雄・伊勢屋ふじこ1985「“逆グレーディング構造”：自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造」『堆積学研究会報』22/23 pp.108-116.

三田村宗樹1992「京阪奈丘陵の大阪層群の層序と地質構造」『第四紀研究』31 pp.159-177

図　　版

犬飼遺跡　図版第１

第４次小規模調査区



(1)調査地遠景(南西から)



(2)１トレンチ全景(西から)



(3)１トレンチ断面(南から)

犬飼遺跡　図版第２

第４次小規模調査区



(1) ２トレンチ全景(北東から)



(2) ２トレンチ断面(北西から)



(3) ３トレンチ全景(東から)



(1) ３トレンチ木製品出土状況
（北西から）



(2) ３トレンチ木材出土状況
（北東から）



(3) ３トレンチ断面（東から）

犬飼遺跡　図版第４

第４次小規模調査区



(1) ４トレンチ断面(北東から)



(2) ５トレンチ断面(南西から)



(3) ７トレンチ全景(北西から)

犬飼遺跡　図版第５

第４次小規模調査区



(1) ７トレンチ断面(西から)



(2) ８トレンチ全景(西から)



(3) ８トレンチ断面(西から)

犬飼遺跡　図版第６

第４次小規模調査区



(1) ９トレンチ全景(北から)



(2) ９トレンチ断面(北東から)



(3)10トレンチ全景(南西から)

犬飼遺跡　図版第７

第４次Ｆ地区



(1)調査地遠景(南東から)



(2)調査区東側断面(南西から)



(3) 1 トレンチ断面(南から)

犬飼遺跡　図版第８

第４次Ｆ地区



(1)溝状遺構ＳＤ16検出状況１
（南東から）



(2)溝状遺構ＳＤ16検出状況２
（南東から）



(3)溝状遺構ＳＤ16
土器出土状況１（南東から）

第４次Ｆ地区



(1)溝状遺構ＳＤ16
土器出土状況２(南東から)



(2)溝状遺構ＳＤ16
土器出土状況３(南東から)



(3)溝状遺構ＳＤ16
土器出土状況４(南から)

犬飼遺跡　図版第10

第４次Ｆ地区



(1)溝状遺構ＳＤ16杭出土状況１
（東から）



(2)溝状遺構ＳＤ16杭出土状況２
（南から）



(3)溝状遺構ＳＤ16断面ｅ－ｅ’
（南東から）

犬飼遺跡　図版第 11

第４次Ｆ地区



(1)溝状遺構ＳＤ16断面ｆ－ｆ’
（北西から）



(2)溝状遺構ＳＤ16断面ｇ－ｇ’
（南から）



(3)溝状遺構ＳＤ16断面ｈ－ｈ’
（北から）

犬飼遺跡　図版第12

第４次Ｆ地区



(1)溝状遺構ＳＤ16断面ｈ－ｈ’
（南東から）



(2)溝状遺構ＳＤ16完掘
（南東から）



(3)掘立柱建物ＳＢ88検出状況
（南西から）

犬飼遺跡　図版第13

第４次Ｆ地区



(1)掘立柱建物ＳＢ88完掘
（南西から）



(2)柱穴ＳＰ199検出状況
（南から）



(3)柱穴ＳＰ199断面（南西から）

第４次Ｆ地区



(1)掘立柱建物ＳＢ90検出状況
（北東から）



(2)掘立柱建物ＳＢ90完掘状況
（北東から）



(3)柱穴ＳＰ77断面(北東から)

犬飼遺跡　図版第15

第４次Ｆ地区



(1)柱穴ＳＰ78断面(北から)



(2)柱穴ＳＰ91断面(南西から)



(3)竪穴建物ＳＨ150断面
(南東から)

犬飼遺跡　図版第16

第４次Ｆ地区



(1)竪穴建物ＳＨ150断面
（南西から）



(2)竪穴建物ＳＨ150完掘
（北東から）



(3)柱穴ＳＰ141土器出土状況
（北から）

犬飼遺跡　図版第 17

第６次Ｆ拡張区



(1)空中写真(東から)



(2)遺構検出状況(北から)

犬飼遺跡　図版第 18

第６次Ｆ拡張区



(1)流路ＮＲ206完掘状況(北から)



(2)流路ＮＲ206南側(北西から)

犬飼遺跡　図版第19

第６次Ｆ拡張区



(1)暗渠検出状況(北から)



(2)不明遺構ＳＸ205木製品
出土状況(南から)



(3)溝状遺構ＳＤ200遺物
出土状況(北から)

犬飼遺跡　図版第 20

第６次Ｆ拡張区



(1)溝状遺構ＳＤ200
遺物出土状況(北から)



(2)流路ＮＲ206・溝状遺構ＳＤ
200遺物出土状況(東から)



(3)溝状遺構ＳＤ200遺物出土
状況(北から)

犬飼遺跡　図版第 21

第６次Ｆ拡張区



(1)断ち割り断面(南西から)



(2)溝状遺構ＳＤ200畔１
断ち割り断面(南東から)



(3) 溝状遺構ＳＤ16・ＳＤ200
断ち割り断面(東から)

第６次Ｆ拡張区



(1)土坑ＳＸ201半裁断面
（東から）



(2)柱穴ＳＰ202半裁断面
（南から）



(3) 土坑ＳＸ203半裁断面
（南から）

犬飼遺跡　図版第 23

第６次小規模調査区



(1) 1 トレンチ全景(東から)



(2) 1 トレンチ全景(西から)



(3) 1 トレンチ断ち割り断面
（東から）

犬飼遺跡　図版第 24

第６次小規模調査区



(1) ２トレンチ全景(東から)



(2) ２トレンチ断ち割り断面
（西から）



(3) ２トレンチ断ち割り断面
（南から）

犬飼遺跡　図版第 25

第６次小規模調査区



(1) ３トレンチ全景(東から)



(2) ３トレンチ断ち割り断面
（東から）



(3) ３トレンチ断ち割り断面
（南から）

犬飼遺跡　図版第 26

第６次小規模調査区



(1) ４トレンチ全景(北から)



(2) ４トレンチ全景(南から)



(3) ４トレンチ断ち割り断面
（北から）

犬飼遺跡　図版第 27

第６次小規模調査区



(1) ５トレンチ全景(南から)



(2) ５トレンチ断ち割り断面
（南から）



(3) ５トレンチ断ち割り断面
（北から）

犬飼遺跡　図版第 28

第６次小規模調査区



(1) ６トレンチ全景(東から)



(2) ６トレンチ断ち割り断面
（東から）



(3) ６トレンチ断ち割り断面
（西から）

犬飼遺跡　図版第 29

第９次Ｋ地区



(1)調査区と平野部を望む(北西から)



(2)調査区全景(上が北)

犬飼遺跡　図版第 30

第９次Ｋ地区



(1)区画溝ＳＤ01全景(南西から)



(2)区画溝ＳＤ01全景(南東から)

犬飼遺跡　図版第 31

第９次Ｋ地区



(1)区画溝ＳＤ01検出状況１
（南から）



(2)区画溝ＳＤ01検出状況２
（東から）



(3)区画溝ＳＤ01検出状況３
（東から）

第９次Ｋ地区



(1)区画溝ＳＤ01土層断面１
（北から）



(2)区画溝ＳＤ01土層断面２
（北から）



(3)区画溝ＳＤ01土層断面３
（南から）

第９次Ｋ地区



(1)区画溝ＳＤ01内集石遺構
ＳＸ125全景(南から)



(2)区画溝ＳＤ01内集石遺構
ＳＸ125土層断面２(西から)



(3)区画溝ＳＤ01内集石遺構
ＳＸ125土層断面３(東から)

犬飼遺跡　図版第 34

第９次Ｋ地区



(1)柵列ＳＡ01全景(北から)



(2)柵列ＳＡ01柱穴ＳＰ11
土層断面(西から)



(3)柵列ＳＡ01柱穴ＳＰ12
土層断面(西から)

第９次Ｋ地区



(1)柵列ＳＡ02柱穴ＳＰ84
土層断面(西から)



(2)柵列ＳＡ02柱穴ＳＰ83
土層断面(西から)



(3)柵列ＳＡ02柱穴ＳＰ82
土層断面(西から)

第９次Ｋ地区



(1)土坑ＳＫ94遺物出土状況
（北から）



(2)土坑ＳＫ94遺物完掘状況
（北から）



(3)遺物出土状況（西から）

犬飼遺跡　図版第 37

第９次Ｋ地区



(1)下層確認断ち割り配置状況１
（北西から）



(2)下層確認断ち割り配置状況２
（北西から）



(3)下層確認断ち割り全景１
（南西から）

犬飼遺跡　図版第 38

第９次Ｋ地区



(1)下層確認断ち割り１土層断面
（北西から）



(2)下層確認断断ち割り２全景
（南東から）



(3)下層確認断ち割り２土層断面
（北東から）

犬飼遺跡　図版第 39

第９次Ｋ地区



(1)下層確断ち割り３全景
（南東から）



(2)下層確認断ち割り３土層断面
（北西から）



(3)下層確認断ち割り４全景
（西から）

犬飼遺跡　図版第 40

第９次Ｋ地区



(1)下層確認断ち割り４土層断面
（南から）



(2)下層確認断ち割り５全景
（北から）



(3)下層確認断ち割り５土層断面
（東から）

第 4 次


1


2


3


12


13


4


14


15


17


16


18


19

第 4 次調査出土遺物 1

第 4 次



20



21



22



23





24



25



26



27



28



29

第 4 次調査出土遺物 2

第 4 次



31



30



35



33



36



34



37



32

第 4 次調査出土遺物 3

第 4 次


38


39


40


41


42


43


44


45


49


50


51


53

第 4 次調査出土遺物 4

第 4 次



52



54





55



56



57



58



60





59



61

第 4 次調査出土遺物 5

第６次Ｆ拡張区



(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器１(外面)



(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器１(内面)



(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器２(外面)



(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器２(内面)

第６次Ｆ拡張区



(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器３(外面)



(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器３(内面)



64



67



73



74



76



77



80

溝状遺構ＳＤ 200 出土土器 4



83



84



87

溝状遺構ＳＤ200出土土器５

第６次Ｆ拡張区



88



89



90



91



92



93



94



96



100



104

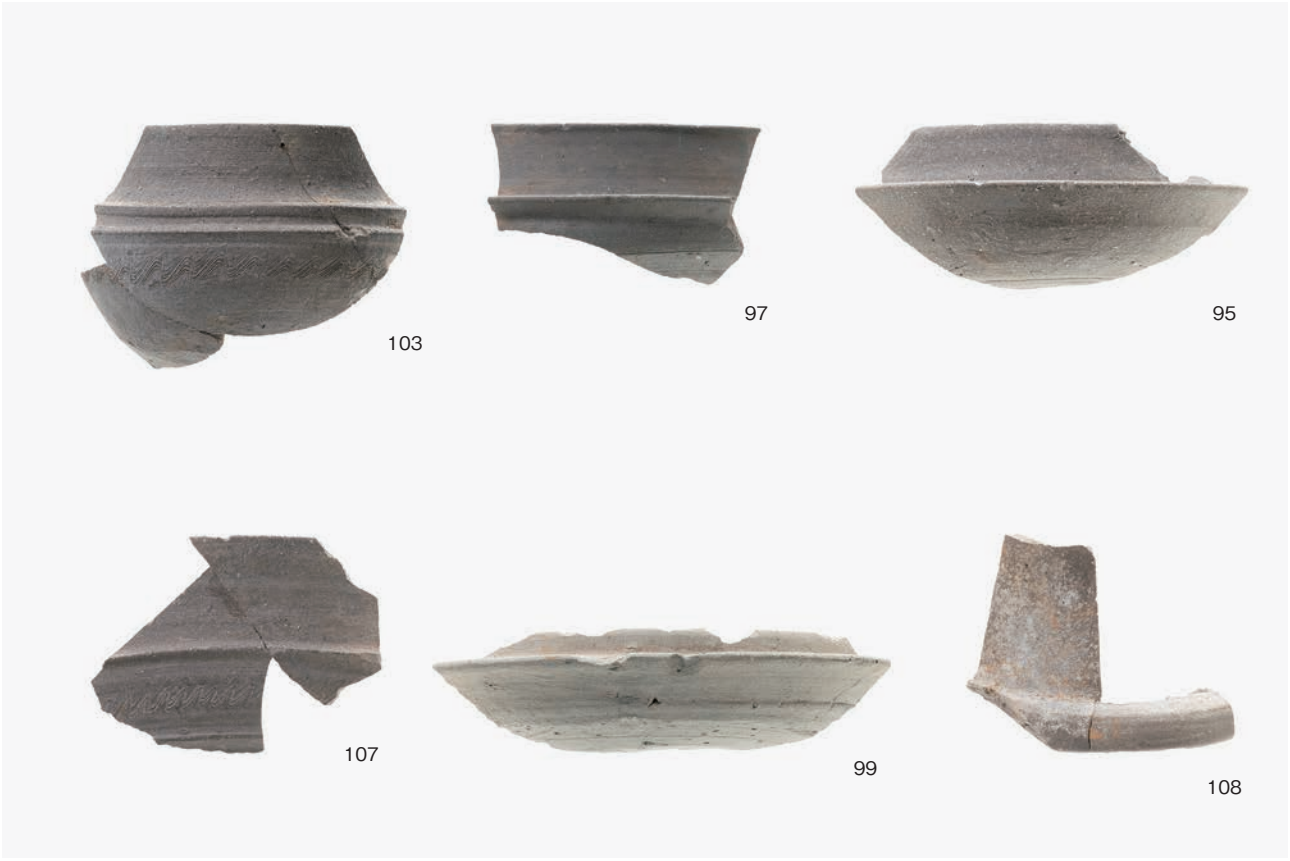


106

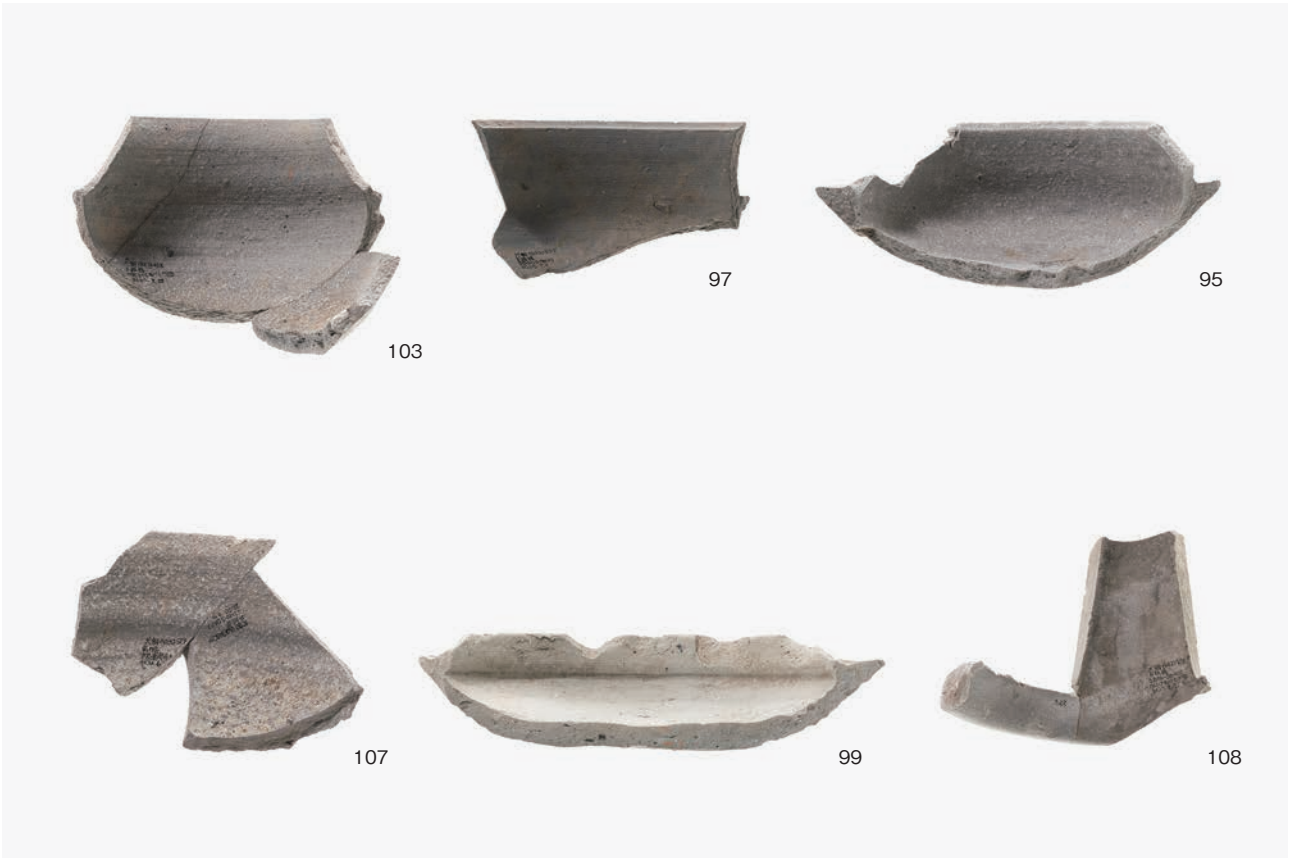


112

溝状遺構ＳＤ200出土土器６



(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器７(外面)



(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器７(内面)



(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器８(外面)



(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器８(内面)



(1)溝状遺構ＳＤ200出土土器９(外面)



(2)溝状遺構ＳＤ200出土土器９(内面)

第６次Ｆ拡張区

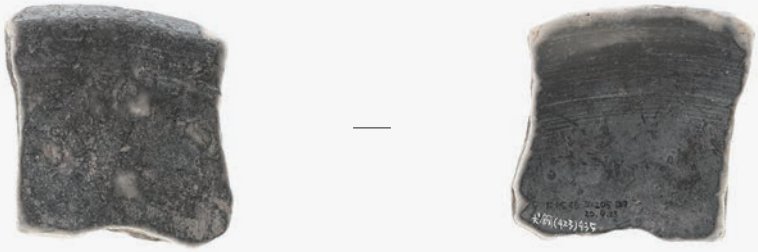


溝状遺構ＳＤ205出土土器１

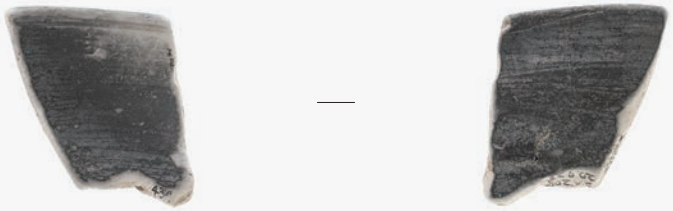
第６次Ｆ拡張区



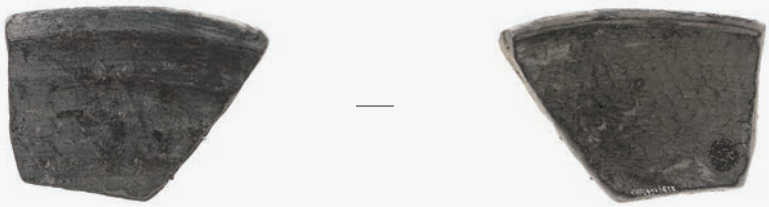
124



125



126



127



128



129

溝状遺構ＳＤ 205 出土土器２

第６次Ｆ拡張区



130



131



132



133



134



143



144



146



154

溝状遺構ＳＤ205出土土器３・溝状遺構ＳＤ200出土玉類・土色変化ＳＸ204出土土器・自然流路ＮＲ206出土土器１

第６次Ｆ拡張区



147



148



149



150

自然流路ＮＲ206出土土器２

第６次Ｆ拡張区



151



153



155



156



157

自然流路ＮＲ206出土土器３・小規模調査区出土土器１

第６次Ｆ拡張区



158



159



160-1



160-2



161

小規模調査区出土土器２

第９次Ｋ地区



196



197





206



199



210





211

区画溝ＳＤ01出土土器１

第９次Ｋ地区



213



214



215



212



216

区画溝ＳＤ01出土土器２・集石遺構ＳＸ125出土土器・土坑ＳＫ94出土土器

犬飼遺跡　図版第 63

第９次Ｋ地区



218



222





219





220





223



224



225



226



228





227

包含層出土土器 1

第９次Ｋ地区



229



234





230





231





232





233





235

包含層出土土器２

第９次Ｋ地区


236


237




240


241


242


244


246


247


249


250


252




253

包含層出土土器３

第９次Ｋ地区


254


255


256


258


259


260


261


262




265


266


268




267

包含層出土土器４

第９次Ｋ地区



269



270





271



273



274



275



276



279



282

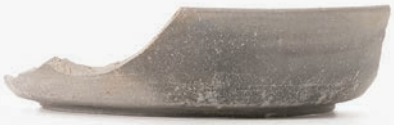
包含層出土土器５

第９次Ｋ地区





280



283



286



287



288



289



290



291



294

包含層出土土器６

第９次Ｋ地区



295



296



297



300



301



302



303



305



306



308

包含層出土土器７

第９次Ｋ地区



309



311





310





312





313





314

包含層出土土器８

第９次Ｋ地区



315



316



317



321





318





319



322



325

包含層出土土器９

第９次Ｋ地区



326-1



326-2



324



327



328

包含層出土土器10

第９次Ｋ地区



334



345





340





341



346



347





348

包含層出土土器11

第９次Ｋ地区





350





351



352



363

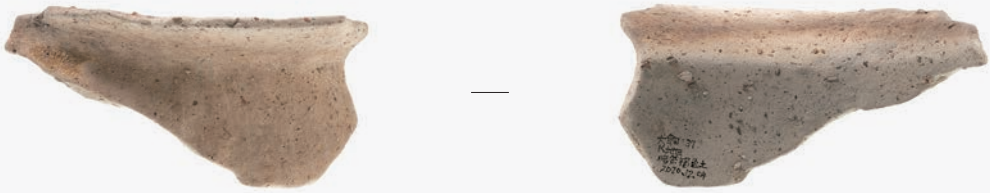




353

包含層出土土器12

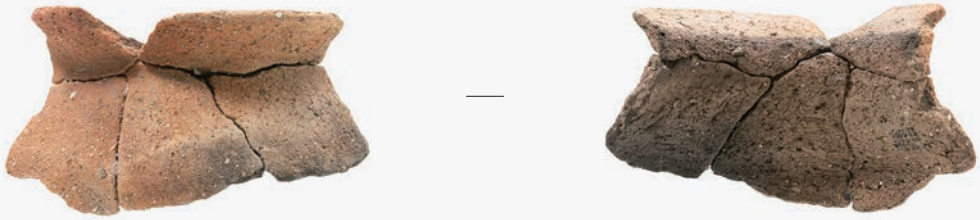
第９次Ｋ地区



354



355



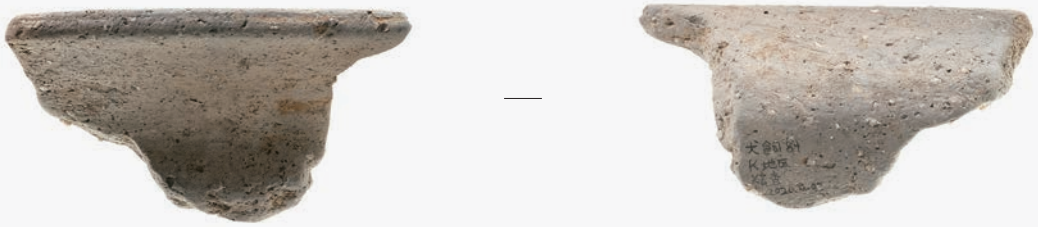
356



357

包含層出土土器13

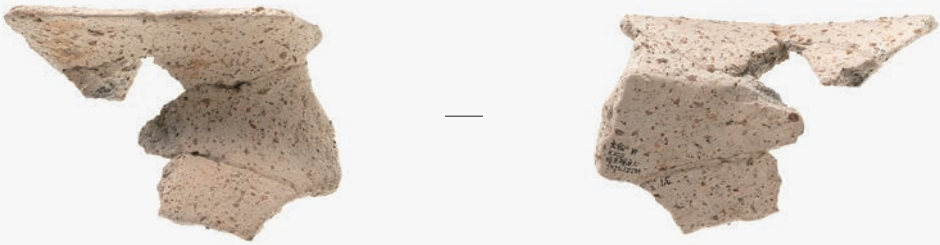
第９次Ｋ地区



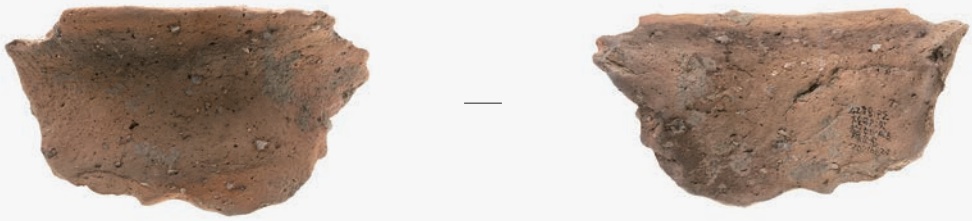
358



359



360



362

包含層出土土器14









第 4 次調査出土木製品 1



第 4 次調査出土木製品 2



113



114



115



116

第 6 次調査出土木製品 1



135



136



137



138



139



140



141



142

第 6 次調査出土木製品 2

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 1

柘榴川原遺跡



調査区全景オルソ画像（上が東）

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 2

柘榴川原遺跡



(1)調査区遠景(北東から)



(2)調査区遠景(南東から)

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 3

柘榴川原遺跡



(1) 1 トレンチ全景(東から)



(2) 1 トレンチ全景(西から)



(3) 1 トレンチ北壁土層断面
(南東から)

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 4

柘榴川原遺跡



(1) 1 トレンチ中央部土層断面
（南から）



(2) 2 トレンチ全景(西から)



(3) 2 トレンチ東壁土層断面
（西から）

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 5

柘榴川原遺跡



(1) 3 トレンチ全景(西から)



(2) 3 トレンチ西壁土層断面
(東から)



(3) 3 トレンチ杭列 S X301
(北西から)

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 6

柘榴川原遺跡



(1) 4 トレンチ全景(西から)



(2) 4 トレンチ全景(東から)



(3) 4 トレンチ西壁土層断面
(東から)

柘榴川原遺跡



(1) 4 トレンチ西側土層断面
（西から）



(2) 5 トレンチ水田検出状況
（東から）



(3) 5 トレンチ杭列 S X501
（北から）

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 8

柘榴川原遺跡



(1) 5 トレンチ全景(東から)



(2) 5 トレンチ西壁土層断面
(東から)



(3) 5 トレンチ中央部土層断面
(東から)

柘榴川原遺跡



(1) 6 トレンチ全景(東から)



(2) 6 トレンチ東壁土層断面
(西から)



(3) 7 トレンチ全景(東から)

柘榴川原遺跡



(1) 7 トレンチ西壁土層断面
（東から）



(2) 8 トレンチ全景(西から)



(3) 8 トレンチ西壁(東から)

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 11

柘榴川原遺跡



(1) 9 トレンチ全景(東から)



(2) 9 トレンチ北壁土層断面
(南東から)



(3) 9 トレンチ西壁(東から)

柘榴川原遺跡



(1)土器　集合　表裏　個体



(2)木器　集合　個体

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 13

石原遺跡



調査区地遠景（東から）　生駒・四條畷方面を望む。右の道路が大阪街道、左は国道163号

石原遺跡



(1) 1 区全景(南東から)



(2) 1 区全景(北西から)



(3) 1 区調査区北壁土層断面
(南から)

石原遺跡



(1) 2 区第 1 面全景(東から)



(2) 2 区第 1 面小溝群(北東から)

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 16

石原遺跡



(1) ２区第１面全景(西から)



(2) ２区小溝群検出状況(北西から)



(3) ２区ＳＤ23・24(南東から)

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 17

石原遺跡



(1) 2 区地山面全景(東から)



(2) 2 区地山面全景(北西から)

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 18

石原遺跡



(1) ２区調査区拡張ＳＤ110
調査状況(北西から)



(2) ２区ＳＰ107遺物出土状況
(北から)



(3) ２区ＳＸ109完掘状況
(北東から)

石原遺跡


(1) ２区ＳＤ01土層断面（南から）


(2) ２区ＳＤ06土層断面（南から）


(3) ２区ＳＤ09土層断面（南から）


(4) ２区ＳＤ16土層断面（南から）


(5) ２区ＳＤ29土層断面（南から）


(6) ２区ＳＤ23土層断面（南から）


(7) ２区ＳＤ24土層断面（南から）


(8) ２区ＳＫ13土層断面（南から）

一般国道 163 号精華拡幅精華拡幅事業関係遺跡　図版第 20

石原遺跡



(1) 3 区完掘状況(西から)



(2) 3 区完掘状況(北東から)



(3) 3 区北壁土層断面(南西から)

石原遺跡



(1) 4 区完掘状況(西から)



(2) 4 区完掘状況(北東から)



(3) 4 区南壁土層断面(北西から)

石原遺跡



(1)出土遺物 1



(2)出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第193冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第193冊
編著者名	名村威彦、三好博喜、竹村亮仁、加藤雅士、福山博章
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40番の3　Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2024年３月20日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
いぬかい 犬飼遺跡第４次	きょうとふかめおかし 京都府亀岡市 そがべちょうほうき 曽我部町法貴	26206	156	34° 59′ 34″	135° 31′ 54″	20190515～ 20190809 20191107～ 20200312	2,600	道路整備
いぬかい 犬飼遺跡第６次	きょうとふかめおかし 京都府亀岡市 そがべちょういぬかい 曽我部町犬飼	26206	156	34° 59′ 30″	135° 31′ 55″	20221108～ 20230106	2,000	
いぬかい 犬飼遺跡第９次	きょうとふかめおかし 京都府亀岡市 そがべちょういぬかい 曽我部町犬飼	26206	156	34° 59′ 30″	135° 31′ 55″	20210906～ 20220302	1,200	
ざくろかわはら 柘榴川原遺跡	きょうとふそうらくぐん 京都府相楽郡 せいかちょうざくろ 精華町柘榴 かわはら　いしはら　まつ 川原・石原・松 ひら ヶ平	26336	21	34° 43′ 50″	135° 45′ 22″	20221208～ 20230228	900	道路改良
いしはら 石原遺跡	きょうとふそうらくぐん 京都府相楽郡 せいかちょうざくろまつ 精華町柘榴松ヶ ひら　いしはら　あしたに 平・石原・芦谷	26336	67	34° 43′ 50″	135° 45′ 42″	20230512～ 20230803	600	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
犬飼遺跡第４次	集落	古墳時代	古墳時代前期の溝 古墳時代後期の掘立柱建物	須恵器、土師器	
犬飼遺跡第６次	集落	古墳時代 中世	古墳時代前期の自然流路､古墳時代中期の水路、古中世の水路	須恵器、土師器、製塩土器、 緑釉陶器、刻書土器	
犬飼遺跡第９次	集落	古墳時代 古代	区画溝、柱穴、柵列	須恵器、土師器	
柘榴川原遺跡	散布地	室町～江戸	室町時代の畑、江戸時代の水田	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、木製品、漆製品	
石原遺跡	散布地	中世末～江戸	ピット、落ち込み	土師器、須恵器、陶磁器、瓦	

所収遺跡名	要　　約
犬飼遺跡第４次	古墳時代前期の溝を検出し、上下で地層が横方向にずれていることを確認した。地震等の影響と考えられる。古墳時代後期の掘立柱建物など居住の痕跡を確認した。
犬飼遺跡第６次	古墳時代前期の自然流路と古墳時代中期の水路を検出し、多くの土器が出土した。また、杭を設置した中世の水路を検出した。
犬飼遺跡第９次	奈良時代前半の柵列、区画溝、柱穴群を検出した。周辺には同時期の集落が存在する可能性がある。
柘榴川原遺跡	山田川上流部左岸の調査で、縄文時代早期後半以降に天然ダム湖が２度形成された後、地震動による変形が起きたことなど、地形形成の過程が明らかになった。また、室町時代の畑から江戸時代の水田へと土地利用が変わることがわかった。
石原遺跡	山田川上流部左岸の調査で、中世末から近世のピット・溝などを確認し、大阪街道と山田川にはさまれた調査地付近が畑などの生産域であったことが明らかになった。

京都府遺跡調査報告集 第193冊

令和６年3月25日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel（075）933-3877（代）　Fax（075）922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒602-8358　京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
Tel（075）467-5151　　Fax（075）467-5152